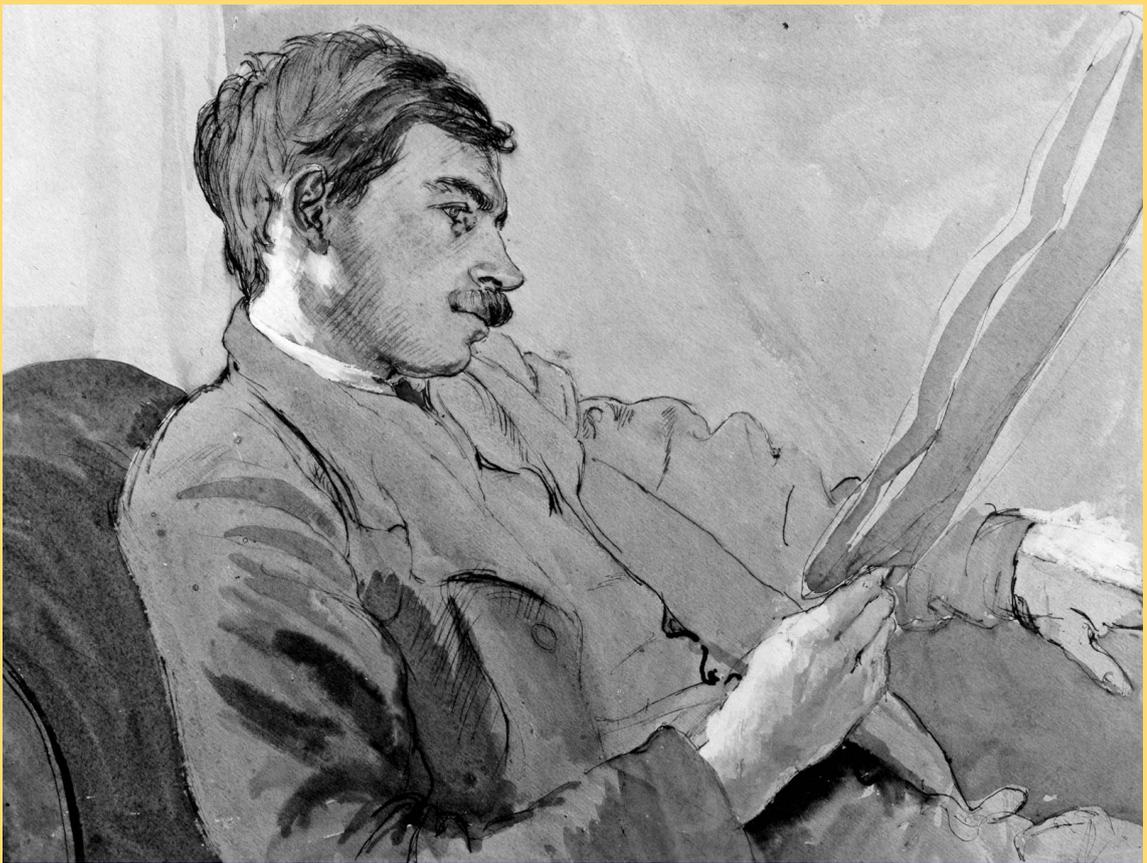


ジョン・メイナード・ケインズ

人物評伝

Essays in Biography (1933/1955)



山形浩生 訳 (2021)

[クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス](#) : クレジットを明記する限り、共有・翻案を自由に行っていい。

人物評伝
Essays in Biography (1933/1955)

ジョン・メイナード・ケインズ^{*1}
訳：山形浩生^{*2}

2021年3月1日

^{*1} 著作権消滅

^{*2} ©2021 山形浩生 クリエイティブコモンズライセンス 表示 4.0 (<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/>) 禁有断転載、有断複製。

序文

二、三編の明らかな例外を除いて、本書のエッセイはすべて直接の知己に基づいている。そのほとんどは、描かれた人物の直接的な印象に基づくものだ。読者に対しても、そのようなものとして提示されている（ただしロバート・マルサスについての論説は除く*1）――つまり、歴史のパースペクティブの中でずっと後で冷静に書かれたものではないということだ。ロイド・ジョージ氏とロバート・マルサスに関する論説は、これまで未発表だった。他の論説の出所は補遺に示した。

第二部では、歴史や経済ドクトリンの進歩について散発的なコメントをお示しした。だが私の主要な目的は人物評伝的なものだ。つまるところ、私は多少の細部のタッチを通じて、イギリスの高等知識人たちの連帯と歴史的連続性を描き出そうとしたのだ。彼らはロックが『人間悟性論』で初の現代英語書籍を書いて以来、二世紀半にわたりわれわれの思想の基盤を構築してきた。以下（39 ページ）にサー・ジョージ・ヴィリアーズの驚異的な血統を示した。だが高等知識人の系譜は、その相互交流の面でも精神的な混淆の点でも、いささかも劣るものではない。ヴィリアーズ・コネクションなどは、君主や暴徒たちを魅了させておけばいい。一過性のできごとを支配させておけばいい、あるいはそのように思わせておけばいいのだ。第二部に登場する人々の名前が所属する、知的にも人的にも相互に絡み合ったロック・コネクションとその長きイギリスの系譜に、精神的なつながりを主張できることもまた、感情的な誇りでもある。これは最も賢いかはさておき、最も真実あふれる人々だ。最も親しみやすいかはさておき、最も奇矯でおもしろい人々だ。最も実務的かはさておき、最も純粋な公共心を持つ人々だ。最高の芸芸における天才かはさておき、人類の心が展開した多くの分野の中で、最もしっかりした誠実なる業績をもたらした人々なのだ。

J.M. ケインズ

キングス・カレッジ、ケンブリッジ

1933 年 2 月

編者注

『人物評伝』が初めて 1933 年 5 月に再版されたとき、細かい訂正がいくつかケインズ卿により行われた。私は今回、追加のいくつか訂正を行い、また注の文章一、二ヶ所を更新した。今回の版は、これまで『人物評伝』未収録だった三本の論説を含む。そのすべてについて、初出は p.?? に掲載した。

*1 現在の本では、ジェヴォンスとニュートンについての論説も同様である：原編者

ニュートンに関する論説で三ヶ所の訂正については、G・フィンドレー・シッラス教授のおかげである。

「ロイド・ジョージ氏」の巻頭にある著者の注記にはご注目いただきました。ここで著者は、なぜそれを『平和の経済的帰結』に含めなかったかをきわめて明確にしている。彼の多くの友人たちは、同書にこれが含まれていたらバランスが取れていただろうと感じているが、執行人たちはケインズ自身の願いに逆らってまでそうするのは正当だとは思わなかった。

ジョフリー・ケインズ (1955)

訳者注

本書は John Maynard Keynes, *Essays in Biography* (1955) の全訳に、ケインズがバーナード・ショー (のアインシュタインの芝居) とアインシュタインについて書いた文、さらにマルサスについての追加の文を加え、少し構成をいじったものだ。追加の文については全集版を見て足した。詳細は巻末の訳者解説を参照してほしい。

山形浩生 (2021)

目次

序文	i
第 I 部 政治家群像	1
第 1 章 四人会議、パリ 1919 年	3
第 2 章 ロイド・ジョージ氏：断片	15
第 3 章 ボナー・ロー氏	21
第 4 章 オックスフォード卿 (ヘンリー・アスキス)	25
第 5 章 エドウィン・モンタギュー	29
第 6 章 ウィンストン・チャーチル	31
第 7 章 偉大なるヴィリアーズ・コネクション	39
第 8 章 トロツキーのイギリス論について	41
第 II 部 経済学者たちの生涯	45
第 9 章 ロバート・マルサス (1766-1835)	47
第 10 章 ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズ	75
第 11 章 アルフレッド・マーシャル (1842-1924)	105
第 12 章 メアリー・ペイリー・マーシャル (1850-1944)	149
第 13 章 フランシス・イジドロ・エッジワース (1845-1926)	165
第 14 章 F. P. ラムゼイ (1903-1930)	175
第 III 部 科学者たち	183
第 15 章 人間ニュートン	185

第 16 章	バーナード・ショーとアイザック・ニュートン	193
第 17 章	アインシュタイン	197
第 18 章	アインシュタイン (その 2)	201
	初出	203
	訳者解説	205

第 I 部

政治家群像

第1章

四人会議、パリ 1919 年



左から、ロイド・ジョージ (英)、オルランド (伊)、クレマンソー (仏)、ウィルソン (米)
(1919)

ケインズ『平和の経済的帰結』より

クレマンソーは四人会議の中で圧倒的に有力な人物であり、他の三人についても十分に値踏みをしていた。あるアイデアを持って、その影響を全面的に考えていたのはクレマンソーだけだった。その年齢、人格、ウィット、外見があわさって、その混乱した環境の中で客観性としっかりした存在感を与えていた。クレマンソーを軽蔑したり嫌ったりはできない。その文明的な人物の性質に対して、ちがう見方を採ったり、あるいはせいぜいがちがった希望を弄ぶしかできないのだ。

クレマンソーの人物像と物腰は万人に知られている。四人会議でかれは、きわめて上質の分厚い黒ラシャで仕立てた燕尾服を身につけ、手にはグレーのスエード手袋をはめて決して脱ごうとはしなかった。ブーツは暑い黒革で、きわめて上質ながらカントリースタイルであり、おもしろいことにその前の部分とはときどき、靴紐ではなくバックル留めとなっていた。四人会議の定例会（これは階下のもっと小さな部屋で開かれた、かれらの非公式で非公開の会議とはちがうものだ）が開かれた大統領官邸の部屋における座席は、暖炉を半円形に囲む四角い金欄つきの椅子の中で真ん中に位置するものであり、イタリアのオル

ランド首相がその左、ウィルソン大統領がさらに左の暖炉脇、ロイド・ジョージ首相はその向かい、クレマンソーの右隣にすわっていた。書類もファイルも一切持たず、個人秘書の付き添いも一切なかったが、そのときの話題にふさわしいフランスの大臣や高官をまわりに置いていた。その歩き方、手ぶり、声は力強さに欠けてはいなかったが、それでも特に暗殺未遂の後では、きわめて高齢の老人が重要な機会のために力を温存しているという側面を漂わせていた。あまり口を開かず、最初にフランスの主張を述べるのは、大臣や高官たちに任せた。しばしば目を閉じ、椅子に深くもたれて、羊皮紙のような平然とした表情を浮かべ、灰色の手袋に包まれた手を身の前で組んでいる。短い一文、断言や皮肉だけでおおむね十分だった。あるいは質問、自国大臣たちを一刀両断に否定して対面を保てる余地を一切与えなかったり、あるいは頑固さを示して見せて、それを刺すような口調での英語数語で強調してみせるだけだ*1。しかし必要とあらば、演説も情熱も十分に示したし、いきなり言葉が噴出してきて、それに続いて胸からの深い咳の発作が起ること、その台詞にみんなは納得するというよりも、無理強いと不意打ちによりそれが押しつけられるという具合だ。

ロイド・ジョージ氏はしばしば、英語で演説を行ってから、それがフランス語に通訳される間に暖炉前のじゅうたんを横切ってウィルソン大統領に近づき、ひそひそ話で何やら直接裏付けの議論を伝えたり、妥協の可能性について探りを入れたりした——そしてこれがときには、大騒動と無秩序の合図となるのだった。大統領の顧問たちがまわりに詰め寄り、一瞬後にイギリス側の専門家たちがバラバラと暖炉前を横切って、話の結論を知ろうとしたり万事快調か確認しようとしていたりして、次にフランス勢が、裏で他の連中が何か仕組んでいるのではといささか疑心暗鬼になってやってきて、やがて部屋中の全員が立ち上がり英仏両方の言語で会話が一齐に始まる。私の最後の最も鮮明な印象はまさにそういう場面だった——ウィルソン大統領とロイド・ジョージ首相がふくれあがる群集と意味不明な喧噪の中心となり、熱心な思いつきの妥協や対案妥協の応酬が行われ、どのみち現実のものではない質問をめぐって大騒音と熱狂が立ち上がるがそれが何を意味せず、その午前会議の重要な問題は忘れられ無視される。そしてクレマンソーはその周縁でだまっただまうわの空で——というのもフランスの安全保障に触れるような話は一切出ていなかったからだ——灰色の手袋をはめたまま刺繍椅子に戴冠し、魂は渴き希望は虚ろなまま、きわめて高齢かつ疲れた様子ながら、その場面全体を皮肉っぽくほとんど悪鬼じみた雰囲気を持ってうかがっている。そしてようやく静寂が戻り、各人が自分の定位置に戻ってみると、いつのまにかクレマンソーは姿を消している。

クレマンソーはフランスについて、ペリクレスがアテナイについて感じていたのと同様に思っていた——その国には独自の価値があるので、それ以外の何も問題ではない、というわけだ。だがかれの政治理論はビスマルク式だった。彼が抱いた幻想はたった一つ、フランスだ。そして抱いた幻滅もたった一つ——人類、それもフランス人を含む人類であり、もちろん自分の同輩たちもまっ先にそこに含まれる。クレマンソーの平和についての原理は単純な形で表現できる。まず、かれはドイツの心理について、ドイツ人が理解できるのは恫喝だけでそれ以外は何もわからないのだという見解を何よりも信じていた。そしてドイツ人は交渉において鷹揚さも後悔も一切なく、隙あらばこちらを出し抜こうとし、

*1 四人会議のうち、どちらの言語も話して理解できたのはクレマンソーだけだった。オランダはフランス語しか知らず、ロイド・ジョージ首相とウィルソン大統領は英語しかわからない。そしてオランダと大統領が直接話をできなかったという事実は歴史的な重要性を持つ。

利益のためならいくらでも平身低頭し、榮譽もプライドも慈悲も持ち合わせていないのだと信じていた。したがって、ドイツ人と交渉したり懐柔したりしては絶対にいけない。頭ごなしに命じるしかない。それ以外のやり方ではドイツ人はこちらに敬意を示すことはないし、またドイツ人がこちらをごまかすのを避けることもできないというわけだ。でもこうした特性がどこまでドイツ人固有のものだと思っていたのか、あるいは他の国民に対しては、根本的にちがった見方を本当にしていたかどうかは怪しい。つまりクレマンソーの哲学では、国際関係において「感傷性」の入り込む余地はなかった。国というのは現実のものであり、あるものは愛し、それ以外のものに対しては無関心だ——あるいは憎悪を抱くこともある。自分の愛する国民の勝利は望ましい目的だ——だが一般にそれは、近隣国を犠牲にして獲得されるものとなる。権力政治は不可欠であり、この戦争について学ぶべき特に目新しいことはないし、その戦争が戦われた目的についても同様だ。イギリスは、これまで毎世紀ごとにやってきた通り、貿易の競争手を破壊した。ドイツとフランスの栄光の間で繰り広げられる長期的な争いにおいて、大いなる一章が幕を閉じた。愚かなアメリカ人どもや偽善的なイギリス人たちの「理想」について、口先でなにかしら言及しておくのが賢明ではある。でも実のところ、この世に国際連盟のような代物の余地がさほどあると信じるのは愚かしいことだ。あるいは国連でなくとも、自己決定の原理などの働く余地はなく、例外があるとすれば単に自分自身の利益のためにバランス・オブ・パワーを作り直すための巧妙な手口としてそれを利用する場合だけだ。

だがこれらは一般論でしかない。クレマンソーがフランスの権力と安全保障のために必要と考えた、講和条約の実務的な細部をたどるためには、かれの生涯を通じて作用してきた歴史的原因に立ち戻らねばならない。普仏戦争以前のフランスとドイツの人口は、だいたい同じくらいだった。でもドイツの石炭と鉄鉱と輸送はまだ誕生したばかりだったし、フランスの富のほうはずっと大きかった。アルザス、ロレーヌ地方を失ったあとでも、両国の実際の資源にはさほどの差はなかった。でもその後の期間で、両者の相対的な地位は完全に変わった。1914年には、ドイツの人口はフランスの7割増し近かった。そして世界最初期の工業国で貿易国となった。その技術能力と、未来の富を生産する手段は比肩するものがなかった。これに対してフランスは、人口停滞か減少に直面していたし、多国に比べると富の面でもその生産能力の面でも深刻に立ち後れていた。

だから、今回の争いからフランスが（今回は英米の支援を受けて）勝利を手にして出てきたとはいっても、フランスの将来の立場はヨーロッパ内戦が平常の、少なくとも繰り返して起こる将来に向けての出来事だと考えるべきだという見方を採る者の目からすれば、相変わらず危ういものだった。そういう者たちは、組織化された超大国同士が過去百年にわたり続けてきた類の紛争は、今後もまた続くと考えているのだ。こういう将来ビジョンに従えば、ヨーロッパ史は果てしない優勝争いであり、今回のラウンドではフランスが勝ったが、今回がどう見ても最終ラウンドではないのだ。基本的に旧秩序は、常に同じである人間の天性に基づいているが故に変わらないという信念から、そしてそれに伴い生じてくる、国際連盟が体现している各種一連のドクトリンすべてに対する疑念から、フランスとクレマンソーの方針は論理的に導かれる。というのも、ウィルソン大統領の14カ条の平和原則といった「イデオロギー」に基づく寛容な平和条約や、公平で平等な扱いをうたう平和条約は、ドイツの復興期間を短縮し、そのフランスに勝る人口や資源や技能をフランスに対して再び投入する日を加速する効果しか持ち得ないからだ。だからこそ「保証」の必要性が出てくる。そして保証が増えればそれだけドイツの苛立ちも高まり、した

がってその後のドイツの報復確立も高まるから、ますますドイツの手持ちを潰しておく必要も増す。このように、こうした世界観が採用され、別の世界観が破棄されたとたんに、一時的に権力を握っている側が課せるだけの、最大限に厳しいカルタゴ的平和の要求が不可欠となる。というのもクレマンソーは、自分が14カ条の平和原則にしばられるふりなど一切示さず、大統領の疑念や体面を保つために場当たりの必要となるおためごかしは、主に他の連中に任されたのだから。

つまりフランスの政策としては、時計の針を戻して1870年以来ドイツの進歩が実現したものを、できる限り解体してしまうことだった。領土の喪失などの手段により、ドイツの人口を削ろう。だが何よりもその経済システム、ドイツの新しい強さが依って立つ経済システム、鉄鋼、石炭、輸送力の上に築かれた広大な経済網を破壊せねばならなかった。フランスとしては、ドイツが落とすよう迫られたものの一部でも掌握できるなら、ヨーロッパ覇権の両ライバル国間の力の格差を、幾世代にもわたり矯正できるかもしれないのだ。

こうしたわけで、高度に組織化された経済生活を破壊するための、累積的な状況が飛びだしてきたわけだ。これについては次章で検討する。

これは老人の政策だ。その人物の最も鮮明な印象や最も生き活きとした印象は過去のものであり未来のものではない。この人物は問題を、フランスとドイツという枠組みで考え、新しい秩序に向けて苦闘する人類とヨーロッパ文明という枠組みでは考えない。戦争はこの人物の意識に対し、私たちとはちょっとちがった形で食い込み、そしてこの人物は私たちが新時代の間際にいるのだということを予想も希望もしていない。

だが実は、この問題に関係しているのは理想の問題だけではなかったりするのだ。本書での私の狙いは、カルタゴ式の平和（訳注：敵にやたらに厳しい条件を課す平和のこと）は、実務的にも正しくないし実施可能でもないというのを示すことだ。この平和条約が生まれてくる学派は経済的要因に気がついてはいるが、それでも未来を司るもっと深い経済的傾向は見すごしている。時計の針を戻すわけにはいかない。1870年の中欧を復活させようとすれば、ヨーロッパの構造に莫大なストレスを創り出し、すさまじい人間的、精神的な力を解き放ってしまうことになって、それが国境や人種を越えて押し広がり、人々やその「保証」だけでなく、その制度や既存の社会秩序すら圧倒してしまうのだ。

14カ条がこんな政策にすり替わるにはどんな詐術が弄されたのだろうか？ そしてなぜ大統領はそんなものを受け入れるに至ったのか？ これらの質問に対する答えは難しいし、人格や心理といった要素や、周辺からの微妙な影響などに依存する。こうしたものは検出するのが難しいし、それを描写するのはもっと難しいのだ。でもある一個人の行動が重要だった希有な事例として、大統領の屈服こそは歴史上の決定的な道徳的事件だった。だから私としてもそれを何とか説明してみなければならぬ。大統領がジョージ・ワシントン号に乗って私たちのほうに航海してきたとき、世界の心と希望の中でいかに大きな存在感を占めていたことか！ 私たちの勝利初期のあの日々、なんと偉大な人物がヨーロッパにやってきたことか！

1918年11月、フォッシュ総司令官の軍とウィルソン大統領の言葉は、私たちが気にかけていたすべてを飲み込みつつあったものからの突然の逃げ道をもたらしてくれた。その条件は、あらゆる期待を上回るほど有利なものだった。勝利はあまりに完璧であり、調停においては恐怖などまったく入り込む余地はなかった。敵は平和条約の一般的な性格として、構成と寛大さを保証する条項が確実に得られ、破壊された生活の流れの復活を公平に

期待できる思えた荘厳な約束を当てにして武器を置いたのだった。この保証を確実なものとするため、大統領は自ら自分の作業に調印すべくやってきた。

ウィルソン大統領がワシントンに後にしたとき、かれは空前の名声と道徳的影響力を世界中に及ぼせる立場を享受していた。その大胆で慎重なことばはヨーロッパの人々に、自分たち自身の政治家の声以上に強く訴えかけた。敵の人々も、大統領がかれらとかわした約束を実行してくれるものと信じていた。そして連合側も、大統領を単なる勝者としてだけでなく、ほとんど予言者として認知していた。この道徳的な影響力に加え、現実の権力を大統領は手にしていた。アメリカ軍は兵員数も規律も装備も絶頂。ヨーロッパはアメリカ合衆国の食糧供給に完全に依存。そして財政的には、食料以上にアメリカに絶対的に頼り切った状態だったのだ。ヨーロッパはすでにアメリカから、支払える以上の金額を借りていただけではない。ヨーロッパを飢餓と破産から救うためには、さらにアメリカから大量の援助を受けるしかなかったのだ。賢者がこれほどの武器を持ってこの世の君主たちを縛れたことは未だかつてなかった。ヨーロッパ各国の首都の群集はなんと大挙して大統領の乗物を取り囲んだことか！　なんとすさまじい好奇心と不安と期待を持って、この運命の人物の姿や形を一目見ようとしたことだろうか。この人物は西からやってきて、己の文明の古き両親たちの傷に癒しをもたらすはずであり、私たちのために未来の礎石を敷いてくれるはずだったのだ。

幻滅はあまりに徹底したものであり、最も強くそれを信頼していた者の一部は、その幻滅について口にしようとするしない。こんなことがあり得るんですか、とかかれらは、パリから戻った人々に尋ねた。講和条約は、本当に一見したほどひどい代物なんですか？　大統領はどうかしちゃったんですか？　これほど極端で、これほどに予想外の裏切りをもたらしたのは、どんな弱みのせいなんですか、どんな不運のせいなんですか？

でもその原因はきわめて平凡で人間くさいものだった。大統領は英雄でも予言者でもなかった。賢者ですらなかった。単に鷹揚な意図を持った人間であり、他の人間と同じ弱さをたくさん持っていたのだ。そして、すさまじい力や人格の衝突がギブ&テークのすばやいゲーム——大統領はまったく経験したことのないゲーム——における勝利の名人としてトップの座につけた、巧妙かつ危険な呪文使いたちと、会議の場で対面しつつ対処するために必要な、あの圧倒的な知的装備を欠いていたのだ。

実のところ、私たちは大統領についてまるでまちがった印象を持っていたのだった。大統領が孤独で超然としているのは知っており、かれがきわめて強い意志を持ち頑固だと思っていた。細かい人物とは思わず、かれがいくつか中心的な考え方をつかみとった明晰性が、その頑固さと組み合わせることで、蜘蛛の巣など一掃できるはずだと思っていた。こうした性格に加え、大統領は学徒のような客観性と洗練と広範な知識を持っているはずだと思っていた。有名な 14 カ条を特長づけた言語のすばらしい傑出ぶりは、しっかりした力強い想像力の持ち主をうかがわせた。その肖像は立派な存在感と堂々たる演説ぶりを示唆していた。これらすべてにより、かれは政治家の技能が無視されない国における筆頭の地位を獲得してそれを維持していた。このすべては、不可能を可能にしてくれるとは思わないにしても、現在の状況に対応するための性質の組み合わせとしては実に結構なものに思えた。

ウィルソン氏を間近に見た第一印象は、こうした幻想すべてではないにしても、一部を毀損するに足るものだった。その髪の毛や装いは見事な仕立てであり、まさに写真通りだったし、その首の筋肉と頭の取り回しは立派なものだった。だがオデュッセウスのよう

に、大統領はすわっているときのほうが賢く見えた。そしてその手は、器用でかなり力強いものではあったが、繊細さと優雅さに欠けていた。大統領を一見して示唆されたのは、他にどんな性格を持つにせよ、その気性は学徒や学者的なものが主ではないというだけにとどまらず、クレマンソー氏やバルフォア氏をその階級と世代における実に見事に洗練された紳士たらしめている立ち居振る舞いという、世界の文化すらほとんど持ち合わせていないということだった。だがそれよりもっと深刻なこととして、大統領は外観面で周囲に対して無配慮だったにとどまらず、自分の周辺に対する繊細さを一切示さなかった。ロイド・ジョージ氏のような、身近に取り巻く人物一人残らずに対する、実に的確でほとんど霊媒のごとき配慮に対して、そんな人物にどんな勝ち目があるというのだろうか？ イギリス首相が一同を見渡し、一般人は持ち合わせない六感や七感でもって、それぞれの人物の人格、動機、無意識の衝動を判断し、それぞれが何を考え、さらには次にその人物が何を言うかさえ知覚して、目の前の査察官の虚栄心や弱点や利己性に最も適した議論や訴えをテレパシーじみた本能でまとめあげる様子を見れば、哀れな大統領はこの集団の中で目隠し鬼ごっこをやらされることになるのだと気がつくことになる。首相の洗練された手腕に対し、大統領ほど完璧な犠牲者を運命づけられた人物がこの広間に足を踏み入れるなどあり得ないだろう。旧世界はもともとその老獪ぶりにおいて強力な存在だ。旧世界の石の心は、最も勇敢な遍歴の騎士による最も鋭い刃ですら鈍らせるかもしれない。だがこのめくらでつんぼのドン・キホーテは、磨き上げられたすばやい刃が敵の手に握られた酒場に入ってきたのだ。

でも大統領が賢人王ではなかったのなら、何者なのだろう？ 結局のところ、かれは人生の相当部分を大学で過ごした人物だった。どう見てもビジネスマンやありがちな政党政治家ではなく、力強さと人格と重要性を備えた人物だ。ならばかれの気性はどうだったのだろうか？

ヒントはひとたび見つかると、実に示唆的だった。大統領は非国教派の牧師、たとえば長老派教会の牧師のようなものだった。その思考や気質は基本的には知的なものというより神学的なもので、その種の考え方や感情や表現に伴う強み弱みをすべて備えていた。この種の人物は、いまやイングランドやスコットランドでは以前に比べ、これほど見事な実例になかなかお目にかかれなくなっている。それでもこの描写は、一般のイギリス人にとって大統領の最も特徴的な印象を伝えるものだろう。

このような大統領の姿を念頭に、出来事の実際の道筋に戻ろう。演説やメモに示された大統領の世界に関する計画は、実に見事な精神と目的を描き出していたので、それに同意する人々は、その重箱の隅をつつくような真似は決してしたくないと考えた——そうした細部は、いま描き込まれていないのは当然であり、いずれはきちんと記述されるはずだと思ったのだ。パリ会議の開始時点では、大統領は大量の顧問の助けを借りて、国際連盟の包括的な仕組みのみならず、14カ条を実際の平和条約に体现させる総合的な計画を考え抜いているのだろうというのが一般に思われていたことだった。ところが実際には、大統領は何も考え抜いていなかった。実務レベルになると、そのアイデアは漠然として不完全なものだった。ホワイトハウスから雷のように轟かせた戒律に、実際の肉付けをするための多いについては、何の計画も、何の仕組みも、何の建設的なアイデアもまったく持ち合わせていなかったのだ。そのどれについてであろうと、何か説教はできただろうし、それを見たしてくれるよう荘厳な祈りを捧げたりすることはできただろう。でもヨーロッパの実情に対する具体的な応用を起草できなかったのだ。

詳細提案がなかっただけではなく、仕方ないことなのかもしれないが、多くの点でヨーロッパの状況について情報不足だった。そして情報不足というだけではなく——それならロイド・ジョージ氏だって同じだ——大統領の頭は回転が遅くて適応性がなかった。ヨーロッパ人の中で大統領の回転の遅さは突出していた。かれは一瞬のうちに他の人が言っていることを理解したり、にらみを利かせて状況を掌握したり、うまく切り返したり、ちょっと視点を変えて状況に取り組んだりすることができなかった。おかげで、ロイド・ジョージのような人物の単なる素早さや理解力や柔軟性だけのために敗北を喫するしかなかった。会議の議場において、第一級の政治家の中でこの大統領ほど無能な人物は、ほとんどお目にかかることがないだろう。ちょっとした譲歩のそぶりを見せるだけで相手の面子を立てせたり、提案を相手には有益だが自分にとっては何ら本質的な傷をもたらさない形で言い換えたりするだけで、相当な勝利を手に入れられるような瞬間というのがしばしば生じる。大統領は、こういう簡単で当たり前の巧みさを備えていなかった。頭の回転が遅すぎ、手持ちのカードも少なすぎたために、何ら代替案を用意できなかった。大統領は身構えて頑固に譲歩を拒否する能力は持っていた。フィウメについてはこれを行っている。だがそれ以外には自衛の手口を持ち合わせず、事態が手遅れになる前にそうした状況の到来を避けようと思えば、相手はちょっとした手管を弄せばすんでしまうのが通例だった。追従と妥協のふりをするだけで、大統領は手玉に取られて足場を「見失い」、頑固に振る舞うべき瞬間を見逃してしまい、そして自分がどこに押しやられたかハッと気がついた頃には、もう手遅れなのだった。さらに、何ヶ月にもわたる親密で、見かけ上は親しい会話を近い仲間たちと交わしたあとでは、頑固に妥協を拒んでばかりはいられなくなってしまふ。全体としての自分の立場について、常に十分生き生きとした理解をもち、いつもは攻撃を控えつつ、決定的な行動をとるべき数少ない瞬間をずばり見て取れる人物でなければ、勝利は不可能だ。そしてこのためには大統領は、あまりに頭の回転が遅すぎ、戸惑いすぎていた。

こうした欠陥について、副官たちの集会的な叡智の助けを求めることで矯正しようともしなかった。条約の経済関連の章のために、きわめて有能な実業家集団を身の回りに集めてはいた。だがかれらは公的な事柄については経験がなく、(一、二名の例外を除けば)ヨーロッパについては大統領に負けず劣らず無知で、しかも何か具体的な目的のために必要な場合に限って不定期に呼ばれるだけだった。だからワシントンでは効果的だった超然とした態度が維持され、そしてその天性が持つ異常な用心のせいで、道徳的な対等性や、継続的な影響力行使を目論む者はだれ一人として近づけようとはしなかった。使節団に同行していた全権使節たちは人形でしかなかった。そして人間やヨーロッパについては大統領より遥かに熟知していたハウス大佐も、その敏感さは大統領の鈍さを実に大いに助けたのだが、やがて背景に沈んでしまった。このすべてを四人会議の仲間たちは煽った。かれらは十人会議を解体することで、大統領自身の気質が皮切りとなった孤立を完成させた。だから日々がすぎ、週が過ぎゆくうちに、大統領は引き込み状態となり、支援もなく、助言も得られないまま、極度に困難な状況の中で自分よりずっと鋭利な人々の中で孤立した状態へと追いやられるのを自ら許してしまった。実際にはその場では、考えられるありとあらゆる資源、有能性と知識が成功のために必要とされていたというのに。かれは連中の雰囲気毒され、相手の計画やデータをもとに議論し、かれらの道筋にそって引き回されるのを自ら許してしまったのだ。

以上をはじめとする各種要因が組み合わさって以下の状況を作り出した。読者諸賢は、

ここで数ページに圧縮した過程がゆっくり、徐々に、密やかに、およそ5ヶ月の期間をかけて起こったということをお忘れなく。

大統領が何も考え抜いてこなかったので、四人会議はおおむねフランスかイギリスの草案をもとに作業を進めた。だからその草案が多少なりとも自分の考えや目的に沿うものになるためには、大統領は絶え間なく妨害、批判、否定の態度を一貫して取らねばならなかった。だから何らかの点で見かけ上の鷹揚さを提示されたら（というのも、だれも真面目に受け取らないような、きわめてバカげた提案という安全な譲歩の余地が常に用意されていたのだから）、大統領としては他の部分で譲歩しないのはむしろかかった。妥協は不可避であり、そして本質的なところで決して妥協しないというのはとても難しかった。さらに、大統領はやがてドイツの肩を持っているかのような描かれ方をされるようになり、「親独的」という示唆をされても仕方ないような立場に置かれた（この示唆に対し、大統領は愚かかつ不幸にもかなり敏感だった）。

十人会議の初期には多大な信念と尊厳を示した大統領だが、たとえばフランス、イギリス、イタリアの代表たちによるプログラムの中には、秘密外交という手法によって譲歩を確保できないような重要なポイントがいくつかあることをかれは発見した。すると最終手段としてどうすればよかっただろう？ ひたすら頑固さを発揮することで、会議をいつまでも引き延ばすことはできる。席を蹴って、何一つ解決しないまま怒り狂ってアメリカに帰ることもできる。あるいは会議の頭越しに世界に訴えかけようと試みることもできる。これはどれもひどい代替案であり、それぞれについて大量の批判が可能だ。また、とてもリスクが高いものでもある——特に政治家にとっては。議会選挙をめぐる大統領のまちがった政策は自国での立場を弱めてしまい、アメリカの世論が大統領の非妥協的な立場を支持してくれるかは、必ずしもはっきりしていなかった。それは論点あらゆる種類の個人的、党派的な懸念事項により曇らされる選挙戦を意味するものであり、それ自体の価値に基づき判断が下されたりしないのが確実な党争において、正しいほうが勝利するなどどだれが言えようか？ さらに、会議の仲間たちと公然と決裂すれば、まちがいなくあらゆる連合国の世論がいまだに強く抱いている「反独」遺恨の盲目的な情熱が、頭上にふりかかってくる。かれらは大統領の議論になど耳を貸すまい。この問題を国際道徳の問題や、ヨーロッパの正しいガバナンスの問題として扱うだけの冷静さも持ち合わせまい。各国の世論の叫びは単純明快で、各種の悪意ある利己的な理由から、大統領は「フン族（訳注：のごとき残忍非道なドイツ）を見逃す」のを望んでいる、というものになる。フランスやイギリスの新聞がほとんど全会一致で何を言うかは予想がつく。だから大統領が公開の場で他の代表に挑めば、敗北しかねない。そして自分が敗北したら、最終的な講和条約は自分がその名声を維持し、ヨーロッパ政治の制約された状況において最大限に奮闘努力した場合に比べてはるかにひどいものになるのではないかと。だが何よりも、自分が敗北したら、国際連盟も失いかねないのではないかと。そしてそれこそが結局のところ、世界の将来の幸せにとって最も重要な問題ではないのか？ 講和条約はずれ改正して和らげてもいい。現在では実に重要と思えるものの多くが、いずれはつまらないものとなり、そして実現不可能な部分については、まさにその理由から決して実現しない。だが国際連盟は、不完全な形においてすら永続的なものだ。世界統治における新しい原理の初の開始となるのだ。国際関係における真実と正義は、数ヶ月で確立できるようなものではない——国際連盟のゆっくりとした胎動のなかで、時間をかけて生まれるしかないものだ。クレマンソーはこの点で賢く、代償次第では国際連盟を受け入れるというのを匂わせていた。

運命の危機に直面した大統領は孤独だった。旧世界の網にとらわれた大統領は、大衆からの共感、道徳的な支持と熱狂を大いに必要としていた。だが会議に埋もれ、パリの暑く有毒な大気に窒息させられた大統領の下には、外部世界からは何の反響もなく、あらゆる国の声なき支持者たちからは情熱の脈動も共感も励ましも響いてはこなかった。ヨーロッパへの到着を迎えた人気の炎はすでに薄れたのが感じられた。パリの新聞は公然と大統領をはやしたてた。故国での政敵たちは留守をいいことに、大統領に敵対する雰囲気を作り出していた。イギリスは冷淡で批判的であり手応えがなかった。付き添いたちをまとめるにあたり、公的な出所がふさいでしまった信念と熱意の流れを私的なチャンネルから得ないようにしたのは大統領自身だった。かれは集合的な信念による追加の強さを必要としていたが、それを欠いていた。ドイツの恐怖がまだ二日酔いのように残っていて、大統領に好意的な世論ですらきわめて慎重だった。敵を力づけるようなことがあってはならず、友邦は支援せねばならず、いまは不和や野次の時期ではなく、大統領が最善を尽くすと信じなければならなかった。そしてこの干ばつの中で大統領の信念という花はしおれ乾燥してしまった。

そういうわけで、大統領はジョージ・ワシントン号についての命令を撤回した。それまでかれは、十分に理由のある怒りの結果として、パリの陰謀に満ちた広間から自らの権力の座に自分を送り返し、自分自身を取り戻せたはずの場所に戻れるように、ジョージ・ワシントン号をいつでも出発できるよう待機させていたのだ。だが残念ながら、妥協の道を歩みはじめたとたん、その気質や能力面ですでに述べたかれの欠陥が、致命的なまでに露わとなった。大統領は、超然としていてもよかった。強情を張ってもよかった。シナイ山やオリンポスからご託宣を下してもよかった。ホワイトハウスや十人会議にさえとどまって手の届かない存在であり続けることもできた。それでもかれは安全でいられただろう。でも大統領がひとたび四人会議の親密な平等性にまで自ら下ってしまったら、それで明らかに勝負はついてしまった。

そしてこの時点で、かれの神学的または長老派的気質と私が呼んだものが危険になった。多少の譲歩は避けがたいと決めたにしても、字面上は多少の犠牲を払ったにしても、強固さや演説やアメリカ合衆国の資金力を使うことで、その内実面ではできる限りのものを確保するようにはできただろう。でも大統領は、これが示すほど明確な理解力を持ち合わせてはいなかった。あまりに良心的だった。いまや妥協が必要となったにしても、相変わらず原理原則を重視する人物であり、14カ条が完全に大統領を縛る契約となっていた。不名誉なことは何一つしない。公正で正しくないことは何一つしない。自分の大いなる信仰告白に反することは何一つしない。こうして、当初の着想を字面上は一切減らすことなしに、14カ条は塗り隠し、解釈するための文書となり、自己欺瞞のあらゆる知的装置のための文書となった。それは、敢えて言わせてもらえば、大統領の父祖たちが自分たちの採らねばならない方向性がモーゼの五書の一字一句と整合性を持つのだと自分たちに言い聞かせたのと同じ自己欺瞞なのだ。

同僚たちに対する大統領の態度は今や次のようなものとなった。「私としては、できる限りきみの希望には沿いたいよ。きみの直面している困難はわかるし、きみの提案にも同意できたらいいとは思うんだよ。でも私は公正で正しくないことは何一つできないんだ。だからきみは、きみのやりたいことが本当に、私を縛っている宣言のことばの範囲内に収まっているということを、まっ先に示してくれなきゃいけない」。そしてこれにより、講和条約すべての文言と内容を不誠実さで最終的にくるむこととなる、詭弁とイエズス会的な

おためごかしの網の目を紡ぐ作業が始まった。パリのあらゆる魔女たちにお触れがくだったのだ。

きれいはきたない、きたないはきれい
闇と汚れの中を飛ぼう

最も巧妙な詭弁屋どもや、最も偽善的な筆耕者どもが仕事にかかり、大統領より賢い人物ですら一時間以上はごまかされたであろう、多くの巧みな作文を数多く生み出した。

だからフランスの許可がない限りドイツ＝オーストリアがドイツと合併するのを禁じるというかわりに（これは民族自決の原則に反することになる）、条約は繊細な作文技能を持って、「ドイツはオーストリアの独立を認知し厳密にそれを尊重し、その国境はその国家と主要同盟及び連合国との間で結ばれる条約で決定される。ドイツはこの独立が、国際連盟評議会の合意がある場合を除く不可侵であることに合意する」と書かれたが、これはまったくちがった内容のように聞こえて、実はそうではない。そして条約の他の部分に、この目的のための国際連盟評議会は全会一致でなくてはならないと書かれていることを大統領が失念したなどということは、だれも知るよしもない。

ダンツィヒ（訳注：グダニスク）をポーランドに与える代わりに、条約はダンツィヒを「自由」都市としているが、この「自由」都市はポーランド税関の境界内に置かれ、ポーランドに対して河川と鉄道のコントロールを委託し、「ポーランド政府はダンツィヒ自由都市の外交関係実施を行い、また同市の市民が外国にいるときの外交的保護も提供する」とされている。

ドイツの河川系を外国支配下に置くにあたり、条約は「一国以上に対して、ある船から別の船への積み替えを伴う場合とそうでない場合を問わず、海へのアクセスを自然に提供する河川系」を国際河川として宣言すると語る。

こうした事例はたくさん出てくる。ドイツの人口を制限してその経済システムを弱めるという正直で理解可能な目的は、大統領のために、自由と国際的平等というご大層な表現に覆い隠されている。

でも大統領の道徳的立場が崩壊してその心の目が曇った最も決定的な瞬間というのは、ついにその顧問たちの嘆きをよそに、同盟国の恩給や軍人別居手当が、他の戦争経費では認められないような意味合いにおいて「同盟及び連合国の文民人口に対するドイツによる陸海空からの攻撃から生じた被害」だと公平に解釈できるのだという説得に応じてしまった瞬間かもしれない。それは長きにわたる神学的な苦闘であったが、多くのちがった議論を棄却した挙げ句、大統領が詭弁屋の技芸による傑作の前についに屈服したのだ。

ついに作業は完了した。そして大統領の良心は相変わらず無事だった。あれだけのことが起こったのに、私はその気性のおかげで、大統領は本当に誠実な人間であるつもりでパリを離れることができたろうと思っている。そしてあの条約が、かつての信仰告白と一貫性のないものなど実質的にほぼ何も含んでいないと、大統領が今日なお心底思い込んでいる可能性は十分にある。

だがこの作業は完全すぎた。そしてこれは、このドラマにおける最後の悲劇的なエピソードのせいだった。ブロックドルフ＝ランツァウの回答は当然ながら、ドイツが休戦に応じたのはある種の保証が約束されたからであり、条約は多くの細部においてこうした保証と一貫性を持たないという立場のものだった。だがこれはまさに大統領が認めるわけにはいかないことだった。孤独な熟考と神への祈りにより、大統領は公正かつ正しくないこ

となど何一つ行っていない。ドイツ側の回答に一理あると認めることは、大統領の自尊心を破壊し、その魂内部の均衡を乱すことになる。そこで大統領の頑固な天性のあらゆる本能が自衛のために立ち上がった。医療心理学の用語でいえば、大統領に対してこの条約がその信仰告白を放棄するに等しいと示唆するのはむきだしのフロイト的コンプレックスに触れることなのだった。それは議論するのも耐えがたい問題であり、あらゆる無意識の本能はこの議論をさらに検討するのを阻止すべく動いたのだ。

このようにしてクレマンソーは、ほんの数ヶ月前ならとんでもないあり得ない提案と思われた、ドイツ人の言い分は聞くべきでないという提案を見事に成功させたのだった。大統領があればほど小心翼翼とせず、自分がやってきたことに対して目を覆ったりしないでくれさえすれば、最後の最後ですら失地回復してきわめて重要な成功を実現できる立場にあったのだ。だが大統領の心は決まっていた。その四肢は外科医たちによりある決まったポーズを取るよう切り刻まれ、それを変えるためには再びその四肢を壊さねばならなかった。ロイド・ジョージ氏は、自分が必死で訴えた寛容性を望んだが、五日だけでは大統領が、五ヶ月かけて公正かつ正しいと信じ込むに至ったまちがいを説得などできないということに、最後の最後になって気がつき戦慄したのだった。結局のところ、この根っからの長老派に詐術から目を覚まさせるのは、そもそも最初にだますよりもむずかしいのだ。というも、目を覚ますのはかれの信念と自尊心に関わることなのだから。

というわけで大統領の最後の行動は、頑固さと和解拒絶を示すものとなったのだった。

第2章

ロイド・ジョージ氏：断片



ロイド・ジョージ (英)

前章の、四人会議についての記述は1919年夏に、講和会議における財務省代表を辞任した直後に書いたものだった。批判を受けるべくこれを見せた友人たちは、ロイド・ジョージ氏に関連する一節を書くよう私をせき立て、彼らを満足させるべく書いたものが本稿だ。だが自分では満足できなかったので『平和の経済的帰結』には含めなかった。同書の「会議」に関する章は、もともと書いた通りのもので、加筆していない。良心の呵責のようなものにも影響されていたからだ。講和会議のある段階で、私はロイド・ジョージ氏とはとても近い関係にあり、根本的なところで本稿は、彼について言えるほぼあらゆることと同様に、部分的なものでしかないと感じていた。その場の勢いの中ですら不完全だと思えるものを、その場の勢いで印刷したくはなかった。

いまだにその良心の呵責は少し残っている。だがすでに十四年近くがたった。こうした問題はいまや歴史に属する。これはその頃の話であり、一側面にすぎず、目に見えたものではあるが全体像ではなく、このプロセスを間近で見たある一人の人物が、当時本当に感じたことの記録として提供するものでしかないということを、今なら当時よりは説明しやすいのだ。

* * * * *

この章はここで終えておきたかった。だが読者はこう思われるかもしれない：この結果の中でイギリスの首相はどんな役割を果たしたのだろうか？ 最終的な責任のうち、イギリスはどのくらいを負っているのか？ 二番目の質問への答はすっぱり割り切れるものではない。そして最初の質問について言えば、カメレオンにだれが色を塗れるだろうか、魔女のホウキをだれがつなぎ止められようか？ ロイド・ジョージの人物像はまだ描かれてはいないし、私もその作業に乗り出すつもりはない。

イギリスの利己的な、あるいはお望みなら正当な利害は、たまたまながら、十四カ条とも、フランスの利害とも激しく対立するものだった。商船艦隊の破壊、海軍の接收、植民地の放棄、メソポタミアの宗主権――ここにはアメリカの大統領が頑張るような話は、彼の職業から見てもあまりなかった。特にイギリスがいつもながら、フランス精神の論理的な非妥協性で外交的な穏健さを阻害されるようなことはなかったため、要求されることを何であれあらゆる面で譲歩しようとしていたので、それはなおさらのことだった。イギリスはドイツ艦隊を自分で欲しいとは思わず、その破壊は軍備解除の一段階なのだった。海軍の接收は正当な補償であり、アメリカが参戦する明示的な理由となった無法な潜水艦攻撃に対するものとして、戦闘停止以前の条件に明記されていた。植民地とメソポタミアについて、イギリスは独占的な主権など要求していなかったし、それは国際連盟の委任統治主義でカバーされていた。

だからイギリス代表団がパリに向かったときには、英米の交渉人の間で、ほぼ完全な相互理解を行うための克服不能な障害などなさそうに思えた。水平線に見えている雲は二つしかなかった――通称「海洋の自由」と、賠償金をめぐる首相の選挙公約だ。前者は、世間がずいぶん驚いたことだが、大統領はまったく提起しなかった。この沈黙はおそらく、もっと重要な問題についてのイギリスの協力に対して大統領として支払うのが正当だと考えた代償としての沈黙だったのだろう。二番目がもっと重要だった。

このようにして可能となった協力は、実務面ではおおむね実現された。英米代表団の個別団員は、友愛的な感情とお互いへの敬意の絆で結ばれ、正直な取り決めと、広い心に基づく人道の方針のため、絶えず協力し合い、共に立ち上がった。そして首相もまた、ラテン諸国の強欲さと称するものや、国際的名理想主義欠如に対し、大統領の友人にして強力な仲間として自らを打ち立てた。では、なぜこの二人の強力で啓蒙的な専制者たちは、よき平和をもたらせなかったのだろうか？

答は、帝国の野望と称するものや、政治家の哲学に求めるよりは、国内のお茶の間の悲喜劇を構成する心と人格の密接な働きに求めるべきだ。大統領、虎、ウェールズの魔女が六ヵ月にわたり同じ部屋に閉じこもって、出てきたのがあの条約だった。そう、ウェールズの**魔女**だ――というのもイギリス首相はこの三角関係に女性の要素をもたらしたからだ。私はウィルソン氏を、非国教派牧師と呼んだ。読者諸賢はロイド・ジョージ氏を、ファムファタルと見てほしい。世界の老人、ファムファタルと非国教派牧師――これが我々がドラマの登場人物だ。このご婦人はときにきわめて宗教的ではあったが、十四戒が完全に無傷でこれをくぐりぬけるとは、まず期待できるはずもない。

パリの黄昏の空を飛び回るホウキをシルエットにするため、背景を説明しなければならない。

パリ会議におけるロイド・ジョージ氏の責務への献身ぶりは、あらゆる公僕のお手本

だった。彼は休むこともなく、楽しみを享受することもなく、人生を送ることもなく、首相兼イギリスのスポークスマン以外の稼業を一切持たなかった。その労働は莫大であり、その大量の精力とエネルギーの備蓄をすべて、惜しまずに手を突けたなみなみならぬ作業へと振り向けた。彼の国際連盟の支持は誠心誠意のものだった。ドイツ東部国境地域に対する公平な自決原則の適用支持は、利害に左右されないものだった。カルタゴの平和を押しつけようなどとはまったく望んでいなかった。ドイツを押し潰すなどという狙いはまったく持っていなかった。彼の戦争嫌いは本物であり、ポーア戦争で彼を律していた平和主義と傑出した理想主義の傾向は、その態度の本当の一部だった。

だがパリが提供したような人格と能力の試験において、首相の天性のよい直感、その生産性、その疲れ知らずの精神の活気は機能できなかった。あの溶鉱炉においては、他の性質が求められていた――永続的な原理に深く根差した政策、粘り強さ、燃えたぎる怒り、正直さ、忠実なリーダーシップだ。もしロイド・ジョージ氏によい性質、魅力、魅惑などがまったくなければ、彼は危険にはならない。彼がセイレーンでないなら、渦巻きを恐れる必要はない。

だが彼に通常の基準を適用するのは不適切である。彼をご存じない読者諸賢に、この我々が時代の傑出した人物、このセイレーン、この割れ蹄を備えた魔術師、古代ケルトの魔術的で呪文をかけられた、魔女だらけの森林より現代にやってきた、半分だけ人間の訪問者についての公正な印象を、いかにしてお伝えしたものでしょうか。彼と一緒にいると、最終的な目的不在、内的な無責任さ、サクソンの善悪の外かそこから離れた存在が、北欧伝承に登場する美しげな魔術師たちに魅力と蠱惑と恐怖を与えている姦計、後悔不在、権力愛と組み合わせられているのが伝わってくるのだ。ウィルソン王子は、西部から三本マストの帆船ジョージ・ワシントン号に乗り、パリの魔法にかかったお城に足を踏み入れ、ヨーロッパという乙女、永遠の若狭と美を持ち、彼の母親と花嫁を兼ねた存在を、鎖と圧政と古代の呪いから解放しようとする。その白にいたるのは、黄色い羊皮紙の顔をした百万歳の王で、それと共に堅琴を奏で、王子自身の言葉を魔法の旋律にあわせて歌う魔女がいる。王子が、忍び寄る麻痺を振り払い、天に向かって叫びつつ十字を切れば、雷と割れるガラスの音と共に城はかき消え、魔法使いどもは消えうせ、ヨーロッパは彼の腕に飛び込んでくる。だがこのおとぎ話では、半分世界の力が価値、人間の魂は地の霊に従属させられるのだ。

ロイド・ジョージは根無し草だ。彼は空虚であり中身がない。自分のすぐ身の回りをもとに暮らし、それを糧とする。彼は楽器でもあり同時に演奏者でもあって、まわりの人々を演奏しつつ、彼らに同時に演奏される存在なのだ。彼がプリズムになぞらえられるのを耳にしたことがある。光を集め、それを歪めて、光が多くの方角から一度にやってくると、実に見事な輝きを放つ。吸血鬼と霊媒が一体となった存在だ。

偶然なのか、はたまた意図的なのか、イギリスの主要な戦争の狙いは、会議のごく初期に話がついた(ただし賠償金は例外だが、これが戦争の狙いだったかははっきりしない)。クレマンソーは当時、フランスの主要な要求を確保できなかったと批判された。だがその後のできごとで、彼がそれを無理強いしなかったのは正しかったことが証明された。フランスの要求は、私が指摘した通り、イギリスのものよりもずっと議論の余地が大きいものだった。そして講和会議の仕事をもっと厳しい試練にかける前に、イギリスを利己性の講和に十分巻き込んでおくことが不可欠だった。イギリスの要求は、大統領の繊細な舌を今後のもっと強い味に慣らすための、すばらしいオードブルとなった。この手続きの順番に

より、イギリス首相はフランスの要求に対して批判的すぎると思われたときには、自分がまっ先に思いつく限りの欲しいものをすべて確保してしまったから、いまやフランスの同志たちに対する責務を放棄するという彼らしい裏切りを行おうとしているのだ、という攻撃に曝されることになった。パリの雰囲気の中だと、これは実際よりもはるかに強力な挑発に思えた。だがそれが本当に首相への影響という点で強さを発揮したのは、三つの特別に重要な状況においてのことだった。二つの点で、首相は避けがたく分がちがたくクレマンソーに肩入れをするしかなくなった――賠償の問題と秘密条約の問題においてだ。大統領の士気がそのまま維持されていたら、ロイド・ジョージ氏はこれらの問題について自分の望みを叶えられるはずもなかった。だから彼は、クレマンソーとほとんど同じくらい、ウィルソン大統領の士気をだんだん壊そうとしていったのだった。だがそれに加え、彼はノースクリフ卿とイギリスの主戦論者たちの突き上げをくらっていたし、フランスのマスコミに登場する不満は、まちがいで自分たちと同意見を、イギリスのある一部で確実に見いだせたのだった。

だから、首相が立場をしっかりと維持し、実質的に大統領に肩入れするには、根本的な信念や原則に根差すしかないほどの勇気と信条に基づく行動が必要となる。だがロイド・ジョージ氏にはそんなものはまるでなく、政治的な配慮のために中道が示唆された。

よってまさに大統領が妥協の道へと押しやられる中で、首相も同じ立場となったのだが、その理由はまったくちがっていたわけだ。だが大統領が失敗したのは、妥協ゲームがとてもし下手だったからなのに対して、首相はあまりにそれが上手だったからこそ、害をなす方向へと進んで行ったのだった。

こうして読者は、ロイド・ジョージ氏がどのようにして表向きは中間の立場を占め、大統領に対してクレマンソーの立場を説明し、クレマンソーには大統領の立場を説明して、万人をすべて誘惑するのがなぜ彼の役割になったのかおわかりいただけたらう。彼はこの任にあまりにぴったりだったが、クレマンソーの扱いよりも大統領の扱いのほうがはるかに上手かった。クレマンソーはその年齢のせいもあり、ウェールズからのご婦人に丸め込まれるにはあまりにシニカルすぎ、あまりに経験豊かで、あまりに学がありすぎた。だが大統領にとっては、こんな手練れに丸め込まれるというのは、素晴らしく、ほとんど喜ばしい体験だったのだ。ロイド・ジョージ氏はやがて、大統領唯一の真の友人という地位を確立した。大統領のきわめてマッチョな人格は、首相の女性的な蠱惑、鋭敏さ、素早さ、共感に完全にたらし込まれたのだった。

したがってロイド・ジョージ氏はその中道の立場にいながらも、クレマンソーよりは大統領に対して影響力を発揮していた。さて読者の念頭にあの比喻をよみがえらせよう。首相の度しがたい取引好きを思い出そう。見かけのために内実をいつも譲り渡す傾向を思い出そう。月日がだらだらと過ぎる中で、結論をさっさと出してイギリスに戻りたいという強い願望を思い出そう。やがて登場した取り決めにおいて真の勝者がクレマンソーだったのも、むべなるかな。

それでも、近くで見ていた者たちは物事が妥結する直前まで、首相のまともな本能と もっと正しい判断力がまだ勝利するのが不可能だなどと思っただけで、彼は内心では、この講和条約が自分の汚点となり、ヨーロッパを破滅させかねないのを知っていたのだ。だが首相は、自分が飛び出せないほど深い墓穴を自ら掘ってしまっていた。彼は自分の苦闘に足をとられ、自分の手口に打ち倒されてしまった。それに、自分の運命の大いなる危機においては、そのときの低次の本能の方が勝利を収めるというのは、彼の内面

存在の特徴であり、トルや地球の魂なきシミュラクラどもの血縁関係がもたらすものなのだ*1。

これがパリで蠢く各種の人格であった－他の国や重要性の劣る人々については言及を控えよう。クレマンソーは、審美的に最も高貴。大統領は、道徳的に最も高潔。ロイド・ジョージは、知的に最も狡猾。彼らの相違と弱点から条約は生まれた。それはその親それぞれの最も劣る属性の子供であり、高貴さも、道徳性も、知性も欠けていたのだった。

*1 訳注：最初の原稿では、このところに次の一段落があったそう。

私は多くのことを書かないでおいた－彼に託されたどんな大義であれ最終的に台無しにすること必定の、不誠実でまさに恥知らずな陰謀の手口；政府という装置そのものの忠実なる指導と統御能力の欠如；そして自分が参加するありとあらゆる人々の集まりに対する不屈の精神と個人的な支配などだ。

第3章

ボナー・ロー氏



アンドルー・ボナー・ロー

ボナー・ロー氏の健康悪化は大いなる不運であり*¹、それは彼の支持者にとってと同じくらい、彼の政敵にとっても不運なことだ。保守党で、これほど偏見のない人物は容易には見つからないであろう。ボナー・ロー氏は何をおいても政党人であり、自分の党を深く気に掛け、党の本能に従順であり、あらゆる危機においては党という機械の指名を受ける人物であった。関税改革とアルスター抵抗運動支持という重要な二つの問題においては、彼は極端な党の見方を熾烈に採用した。だが本当のところでは、彼は保守党の原則をほとんど持たない人物だった。このカナダ出身の長老派教会信徒は、過去の伝統やシンボルに対して空想的な畏敬など抱いてはおらず、既存利権にもことさら配慮はなく、上流階級にも、シティにも、陸軍にも、教会にもまるで執着がなかった。彼はあらゆる問題をそれ自体の功罪に基づき検討する用意があり、資本課税に関する彼の率直な肯定は、その習慣的な精神状態の驚くべき例だった。

ボナー・ロー氏の保守主義は、ドグマや偏見、イギリス生活のある部分を温存しようという情熱に基づくものではなかった。それは用心、懐疑論、信仰欠如、一、二歩以上先を進もうとする知的プロセスすべてに対する不信、無形のものに頼る感情的な熱狂すべてへの不信、そしてあらゆる種類の成功に対する極度の敬意から発したものだ。

ボナー・ロー氏の議論における見事な技能は、私的な会話でも公開論争でも発揮されたものであり、それはあらゆる観察者に感銘を与えた彼の頭の鋭さとすべてを掌握する記憶力だけによるものではなく、議論を言わば盤上にある駒だけに限り、しかも確実に予見で

*¹ この一文はボナーの存命中、1923年5月に彼が首相職を最終的に辞したときに書かれた。

きる二手か三手先だけの話に限定するというやり方のおかげでもある(ボナー・ロー氏はチェスの技法に対する有名な技能を政治の問題にも適用すると明言していたから、彼の頭の働きを表現するのにチェスの例えを使うのは自然なことだ)。ボナー・ロー氏は論争において反論が難しい相手だった。というのも、盤上に見られる駒だけが議論の前提のすべてだという想定に基づき、完全に筋の通った答を常に行ったからで、さらにあまりに先を見通そうとする試みはすべてあまりに仮想的でむずかしいからやるだけ無駄で、問題となる試合は完全に事実とは切り離されたものとして展開されており、その試合における正しい動きをするという以外の実用的な狙いは一切ないのだという想定で返答が行われたからだ。この彼の手法は、ひょっとすると他の人と比べたとき、不当なほどに判断力と誠実さの面で高い評価をもたらしたかもしれない。かれはときには、他の政治家と同じくらい狡猾だった。自分でも指摘したように、見かけほど単純な人物ではなかったのだ。だが彼にとっては、どんな場合でも自分が尾持っていることをおおむねすべて語るのが、他人よりはずっと簡単であり、自分の本当の理由を何ら留保や実利的な魂胆なしに語れるのだった。他の人々のが持つ理由の一部は、簡単には表現できないほど迂遠なものだったり、目先の問題とだけ関連しているわけではなかったり、その場で導入するのが不都合だったりするからだ。かなり先のことを考えようとしたり、目先の立場を、それが全体との関係で持つ漠然とした枠組みとして捕らえていた蟻、あまりしょっちゅう口走るといささか堅苦しくなるような究極の理想を持つ論敵は、ボナー・ロー氏との論争では常に多に不利な立場に置かれる。かれの物静かさや、優しい聞き分けのよさや、論敵の発言の中での具体的な部分に対する辛抱強い関心は、反対者の態度の中で、何かヒステリックだったりやりすぎだったりする部分を強く浮き彫りにしてしまうのだ。

この国のために戦争をしかけた人々の中で、物事の表面においてこれほど俊敏な働きを示した精神は他になかった。公僕がその首長を会議に送り出すときの急かされた雰囲気の中で、これほど素早く説明を受けて、その問題をめぐる事実をもとに反論できる人物はいなかった。そして、その問題との以前の取り組みからこれほどのことを記憶できる人物もいなかった。だがこの理解の素早さは、事実や議論についてだけでなく、人物やその性質についての理解も含まれていたとはいえ、それがその客観的なチェス指しの頭脳と組み合わせわさったときですら、かなり決然とした反知識人的偏見から彼を救ってはくれなかった。四年ほど前のトリニティ大学記念式典に出席した人物は、学部生に対して彼が行った魅力的な小演説をご記憶だろう。そこで彼は優しいシニズムをもって、大学が代表しているものすべてを一蹴して見せたのだった。ボナー・ロー氏は自分を平凡なビジネスマンとして考えるのを好み、そうしたければ長期のトレンドよりはよい市場判断による短期の揺れで大儲けもできたはずで、戦争や帝国や革命を、産業の一般船長として扱う人物になれたと思いたがった。この未実現の可能性に対する知識人的な探究への不信のため、彼は目先の状況の可能性についての多大な用心と悲観論を、いずれ起こりかねないことについてのかなりの無謀さと組み合わせることとなる――これは戦時中も戦後も、彼の政策を貫く特徴であった。たとえば彼は、フランスのルール地方侵攻阻止はほとんど絶望的な提案だと主張しつつ、フランスがそうしたことによる結果は、とてもひどいものにはなるが、一部の人が予想するほどはひどくないかもしれない、と述べる。この性質のおかげで、彼はときに、予想されたほどよい交渉人になれなかったこともある。もっとよい取引を引き出せるという見通しについての陽気な楽観論や、道を譲ることで生じる確率の低い結果について怯えてしまったりすることで、少し譲歩しすぎるのを抑えられなかった。ひょっとすると

実のところ、彼はそんなにいいビジネスマンにはなれなかったかもしれない――目先の利益に飛びつくには悲観的すぎるし、将来の大惨事を避けるには近視眼すぎたのだ。

ボナー・ロー氏の成功に対する過度の敬意は特筆に値する。彼は結果的に正しかった知識人ですら尊重できる。彼はたたき上げの億万長者を崇拜する。成功のために他人に対して行使された手口にそうそう衝撃を受けたりはしない。かつて彼がロイド・ジョージ氏に対して抱いていた大いなる崇拜は、主にロイド・ジョージ氏の成功に基づいたもので、その成功が衰えをみせると、それに比例して崇拜も下がった。

慎み、優しさ、無私の心は、彼の身近で働くすべての人からの愛情を獲得した。だが世間が彼に対して抱く気持は、そうした単純な性質よりはもっと大きく、珍しいものを直感的に理解していたせいなのかもしれない。世間は彼が偉大な公僕であり、その謹厳で責務に満ちた生活は自分自身よりも世間のためのものであったと感じている。多くの政治家は、闘争の衝突や華々しさにあまりに没頭しすぎており、その心は権力の増大と誇示に明らかに夢中で、地位とキャリアを楽しみすぎ、そうした甘き喜びにしがみついて、主に自分の楽しみばかりにかまけている。これは妬みと非難とある種の侮蔑の自然な標的となる。彼らはすでにその報酬を得てしまっており、今さら感謝されるまでもない。だが世間は、自分の立場を理由もなく楽しまない首相を求めていたのだった。われわれは、国家の最高の地位に対して、首相であるのはもちろん素敵なことだが、それが特に渴望するほどすばらしいものだとも思わず、単に退職後にはなく在職中にも物事の虚飾を感じ取る人物の、悲しい微笑により統治されるのを望んだのだった。

1923年5月.

第4章

オックスフォード卿 (ヘンリー・アスキス)



ハーバート・ヘンリー・アスキス

晩年のオックスフォード卿^{*1}しか知らぬ者は、おそらく三十年やそれ以上前に彼のものだったと報じられている様相や評判をなかなか理解できないであろう。その能力と寡黙さはだれでも見てとれるものだったが、ベリオールカレッジ出身の新進弁護士のいささか謹厳な顔つきや、冷淡さとされるものは、戦中と戦後で高貴なローマ人へと変身をとげ、グラッドストーン氏以来空前の首相然とした様相を示したのだった。その巨大な相貌と、尊敬すべき強靱さはその晩年にあつて、冷酷さや自己中心主義を隠すものとはまるで思われず、むしろ感情にすぐ動かされる暖かく優しい心、さらには自分自身には何も求めず権利主張もしない個人的な慎みを、適切な形で覆い隠すものだと思われたのだった。

^{*1} 訳者注：もとの文は「オックスフォード卿」という題名だったが、オックスフォード卿はたくさんいるので、全集に入れるときには「ヘンリー・アスキス」と改題されている。第一次大戦に突入したイギリス首相。

オックスフォード卿は、偉大な政治家に必要とされる才能のほぼすべてを保有していたが、他人に対する無慈悲さと自分についての鈍感さは持ち合わせていなかった。現代の条件において、彼ほど繊細な人物が、公的生活の憤激に己をさらせるほどの強靭さを持ち合わせるものが二度とあるだろうか。オックスフォード卿は自分の敏感さを沈黙により保護した。反論や愚痴を一切差し控えたのだ。金銭ずくのマスコミからの手助けや機会は是非もなく拒絶した。彼は国家や政党の指導者となれた。友人や同僚を守るために駆けつけた。だが自分自身を守るのは軽蔑し、その度合いがあまりにすごくて、現代生活の実際の条件とほとんど相容れないほどとなっていた。だが、おそらくこの行動方針、この人格の要素こそは、年月が経つ中で彼にとって尊厳と甘く穏やかな雰囲気、相貌の優しき厳つさを形作ったものであり、その知人たちが、彼がついに離職した後に思い出の中で他ならぬオックスフォード卿のものとしてお菊するのもその部分となる。さらに彼は、単純なるものの喜びについて鋭い感覚を有しており、政治的な失望がやってきたときにも、自己憐憫に陥らずにそれに直面できたのは、その能力のおかげだったのかもしれない。

この時点では、彼を愛すべき人物とした性質と、彼のキャリアの幕引き段階である首相職を辞してからの最後の十二年間、彼の国家に対する建設的な奉仕にほとんど何も貢献はしていないが、彼自身の人格についての世界の知識と理解には大きく貢献した時期に最も注目された出来事にひたすら耽溺するのが自然だろう。だがもちろん、彼を国家の大なる役職へと就かせたのは、その知力と急速な生産性なのだった。オックスフォード卿の知性は理解の素早さと、明晰さ、批判低位名鋭さ、大量の正確な記憶、趣味のよさと選抜力、偏見と幻想の両方からの自由に、独創性と想像力の不在とを組み合わせたものだった。そしてこの独創性の不足が、これを成功した組み合わせとするための含有物として最も必要なものではなかったのかどうか、私には自信が持てない。彼の精神は、外部世界の所与の事実に対処するために構築されていた。それは工場または機械であって、鉱山や湧き出る地帯ではなかった。だがこの欠陥は彼の判断力の強さを温存した。オックスフォード卿は道を踏み外させるような知的流行りなどなかったし、自分で作った風船により地面から浮き足立つようなこともなかった。耳を傾けて判断するのが彼の仕事だった。そして彼が就いた役職――内務大臣、財務大臣、首相――は発明と構築の才覚を持つ人物ではなく、耳を傾けて判断するのが仕事の人物が就くのが最もよい地位なのだ。この仕事については、今世紀にはあらゆる面で、彼に匹敵する人物はいなかった。自分に語られていることの狙いを完璧に理解するには、多言も多時間も要さなかった。そしてそれに対して自分の知識と経験をぶつけるにあたり、偏見や先入観からは完全に自由なのだった。

彼の気質はもちろん保守派だった。もう少しバカさ加減と多少の偏見を挿入すれば、彼は政治的な意味での保守党にもなっただろう。実際の彼は、彼の世代における急進的なプロジェクトで正しく判断されたものを実行にまで進める、完璧なホイッグ党員となった。戦争八年前のリベラル法制を振り返ると、それがいかに数が多かった一方で、それがどれほど選び抜かれており、全体としてそれがどれほど完璧に物事の試練に耐えてきたか、驚くべきものがある。われわれはオックスフォード卿に対し、そのプログラムのどこかを少しでも発明したことではなく、その選択と実施の賢明さについて感謝する必要がある。1916年末に第一次連合政府失墜へと到った戦争遂行をめぐる論争についていえば、当時も今も、私は彼がおおむね正しかったと信じている。

オックスフォード卿ほどのつらい仕事を大量に生涯でこなせた人物はいないも同然だ。だが彼は実に活動を効率的に行って仕事をした。首相として生き残るにはそうするしか

かったのだろう。彼は印刷物や文書を、学者のようなすばやさで処理できた。現代の速記という呪いとそれがもたらす無駄口の多さに負けるようなことはなかった。オックスフォード卿は、願わくば決して死に絶えない偉人の系譜、ペンを手に取って、必要な行為を自筆でしたためた短いメモによって実行できる人々に属していた。仕事についてのオックスフォード卿の欠点は、ひょっとすると何か脇に置かれたときに関心を緩めてしまい、公式の一日の仕事が終わるとそれを内心や舌先に抱えようとはしなかったことにあるのかもしれない。もちろんこれは、ときには強さの源泉になったが、またときには弱さももたらした。その謙虚さは、ときには彼に言いにくい話を切り出しにくくさせたが――これは部分的には出過ぎた連中を抑えておくために主導的な政治家すべてが必要とする性質だが、オックスフォード卿はそれを異様なほどに実践した――それと組み合わせることで、問題を脇に置いておくという能力はときに、政治的なおなべの中で何が茹だっているのかを完全に把握できないようにしてしまったのだ。そうした心の習慣はまた逃げ道を作り出すこともできたし、特に個人的な問題ではそれが顕著だった。誠実な友人と、それほど誠実でないライバルとの両方に対する規律と厳しい峻厳さは、内閣の管理ではどうしてもつきまとうものだが、それが彼にはとんでもなく悪趣味に思えたのだ。

したがってオックスフォード卿は、完全に政治的でまったく個人的な側面のない大きな問題があるときに、最も頭角をあらわし、最も幸福だった。心と意図のまとまった支持者と副官たちの群れを背後に従え、そのちがいが様々な衝動性の度合いでしかないときに最も有能だった。そうした場合に、彼は偉大な政党において最も価値あるもののすべてを利用し、それを叡智の方向へと向けられたのだ。自由貿易のための戦い、議会法のための戦い、戦争の最初の年などはこの種の機会で、アスキス氏は自分の知性の全力と精神力強さをすべて担う指導者として立ち上がったのだ。

オックスフォード卿については、彼が学習と学究的な手法を愛し、大学が代表するものも愛していたのだということは記録しておこう。彼は本物の読書家だった。図書館の本を愛情込めて扱えた。古典と文芸的な探究に対する彼の才能は、その梯子の最初の一段をもたらしたものだだったが、それがもはや役に立たなくなっても捨て去られることはなかった。たぶん彼はそうしたものが好きだったのだろう、ちょうど大きな憲法的、政治的な論争が好きだったようにだ。特にそれが、あまり個人的な問題という汚れた泥とあまり混じっていないのも気に入っていたのだろう。オックスフォード卿を身近に知っていた人人は、彼を独得な家族の環境から切り離して考えることはできない。彼は、あの明るい円が回転するときのしっかりした中核なのだ――最も華やかでまばゆい世界の中心、現代イングランドというもっとも幅広いながら、最も気取らぬ歓待の心を持つ世界だ。比類無き女主人と向き合い、ウィットと豊かさ、気取りのなさなど、彼の最も素早く大胆なものをあたりに漂わせたオックスフォード卿は、これほどの光の中で最も鈍い人物に見せかけようとするのが好きで、自分は動くこともなく、理性と不合理の流れを楽しみつつ、あごを撫で、肩をすくめた、賢明で寛大な審判役を務めるのを好んだのである。

1928年2月.

第5章

エドウィン・モンタギュー

目にした新聞記事のほとんどは、エドウィン・モンタギューの驚くべき人柄について公正とはとても言えない扱いをしている。彼は激しく気分を変動させる人物の一人であり、無謀な勇敢さと自信から、情けないパニックと落胆へと即座に切り替わる――常に人生とその中で自分の役割をドラマ仕立てにして、自分自身やその直感について、最もよい見方をしたり最悪の見方をしたりするが、落ち着いた安定した見方はめったにしないのだ。だから悪意に満ちた人々が、彼の台詞を使って彼を糾弾し、その顔が地に向けて伏せられていたときだけを記憶することでその名を貶めるのは簡単なことだった。ある瞬間の彼は東の皇帝としてゾウに乗って現れ、レトリックと栄光に身を包むが、次の瞬間には道端のホコリにまみれた乞食となって、施しを懇願しつつもぼそぼそと、シニカルでとんでもないウィットを語り、それにより先ほどのレトリックと栄光を突き刺して、一層ホコリだらけにまみれた存在にしてしまうのだった。

東洋の人であり、それなのに西洋の知的技法と雰囲気とを備えていたことで、彼は自然にインドの政治問題に惹かれるようになり、自分とインド人民との間に直感的な相互の共感を認めたのだった。だが彼はあらゆる政治問題に関心があり、政治の個人的な側面にも大いに興味を持っていて、最も強烈な形での政治家だった。その他ほぼすべては彼を退屈させた。一部の回想録著者たちは、彼が実は科学者だったのではと示唆している。というのも自然が相手なら、ときには照明を逃れることができたからだ。他の著者たちは、彼の親と晩年2年にシティに入ったことから、彼はもちろん金融屋だったのだと考える。これまた真実からはほど遠い。私は財務省や、講和会議における財務的な交渉で身近に彼を見ていたが、彼の一般的な判断はよいものだったとはいえ、純粋な金融の問題について彼が気にしていたとか、大した才覚を持っていたとかは思わない。また――彼はお金を変えるもののためにお金が好きではあったが――彼はお金儲けの細部にも興味を持たなかった。

ロイド・ジョージ氏はもちろん、彼の政治キャリア失墜をもたらした――これはまさにモンタギューが常に語っていた通りだった。彼はロイド・ジョージというまばゆいロウソクから身を遠ざけられなかったのだ。だが哀れな蛾たる彼は、自分が羽根を焼かれることになるを知っていた。私や他の多くの人々が、あの（絶頂期にあつては）語られ得ぬものについての最も見事で、真実をついた、ウィットあふれる記述を聞かされたものだ。だが舞台裏でモンタギューの舌は主人だったが、その弱さは彼を、行動においては自然な傀儡にして被害者にしてしまった。というのもあらゆる人物の中で、彼は利用して放り出すのが最も簡単な相手の一人だったのだ。かつて、あるとても高貴な閣下が二人の従僕を備えており、その人地はびっこで、もう一人は俊足であり、したがって一人が届けようとする

辞任状を、もう一人がその運命的な10番街への配達前に横取りできるから、というわけだ。エドウィン・モンタギューの手紙は横取りはされなかった。だがそれを開けた人間の弱みを持つ繊細な知識人は、その頃には頭にのぼせた血がおさまっていて、寒風が吹きすさんでいるのを知っていたのだ。それは無視してもいいし、その著者の攻撃材料としても使える――気に召すままに。

彼ほどの大きな心を持つ男性で、あれほどゴシップ中毒だった人物はエドウィン・モンタギューをおいて知らない。ひょっとするとこれが、物事に立ち入らずにはすませられない主要な理由だったのかもしれない。彼は大臣や高官たちの従僕ホールでずっとゴシップに花を咲かせてきた。議会で国家の問題について論争してから、そこから出てきて小さな集団相手に、偉人たちが自分も含め何を言ったかについて、見事で暴露的なパロディーを、ものまねで味付けして演じてみせるのが彼の楽しみなのだった。だがかれは、ゴシップを先に進めて親密さに到達できるときのほうが気に入っていた。彼は自分の腹を割って話したいという強烈な願望をすぐに抱き、ときには自分を曝露までして、その告白相手から一滴の――ときには嫌々ながらの――愛情を搾り出そうとするのだった。それがすむと彼は再び沈黙し、耐えがたいほど引きこもっては、その大きな手を口の前で組んで、モノクル越しにじっと見つめつつ、石のようにじっと座り続けるのだ。

1924年11月.

第6章

ウィンストン・チャーチル



第一次大戦塹壕のチャーチル

戦争を語るチャーチル氏

この見事な本^{*1}は歴史ではない。それは一連のエピソードであり、鳥瞰図の連続であり、大いなる対決のある側面を明らかにして、現代戦争の遂行に関する著者の理論を、その最も広い戦略的側面において裏付けようとするものだ。このやり方には大きな利点がある。チャーチル氏は、非凡なまでにおもしろい多くの細部を語ってくれるし、そのほとんどはこれまで知られていなかったものだ。だがそれでも彼は、その細部で迷子になるようなことはない。戦争遂行における高次の考えにおける本質的な問題により、大きな課題にも取り組んでいる。本書は、多少なりとも価値を持つほとんどの本と同様に、目的をもって書かれている。歴史上の最も偉大で感動的な出来事ですら、その心に何一つとして明確な印象を引き起こさずに通り過ぎてしまうようなこれまでの退屈な著者たちが持つ、空疎な客観性のそぶりなどは見せない。チャーチル氏の知性は、戦争を最初から最後まで間近で見続け、内部の事実を知り、出来事の主要な役者たちの内面の思考も知っていた、最も鋭敏かつ集中した知性だったかもしれない。彼は真実や錯誤がどこにあったのかについて

^{*1} *The World Crisis, 1916-1918.*

て、大胆な結論を出している――しかもそれは、事後の岡目八目だけではない。そして彼は本書でわれわれにそれを、修辭的ではあるがあまりに修辭過ぎはしない言葉で語ってくれる。これは当然ながら、彼が最も身近だったものを最も多く語り、自分が最も賢いと思った部分を主に批判するということだ。だが彼はこの離れ技を、無用な自己中心主義なしに行おうとする。恨みを晴らそうとしたり、悪意を示したりはしない。彼の分析の被害者となった提督たちや将軍たちですら、あまりひどくはやり玉に上がらない。アスキス氏、ロイド・ジョージ氏、バルフォア氏、ボナー・ロー氏、サー・エドワード・カーゾン――チャーチルはこの全員について、そのいくつかの長所を認めて公平かつ親しみをこめて扱い、国に奉仕した人々について、ちょっとした欠点があるからというだけで罵倒したりはしていない。チャーチル氏はディズラエリ以来のどんな政治家よりも文章がうまい。本書は、その偏向が正しいにせよまちがっているにせよ、彼の評判を上げることだろう。

チャーチル氏の主要な理論は、ざっと言えばあらゆる国でプロの兵士たち、つまり「真ちゅう帽たち」は、軍事政策全般の問題において、一般にまちがっていた、というものだ。事前の議論の重みにおいてもまちがっていたし、事後の証拠の重みについてもまちがっていた。これに対してプロの政治家たち、サー・ヘンリー・ウィルソンのいう「フロックたち」(彼もまたちょっとした「フロック」だ)は全般に正しかった、という。これは当時は外部の観察者が判断をつけられない問題だった。というのも戦争の転回点ごとに、どちら側も致命的なまちがいを重ねていたように見えたが、だれもその責任を閣僚と軍部との間で仕分けできなかったからだ。イギリスでは、世論は全体として将軍たちのほうに肩入れした――小突き回されるご同輩「フロック」たちよりずっと華々しく、ずっと派手な存在だったし、しかも公開で弁解をせずすむというすさまじい優位性を享受していたからだ。チャーチル氏はこのバランスを回復しようと乗り出し、いまやあらゆる方面から得られる完全な情報開示に照らして、叡智を持っていたのは全体としてアスキス、ロイド・ジョージ、自分であり、さらにはブリアン、パンルヴェ、クレマンシー、さらにベスマン＝ホルヴェグと皇太子にさえ叡智があったのだという。そしてヘイグ、ロバートソン、ジョフレ、ニヴェル、ファルケンハイン、ルーデンドルフが戦争を邪魔したり敗戦をもたらしたりしたのだという。

軍部に対するチャーチル氏の糾弾をまとめてみよう。どちらの側もクンクタートル・マクシムスを明らかに欠いていた。待ち、撤退し、そそのかすようなファビウスは登場しなかった。「真ちゅう帽たち」は常に急いでおり、自分たちの新しい攻撃兵器保有を、決定的な戦果を生み出せるほど備蓄が進む前に、あわててバラして見せるのだった――ドイツの毒ガス、ドイツのUボート、イギリスの戦車など。そして、悲惨な「攻撃」の役立たずな虐殺へと急いだ。戦略的な降伏、意図的な撤退、脇から制圧できるような袋小路に敵を誘導する試み、こうした戦争の高次の想像力活用はすべて、ほとんど試みられなかった。1918年7月のフォッシュ指揮下でのマンジャン反攻は、仏軍も英軍もどちらも軽視して信用したがらなかったが、これはそうした数少ない試みの一つだった。軍部の発想は最初から最後まで、極度に幼稚だった――攻撃では、敵の最も強い部分を見つけ、そしてそこに自分で飛び込んでいく。防衛では、最初の塹壕で英雄的に死んでみせる。重要な例外は二つしかなかった――1917年のドイツによるヒンデンブルク戦線への撤退と、サー・ジョン・ジェリコの不変の相貌だ。チャーチル氏によるユトランド沖海戦の見事な分析は、素人目に見るとジェリコが機会を逃したことを示しているように見える――彼がその機会を逃すべきではなかった、と。だがジェリコは、他のどんな一個人よりも重いリスクと責任

の負担を背負っており、チャーチル氏も認める通り、どちらの側においても一午後だけで敗戦を引き起こし兼ねなかった人物として、唯一の勝利したクンクタートルとして傑出しており、機会をのがしたとしても、最初から最後まで悲惨なまちがい一つも冒さなかった。チャーチル氏による鋭い批判に照らしても、北海を担当する人物として、戦争で他のどんな国に登場した他のだれであれその任に充てたいとは思わないと思う。

チャーチル氏の次の論点は、軍部の偏狭な地理的視野、敵味方どちらも潜在的な敵の全体像に対して、広範な戦略的政治的視線を投げかけられなかったというものだ。軍はお互いに磁石のように引き寄せられた。兵士たちは常に、敵がどこで最強かを忙しく見極めて、そしてそれに対抗するため、そこに同量かもっと多くの軍勢を要求してばかりで、敵がどこで最弱かを調べてそこを攻めるということがなかった。これは昔からの論争であり、チャーチル氏の立場、およびロイド・ジョージ氏の立場はみんな昔から知っている。本書が彼らの主張に直接的なものを大して付け加えているかどうかはわからないが、チャーチル氏の三番目の論点は、これから説明するが、確かに軍部の頑固な鈍重ぶりに対し、政治家の不断のビジョンのほうが、勝利へのヒントとして潜在的に価値があるとうらづけているように思う。チャーチル氏はドイツ人、特にファルケンハインも、この点ではわれわれと同じくらいヘマをしていたと主張する。どちらの側の將軍たちも、同じくらい筋金入りの「西洋人」であり、その性向を通じてお互いを支え合い、それぞれの故国の政府には逆らったのであった。

この偏狭な地理的、政治的な見通しと似ているのが、專業兵士たちについての科学的なビジョンの偏狭さ、新しい機械的なアイデア採用のとんでもない遅さで、これは戦車の歴史がはっきり示している。(軍部はその着想時には戦車を重視せず、それが挙げた戦果に狂乱したくせに軍備省に対して十分な台数を要求しようとせず、そしてルーデンドルフもその存在を早め知っておきながら、本格的な規模でそれを真似ようとはしなかったのだ。弾薬の過剰生産と騎馬隊の維持も、そうした心の柔軟性欠如のさらなる例だ。騎馬隊には1918年ですら、機関銃と同じくらいのイギリス兵員が割かれており、戦車部隊の2倍の人員だった。これに対して、代替の戦略は、人員を大量に飛行機、機関銃、戦車、ガスに集中させるというもので、一度も採用されることがなかったが、その例外はチャーチル氏自身が1918年に行ったものであり、そして1919年の未遂に終わった戦役に向けて用意されたものだった。

第三の論点は、おそらくチャーチル氏の本で最も目新しく興味深い部分を構成しているものだが、いまや両側の記録で完全に明らかとなった結果から判断して、西部戦線の大攻勢が本当はどれだけ価値があったか、というものだ。ここでこそ、プロの政治家たちとプロの軍人たちとの間で、最も激しく継続的に意見が分裂していたのだった。1917年にロイド・ジョージ氏が一時的に軍部の見方に寝返ったのを除けば、政治家たちはずっと、軍人たちが防衛の可能性を過小評価し、攻勢の潜在的な利得を課題に見ていると考えていた。そして、西部戦線で要塞化した立場の敵を攻撃したところで、勝負は決してつかないとも思っていた。戦時内閣の影響力は、1915年、1916年、1917年の「攻勢」に対してほぼ一貫して反対するものだった。数代にわたる内閣はこうした呆れ果てるような攻勢に何も期待しなかったので、残酷で無駄な損失についての影響を彼らの心の中で軽減させるものは何もなかった。1917年末までにはロイド・ジョージ氏が、大陸で予備兵がまちがいなく必要だったにもかかわらず、手持ちの兵員を英仏海峡を越えて輸送させないようにするという状況にまで発展した。いったんその兵がフランスについたら、サー・ダグラス・ヘイグ

がそれをみすみす虐殺されに送り出すのを自分は防げないとロイド・ジョージ氏は考えたからだ。チャーチル氏はこう書く。「だがパッシェンデルが首相と戦時内閣の内心に引き起こした恐怖がなければ、ヘイグはまちがいなくはるかに大きな増援を与えられたことだろう」。アスキス氏の、長きにわたる面倒な徴兵制反対から、1917年冬のこの一件まで、優しい心を持っていたのが政治家であっただけでなく、全体として軍事的な根拠から見ても、正しかったのは政治家たちだということをチャーチル氏の証拠は十分に示している。

各攻勢が終わる毎に軍部は、結果が本意だったことをすぐに認めたが、敵に与えた巨大な損失と、消耗戦という狙いに向けて多少は満足できる進展があったことで自分を慰めるのが常だった。チャーチル氏は、当時こうした結論を信用せず、両側からいまや手に入る死傷者の数字を見ると、ほとんどあらゆる攻勢の結果は、攻撃側の兵力を以前よりも相対的に弱めるものだったのだと主張している。サー・フレデリック・モーリスは『タイムズ』への投書で、統計のこの解釈には異論があると述べている。だがチャーチル氏が自分の主張を少し誇張しすぎているにしても、全体としてはその主張を確立できているようだ。特に、ルーデンドルフの見かけ上は成功した1918年の攻勢こそは、最終的なドイツ崩壊の道へと続き、まさにそれを不可避にしてしまったものだったのだ。

チャーチル氏の本で何よりもおもしろいのは、両側の最高司令部に見られる主流の人格に関する印象だ。彼曰く「まったく欠けていたのは、あの歴史上の偉大な征服者の人格にはっきり見られる、王・戦士・政治家の至高の組み合わせだ」。大司令官のほとんどは、ジョフルは例外かもしれないが、まちがいなくその機能においては傑出した能力を持つ人々だった。だが彼らは圧倒的に鈍重な石頭タイプばかりで、想像力よりはるかにツラの皮のほうが強かった。融通が利かないのはヒンデンプルクだけではなかった。ジョフル、キッチェナー、ヘイグ、ロバートソン、ルーデンドルフ――みんな同じ表現が当てはまる。熟睡し、食欲旺盛、彼らが気分を害することなどない。みんなほとんど自分の行動を説明できず「直感」に頼りたがるので、絶対に反論されない。チャーチル氏は、ロバートソンからヘイグあての手紙を引用する。そこではロバートソンが西部戦線の攻勢を続けろと提案しているが、「それは何か裏付けとなるよい議論があるというよりは、直感がそれを続けろと促しているからなのです」と書いているのだ。チャーチルはこうコメントする。「これは四十万人近くの犠牲を続けるのに使われるには、ひどい言葉だ」。この人物類型は、チャーチルによるジョフル爺さんの半ば戯画的な描写で頂点に達する。現代戦争における最高司令部の損傷摩耗には、もったきちんとした人物であればまちがいなく耐えられない。そういう人々は必然的に排除されて、チャーチル氏に言わせると、悲惨な驚きの中でも「鈍感とほとんど見分けがつかないくらい」平静を保てる人物に置きかえられる。さらに最高司令官は、真実を聞かされることがあっても、ほとんど最後近くの間人だ。「軍人の心の習慣はすべて、意見の従属に基づいている」。これはつまり、忌憚ない有人たちや監視の目を光らせる政敵に囲まれた、政治家のもっと軽やかな心のほうが、正しい結論を出すにあたって不可欠だったということだ。ドイツの最終的な敗退は、実はその軍総司令部の強さが優れていたためだ。もしドイツの政治家たちが、イギリスやフランスやアメリカと同じくらいの影響力を持っていたなら、あんな負けぶりは決して見せなかつただろう。ドイツの致命的な三つの誤り――ベルギー侵略、Uボートの無制限使用、1918年3月の攻勢――は、チャーチル氏によるとどれも軍部の特異かつ単独の責任だ。ルーデンドルフは軍部の影響力と、その最高の性質を体現した最終的な存在だった。ドイツの軍部の成員たちは：

最も密接な専門的仲間意識と共通の狭義で結ばれていた。彼らは軍の他の人々に対し、イエズス会がその頂点においてローマ教会に対して持っていたような存在だったのだ。あらゆる指揮官の横にいて、本部にもいた彼らの代表は、独自の言語を話し、独自の落ち着いた自信を持っていた。工兵隊や陸軍のドイツ将軍、陸軍集団司令官、いや当のヒンデンブルク地震ですら、この友愛集団によって、ほとんど信じがたいまでに単なるお飾り扱いされ、しばしばそれ以上のものとしては一切扱われなかったのだった。

ドイツ軍を化け物じみた規模にまで拡大させ、その非人間的な行為を挑発して組織したのはこの驚異的な友愛集団だったのだが、しかしそれ自身の本質の避けがたい働きにより、その大敗北を自らにもたらしたのも、まさにこの友愛集団なのだった。

チャーチル氏は、決定を下せる立場で大規模で戦争を行う体験を享受できる人々の、強烈な体験についての自分の喜びをごまかそうとはしない。またその一方で、そうした喜びの原材料を提供する人々にとってそれがいかにひどいものかを隠そうともしない。強調の偏りは、大きな決断と高次の議論にある。だがそれによって彼の本が最終的に読者に与える印象が、戦争に反対する論考となるのはいささかも阻害されていない――平和主義者による作品よりもそれが有効に行われ、戦争というものの狙いとその手法の愚鈍にとどまらず、それ以上にその愚鈍さが個別プレイヤーの偶発的な性質によるものではなく、戦争の精神とルールに内在するものだというところを、そのゲームを愛する人物が実証してみせているのだ。

1927年3月。

平和を語るチャーチル氏



ピースサインのチャーチル

チャーチル氏は自分の作業を終えた――圧倒的で他を寄せ付けないまでに、戦争の歴史についての最大の貢献であり、歴史家と生まれながらの文章家の才能が、その出来事の

主要な主導者の深遠な体験と直接的な知識と組み合わせた唯一のものだ。この最終巻*2は、試験では前の二巻ほどはよくない――この凋落は、これまたたぶん著者が最近になって政府に戻ったがっかりする結果の一つなのだろう。というのも本を書くのはフルタイムの仕事だし、財務大臣もまたフルタイムの仕事なのだ。だがこの本は『タイムズ』が刊行したいささか平板な修辭的抜粋を読んだ者が想定するものよりはずっと出来が良い。というのもその抜粋は、抜粋の常として、全体の流れと印象をなくしてしまうからだ。

チャーチル氏は序文で、自分が個人的に関わっていた実に多くの重要な出来事が完全に頭の中から消えてしまったと書いている。彼によれば、これはおそらくほとんどの主要役者たちに共通の体験なのだという――「ある印象が別の印象を消してしまう」。行政の流転の中で暮らした人はみんなそうなのだろう。私にとって、ホテル・マジェスティックで出されたミッドランド鉄道朝食マーマレードの品質は、他のどんなものよりも強く印象にこびりついている。その体験がどんなものだったか、私はズバリわかっている。戦争を記憶の中で生き直せるのは、何ヵ月も塹壕の中で暮らしたり、何か反復的な軍の定型活動に苦しみ、ある印象が他の印象によって強化され続けた人だけなのかもしれない。だがチャーチル氏は後代では決して自力では再現できないであろう動機や雰囲気について、同時代の印象を伝えようと企んだ――だが興味深いことに、読者が本能的に読み飛ばすであろう、彼の引用する当時の文献が伝える部分は最も少ない。この本にはまた、その時点での感情が永遠の溝を刻んだような、傑出して感動的な下りがいくつかある。中でも私が例として挙げたいのは、イギリス動員解除とアイルランド条約の記述だ。さらにそれは、あらゆるものの中でわれわれが最も忘れがちなものを圧倒的によみがえらせてくれる――それは戦争後の時代、チャーチル氏の著書の題名となった「その後」の暴力、流血、混乱だ。

本書は主に四つのちがう主題で構成されるが、いささか気の散ることに、章ごとにそれが入り乱れている――講和会議、ロシア革命、アイルランド反乱、ギリシャ＝トルコ紛争だ。こうした記述の中で、ロシアの話が――予想通り――最も不満の多い部分だ。チャーチル氏はロシア内戦の失敗における自分自身の役割を、不当に弁護しようとはしていない。だが彼は、物事の大きさをその当然の関係性の中で見ようとしなない――あるいは少なくとも、それを適切な視野に収めようとしなないし、本質的なものを一過性の出来事と切り分けようとしなない。彼は自分が支持した取り決めの、避けがたい不毛性を半ば認めてはいる。読者に、かれとしては本当に理想化したかったであろうロシア白軍の、見下げ果てた人格とどうしようもない無能ぶりを見せてくれる（「紛争に負けたのは、物質的な手段が不足していたからではなく、仲間意識、意志力、無骨な頑固さの欠如のせいなのだ」）。そして彼は、こんな取り決めと一切関わりを持たないと明言したフォックを引用する。フォックは「大いに決然と」こう言った。「このコルチャックやデニキンの軍隊は、背後に市民的な政府を持っていないから長持ちするわけがない」。だがボリシェヴィキたちは彼にとって、レーニンの偉大さに対する彼の賞賛にもかかわらず、愚鈍な残虐行為以上の何物でもない。彼の想像力は、ボリシェヴィキたちを偉大な死肉処理人とは見ることができず、白軍将校たちがよく見えるのは上辺だけだということも理解しようとしなない。だが彼は、その見事な結びの言葉――「ロシアよ、自らを追放し、北極海の夜に銃剣を磨き、自らを飢えさせた唇で、憎悪と死の哲学を機械的に唱える」――が本当に真実の全貌だとも思っているのだろうか？

*2 *The World Crisis: the Aftermath.*

ロシアを除けば、チャーチル氏は世論のとて公正とはいえない評価とは裏腹に、融和政策の熱心で一貫した支持者のように見える。ドイツ、アイルランド、トルコでの融和だ。1920年3月に彼がロイド・ジョージ氏に書いたように――「停戦以来の私の政策は『ドイツ人とは平和、ポリシェヴィキの圧制とは戦争』となるでしょう」。講和会議の間中、彼が持っていた影響力は、穏健さのほうに向けられたのだった。

講和会議の彼の記述事態は、本書の他の部分に比べて個人的な部分が少ない。というのも彼は確かに、直接的な関わりはほとんどなかったからだ。パリを一、二回訪問したが、主にロンドンで他の事柄に忙殺されていた。だから彼が提示するのは一般的な見方で、交渉の主流の外側にいたイギリス閣僚の一人としての印象だ。彼の態度は、遺憾だとは思いますが肩をすくめるだけ。当時もその後も、肩すくめはあまりに多すぎた。彼は自分の肩すくめを二つの理由で正当化する。まず、政治家は優柔不断だけでなく、優柔不断が正しいことなのだから、彼らの優柔不断は単に、実際の無能ぶりを実現したにすぎないのだということ。そして二番目に、金銭的、経済的なまちがいはいずれは何とかなるが、国境（これは会議ではそんなに悪い扱いにはならなかった）こそは唯一の長期的な現実だ、ということだ。戦争の悲惨についても同じことが言えそうだ――すべては終わったことだ――そしてほとんどあらゆることについてもそれは言えてしまう。というのもその結果は、それが続いたとしても、一般には時の流れの中にかき消えてしまうからだ。そして政治家が、そうしないと失職する場合には常に自分の確信に逆らって行動しなくてはならないというドクトリンが本当なら、彼らの首をすげ替えるのは実際よりもむずかしいということになってしまう。当時も今も私は、あれが政治的な勇気への投資が最終的に見事な見返りををもたらしたはずの状況だったと信じている。

講和会議に関するチャーチル氏の記述は、その場でボロボロにされた人物なら自然に出てくるはずの感情の強さを欠いている。だがそうは言っても、本当に起きたことの一般的な性格について書かれた手短なハンドブックとしては最善のものだ。中には特だすべき点も一つか二つある。チャーチル氏が1919年ドイツ封鎖の長期化を、第一級の重要性を持つ問題として強調したのはよいことだ。戦闘停止の更新とドイツへの食糧供給をめぐる幾度も交渉の驚くべき歴史は、これまで印刷に供されたことはないのだ^{*3}。彼は、その重要性は認知しているものの、それについての記述（66, 67ページ）はまるで正確ではないし、彼が細部に精通していないか、すでに忘れてしまっているのを示している。中欧の悲惨な窮乏を長引かせた主な責任者として特だすべき個人がいるとすれば、それは「役人たち」ではなく、まちがいなく賞賛されているムッシュー・クロツツだ。ロイド・ジョージがカイゼルを絞首刑にしたいといったのはまったくの本気だし、他の人が冷静になってもずっとそうした感情を抱き続けていた、というのは本当だと思う。だが彼がいつの時点であれ、賠償金については幻想を抱いていなかったし、慎重に読めば留保条項のついていない声明を出したことはないというのも事実だ。

また、1919年6月1日にロイド・ジョージ氏が、講和条約草案へのドイツの回答を検討するためにパリで召集した大英帝国代表団会合について、彼がこれまで刊行されたものよりも十分な記述を行っているのもよいことだ。首相がこの会合を召集したのは「講和条件の軽減を獲得するための努力において自分を力づけるためだった」。チャーチル氏自身

^{*3} この出来事についての私の印象は、その直後に書き留めたが、まだそれを印刷に供する時期は到来していない。[編者注：これは『回想二篇』（Hart-Davis, 1949）収録の「メルキオール博士」として出版された。]

も帝国軍部の長官承認済みのメモを回覧し、われわれが少なくともドイツ人たちと中間地点までは妥協すべきだと促した。この見方は実質的に、代表団と内閣の全員に受け入れられ、そこには当時の財務相オーステン・チェンバレン氏、バーケンヘッド氏、ミルナー氏、バルフォア氏も含まれていた。この会合は、多くの重要な譲歩が行われるべきだと決議し、「大英帝国すべての重みを活用し、必要なら英陸軍がドイツへと侵攻するときに協力を拒絶する、あるいは英海軍がドイツの封鎖実施を拒否するところまでやってかまわない」という捕捉条項まで首相に与えた。これはロイド・ジョージ氏が正真の、だが長続きしない、「よい」講和に向けた努力を行った二回目だった。だが、実現はしなかった。得られたほぼ唯一の譲歩は上部シレジアの住民投票だけだった。その他の部分については、ウィルソン大統領が拒絶した。彼は――私が『平和の経済的帰結』で述べたように*4――この段階では、「一切受け入れない」状態になっていたのだった。

チャーチル氏は、ウィルソン大統領いろいろ文句がある。彼は自分自身の記憶だけでなく、ハウス大佐の最新の著書という、その場面に実に明るい照明を横から投げかけてくれる記録の支援を受けている。証拠が積もるにつれて、大統領が盲人同然であり、信じられないほど物事の現実から遊離していて、まちがった猜疑心ばかりで一杯だったという印象は裏付けられる。だが彼の精神に平和あれ。チャーチル氏のまとめは公正なものだ。

強大で冷静かつ善意のアメリカがヨーロッパの講和に与えた影響は、希望の貴重な材料だった。その善意は、不毛な争いや、中途半端でやりかけの邪魔によりほとんど無駄にされてしまった。もしウィルソン大統領が当初から、ロイド・ジョージやクレマンソーと共通の大義を打ち立てようとしていたなら、この三人の偉人、主要支配国の首長たちの力をあわせることで、ヨーロッパの悲劇の広い場面に対する全体会議で有益な力が発揮されたかもしれない。彼は自分と他の二人の力を紛争の中で消耗させ、常に自分が負けた。彼が敵対者や修正者として得た結果は、仲間になっていれば報われたはずの結果と比べ、哀れなまでに乏しかった。すべてを素早く簡単に決めることもできた。だがすべてを遅らせ、困難にしてしまった。指導力が強かったときに調停案を打ち出すこともできた。だが疲労と分散の段階が支配的となった段階で、二流の解決策を受け入れるしかなくなってしまった。

だが船長として、彼は船と運命を共にしたのだった。

年代記は完結した。人はどのような気持でチャーチル氏の二千ページの本を置くのだろうか？ これほどの雄弁さと、戦争世代のわれわれすべての生活の一部となったとはいえ、著者がずっと身近ではっきり知っている物事の気分をもって書ける人物に対する感謝。現時点においてわれわれの大問題となっていることに対する、知的な関心と本質的な感情の強烈な吸収と心のエネルギー――これは彼の最高の性質だ――についての賞賛。フロンティア、人種、愛国主義、必要なら戦争ですら、最終的には人類の真実なのだという揺るぎない彼の確信についての多少の妬みもあるかもしれない。このため、他の人にとっては悪夢じみた幕間でしかなく、永遠に回避すべきできごとでも、チャーチルにとってはある種の尊厳と高貴さを感じられるのだから。

1929年3月.

*4 上の pp. 30-31 参照

第7章

偉大なるヴィリアーズ・コネクション

ガン氏*1 は、ゴールトンが発明した魅力的な主題をさらに進めようと乗りだした――有名人とそこそ有名な人々を結びつける、世襲的な雑学の収集だ――これは青い目、丸い頭、足の六本指といった、確実に決定できる特徴について、完全な家族樹の科学的な構築を行うのとはかなりちがう主題となる。彼の手法はゴールトンのものと同じく、各種の傑出した「つながり」をいそいそそれぞれ採りあげ、驚くほど多くのセレブたちが、お互いに何らかの従兄弟同士だったりすることを示す、というものだ。

ガン氏の示すつながりで最も驚かされるものは、どう見ても目新しいものではないが、繰り返す価値のないほど言い古されたものでもない――ドライデン、スウィフト、ホレーズ・ウォールポールのいとこ関係だ。この三人とも、ノーザンプトンシャーのキャノンズ・アシュビー出身のジョン・ドライデン子孫であり、スウィフト牧師は詩人ジョン・ドライデンのまたいとこの子、ホレーズ・ウォールポールは詩人のいとこの曾孫となる（ホレーズはドライデンの叔母エリザベスから生まれた母方の子孫だ――だからその父親がはっきりしなくても関係ない）。ガン氏はこの壮大な展示を、元のジョン・ドライデンの妻――エリザベス・コープにたどる。彼女はエラスムスの友人であり、サー・ラルフ・ヴァーネイの曾孫で、これにより実に多くの人々が同じコネクションに入ってくる。そこにはロバート・ハーレーも含まれる。今日この偉大なヴァーネイ・コネクションの代表と言えるのは、レディ・オットライン・モレルだ*2。一方で、レディ・オットラインは服地商人ヴァーネイの子孫であるだけでなく、サー・ウィリアム・ピエルポントの子孫でもある（そしてその妻を通じてヘンリー七世のエンブソンともつながっており、そのエンブソンはふるい職人エンブソンの息子だった）ことを思い出せば、彼女がフランシス・ビューモント、チェスターフィールド卿、レディ・メアリー・ウォートレー・モンタギューとも血縁関係にあることが確立される。われわれの家族自体は自分自身の意味合いを見失ってしまった。当のレディ・オットラインは、ビューモント、ドライデン、スウィフト、ウォールポール、ハーレー、チェスターフィールドを親戚呼ばわりできると知っているのだろうか。類は友を呼ぶ、というやつか？ ひょっとするとこの血族関係には、何か持続的な要素が見られるのかもしれない。

*1 W. T. J. Gun, *Studies in Hereditary Ability*.

*2 1938年4月21日没

1515年にフロッデンフィールドで倒れたジョン・リードの子孫に関するガン氏の分析は、少なくともこの評者にはもっと目新しいものだった。ここには驚くほどの多様性がある――そしてまた、共通の性質も見られるだろうか？ 18世紀にジョン・リード氏は、ボズウェル、歴史家のロバートソン、建築家ロバート・アダム、ブローハムを生み出した。現存するその子孫としてはバートランド・ラッセル氏、ハロルド・ニコルソン氏、ブルース・ロックハート氏、救世軍のブース＝タッカー将軍がいる。これまた類は友を呼ぶだろうか？

ガン氏は、今日の有名な作家の実に多くが、ふるい共通の血筋を持つことを苦勞して示している。彼はG・M教授とR・C・トレヴェリアン氏と、ローズ・マコーレー嬢が高地民オーレイ・マコーレーの子孫だと教えてくれる（したがってT・B・マコーレーとも近い関係だ）。そのマコーレーの息子ケネスの本についてジョンソン博士はこう語る。「自由と奴隷制についての気取った部分以外は見事に書かれている」。またヒュー・ウォールポール氏、リットン・ストレイチー氏、コンプトン・マッケンジー氏、モーリス・ベアリング氏、そして（まちがいなく付け加えるべきだった人物として）ヴァージニア・ウルフ夫人も数世代にわたり傑出した血筋だと言えることも示す。そして、オルダス・ハックスレー氏は祖父の孫というだけでなく、マシュー・アーノルドの姪だったハンフリー・ワード夫人のおいでもあるのだということも示されている。

中でも最も驚異的な家族について言及する余地が残されている――それが偉大なヴィリアーズ・コネクションであり、そこからはあらゆる野心的な魅惑家が出現している。その相貌と声においては実に多大な魅力を持ち、どこか内側には実に強情な核を持ち、17世紀にはわれらが君主のお気に入りや愛人で、その後もずっと議会制民主主義にお気に入りだった人々だ。サー・ジョージ・ヴィリアーズの子孫やサー・ジョン・セントジョンの子孫を含まなかった内閣は、二百年にわたりなかったはずだ――ただし労働党内閣二回は例外かもしれない。このジェームズ一世の御代の田舎紳士二人は、前者の息子が後者の娘と結婚した。この二家族の有名な傑出児は、ここで詳しく示すにはあまりに多すぎる。だが単純な一覧だけでも感動的だ。バッキンガムの初の男爵はジェームズ一世のお気に入りだ。キャッスルメインの伯爵夫人にしてクリーヴランドの公爵夫人バーバラは、ジェームズ二世の愛人だ。オークニー伯爵夫人エリザベスはウィリアム三世の愛人（スウィフトは彼女を「これまでに会った最も賢い女性」と呼んだ）。バッキンガムの第二公爵、ロチェスター卿、サンドイッチ卿、バーウィック公爵、マールボロ公爵、グラフトン第三公爵（ジョージ三世の首相）、ピット二人、チャールズ・ジェームズ・フォックス、チャールズ・タウンゼント、キャッスルリー卿、ナピエ家、ハーヴェイ家、シーモア家、ハートフィールド公爵夫人、ビュート家、ジャージー家、ランズダウン家、キャヴェンディッシュ家、デヴォンシャーの公爵たち、レディ・ヘスター・スタンホープ、レディ・メアリー・ウォートレー・モンタギュー、フィールディング、そしてウィンストン・チャーチル氏にファロドンのグレイ子爵。これはまさに、イギリスの真の貴族の血筋なのだ。

ここから何を結論すべきだろうか？ あらゆるイギリス人は、みんな家系図をたどれば四世紀以内ですべて親戚関係になるということだろうか？ それとも一部の小さな「つながり」がその規模にはまったく分不相応な傑出した人物を生み出したというのは本当だろうか？ ガン氏は科学的な結論を与えてはくれないが、後者の結論への傾倒なしに本書を読み終える人物は、よほど警戒心の強い懐疑的な読者だろう。

第8章

トロツキーのイギリス論について

この本^{*1}の同時代の書評はこう語る。「かれは傷のついたレコードをかけた蓄音機のような声で、陳腐な内容をどもりつつ語る」。おそらくそのレコードを口述したのはトロツキーなのだろう。英語という衣装をまとうと、この本はこけおどしの濁音をともないどんよりした湯気をたてつつ現れてきて、いかにもロシア語から翻訳された現代の革命文献らしい。イギリスの状況に関するドグマチックな論調は、たまに見られる洞察のひらめきですら、自分が語っているものについての予想される無知により曇らされており、イギリス読者に説得力を持つものではない。だがそれでも、トロツキーにはある種のスタイルがある。そしてそのすべてが陳腐というわけでもない。

この本は、まず何よりも、イギリス労働党の指導部に対してその「教条主義」と、そしてかれらが革命の用意をせずに社会主義の準備をするほうがいいと信じていることについての攻撃となっている。トロツキーは、イギリスの労働党が過激な非国教派たちと慈善的



レオン・トロツキー

^{*1} L. Trotsky, *Where is Britain Going?* (1925), トロツキー『イギリスはどこに向かうのか?』

なブルジョワから直接発した存在であり、無神論や流血や革命に染まっていないのだと指摘する。たぶんその通りだろう。したがってトロツキーは、感情的にも知的にも、かれらがまったく共感できない存在だと考える。ちょっと引用をまとめると、どういう見方になっているかが露わとなる：

労働党指導部のドクトリンは、保守主義とリベラリズムの一種のごった煮で、部分的に労働組合のニーズにあうように変えてある。(中略)労働党のリベラル指導者やセミリベラル指導者たちは、いまだに社会革命というのがヨーロッパ大陸の嘆かわしい特権だと考えているのだ。

マクドナルドはこう語り始める。「気持ちと良心の領域においては、精神の領域においては、社会主義は人民への奉仕という宗教を構成する」。このことばの中で、人民に「奉仕する」という愛他的なブルジョワや左派リベラルは、片側から人民に寄り添う、いやもっと正しくは上からやってくるという点で裏切られているのである。こうしたアプローチはすべて暗い過去にその根を持つものであり、過激インテリゲンツィアがロンドンの労働者階級地区に暮らしにいて文化的教育的作業をしようとしたのが根底となっているのだ。

ファビアン主義こそは、神学文献と並んで最も役立たずであり、いずれにしても言語的な創造物として最も退屈きわまるものだ。(中略)安手の楽観主義的なビクトリア時代、明日が今日よりちょっとだけよくなると思え、その翌日は明日よりもっとよくなると思えた時代が最も完成された表現を見たのは、ウェップ夫妻、スノウデン、マクドナルドといったファビアン主義者たちにおいてだった。(中略)こうした大言壮語の権威ヅラ、知ったかぶり、傲慢で口だけ達者な腰抜けどもが、労働運動を系統的に汚染し、プロレタリアの意識を曇らせ、その意志を麻痺させる。(中略)ファビアン主義者ども、独立労働党ども、労働組合の保守的官僚どもは、現在ではイギリスにおける最も反革命的な勢力となっており、世界の発展においても最も反革命的存在かもしれない。(中略)ファビアン主義、マクドナルド主義、平和主義というのは、イギリス帝国主義や、ヨーロッパ、いや世界のブルジョワの主要な結末点なのだ。こうした自己満足の知ったかぶりども、こうした姦しい折衷主義者ども、こうした感傷的な出世主義者ども、ブルジョワジーにお仕着せを着せられた新進の走狗どもの真の姿を、労働者たちに露わにしてやらねばならない。こいつらのありのままの姿を曝露することは、この連中を絶望的なまでに権威失墜させることとなるのだ。

いやはや、ウィンストン・チャーチル氏をあれほどに恐れさせる人物の心情吐露とはこういうものだ。そしてこれをはき出したことで、胸のつかえが取れたことを祈りたいものだ。読者は、いまの引用集をちょっと変えるだけで右翼の思想的殴り合いになってしまうことにお気づきだろう。そしてこの類似性の原因は明らかだ。トロツキーはこうした下りで公共問題に対する態度を問題にしているのであり、その最終的な目標を扱っているのではないのだ。単に、行動といえは戦争だと思っている泥棒政治家たちのかんしゃくと同じものを示しているだけで、そうした政治家と同じく、易しい理詰めや慈愛、寛容、慈悲の空気に触れると頭に血がのぼってしまうのだ。だが風が東に吹こうと南に吹こうと、ポールウィン氏やオックスフォード卿やマクドナルド氏たちは、そうした空気の中で平和のパイプをくゆらせる。ファシストはボリシェヴィキ主義者たちと合唱する。「やつらは平

和などあってはならないところで平和のパイプを吹かせる。もったいぶった愚鈍な頹廢、痴呆、死の象徴め、無慈悲な闘争の精神にしか存在しない、生命と生命力のアンチテーゼどもめ！」話がここまで簡単だったらいいのだが！ ライオンのようにだろうと、そこらのか弱いハトのようにだろうと、吠え立てるだけで何か実現できるなら実にありがたいのだが！

トロツキーの本の前半は、吠え立てるばかりだ。後半はその政治哲学を完結に述べているので、もっと注意して読む価値がある。

第一の主張。文明を維持させるなら、歴史的な過程から見て社会主義への転換は必然である。「社会主義への移行なくしては、人類の文化はすべて衰退と解体に脅かされる。」

第二の主張。この移行が、平和的な議論と自発的降伏で実現されるとはまったく考えられない。所有階級は、武力への反応以外で降伏するわけがない。ストライキはすでに武力の利用である。「階級闘争は、あからさまな、あるいは隠れた武力の継続的な連続であり、これは大なり小なり国家が仕切っており、その国家は敵の中でも強力な存在、つまり支配階級の組織的な道具なのである」。仮説としては、労働党が憲法的（合法的）手段により権力を握り、それから「実に慎重に、巧妙に、賢明に駒を進めることで、ブルジョワジーが活発な反対を必要とはまるで感じないようにする」という発想は「笑止である」——が、これこそ「まさにマクドナルドたちの心底にある願望なのだ」。

第三の主張。もし遅かれ早かれ労働党が合法手段で権力を握ったとしても、反動政党たちはすぐに武力を使おうとする。所有階級は、自分が議会装置を仕切っている限りは議会手続きに口先だけ従うふりをするが、もし権力が奪われたら、向こうが武力の利用をためらうなどと思うのは馬鹿げている、とトロツキーは主張する。仮に、議会で多数派の労働党がきわめて合法的に、代償なしで土地を召し上げると決めたり、資本に重課税を決めたり、王室廃止や貴族院廃止を決めたりしたら、「所有階級が関わらずして従ったりしないのはまったく疑問の余地がないことである。警察、司法、軍といった装置が完全に連中の手中にあることを考えればなおさらだ」。さらに、そいつらは銀行や社会的信用の仕組みすべてに、運輸交通の機械も握っているから、ロンドンの日々の食料は、労働党政府自体のものも含め、巨大な資本主義複体に依存しているのである。こうした恐ろしい圧力手段が「労働党政府の活動を抑え、その実施を麻痺させ、それを脅かし、その議会多数派を分裂させ、そして最後に金融パニックや物資不足やロックアウトを引き起こすために、狂ったような暴力を持って活用されるのは」明らかであるとトロツキーは論じる。それどころか、社会の命運が労働党の多数派獲得で決まるのであり、その瞬間における物理的武力のバランスで決まるのではないなどと考えるのは「議会算数のフェティッシュへの隷属なのである」。

第四の主張。以上すべてを考慮すると、憲法上の（合法的な）権力奪取を狙うのはよい戦略かもしれないが、それでも最終的には物理的な力こそが決定要因になるという想定で組織化を図らないのは馬鹿げている。

革命的闘争においては、反動勢力の手から武器をたたき落とし、内戦の期間を短くして被害者を減らすに役立つものは、最大限の決意のみである。もしこの手段を執る気がないなら、そもそも武器など手に取らないほうがまだ。もし武力を使わないのであれば、ゼネストを組織するのは不可能だ。もしゼネストを放棄するなら、まじめな闘争など考えることもできない。

その前提を認めるにしても、トロツキーの議論の大半は答えようがないものだと思う。革命ごっこをするほど馬鹿げたことはない——トロツキーがいたいのはそういうことだろうか。だがその前提はなんだろうか？ トロツキーは、社会変革の道徳的、知的な問題はすでに解決されたと想定している——すでに計画があり、それを実際に稼働させる以外にやることは残っていないのだ、と。またかれはさらに、社会が二つの部分に分かれていると想定する——すでにその計画に転向したプロレタリアたちと、まったく利己的な理由だけからそれに反対しようとする残りの人々と。まずは多くの人々を納得させない限り、どんな計画だろうと勝てないということをトロツキーは理解していない。そしてそれが本当にまともな計画なら、多くの分野から各種ちがった賛同が得られるはずだということも。あまりに手段のことにばかりこだわるあまり、それがそもそも何のためのものかを語ろうともしない。その点を追求したら、たぶんトロツキーはマルクスを持ち出すことだろう。そうなったら、われわれはご当人のことばをそこで繰り返して置き去りにするまでだ——「神学文献と並んで最も役立たずであり、いずれにしても言語的な創造物として最も退屈きわまるものだ」と言って。

トロツキーの著書は、人類の現段階における武力の役立たずぶりや、その考えなさ加減についての確信をさらに裏付けるものとなっている。武力では何も解決しない——それが階級戦争でのものであっても、国家の戦争や宗教戦争の場合と同じだ。トロツキーは歴史的な過程をもちだすのが実にお好きだが、その歴史的な過程を理解すれば、いまの世界の状況においては、武力は支持するより否定されるはずだ。われわれは、進歩のための一貫した仕組みといういつもの代物を欠いているだけでなく、しっかりした理念をも欠いている。あらゆる政党はすべて、その起源が過去思想となっており、新しい思想に根ざしていない——そしてそれが最も露骨なのがマルクス主義者たちなのだ。人が己の福音を武力によって広めるのがどのような場合に正当化されるかという細かい論争にふける必要はない。次の動きは頭によるものだから、げんこつには待っていただく。

1926年3月.

第II部

経済学者たちの生涯

第9章

ロバート・マルサス (1766-1835)

9.1 ロバート・マルサス：初代のケンブリッジ経済学者

バックスーイギリス人がバックスと呼ばれるとき――それはベークハウス（パン焼き屋）から派生したものだ。同様に、マルサス*1という珍しく奇妙な名前の元の形は「モルトハウス」だ。英語の姓の発音は、その綴りよりは世紀ごとに一貫性を保っていて、音韻的、語源学的影響により変動するが、綴りの変動の検討によりかなり自信をもって類推できる。この点からすると (Malthus, Mawtus, Malthous, Malthouse, Mauthus, Maltus, Maultous)、最初の母音はビールモルトと同じで、hの音がはっきりしない形のモルタスというのが、本来行うべき発音なのだというのは疑問の余地がない。

ロバート・マルサスの家系*2については、クロムウェル配下でノースオルト司教となり、王政復古で排除されたロバート・マルサス牧師までさかのぼれば十分だ。カラミティは彼を「古の聖人、強い理性の人、そして聖典について万能であり、大いなる雄弁さと情熱を持つが、台詞回しが欠点」と述べている。だが彼の教区信徒たちは「非常につまらない無益な司教」と考えている。これは、彼が戒律の実施に厳格だったからかもしれない。そして彼の更迭を求める請願は、「スコットランドにいる我が軍に対する罵倒的な表現を口走った」と述べ、また「マルサス氏は声が小さいだけでなく、発話に多大な障害を抱えている」と述べる。ここからおそらくうかがえるのは、彼がその曾々孫と共有していたのが、ローバト・マルサス牧師という呼称だけでなく、口蓋の障害でもあったということだ。彼の息子ダニエルは高名なサイデンハム医師の推薦でウィリアム王の薬剤師に指名され、その後はアン女王に仕えて*3、かなりの財産を成し、その未亡人は馬車と馬を所有できる

*1 この伝記的な素描は、マルサスの決定版伝記のための入手材料すべてを活用したなどと主張するつもりはない。その決定版伝記は、ドナー博士のペンにより書かれるのをわれわれみんな、待ちくたびれているものだ。私は普通の権威ある材料――マルサス『政治経済学』第2版（1836年、死後刊行）の付録にあるオッター司教の生涯記、『エジンバラ・レビュー』（1837年1月）掲載のW・エンブソンによるオッター版書評、ボナー博士『マルサスとその業績』（初版1885年初版とそれに先立つ1881年の素描「マルサス牧師」、それに続く1924年の第2版とその拡大された伝記章。これからの私の参照先もこの版だ）――に基づき、さらに特に系統的でも網羅的でもない散漫な読書の中で出くわした、いくつか他の細部も付け加えている。またマルサスが政治経済学に対して行った貢献について、完全なまとめや評価を行おうともしない。それをやるには、彼の同時代人の業績について、いまの私よりも詳細な検討を必要とする。私の狙いは、肖像に最も貢献しそうな情報アイテムを選び出し、特に彼が故郷とケンブリッジで育った知的雰囲気についていささか拡張することだ。

*2 この姓を持つあらゆる人物に関連する記録の完全なコレクションとしては J. O. Payne, *Collections for a History of the Family of Malthus*, 1890年に印刷された110部の私家版四折本を参照。スラッファ氏はこの本のペイン自身のものを持っており、そこには追加の注記とイラストも入っている。

*3 ロバート・マルサスの母親は、ジョージ一世とジョージ二世の薬剤師だったトマス・グレアムの曾孫

ほどだった。ダニエルの息子サイデンハムはさらに家族の地位を高め、大法官庁の事務員となり、南海会社の部長となって、娘に持参金五千ポンド持たせるほど豊かになり、故郷の郡とケンブリッジシャーにいくつか土地付き所領を持つに到った*4。

成功したイギリス中産階級一家の黄金の凡庸さがいまや実現されたので、サイデンハムの息子ダニエル、わが主人公の父親は、イングランドでは「独立」と呼ばれる地位となり、それを活用することにした。彼はオックスフォードのクイーンズカレッジで教育を受けたが学位は取得せず、「ヨーロッパとこの島のあらゆる場所を旅し」、快適なご近所に落ち着くと、ちょっとしたイギリス田舎紳士の人生を送り、知的な趣味や友情を育て、いくつか匿名作品を執筆し*5、野心を気後れが押さえつけるのを許した。記録によると彼は「きわめて快い態度で、もっとも愛他的な心を持ち、それは彼の暮らすあらゆる場所の貧者が体験したものだ」*6。他界したときには『ジェントルマンズ・マガジン』(1800年2月, p. 177) は彼が「最も厳密な意味でエキセントリックな人物だった」と記録しおおせている。

1759年にダニエル・マルサスはドーキング近くに「小さく瀟洒な邸宅」を購入した。それは「チャートゲート農場なる名前で知られ、その美しさ、丘陵と草原、森と水を活用してそれをむきだしの単純さで展示し、それを紳士の居住地に変えて、ザ・ルーカリーという名前をつけた」*7。ここで1766年2月13日に生まれたのが*8、彼の次男トマス・ロバート・マルサス、『人口原理論』の著者だった。この赤子が生後三週間するとき、名付け親二人、ジャン＝ジャック・ルソーとデイヴィッド・ヒュームが連れだってザ・ルーカリーを訪れ*9、おそらくはこの赤子に多様な知的贈り物のキスを与えたものと思われる。

というのもダニエル・マルサスはヒュームの友人だったばかりか*10、熱狂的とは言わないまでも熱心なルソーの崇拜者だったからだ。ルソーが初めてイギリスにやってきたとき、ヒュームはダニエル・マルサスの近所スリーに彼を落ち着かせようとし、ダニエル・

だった。

*4 サイデンハム・マルサスは、ケンブリッジ近くのリトルシェルフォードに所領を2200ポンドで買った。その息子はその近くのケンブリッジにいくつも農園を持っていたと記録されている――ホーソン、ニュートンとハーストンで持っていた。

*5 彼は1783年にドズレーより刊行された、ジェラルディン『風景論』の翻訳者でだった。T. R. M. は『マンスリーマガジン』1800年2月19日号に投稿し、自分の父親は翻訳など一度も刊行していないと頑固に抗議している (Otter Life, 前掲書 p. xxii 参照)。だが私は上の話を、マルサス自身の図書室にあった問題の本に書かれたメモから取っている。

*6 Manning and Bray, *History of Surrey*. (ブレイはダニエル・マルサスの義理の息子)。現在アルバリーのロバート・マルサス氏宅の壁を飾る、魅力的な青服の少年を描いたパステル画は、家族の伝統ではダニエル・マルサスの肖像とされている。

*7 Manning and Bray, 前掲書。1768年にダニエル・マルサスはザ・ルーカリーを売却し、一家はギルドフォードからほど近いアルバリーの、それほど広くない家屋に引っ越したザ・ルーカリーを描いた初期の銅版画がスラッファ氏所蔵のペイン氏の本には挿入されており (前出参照)、この家は多少の改築はされているが現存する。それはゴシック様式の相当で高価な新趣向だった――これもまたダニエル・マルサスが関心を持っていた当時の知的影響を示すものだ。アルバリーハウスは、ノーサンバーランド公爵のアルバリーパークや、現在マルサス一家が所有するアルバリーの二軒の家 (ダルトンヒルとザ・コテージ) と混同してはいけないが、現存しない。それを示すと称する銅版画がスラッファ氏所蔵のペイン氏の本に挿入されている。

*8 ウォットン教区登記簿参照。

*9 Greig, 『デイヴィッド・ヒューム書簡集』 vol ii, p.24 参照。

*10 1766年3月2日と3月27日のヒュームの手紙を参照。グレイグ博士版 (前掲書) では309番と315番となる。ボナー博士によれば (前掲書、第2版 p.402)、故サイデンハム・マルサス大佐の伝えることとして、ダニエル・マルサスはヴォルテールとも交流があったが「その手が書簡に触れたある女性が、それを炎に投げ込んだ」という一家の伝説を紹介している。ルソーとの書簡は、ダニエル・マルサスがウィルキスとも親しかったことを示している。ウィルキスは彼をザ・ルーカリーに訪ね、そこから初めてルソーとヒュームの口論の話を聞かされたこともそこからわかる。

マルサスは「どんな奉仕でもしたい」と言っていたので、ルソーには付き合いやすお仲間となり、慈愛に満ちた目をむけてもらえたことだろう*11。この不穏な訪問者に対するヒュームの善意のほとんどすべてと同様に、この試みも挫折した。レイスヒルふもとにある小屋は、後にファニー・バーネイに「ジャン＝ジャック寓居」と紹介されたが*12、彼がそこに住むことは一度もなかった。だがまちががなく、ダニエル・マルサスが適切なものとして見極めた隠遁所であり、ジャン＝ジャックが1766年3月8日に検分しつつ*13、その後拒絶したものだ。二週間後にルソーは、ダービーシャーのピークにあるウートン*14での悲惨な滞在を開始し、そこで寒く退屈して孤独だった彼は、ものの数週間でヒュームとのとんでもない口論へと到る不満をため込みはじめたのだった*15。

この文芸面のきわめて有名な争いは、ジャン＝ジャックがダニエル・マルサスのきわめて熱烈な招待を受け入れてさえば、起こらなかつたらうと私は思う。というのも彼は愛情を嫌と言うほど注がれ、楽しみも得られたしすぐ近くに知人がいたのだから。ダニエル・マルサスのジャン＝ジャックに対する崇拜の熱烈な宣言は、おそらくジャン＝ジャックの警戒心が完全に解けた唯一の機会だろう*16。たぶん彼らが会ったのは三回だけだ――マルサスが1764年春に旅行者としてモチエ村を訪れたとき、1766年3月にヒュームがルソーをザ・ルーカリーに連れてきたとき、マルサスが同年6月に、ウートンの彼を訪ねたとき。だがマルサスからルソーに当てた十三通の手紙(現存する)と、ルソーからマルサスへの手紙一通を見ると*17、その出会いは大成功だったようだ。マルサスはジャン＝ジャックを崇拜し、ジャン＝ジャックはお返しに礼儀正しくて親しみやす

*11 この出来事の優れた記述が Courtois *Le Sejour de Jean-Jacques Rousseau en Angleterre* (1911) にある。

*12 『ダルブレイ婦人の日記と書簡』(ドブソン版), vol. v. p. 145. バーネイ嬢はダニエル・マルサスを「モルトハウス氏」と呼んでいる。

*13 ルソーはマルサスに、1767年1月2日にこう書いている: *Je pense souvent avec plaisir a la ferme solitaire que nous avons vue ensemble et a l'avantage d'y etre votre voisin; mais ceci sont plutot des souhaits vagues que des projets d'une prochaine execution.* (一緒に内覧したあの寂しい農場のことと、そこであなたのご近所になったらどんなによいか、しばしば楽しく考えております。しかしこれは将来に実践するための計画というよりは、むしろ漠然とした願いです。)

*14 リチャード・ダヴェンポート氏が貸したものだ。ここでルソーは『告白録』の執筆を開始する。マルサスを訪ねたときにルソーがほとんど選びかけた隠遁所の一つはもう一つのウォットン、アルパリーにとても近いスネイの、イプリンのウォットンだった(1766年3月21日付けのダニエル・マルサス書簡を参照。そこで彼は、サー・ジョン・イプリンにこの件で話をしていると述べている)。

*15 もちろん悪いのはジャン＝ジャックだ。だがそうは言っても、ヒュームももっと静謐さを保ち、アダム・スミスの助言「世間に対して何かを公表しようなどとは考えなざるな」に耳を貸すべきだった。1766年3月21日(Greig, No. 314)に彼がブレア博士に書いた、自分の客についての見事な人格素描の後で、彼の後の手紙(および1766年に刊行された、それ自体としては魅力的な『手短で本当の記述』)は、理解しようとする心の産物ではなく、パリの友人たちが誤解しかねないスキャンダルを避けようという極度の不安の産物となっている。

*16 ルソーが手紙に返事をよこさないと、ダニエル・マルサスはこんな心情吐露を行っている。「閣下、私の手紙を受けとりながら、お願いする言葉を私に対して拒絶なさっていたりするのでしょうか? そんなことを信じたくはありません。私は自分の友情に偽の重要性を与えたりはしないのです。私に敬意など示さず、ご自身に敬意を払ってください。あなたはご自身のような心の中に、ご自身をこれほど一身に愛し、あなたを糾弾するすべを知らない心を奪えるのだという見事な発想を残しておられるのです」

*17 マルサスの手紙は Courtois, 前掲書に印刷され、*Correspondance ginirale de Rousseau* の 2908, 2915, 2939, 2940, 2941, 2952, 2953 (Mlle. le Vasseur 宛), 2970, 2979, 3073, 3182, 3140 番だ。ここに1767年12月14日と1768年1月24日の手紙 [vol. 18, 1932 の 3547 番と 3578 番] も追加しなければならない。ルソーの手紙は 3211 番であり、それまでの編集者が別の人物に宛てたものとまちがって考えていたものを Courtois が発見した。どうやら二人の文通は1770年に再開し、二人は交流を続けたようだ。だが後年の手紙は Courtois 氏は発見していない。[*Correspondance ginirale* の後の巻でも、それ以上の手紙は見つかっていない。編者]

く、「あなたが私の中に呼び起こした尊敬と愛着の気持」について語り、マルサスの「実に甘い歓待」に触れている。マルサスは、二人の口論に巻き込まれずにヒュームの人格を擁護さえできている。二人がいっしょに造園をした言及がたくさん見られるし、ルソーは自分がダービーシャーの散歩で見かける植物の名前を同定できないのは何と苛立たいことかとグチを述べている。というのもルソーによると彼は「運動を必要とする作業が必要なのです。なぜなら、私にとってじっとすわって読み書きするほど苦痛なことはないからです」。後に (1768 年) ダニエル・マルサスが大いに苦勞して、ルソーの植物学図書室を充実させようとしているのがわかる。これはおそらくルソーが 1771 年づけの『植物学の要素についてのあるご婦人への手紙』を構想していた頃だろう。そして二年後にルソーは、ときどき自分の本を全部処分する狂乱に襲われる人物だったので、蔵書を丸ごとマルサスに売り戻し、そこに自分の薬草館の一部という贈り物もつけた*18。こうした本はダニエル・マルサスの遺書に再登場し、以下の条件がつけられている。「ジェイン・ダルトン夫人*19へ、私はルソーの名前が書かれている植物学蔵書をすべて与え、またムッシュ・ルソーがくれた植物の箱も添える」。その本のうち二冊は今でも、ロバート・マルサス氏*20が所有するアルバリーのダルトンヒル図書室に所蔵されている。具体的には、レイの *Synopsis Methodica Stirpium Britannicarum* とソーヴェージュ *Methodie pour connoitre les plantes par les feuilles* で、どちらもルソーの名前が書かれ、大量に下線が引かれている*21。

オッターは、ダニエル・マルサスはルソーの文芸執行人だったと伝える。これは考えにくい*22。だがダニエル・マルサスの忠誠は最後まで続き、30 ギニー払ってルソーの死後出版『我が人生の悲惨への慰め』を六部予約した。そしてこの数ページにおいて、私は経験にも彼の願いを叶えたことになる。「もし私が記憶されるのであれば、私はルソーの友人として記憶されたい」

ダニエルの生き様についての魅力的な記述が、1768 年 1 月 24 日のルソーに当てた手紙

*18 Courtois, 前掲書 p. 99 参照。

*19 ダニエル・マルサスの母親の姪であり、ルソーへの手紙でダニエル・マルサスが「野生植物学者である小さないとこ」として言及している人物。明らかにダニエル・マルサスとルソーの植物学趣味を共有しており、*Johnson sur Gerard* (おそらくジェラルドの *Herball*, 1633) をダニエル・マルサスが書店から手に入れられなかったので、ルソーにそれを自分の蔵書から贈っている。(ダニエル・マルサスによるルソーへの手紙、1768 年 1 月 24 日付け、Courtois, 前掲書 p. 219 所収を参照)。マルサス一家の広範な親戚関係を探究したい向きは是非ともペイン氏の本、できればスラッファ氏の蔵書を参照されたい。この一族は、半分近くの場合にいとこと結婚するのが習慣だった (T. R. マルサス自身もいとこと結婚している) ので、その結果は異様にややこしい。

*20 サイデンハム・マルサスの曾孫、T.R. マルサスの兄。男系のダニエル・マルサスの、他の唯一の存命子孫は、たぶんニュージーランドに移住したはずだ。T.R. マルサスは、子供を三人もうけたが、存命中の子孫はない。だが女系ではダニエル・マルサスの子孫はたくさんいるはずだ。ペイン氏の奇録 (前掲書) によると、ダニエルは八人の子供をもうけ、少なくとも孫は十九人いるので、おそらく曾孫となれば三十人は優に越えるはずだ。現在の曾々孫の世代となると数え切れない。だが幾何級数法則の作用する安全な余地が十分にありそうだ！ダニエルの存命中または最近まで存命中の子孫として最も傑出しているのは、アルバリー近くのシャーのブレイ家で、故ジャスティス・ブレイ氏はこの一家の出身だ。

*21 この図書室はダルトンヒルでいまだに無傷で保たれているが、T.R. マルサスの息子ヘンリー・マルサス牧師の蔵書となる。だがそこには T.R. マルサスの蔵書の相当部分が含まれており、まだダニエルの蔵書もたくさんある。ボナー博士はこのコレクション全体の完全で慎重なカタログを作成した。こうした細部を得る機会を、彼のおかげである。

*22 *Correspondance ginirale* の後の巻でこの点にはもっと明らかになるかもしれない。確かにルソーは、イギリス滞在中に遺書の一つを執行し、マルサスがそこで言及されている可能性はある。スラッファ氏が示唆してくれたところでは、オッターはルソーが氏の直前に『告白録』の原稿をポール・モールトウに託したという事実で勘違いしたのは、とのこと。

に見られる*²³。夏の植物観察散歩で、

わが愛しのヘンリエッタとその子供たちがときに同行し、たまにあなたもご記憶のあの丘の斜面に寝転がって、各種の菓草を吸ったものでした。(中略)冬にはちょっとした読書(すでにあなたの文に影響されています、というのも『エミール』を手に入れたからです)。子供たちと長い散歩に出かけます。ご近所の城よりは、小屋で過ごす時間のほうが長い。いつも農場には作業もあるし、ちょっとした実験もしたい。キツネ狩りはしますが、もっぱら習慣のせいだし、さらには野生生命についての自分の想像力が刺激されるからです。

この楽しい考えにより、われらが静かなキツネ狩りの郷土は、自分をルソーの高貴な野蛮人として思い描けるのだった。

『エミール』著者の友人として、ダニエル・マルサスは教育での実験に傾倒していた。そしてロバートは才能を見せて、それが父の愛情と野心を呼び覚まし、自宅で教育を受けた。一部はダニエル自身によって、一部は家庭教師たちによってだ。その最初の一人がリチャード・グレイブスで、「かなり学とユーモアを持つ紳士」にしてシェンストーンの友人であり、メソジスト派を皮肉った『霊的キホーテ』著者でもあった。十六歳で彼はギルバート・ウェイクフィールドの元に移った。これは異端の聖職者で「荒々しく、落ち着きがなく、意見の多くがパラドックス的で、すばやく手厳しい反論者」であり、チャールズ・フォックスの文通相手でルソーの弟子であり、教育原理をこのように語っている。

あらゆる若者に対する教育の最大の奉仕は、自分自身の力の行使を教えることであり、自分自身のやり方を当人が見極めて確保する段階的なプロセスを通じて知識の限界を教え、自分自身の能力と自分の上達を認識して喜ぶようにすることである。*²⁴

1799年にウェイクフィールドは、フランスの革命派がイングランドを侵略し征服してくれないかと述べたことで、ドーチェスター刑務所に収監された。

現存するロバート・マルサスの学生時代の手紙*²⁵は、彼がウェイクフィールドにとっても親近感を抱いていたことを示している。ウェイクフィールドはケンブリッジのジーザスカレッジのフェローであり、このつながりの結果として初のケンブリッジ経済学者たるロバート・マルサスは、1784年の冬学期に、十八歳にして寄宿制としてジーザスにやってきた。1784年11月14日、彼は故郷に次のような手紙を送っている。

もう部屋にはかなり落ち着きました。講義は明日始まります。そして先週、少し数学を復習する時間があったので、昨日検討してみたところ、一年上の授業についていけることがわかりました。初めは力学、マクローリン、ニュートン、キールの『物理学』です。また月曜日と金曜日にはダンカン『論理学』、水曜日と土曜日にはタキトゥス『アグリコラ伝』の講義があります。書店と契約して必要な本をすべて揃えてもらいました。大学には賢い人が何人もいるし、読書がいささかの流行りのようです。主要な勉強は数学です。というのも学位を得るあらゆる榮譽はこの学問

*²³ Courtois, 前掲書 p. 221.

*²⁴ *Life of Gilbert Wakefield*, vol. i. p. 344, ボナー博士の前掲書 p. 405 で引用。

*²⁵ 現在の持ち主の父であるサイデンハム・マルサス大佐が、それをボナー博士の裁量に任せた。

の上に成り立つからだし、人々の相当部分の大いなる狙いは、榮譽ある学位を得ることだからです。同時に、よい古典もあると思います。二人と知り合いになり、一人は同年で、実際とんでもなく賢い人物であり、サボらなければ古典賞を得る可能性が十分にあります。礼拝堂で二回夜見ました。

彼の経費は年額 100 ポンドになった。それ以上になったら、ダニエル・マルサスの手紙によると、司教は息子たちをこのまま大学へはやれないという。外国のライプツィヒなら、25 ポンドですむから、と*26。

この時代に大学は長い眠りからちょうど目覚めようとしており、最も眠りの深かった学校の一つであるジーザスカレッジは、知的な胎動の中心となりつつあった。マルサスはおそらく、父親の影響と共感に負けず劣らず、ジーザス時代の知的な仲間になきなものを負っている。彼の教師、ウィリアム・フレンドは、ペイリーの生徒でありプリーストリーと親密だったが、マルサスが三年生のとき (1787 年) に、イングランド教会からの離脱とユニタリアン派支持、思想の自由、平和主義支持のため、最も有名な大学論争の中心となった。ペイリー*27 自身は 1775 年にケンブリッジを離れたが、彼の『道徳政治哲学原理』、あるいはその原題『道徳性と政治の原理』はマルサスのケンブリッジ初年 (1785) に刊行され、『人口論』著者への知的影響*28 としてかなり高いところに位置するはずだと私は思う*29。さらに彼はたまたま、実に聡明な学部生の小集団に加わることとなった。その中には、彼の伝記作家オッター司教と、旅行者にしてケンブリッジのエキセントリックで教授となる E・D・クラークが主に挙げられよう。マルサスが B.A 学位を得たあとで、コールリッジが同カレッジに入学した (1791 年)。若きコールリッジが大門に面する階段右手の一階の部屋にいるようなら、ジーザスカレッジが退屈な場所であったわけがない――果てしない会話が中庭へとあふれ出ただろう。

あたかもまず詩神の平穏なる住まいから
 ぼくはやってきて、学習の仕方もまだ教わっておらず
 そこへ彼女が我が額に月桂を結わえ
 そしてぼくの口づけに出会い、その会釈を半分返した。*30

*26 Bonar, 前掲書 p.408 の引用。

*27 この論説の中に、ペイリーについての記述を入れられればよかったのだが。というのも、ペイリーは、今ではまったく顧みられないが、一代以上にわたりケンブリッジに大きな知的影響を与えており、それを上回る人物といえばニュートンだけだった。ある意味で彼こそがケンブリッジの初代経済学者かもしれない。ペイリー『原理』を再び手に取る者はだれでも、おそらくその予想とは正反対に、不滅の本を見出すことだろう。あるいは G・W・ミードレー『ウィリアム・ペイリーの想い出』を見れば、典型的なケンブリッジの親玉による、愛すべきウィットとエキセントリックさが見出されるだろう。彼の曾孫娘であるアルフレッド・マーシャル夫人は、この大執事の (とてもビジネスライクな) ラブレター入りの小さな刺繍付きケースを見せてくれた。

*28 ただしボナー博士は、マルサスが「できることならペイリーよりはタッカーを引用したがった」(前掲書 p.324) と考えている。エイブラハム・タッカーは、『自然の光』著者で、長年ドーキングでダニエル・マルサスの身近な近所だった。

*29 またベンサムにも影響を与えたと思う。彼はマルサスの同時代人だが、両者が接触したという記録はまったくない。

*30 「初期の若き日々」にコールリッジが書いた「秋の晩の発露」。この優しく凶兆に満ちた詩を涙なしに読むのは困難だ。それはこう終わる。

光をぼくの目は切なき視線で追い求める
 影に重なる影をが、さらに深き陰を重ねる
 寒く湿った月なき夜の到来まで。

ある同時代人はこう書く*31。「これらの部屋で、何と言う日々を私は過ごしたことか！アイスキュロスとプラトンとツキジデスが辞典の山と共に脇へ押しやられ、その日のパンフレットについての議論が交わされる中で、夕食、あるいは当時の呼び名では糧食をどれほど忘れ果てたことか。パークの筆になるパンフレットが、常に間もなく登場した。目の前に本がある必要などない。コールリッジが朝のうちにそれを読み、晩にはその全ページをそのまま暗唱してくれる。(ウィリアム・)フレンドの裁判が当時進行中だった。印刷機からはパンフレットがあふれ出た。コールリッジはそれをすべて読んでいた。そして晩には、我らがエチオピア皇帝と共に、それを華々しく口頭試問するのだ」

マルサスが1793年6月にフェローへと昇格すると、1793年12月19日に以下の指令を可決した者の一人となった：

休暇を取らずにカレッジを離れたコールリッジが、本日より一ヶ月以内に戻り、教師に対する負債を支払わないか、それが支払われるための適切な保証を提供しないのであれば、彼の名前を学籍簿より外すことが合意された。

コールリッジはどうやら、シラス・トムキンス・コンバーバッチという偽名で第十五竜騎兵団に加盟したらしい。ジーザスカレッジでのコールリッジの武勇伝にこれ以上引き込まれるのは控えるが*32、この逃避行から帰還すると彼はカレッジ校内に一ヶ月幽閉のうえ、デメトリオス・パレオス作品集を英訳するという処罰を与えられた。コールリッジが後に『人口論』に対して示した熾烈な反発は有名だ。

最後に、この強大なる国、その支配者と賢者たちが――ペイリーと、そして――マルサスに耳を傾けているのをご覧じろ！ 嘆かわしい、何とも嘆かわしい！（『サミュエル・テイラー・コールリッジの文芸遺稿』 p.328）

私はここに、人類の無知と弱さと邪悪さが生み出したあらゆる異端や派閥や流派をすべてあわせても、キリスト教徒として、哲学者として、政治家として、あるいは市民としても、人類にとっての不面目さはこの恐ろしい論説ほどではないと荘厳に宣言しよう。（『卓上談話』, p. 88].*33

カレッジでロバート・マルサスは、クリケットとスケートがお気に入り、ラテン語と英語の雄弁術で賞を採り、1786年にはブルンゼル給費生に選ばれ、1788年に第9位の優等合格者として卒業した。優等合格者となる直前の学部生時代に故郷に書いた手紙では、ギボンを読んでいて数ヶ月後に出版されるはずの最後の三巻を楽しみにしていると述べている。

最近ギボン『ローマ帝国衰亡記』を読んでおります。彼は現在はヨーロッパの洗練された国家を形成する、蛮族どもの国の起源や進歩について有益な情報を与えてくれますし、世界を長きにわたり圧倒したあの暗黒時代の始まりにも光を当て、読

*31 C. W. L. Grice, 『ジェントルマンズ・マガジン』(1834), グレイ『ジーザスカレッジ』での引用。

*32 コールリッジのユニテリアン派時代は、フレンドの影響下でのものだった。ウィリアム・フレンドが逮捕された直後、コールリッジは「パースのユニテリアン派教会で『ケンブリッジのジーザスカレッジ所属のS・T・コールリッジ牧師』として説教し、フレンドの論考で大いことがめられている「黒服の紳士たち」と袂を分かったことを示すため、その人を青い上着と白のチョッキで行うと宣言した」（グレイ、『ジーザスカレッジ』 p.180）

*33 コールリッジによる主要な批判は、大英博物館所蔵にあるコールリッジ蔵書の『人口論』第二版余白の手書きコメントに見られる。Bonar, 前掲書, p. 371 参照。

む者の好奇心を喚起せずにはおかないものだと思います。思うに彼はとても楽しい書き手です。その文体はときに本当に崇高となり、すべてが興味深くうなずけるものですが、全般にあまりに歴史というには派手すぎるかもしれません。次の数巻を是非とも読みたいものです。[1788年4月17日].^{*34}

晩年におけるマルサスは、気分や相貌の穏やかさと優しさは過剰すぎたかもしれない^{*35}が、ケンブリッジでは、楽しい仲間だったという。オッターによると彼のユーモアあふれる性格は

若者時代は実に多く見られ、成人してからの一部にまで続き、特にケンブリッジでは、非常に可笑しい表情と、興がのればきわめて特異な口ぶりでそれが解き放たれ、仲間たちにとっては果てしない喜びと楽しみの源となったのであった。

だが学部時代ですら、オッターによれば彼がことさら傑出していたのは

落ち着きと慎みの度合いで、その時期にはとても珍しいものであり、それが学術探究にも持ち込まれた。こうした面で彼は常に、勉学への情熱よりは辛抱強さの面で傑出しており、カレッジでそのときに涵養されていた各種の学部について、どれか一つだけに集中したり強弱をつけたりするよりも、すべて等しく心を向ける方を好んだ。

1793年6月10日、カレッジからのフレンド追放運動^{*36}が絶頂に達した頃、彼はフェローの地位を認められ、1804年に結婚して転居するまで不定期にそこで暮らした。1788年頃に聖職につき^{*37}、1796年以降はケンブリッジと、父親の家の近くオルバリーの副牧師職とを往き来した。1803年11月21日にはヘンリー・ダルトン(まがいなく親戚)の推挙でリンクスのウェールズビー教区牧師に任ぜられ、それを不在権益として生涯にわたり維持し、教区は何度か交替した副牧師たちに任せた^{*38}。

ダニエル・マルサスが、ジーザスカレッジ学部生だった息子宛に書いた数通の手紙が、オッターにより『回想録』に収録されている。息子がフェローに選出されたときに父親がロバート・マルサスに宛てた手紙は、両者の関係に光をあててくれるので、全文を引用しなくてはならない。

おまえの成功を心から祝おう。自分自身の後悔から生じるある種の喜びを与えて

^{*34} Bonar, 前掲書 p. 412.

^{*35} 『ジェントルマンズ・マガジン』での追悼記事作者(1835, p. 325)は、ある人物(まがいなくオッター)「は彼と親密に50年近くつきあってきたが、一度も機嫌を損ねたり怒ったり、過度に興奮したり落ち込んだりするのを見たことがない。賢くよいものは認みを得て生き、一般に仲間の人間たちに配慮しようとするという、ほとんど彼一人にしか見られない心の平安を持っていたため、無益な非難などは慮外なのであった」と書いている。

^{*36} 「1792年にトム・ペインの形代がケンブリッジのマーケットヒルで暴徒たちに焼かれた」(グレイ『ジーザスカレッジ』p.171)。フレンドのパンフレット『共和国派と反共和国派の関連団体に提言する平和と連合』が二ヵ月後に刊行された。フレンドはロック保険会社の書記官と保険計数官になり、マルサスや同時代人すべてより長生きして1841年に他界した(グレイ前掲書)。

^{*37} この二年前にカレッジ学長にこの件を相談した。特に、自分の話し下手が障害になるかどうかを尋ねている。だが「自分の最大の願いは田舎での隠居暮らし」と説明すると、ピードン博士は一切の異議を差し控えた(T. R. M. のダニエル・マルサス宛書簡、1786年4月17日、Dr. Bonar, 前掲書 p. 409 収録を参照。)

^{*38} この情報については、リンカーン記録協会のキャノン・フォスターの助けを得た。暮らし向きはよかったらしい。

くれるのだよ。私が人生で得られなかったものを、おまえのために願うのは理に適ったことだろう。

ああ！我が親愛なるボブ、おまえに怠惰について語る権利など私にはないが、おまえが不服に思ったあの手紙を書いたとき、私は自分自身の破れた目標や未達に終わった探究について深く感じ入っていたのだ。おまえの中に、自分自身の若き日々の記憶から、同じように自分の獲得した歩みを見失い、自己叱責する傾向を予見したので、自分の不幸な体験を少しでもおまえの役に立てようとしたのだ。確かにそれは、おまえが求めてもいないものだったが、おかげでなおさらそれを与えたいと思い、そして一般におまえに見せる以上の優しい心を持っておまえに手紙を書き、ある種の調子で書いたが、そのためにおまえの返事は粗い失望となって戻ってきて、それで私は自分自身に戻った。おまえはその印象に飽きたと言い、確かにおまえがそう思うのは正当なことだ。というのも私はおまえの中にきわめて傑出した人格、最も優しき態度、最も筋の通った親切な行動、常に私の庭に小石を投げ入れたりするようなことはなく（そんなことをしたら私が容易には許さないのを知っているね）、常に身の回りの全員を気楽に楽しませようとする人物を見出してきた。私が最も短気で気難しい人間だったとしても、自分が伴侶に求めるものに何一つ不足はない。そして気まぐれで、不当で、おそらくはまちがったものだったとしても、おまえの幸せを願う気持ち以外は何もないのだ。私はしばしば、自分がおまえに愛情を拒絶しているのではと思ひ、おまえの手を握りしめて涙を流しそうになったものだ。私は即座におまえに承認を与えようとしていたのだよ。

おまえの教会で何かできることがあれば手紙をくれ。またその他おまえのためにできることがあれば何なりと。というのも私は、信じてほしいが、親愛なるボブよ、最も愛情こめておまえのものだからだ。

ダニエル・マルサス

マルサスが初めて著作に手を染めた論説『危機：憲法の友である者が書いた、大英帝国の最近における興味深い状態に関する見方』は1796年、彼が三十歳のときに書かれ、ピット政権を批判するものだったが、版元が見つからなかった。オッターとエンブソンが引用した抜粋を見ると、彼の関心はすでに政治経済学の社会問題に向けられており、人口問題そのものにすら向けられていることがうかがえる。

人口の問題について、私はペイリー大執事には同意できない。彼は、あらゆる国で幸せの量は人の数により計測するのが最善だという。人口の増加は最も確実に国家の幸福と繁栄の徴である。だが実際の人口は、すでに過ぎ去った幸せの徴でしかないかもしれない。

1798年にマルサスが32歳のとき、匿名で『人口原理、それが将来の社会改善に与える影響について：ゴドウィン氏、コンドルセ氏などの著者の考察についてのコメントつき』が刊行された。

彼を有名にした一般論をロバート・マルサスが思いついたのは、ダニエル・マルサスとの会話でのことだった。この物語は、マルサス本人から直接聞いているオッター司教の決定版で有名だ。1793年にゴドウィン『政治的正義』が登場した。度重なる議論の中で、完全な平等と幸福という未来のドクトリンを、父親は用語し、息子は攻撃した。

そしてこの問題が両者の活発な議論の主題となり、主に人口が生計手段よりも急速に増えるという傾向が常にもたらす障害を元に、息子が自分の議論をまとめた。するとそれをその主張の中身を、熟慮のために書き物にしろと要望され、その結果が『人口論』だった、父親が意見を変えたかはわからないが、その原稿に含まれた見方の重要性と議論の独創性に彼が強く感じ入ったのはまちがいでなく、息子にその労働を世間に問うよう推奨したのだった。

初版は、5万語ほどの八折本で、五年後に四折本で出た第二版とはまったく異なり、またその簡潔さ故にずっと優れた本だ。第五版までにこの本は25万語に及ぶ三巻本へとふくれあがった。初版は、マルサスが第二版で説明するように、「その場の衝動で書かれ、田舎暮らしの自分の手に届くわずかな材料をもとに」書かれたもので、主に演繹的な本であり、一方では道徳進歩主義者たちへの反駁と、もう一方では造物主の手法が、不当なように見えて実は正当なのだという主張とを念頭に書かれたものだ。

最初の論説は、手法が演繹的で哲学的なだけでなく、文体も大胆で修辭的であり、用語と感情もずっとはつらつとしている。後の版では、政治哲学にかわって政治経済が登場し、一般原理には社会学史先駆者の機能的な確認が塗り重ねられ、フランス総裁政府の晩年に執筆している若者の明晰さと高揚した精神は消え去る。第二版にコールリッジが寄せた余白のコメントは「多言に無意味な反復」というものだった。

貧困から生じる大いなる悲惨とひどい悪徳を教わり、パンの斤数より口が多く、脳みそより頭が多いときには最悪の形の貧困が必ず起こる、などということも教えてもらうのに、いまやいちいち四折本が必要なのか？

この本の希少性から判断すると、初版の刷り部数はきわめて少なかったはずだし(マルサスが1820年に語ったところによれば、自分の著作すべてあわせても千ポンドも得ていないとのこと^{*39})、そして即座に絶版になったのもわかっている。第二版が出るまでには五年もかかった。だがそれは即座に注目を集め、パンフレット戦争が即座に始まった(ボナー博士によれば、第二版が出るまでの五年間だけでも二十編以上が出たとのこと)。そしてそれは百三十五年にわたり止んでいない。客観的な理性の声が、生命開始以来の進化的闘争が埋め込んできた深い本能に抗してあげられたたのだった。そして人間精神は、幸福の意識的な追求の中で、単なる圧倒的な生存の無意識的な衝動の手から、統治の手綱を奪おうとする大胆さを見せていたのだった。

当のペイリーは、かつて「人口衰退は国家が苦しむべき最悪の邪悪であり、あらゆる国は目指すべき目標として人口増加を上げるべきであり、これをその他のあらゆる政治目標より優先すべきである」と論じたが、転向した^{*40}。政治家ですら注目し、オッターは1801年12月のピットとマルサスの会合を記録している。

たまたまピット氏がそのとき、何やら大学の視察訪問を行っていた。(中略) ジーザス・ロッドでの夕食でとても若き旅行者数名を伴い、特にマルサス氏などと、彼はサー・シドニー・スミス、ジャッファでの虐殺、アクレのパシヤ、カーライルなどをめぐり、とても気安い会話を楽しむことになった。

^{*39} これに対してペイリーは、自分の『原理』(処女論説)初版を千ポンドで販売した。

^{*40} Cf. G. W. Meadley, *Memoirs of William Paley* (2nd ed.), p. 219.

その一年前に、新しい救貧法を取り下げるにあたり、1796年に家族全員が喰うや喰わずでも、多くの子供を生み出した者は「国を豊かにした」*41と考えたピット氏は、下院で自分がそうしたのは「敬意を払わざるを得ない人々」の反対を尊重してのことだと述べた。これはつまり、ベンサムとマルサスのことだとされる。

マルサスの論説は若き天才の作品だ。著者は自分が表現している発想の重要性を十分に認識していた。彼は自分が人間の悲惨のヒントを見つけたと信じていた。この論説の重要性は、その事実の目新しさではなく、そこから出てくる単純な一般論に彼が置いた衝撃的な強調ぶりにある。実のところ彼の主要な発想は、他の18世紀著者たちに、もっと無骨な形でほとんど予見されていたが、それはあまり注目されなかった。

この本は、思想の発展に大きな影響力を持った本の中に数えられる。これは人間科学のイギリスの伝統にしっかり根差したものだ。これはつまり、スコットランドとイングランドの思想には、私が思うに、18世紀から現代まで驚異的な気分の連続性と言って良ければそういうものがあり、この本もそれを持つということだ。この伝統は、ロック、ヒューム、アダム・スミス、ペイリー、ベンサム、ダーウィン、見るといった名前で示唆される伝統であり、真実への愛と最も高貴な明晰さを特徴とし、情緒や形而上学とは無縁の即物的な正気さを持ち、壮大な公平無私の心と公德心を備えている。こうした著作にある連続性は、気分だけでなく、その実際の対象においても連続性がある。マルサスもこの仲間にも所属しているのだ。

マルサスのケンブリッジ式演繹手法——ペイリーや、数学学位審査、ユニタリアンの手法——から後の版での帰納的議論への移行は、1799年に「当時イギリス人旅行者に開かれていた国であるスウェーデン、ノルウェー、フィンランド、ロシアの一部」と、1802年のちょっと落ち着いた時期にフランスとスイスへ赴いた材料を探しの旅行にも支援を受けている*42。北の旅行は、ジーザスカレッジの友人たち、オッター、クラーク、クリップスと一緒にだったが、マルサスとオッターは、おそらくは天性の旅行者で収集家だったE・D・クラークの莫大でエキセントリックな活力に疲れ果てたため、途中で帰ってしまった。クラークとクリップスは二、三年にわたり旅行を続け、ありとあらゆる種類の大量の品を貯め込んでコンスタンチノーブル経由で帰ってきた。その多くはいまはフィッツウィリアム博物館に所蔵されている*43。クラークの手紙は、その多くが彼の『人生と旅行』に収録されているが、ジーザスカレッジの集会室において、故郷に残った友人たちに向けて大いなる好奇心と関心の中で朗読された*44。クラークは後に、ジーザスの上級講師(1805)となり、鉱物理学の初の教授(1808)を経て、最後に大学司書となった(1817)。

一方、マルサスは自分の経済研究の続きとして1800年にパンフレットを出した。これまた(『人口論』初版と同様に)匿名で『現在の食料高価格の原因に関する探究』という

*41 Cf. Cannan, *History of the Theories of Production and Distribution*.

*42 1800年1月にダニエル・マルサスが70歳で死亡し、三ヵ月後に妻でロバートの母も67歳でその後を追った。二人ともウォットン教会墓地に埋葬されている。

*43 彼のパトモスからのプラトンはボドレイアン美術館にある。歴史教授はこう書いている：

ここに謳うは高名な教師
知識を求めて艱難辛苦
それを世界中で集めてまわり
箱詰めして大学に帰還。

*44 ガニング『回顧録』の以下の下りは有名だ。「アウトラム(朗唱家)と食事をしているところへ、クラークからの小包が届いたことがあった。書き出しはこんな具合だ。『いま私はここで、北極圏でイチゴを食べている』。みんな彼のデザートに夢中になるあまり、自分のデザートのことを忘れてしまった」

ものだ。このパンフレットは、それ自体として重要でもあり、またマルサスがすでに実務的な経済問題を扱うときに、ある特定アプローチに傾いていたことを示す点でも重要だ。これについては、後にリカードとのやりとりで発展することになる――その手法は私から見れば、リカードの別のアプローチに比べると、正しい結論に親和的でそれに向かいやすいものと思われる。だが勝利したのは、リカードのもっと見事な知的構築物であり、リカードはマルサスの思想にほぼ完全に背を向けることで、経済学を丸百年にわたり、非現実的な溝に制約してしまったのだ。

マルサスのすぐれた常識的概念によれば、価格と利潤は主に彼が、あまり明確ではないながら「有効需要」と呼んだものによって決まる。リカードはもっとずっと厳密なアプローチを好み、「有効需要」の裏にまわって、一方では根底にあるお金の条件と、もう一方では実質費用と実質の製品区分へと向かい、こうした根本要因が自動的に、一意的で不変のやり方で相互に決まると考え、リカードのやり方がとても不自然だと見下した。だがリカードは、彼のきわめて抽象的な議論の多くの段階ごとに単純化を行う中で、必然的に、そして自分でも気がつかないほどに、実際の事実から遊離してしまった。それに対してマルサスは、そのおとぎ話がずっと結論に近づいたときに触れたおかげで、現実世界で何が起こりそうかについてももっとしっかり把握していた。リカードは、貨幣数量説や、為替の購買力平価といったものの父だ。頑張っただけでこうした疑似数学的ドクトリンの知的支配から逃れたら、ひょっとしてこの百年で初めて、マルサスのもっと漠然とした直感が持つ本当の重要性を理解できるようになるのかもしれない。

マルサスの思いついた「有効需要」は、この初期のパンフレットにおいて「ハスティンクスから町へと馬に乗っていたときに、彼をあまりに強烈に襲ったので」、彼は「町の屋根裏部屋」に二日間滞在して、「朝二時まで起きてそれを仕上げ、なんとか議会会合までに出版できるようにしようとした」*45。彼は、なぜ食品の価格が、収穫の不足で説明がつくよりもずっと大幅に上がるのかについて考えていた。彼は数年後のリカードとはちがって、貨幣量は持ち出さなかった*46。彼はその原因を、労働階級所得の所得増に見出した。これは、教区支給金が生活費に比例して引き上げられる結果なのだという。

私はきわめて強力に、王国のほとんどの部分で穀物価格に比例して教区支給金を増やそうとする試みが、この国の富とあわせて、それがこの面で極度に素早く実施されるようにしたことが、相対的に述べて、この国の食料価格が希少さの度合いから見て妥当と思われる水準に比べてずっと高く上がるようになった唯一の原因だとにらんでいる。あまりに高くなりすぎており、この原因が作用しない他のどんな国でもこんなことはあり得ない……

仮にある商品が、50人により多大に求められているが、何か生産上の問題で40人分の供給しかないとしよう。上から40番目の人が、この商品に費やせるお金を2シリング持っていて、その上の39人は、度合いはどうあれそれ以上の金額があ

*45 『エコノミック・ジャーナル』(1897) p.270 でフォックスウェル教授が発表したマルサスの手紙(1800年11月28日)を参照。マルサスは、ピットがとても感銘を受け、『下院委員会報告』では「かなり同じ種類の理由づけが採用されている」と記録している。

*46 別にマルサスはこの要因を無視したわけではない。彼はそれについて、以下のように立派に対処している。「同じ、あるいはほとんど同じ量の商品を、それがずっと高い値段のときに国の中で流通させるには、何であれその媒体の必要量ももっと増えねばならないはずだ。...したがって流通している紙の量が昨年中に大幅に増えたら、私はそれを、食品の高価格の原因というよりはむしろ結果として考えたい。この流通媒体の多さは、安さに戻るときの邪魔になる障害物の一つとなる」

り、その下の10人はみんな少ない金額しかないのであれば、この品の実際の価格は、正統な取引原理に基づくと、2新リングになる。...さて、だれかがここで排除された貧しい人々10人に1シリングずつあげたとしよう。50人すべてがいまや、以前の要求価格である2シリングは払える。公平な取引のあらゆる正当な原理により、その商品はすぐに値上がりする。そうでなければ、どんな原理で2シリング払える50人のうち10人を拒絶するのか? というのも仮定によって、いまだにこの商品は40人に足る量しかないからだ。貧乏人の2シリングは、金持ちの2シリングと同じだけの価値を持つ。そして、だれであれその最貧の10人の手の届かないところまで商品が値上がりするのを防ごうと介入したら、コイン投げ、くじ引き、宝くじ、けんかななどでだれを排除するか決めるしかない。国の商品分配において、こうした方法のどれか、あるいはどれでも、卑しいお金による区別以上に適切かなどという問題に立ち入るのは、私の目下の狙いを超えるものとなる。だがまちがいなく、文明化された開明的な国々の習慣と、商業取引のあらゆる原理に基づき、価格は50人のうち10人の購買力を超えるようになるまで、価格が上がるのを容認するしかない。この点は、半クラウンかそれ以上高いものかもしれず、それがいまやこの商品の価格となる。排除された十人に、また1シリングずつあげてみよう。全員がいまや半クラウン提示できる。その結果として価格はすぐに3シリング以上に上がらねばならず、これはどこまでも繰り返される。

用語と発想は単純だ。だがここには系統的な経済学思考の発端が見られる。このパンフレットには他にもいろいろある――ほとんどその全文が引用に値する。この『探究』*47はマルサスの著作の中で最高のものの一つだ。とはいえ『人口論』にもすばらしい下りはあるのだが。そしていまや、引用を盛大に始めてしまったので、それに続いて第二版(p.571)からの有名な下りを続けざるを得ないだろう。そこでは部分的に似た考えが導入されているが、もっと立派な服をまとい、文脈もちがう(ペイン『人間の権利』批判の文脈だ)。

すでに十分持っている世界に生まれ落ちた人物は、公正に要求できる相手となる両親から食料を得られず、社会がその労働を求めなければ、ごくわずかな量の食べ物にすら権利主張ができず、実際問題としてその場にいることが許されない。自然の強力なる宴会の席に、その人物をが入れない空いた隅の座席はない、自然はその人物に消えうせろと告げ、そしてその人物が自然の客の同情に働きかけない限り、即座に自分の命令を実行する。その客たちが立ち上がって、その人物のために場所を空けてやるなら、他の乱入者がすぐにやってきて、同じ恵みを自分にもよこせと要求する。来る者全員に食料が与えられるという報せで、その広間は無数の権利主張者だらけとなる。宴会の秩序と調和は乱され、かつては支配的だった豊富さが希少性に変わる。そして客たちの幸福は、広間のあらゆる部分に見られる悲惨と依存の光景により破壊され、期待するよう教わった食料が見つからないので当然ながら激怒した連中の騒々しい執拗さにも潰されてしまう。客たちは自分のまちがいに気がつく。その宴会の大いなる女主人が、来客たちすべてが十分得られるようにと願い、自分が無限の人数には喰わせられないと知って、すでにテーブルがいっぱいときには新入者たちを人道的に拒絶するために発した、すべての乱入者に対抗する

*47 珍しいパンフレットで、私の知る限り一度も再版されていない。

厳密な命令に逆らったのがまちがいだっただ。だがすでに時遅し。

マルサスの次のパンフレット『サミュエル・ウィットブレッド閣下議員にあてた、救貧法改正法案についての手紙』は1807年に出たが、こんなに楽しげではない。それは『人口論』の原理の極端な適用だ。ウィットブレッド氏は「教区に小屋を建てる力を与える」、つまり住宅制度を提案したが、これは一部はひどい住宅不足を解消するため、一部は雇用を作るためだった。だがマルサスは、「住まいを調達する困難」を一切軽減してはならない、というのもこれは「救貧法が、自然に期待されるほどの早婚を奨励しない」理由だから、と熱心に指摘する。救貧法は物価を上げ、物価高は小屋の建設を阻害し、小屋の不足は人口増大をもたらすという救貧法が本来持つ悲惨な影響を軽減してくれる、というのだ。

早期に婚姻を形成したいという傾向はあまりに強いため、十分な救貧住宅による奨励があると、人口は大いに増えて、大量の労働量が市場に投入されるため、独立労働者の状況は絶対的に絶望的なものになってしまうと私は疑問の余地なく考える。

経済学とは、何とも危険な科学だ。

1803年に『人口論』新版が、600ページの立派な四つ折り本として、一ギニー半の値段で登場した。この頃にはマルサスは明確な責務も無く、自分の経済学探究を自由に進められた。1804年に彼は結婚した^{*48}。1805年、39歳のときには、前年に行われた新設の東インドカレッジ（最初はハートフォード、まもなくヘイリーベリーに移転）の現代史と政治経済学教授職への指名を受諾した。これはイングランドでの政治経済学教授職としては最初期のものだ^{*49}。

マルサスはいまや、学者にして教師という平穏な暮らしに入った。1834年の死まで30年にわたりヘイリーベリーにとどまり、後にマルサスの最後の副牧師だったサー・ジェイムズ・スティーブンスが入居する、時計塔の下の家で暮らした^{*50}。彼には三人の子供がおり、娘の一人は成人前に死亡、もう一人プリングル夫人は1885年まで存命、一方息子のヘンリー・マルサス牧師は子供をもうけずに1882年に死亡した。

『人口論』は版を重ねる毎にふくれあがった。1814年と1815年に彼は穀物法に関するパンフレットを刊行し、1815年には地代についての見事な論説、1820年には二冊目の本

^{*48} 『資本論』脚注 (vol. i. p.641, Dr. Bonar, 前掲書 p. 291 での引用) マルクスはこう語る。「マルサスはイングランド協会の聖職者だったが、彼は修道院の独身の誓いをたてた。というのもこれはケンブリッジのプロテスタント大学フェローとなる条件の一つだからだ。この条件からして、マルサスはカソリックの独身の誓いを投げ捨てた他のプロテスタント司祭とは、よい形で一線を画している」。よきマルクス主義学者ではない私は、1925年にモスクワ財務政治局の前で講演を行ったとき、私がロシアにとって人口増加が問題だと言うとそれがすべて悪意に取られるので驚いた。だがマルサスを批判しているマルクスは、人口過剰は純粋に資本主義左派期の産物でしかなく、社会主義では起こり得ないと主張していたのを忘れるべきではなかった。マルクスがこんな見方をしている理由は決して興味深くないわけではなく、実は資本主義社会においては「有効需要」が産出に追いつかないことがあるというマルサス自身の理論とかなり近い類縁関係にあるのだ。

^{*49} 当初提案されていた役職名は「一般歴史、政治、商業、金融教授」だった。

^{*50} D.N.B. にマルサスについての論説を書いたレスリー・スティーブンスは、当時はケンブリッジの若き教員で、徒歩主義での業績で主に知られているが、長きにわたりマルサスが住んでいた家にいる父親を訪ねてケンブリッジからヘイリーベリーまで歩いても平気だったと記録されている（『古きヘイリーベリーカレッジ回想記』p. 196 参照）。「ジョーンズ老」をここで持ち出してくる口実があればよかったのだが！彼はマルサスとスティーブンスとの間の20年にわたりその地位に就いていて、「さてご同輩たちよ、お尋ねもうそう：そなたらの中で、毒蛇の卵をかえたことのない者がいるかね？」という説教で有名だ。

『実務的応用を念頭に考慮された政治経済学原理』が出た^{*51}。

「マルサス夫人の素晴らしい晩のパーティーという伝統は、ロンドン学会のエリートたちがしばしば参加したもので、カレッジの終わりまでヘイリーベリーに残り続けた」^{*52}。「彼の召使いたちは、結婚するか落ち着くまで同居を続けた」^{*53}。学生たちは彼を「おとつあん」と読んだ。ホイッグ党員だった。説教は神の善を特に強調した。ヘイリーベリーは満足のいく学校だし、政治経済学は「それを理解できるだけでなく、退屈とすら思わなかった」若者たちにとって適切な勉強だと考えた。思いやりがあり、気質は穏やかで平穩、忠実で愛情深い態度で、朗らかだった――これは1798年『人口論』初版で「人生は、一般には将来状態とは無関係の恵みである(中略)そしてどう考えても、神の御業の中の要素として絶対不可欠なもの以外、それ以上の邪悪はまったくないのだ」という結論を裏付けている。

この図式と、パンフレット乱発論争の残酷で邪悪な化け物との対比は、マルサスがただ見えないようにしたものらしいが、友人たちの一部はこれでかなり機嫌を損ねたものの、シドニー・スミスはもっとうまい扱いをしている。彼はある手紙で1821年7月に次のように書いている。

先週、哲学者マルサスがここにやってきた。私は彼のために未婚の人々の楽しい集団を集めた。子供を産んだ女性はたった一人しかいなかった。だが彼はよい性格の人物で、妊娠の様子さえ見られなければ、あらゆる女性に礼儀正しい。(中略)マルサスは本当の道徳哲学者であり、あんなに賢く考え行動できるものなら、あんな聴き取りにくい話し方になってもほとんど構わないと思えるほどだ。

『ジェントルマンズ・マガジン』(1835, p. 325) は追悼文でこう書く。

マルサス氏は背が高く優雅な姿だ。そしてその外観は、行動と同じく完璧な紳士のものだった。

1833年にジョン・リンネルが描いた見事な肖像は、いまはロバート・マルサス氏所有で^{*54}、リンネルの有名な銅版画版で有名だが、血色のよい肌の色で、髪は赤っぽいか褐色の巻き毛、驚くほどハンサムで傑出した姿となっている。マルチノー嬢は彼女の自伝でマルサスについてこう書く。

イギリス中を探しても、マルサスさんほど単純な心を持つ美德にあふれる男性で、家庭への愛情に満ちた方は見つかりません。(中略)この世のあらゆる人の中で、マルサスは補聴器なしでも楽々と聞き取れた唯一の方でした。マルサスさんの話し方は、口蓋の障害のせいで絶望的に不完全でした。わざと私の知り合いになった彼のご友人に招かれて、私はあの方にお目にかかるのをひどく恐れたものです(中略)自分自身の耳の遠さと、あの方がアルファベットの子音の半分を発音でき

^{*51} マルサスの他のパンフレットなどの一覧は、Otter (前掲書, p.xlii) と Bonar (前掲書, p.421) にある。彼はまた『エジンバラ』と『クォーターリー・レビュー』に寄稿した。1827年刊の『政治経済の定義』は、大しておもしろくない小作品だ(ただしカードによる実質賃金の定義に対する攻撃は別かもしれない)。

^{*52} 『古きヘイリーベリーカレッジ回想記』p. 199。

^{*53} 『アテナウム』1835年の追悼文(オッター著)より。

^{*54} オールバリーのダルトンヒルの食堂で、同じくリンネルの筆になるマルサス夫人の対になった肖像とともに、暖炉の反対側にかかっている。こうした家族の肖像画の中には、息子ヘンリー・マルサス牧師の肖像画もある。リンネルの肖像画の複製がケンブリッジのジーザスカレッジにある。



トマス・ロバート・マルサス肖像、リンネル画

ず、あの方の兎つ口のために私の補聴管を差し出すこともできないのを考えると、私たちのやりとりは悲惨なものになるのではと恐れましたが、喜ばしいまでにまわがっておりまして。あの方の最初の一文――ゆっくりして優しく、子音はどうあれ母音は朗々としていたので、私は完全にくつろぎ、やがて自分が耳にするのが実は母音だけなのだということがわかりました。あの方の最悪の文字がLで、あの方の質問「Would not you like to have a look at the lakes of Killarney? (キラニーの湖をご覧になりませんか)」が何の苦も無く理解できたので、もう恐れるものはありませんでした」

このルソーやヒュームからはすでに隔絶した喜ばしい光景は、何とわれわれ自身の記憶の手の届く範囲にきていることだろうか！ ジョンソン博士やギボンやバークのあまりに多くの印象に影響されて、われわれは18世紀から19世紀への移行をとげるにあたり、マルサスが育った18世紀最終四半期の若き過激なイングランドの重要性も、フランス革命の結果に対する押し潰すような失望（今日のロシア革命の結果が、今日のその同輩たちに間もなくもたらしそうな影響にも比肩する）がそれに与えた破壊的な影響も、つい忘れがちとなる――とはいえ、ワーズワースやコールリッジの推移でそれはわかるし、シェリーの無敵の情熱からも感じられるのだが。いずれにせよマルサスは、いまやある世紀から別の世紀へと、環境面や知的見通しの面で完全に移行した。ルソー、父ダニエル、ペイリー、ピット、『人口論』初版は、別世界と別の文明に属するものだった。彼とわれわれとのつながりは密接になった。彼は政治経済クラブ^{*55}の創設メンバーだが、この会はいまでも

^{*55} J・L・マレット氏は1831年の日記で、マルサスがほぼ必ずこのディナーに参加したと述べている。

毎月第一水曜日に晩餐会を開いている^{*56}。彼はまた、その死の直前にできた王立統計協会の創設フェローだ。1833年には英国協会のケンブリッジ集会にも参加している。この論説の読者の一部は、彼の生徒の何人かをご存じかもしれない。

彼の晩年で最も重要な影響はリカードとの親交だった。リカードについてはこう語っている。

私は自分の一族出身者ですらこれほど気に入ったことはない。我々の意見交換は実に率直であり、二人ともが追求している対象は実にまったくの真実でそれ以外の何物でもなく、我々が遅かれ早かれ意見の一致を見るのは必定と思えた。

二人ともよく知っていたマリア・エッジワースは次のように書いている。

二人は真実を求めて共に飯をして、それを見つけるとどちらが先に見つけたのであろうと歓声をあげました。そして実際わたくしは、二人ともその有能な手を井戸の巻き上げクランクにかけて、真実が不思議なことにやたらに暮らしたがるあの井戸の底からそれを引っ張り上げるのを見たのです。

マルサスとデビッド・リカードとの間の友情は1811年6月^{*57}、マルサスが「自分たちがおおむね問題で同じ側の立場にいるから、自分たちの相違点をあげつらう紙上での長い論争の必要性を、友情に満ちた私的な議論で克服できないか」との期待から「自己紹介を敢えて行った」ことで始まった。それは長い進行につながり、決して破れることはなかった。リカードは何度も週末にヘイリーベリーを訪ねた。マルサスは、ロンドンにすればほぼ必ずリカードのところに滞在するか、少なくとも朝食を共にした。そして後年には、ゲートこむパークのリカード一家のもとに泊まるのが常となった。二人がお互いにきわめて深い愛情と尊敬を抱いていたのは明らかだ。両者の知的才能の対比は明らかだったしすばらしいものだった。経済的な議論において、リカードは抽象的で演繹的な理論家であり、マルサスは帰納的で直感的な探求者であり、事実や自分の直感を参照して検証できることからあまり遠くに離れるのを嫌った。だが金融実務となると、ユダヤ人株式仲買人と貴族的な聖職者の役割は、当然ながら逆転した。これを示す、なかなかおもしろいちょっとした逸話があるので記録しておこう。ナポレオン戦争の間、リカードは政府の証券活動において、現在なら「引受」に相当する活動を行うシンジケートの主要メンバーだったのは有名な話だ。彼のシンジケートは財務省から提供された、様々な期間の証券の入り混じったものを引き受けて、それを市場が有利になったところでだんだん一般に向けて売り払う。こうした機会にリカードはマルサスに、お金を抛出なしに少し証券の割り当てを与えるという仲良しサービスをするのが習慣だった^{*58}。つまりはマルサスがあまり長期保有しなければそこそこの利益が確実に得られるということだ。というのも当初、シンジケートの条件はその時点の市場価格よりかなり低かったからだ。さてたまたまマルサスは、自分がウォーテルローの戦いの数日前に、自分が政府証券のちょっとした「強気」ポジションにいることに気がついた。これは、不幸なことに、彼の神経には荷が重すぎたので、彼はリ

^{*56} このクラブの前で私は1924年4月2日に、「ロバート・マルサス牧師とはどのような人物だったのか？」という疑問の下でこの論説の古い版を朗読した。

^{*57} スラッフア氏によれば、ボナー博士の上げる1810年ではなくこちらのほうが正しい櫃だけだとのこと。スラッフアがこの文通のマルサス側を発見したことで、ボナー博士が1810年としていたが実は1813年のものだったいくつかの手紙の日付の誤りが訂正できた。

^{*58} マルサスはある手紙で、(政府への)融資五千ポンドほどを持っていると語っている。

カードに、もし「あなたが反対かご多忙でなければ」「あなたのご親切にも約束してくれた証券について、早めに少額の利潤を確定させてくれる」ように支持したのだった。リカードはこの指示に従ったけれど、自分自身はまるでちがう見方をしていたらしく、ウォーテルローの戦いの週が終わるまで、手持ちの財産ありったけを使ってその強気ポジションを繰り延べした。1815年6月27日の手紙で、彼は慎ましく報告している。「これは証券価格上昇による利益としては、これまで予想や希望していたものをはるかに上回る規模のもので、この融資で私はかなり儲けました」「さて以前の話に戻ります」と彼は続け、商品価格上昇の原因として考えられるものの理論にすぐ没頭する^{*59}。哀れなマルサスは、いささかの苛立ちを隠せずにいる。

告白しなければなりません [と彼は1815年7月16日に書いている] 私は初戦は先手攻撃ができたボナパルト有利だと考えておりました。そして実際、ウェリントン公爵の報告からすると、一時はボナパルトはかなり成功に近かったようです。しかしそれ以来起きたことから見て、フランス側は十分な準備ができていなかったようです。彼らが独立を守るために期待されるだけのエネルギーと熱意を持っていたら、いかに血なまぐさく完膚なきまでのものとはいえ、たった一つの戦闘でフランスの命運が決したはずはないでしょう。

この友情は、政治経済学の発展すべてにおける最も重要な文通を生み出したものとして、歴史に残るだろう。1887年にボナー博士は、文通のリカード側の手紙をマルサス大佐が保管しているのを発見し、有名な書簡集を刊行した。だがリカード一家が保有しているはずのマルサスが書いた手紙は、リカード家が保有しているはずだが探しても見つからない。1907年にフォックスウェル博士は『エコノミック・ジャーナル』に、一連の手紙から一通だけを発表した。これはデビッド・リカードがサインを収集していたイーストングレイのスミス夫人にたまたまあげたものだった。そして彼は、今にして思えばおおいなる先見性を持って、こう宣言した。「この文通におけるマルサス側が失われたのは、経済学者にとってはかのもう一つの文芸的大惨事、『国富論』に対するデイヴィッド・ヒュームのコメント破壊に次ぐものと位置づけられよう」^{*60}。だがすべてを見通すピエロ・スラッファ氏は、王立経済学会のために彼が準備している、近刊のデヴィッド・リカード完全作品集決定版（今年中には刊行されるはず^{*61}）のための調査の中で、失われた手紙を発見した。文通の両側が好評されると、そのおもしろみは大幅に高まることになるだろう。ここには確かに経済学理論の種が見つかり、またその主題がたどることになる、両者の議論の分岐過程――当初からあまりに別れすぎていて、実際にたどりつくまでその目的地はほとんどわからない――も見てとれる。リカード派均衡状態での産物の分配理論を検討しているし、マルサスは現実世界の日々の産出量を決めるのは何かを考えている。マルサスは、いまわれわれがたまたま暮らしている金融経済を扱っている。リカードは中立的なお金の経済という抽象を扱っている^{*62}。二人とも、概ね自分たちのちがいの本当の源を認識していた。1817年1月24日の手紙でリカードはこう書く。

^{*59} 『リカードからマルサスへの書簡』p. 85.

^{*60} もう一通の手紙は、リカードからマカロックに転送され、大英博物館のマカロック文書とともにほぞんされておられ、ホルンダー博士が1895年にリカード＝マカロック文通の一部として公刊した。

^{*61} [編者注：これはえらく予言的な一文となった。「今年」は結局1951年にまでずれ込んだ。]

^{*62} この点をよく示すものとしてはマルサス『経済学原理』（初版）p.326の「リカード氏の利潤理論について」を参照。

思うに私たちが実にしばしば議論した主題をめぐる意見の相違の大きな原因は、あなたが常にある変化の即座の一時的な影響を念頭においているのに対し、私はその即座の一時的な影響を脇において、すべての注意をそこから生じるものごとの永続的な状態に向ける、ということにあるのだと思われます。あなたはこうした一時的な影響を重視しすぎ、私はそれを軽視しすぎる傾向にあるのかもしれませんが。この主題をちょうどよく扱うには、この両者を慎重に区別して言及し、それぞれに適切な影響を割り当てる必要があります。

これに対してマルサスはかなりの量を割いて、1817年1月26日に返答している。

私たちの意見の相違の一つの原因が、あなたのおっしゃることだという点には同意します。私は確かに、あるがままの物事を参照し、それが自分の著作を社会のにとって実務的に役立つものにする唯一の方法だと考えますし、またそれがラピュタ島の仕立て屋の誤謬に陥らないようにするための唯一の方法だと思うし、出発点でのちょっとしたまちがいがから、真実からかけ離れた結論に到達してしまう危険を逃れる唯一の方法だとも思います。それに私は本当に、社会の進歩は不規則な運動で構成されると考えており、八年から十年にわたって生産と人口に大きな刺激をもたらす要因の考察を欠いたり、それを十分に考察しなかったりすることは、国の豊かさや貧困の原因――政治経済学のあらゆる探究の大目標――を無視することだと思うのです。確かに著述家は、自分の好きな仮説を立てることはできます。でも実務的にまるで真実でないことを想定するなら、その仮説から実務的な洞察を引き出す可能性を自ら閉ざすこととなります。利潤に関する論説で、あなたは労働の実質賃金が一定だと想定します。しかしながら、それは(名目値は同じままですが)商品価格が変わるごとに変動するものですから、現実には利潤と同じくらい変動するものであり、あなたの洞察が物事の実態に適用したときに正しいことはあり得ません*63。身の回りのあらゆる国、特に私たち自身の国で繁栄の高いときと低い時期、ときには衰退の時期は見られますが、あなただけが考えているような均質な進展はまったく見られないのです。

しかし、私たちのさらに個別で根本的な相違に移りますが、それはこういうものだと思います。あなたは、人間の欲求や嗜好は常に供給に応えるものだとお考えのようです。一方で私は、新しい嗜好や欲求を引き起こすほどむずかしいことはなかなかないと深く確信しているし、特に老人からそれを引き出すのはむずかしいと考えております。需要の大きな要素の一つは、人々が商品に置く価値であり、供給が需要にぴったりあてはまれば、それだけその価値は上がるし、もっと多くの労働日数分がそれと交換されたり、その利用権のために支払われたりします。(中略) 私は実務的に、生産と人口への実際の抑制は、生産力の不足よりは刺激の不足から生じるのだと完全に考えております。

この文通を精読すると、マルサス的なアプローチがほぼ完全に殲滅され、リカードのアプローチが百年にわたり完全に支配してきたことで、経済学の進歩に大惨事がおきたという印象は拭い難い。こうした書簡で、何度も何度もマルサスはまったく筋の通ったことを

*63 この点は、前の注で挙げた「リカード氏の利潤理論について」でさらに展開されている。

語っているのに、リカードは頭を雲の上に出して、まったくその力を理解できずにいる。何度も何度も、マルサスによる有無を言わせぬ反論にも関わらず、リカードはマルサスが何を言っているのかさえわからないようだ。だが、ピエロ・スラッフア氏の近刊の重要性をこれ以上先取りしてはいけない。こうした抜粋の機会、彼のおかげとなる。ここでは単に、マルサスが過剰貯蓄が利潤への影響を経由して及ぼす影響について完全に理解していたことを示すにとどめよう。

フォックスウェル博士が『エコノミック・ジャーナル』(1907年, p.274)に掲載した手紙を見ると、1814年10月9日の時点でマルサスはこう書いていた:

「蓄積の欲求は、消費の欲望と同じくらい自然に需要に伴う」、および「消費と蓄積は同じくらい需要を促進する」というあなたの主張には、私はまったく同意できません。確かに私は、利潤の低下は一般に、生産物の価格が生産費用より急激に下がることで生じるものと比べて、あなたも認めるような蓄積より生じるほうが多い、つまりは有効需要が減ったことで生じるのだという以外の理由を知らないと告白しましょう。

しかし、1821年7月にマルサスが書いた二通の手紙からの以下の抜粋を見ると、その頃にはこの問題はマルサス側では一層明確になり、リカード側は相変わらず理解できていなかったことがわかる。

[July 7, 1821]

世界のほとんどの部分では、大量の生産力が活動していません。私はこの現象を説明するのに、実際の産物の適切な分配に対する要求からは、継続的な生産のための適切な動機がもたらされないからだと述べます。富の進展の直接的な原因を検討する言うとき、私ははっきりと主にその動機を検討するつもりです。私は一部の人やその他の人が、生産されるすべてのものを消費する権利があることを否定する気はまったくありません。しかし大きな問題は、関係する各種の人々の間で、将来の生産に対する最も有効な需要をもたらすような形でそれが分配されているか、ということです。そして私ははっきりと、急速に蓄積を行おうという試みは必然的に、非生産的な消費の大幅な減少を意味するとはっきり主張したい。それは、通常の生産の動機を大きく阻害することで、富の進展を不十分なところで止めてしまうからです。これはまちがいでなく、大きな実務的問題であって、このようにして生じた種類の停滞を過剰と呼ぶべきかどうかという話ではありません。呼び名は私にとって、まったく副次的な重要性しか持たないものです。しかし、とても急速に蓄積しようという試みが、労働と利潤の間に大きな溝を引き起こし、将来の蓄積の能力や動機をほとんど破壊してしまい、結果として増大する人口の維持雇用の力が失われてしまったら、そうした蓄積の試み、あるいは貯蓄方法が、本当に国にとって有害だということにならないでしょうか。

[July 16, 1821]

現在の議論の主題についてですが、どうもお互いに決してきちんと理解し合えないように思えます。もしあなたが私の最後の章の最初の節での暴騰の二段落を読ん

で、それでも「莫大な生産力が活動へともたらされ、その結果が人類にとって望ま
しからぬものだと理解」するのであれば、私は自分の言いたいことを決して説明で
きないのではないかとほとんど絶望してしまうのです。私ははっきりと、自分の狙
いが生産の力を呼び起こす原因が何かを示すことだと述べております。そして私が
ある程度の非生産的消費を推奨するなら、それは明らかに明示的に、最大の生産継
続のために必要な動機をもたらすという動機のためだけなのです。そして私はさら
に、この非生産的消費のある割合は土壌の肥沃さなどによって変わりますが、国の
リソースを呼び起こすには絶対的かつ不可欠なまでに必要だと考えています。(中
略) さて生産のための動機の中で、まちがいなく最も本質的なものの一つは、生産
されたものの十分な割合が、あらゆる産業を動かす人々に帰属するということ
です。しかしながら巨大な一時的貯蓄は、利潤がそれを奨励するのに十分な場合
には、生産物の分裂を引き起こし、おかげでそれ以上の生産増加の動機が残らな
くなってしまふ可能性があるとなんたご自身が認めておられます。そしてしばらく
それ以上生産を増やす動機がないという物事の状態が、まことに適切に停滞と呼べ
ないのであれば、何をもって停滞と呼ぶべきか私にはわかりません。特にこの停滞は
どうしても、新興世代を雇用から追い出さざるを得ないからです。繰り返された経
験から、労働価格は多くの作業員がしばらく失業しないと低下しないのはわかっ
ています。そして問題は、生産増大に地主や資本家たちの非生産的な消費が適切な比
率で伴わないことから生じたこの資本の停滞と、その結果としての労働需要の停滞
が、国に被害を与えずに起こり得るのか、地主や資本家の非生産的消費が、社会の
自然剰余に対して、まず生産動機を絶やさず、さらにまず不自然な労働需要を阻止
し、さらにそうした需要の必然的で突然の喪失をもたらさないような割合で生じた
場合に比べ、幸福も富も低い水準がもたらされてしまうのではないかと、というこ
とです。しかしもしこれが本当なら、節約が、生産者に対しては有害ではあっても、
国家に対しては有害ではあり得ないなどとなぜ言えるのでしょうか？あるいは地
主や資本家の間の非生産的消費が、ときには生産の動機が不足するときの物事の状
態に対する適切な療法だったりすることがないなどと、なぜ言えるのでしょうか？

19世紀経済学が発達した主要な茎が、リカードではなくマルサスであってくれたら、世
界ははるかに賢く豊かな場所になっていたことだろう！ われわれは、決して自明である
ことを止めるべきではなかったものを、苦勞して自分たちのまちがった教育の目をくらま
せる封筒を無理矢理押し破って再発見しなければならないのだ。私は昔から、ロバート・
マルサスコそ初のケンブリッジ経済学者だと主張してきた。そしてこれらの手紙が公開さ
れたら、共感と畏敬をさらに高めた形でわれわれみんながそう主張し続けられる。

この手紙でマルサスは、実は1820年刊『経済学原理』の第7章9節の議論を言い直し
ているだけだ。「非生産的な消費者によりもたらされる分配のうち、製品全体の交換価値
を高める手段として考えられるもの」。だがこれはリカードにはまったく理解できないも
のであり、同様にこれは節約の発想にも影響を与えられなかった。だが彼はそれをさらに
重要なものとする。しかしきちんと目を開いて『経済学原理』に戻れば、この議論のエッ
センスがそこで展開されているのがわかる^{*64}。同じ章の第10節で、マルサスはこの原理

^{*64} 読者には第9節すべてをご覧いただきたい。私たちが暮らす実際の経済システムでの最適な貯蓄を決める
条件に関する見事な検討となっている。

を「1815年以來の労働階級の困苦」に適用する。彼は問題は、これまで戦争に向けられていたリソースが貯蓄の蓄積に向けられてしまっていることなのだと言及する。そして、そういう場合には貯蓄の不足は絶対に失業の原因ではなく、貯蓄は私的な美德ではあっても、公的な責務ではもはやなくなってしまったのだと述べる。そして公共事業と地主や財産持ちによる支出こそが適切な治療法だと述べる。以下の二つの下りは、1815-20年の出来事について書かれた、最高の経済分析の例として引用できる。

利潤が低くて不確実なとき、資本家たちが自分の資本を安全にどこへ投資できるか見当がつかないとき、そしてそうしたときに資本が国から流出しているとき。要するに、対象の性質が示すあらゆる証拠が、はっきりと資本にとっての有効な需要が故国にないことを示しているとき、貯蓄を推奨したり、もっと多くの収入を資本に転換したりするよう奨めたりするというのは、政治経済学の一般原理に反するものであり、需要と供給の原理というその第一の、最大の、最も普遍的な原理に対する無駄で無益な反対なのではないだろうか？ それは人々が飢えて転出しているときに結婚を推奨するのとまったく同じ話ではないか？*65

全体として私は、道路や公共工事で貧困者を雇用し、地主や財産保有社が建設したり、自分の土地を改良し美化したりする傾向を発揮し、作業員や身体使用人を雇うのは、生産と消費とのバランス阻害から生じる邪悪を治療するために最も直接的に計算され、最も我々の力の範疇にある手段だと考える。そのバランス阻害は、兵士、水兵など戦争が雇用した各種の階級を、すぐに生産的な労働者に転換するために生じたものなのだ。*66

貯蓄と投資のバランスの問題すべては、同書の序文で以下のように提起されている。

アダム・スミスは、資本は儉約により増え、あらゆる節約者は公共に利する存在だと述べた。そして富の増大は、消費より生産がどれだけ多いかで決まるのだと述べた。この主張がおおむね正しいということは、まったく疑問の余地がない。(中略) だがそれが無限に正しいわけではないのも、かなり自明だろう。そして貯蓄の原理は、極端に推し進めたら、生産の動機を破壊してしまうのも当然だ。もし万人が最も単純な食事、最も貧しい衣服、最も卑しい住宅で満足してしまえば、それ以外のどんな衣食住も存在しなくなってしまうのはまちがいない。(中略) 両極端は明らかだ。そしてここから、何か中間点があるはずだということになる。政治経済学のリソースではその地点を見極められないにしても、生産の力と消費の意思との両方を考慮しつつ、富の増大の促進が最大になる地点があるのだ。*67

この考えの方向性にまったく重要性を見出さなかったのは、まちがいでなくリカードの大きな落ち度だ。だがマルサスの欠点は、金利が果たす役割を完全に見すごしたことにある。二十年前なら私はマルサスに対し、彼の考えるような自体は、金利がまずゼロに下がらない限り起こり得ないと反論しただろう。マルサスはいつもながら、真実であることを直感していた。だがそれが真実である理由の完全な理解のためには、なぜ儉約の過剰にと

*65 前掲書 (初版) p. 495.

*66 前掲書 p. 512.

*67 前掲書 pp. 8, 9.

もなつて金利のゼロへの低下が生じないのかという説明が不可欠なのだ。

アダム・スミスとマルサスとリカード！ 彼らの精神の子供であるわれわれにとって、この三人には通常以上の気分をかきたてる何かがある。マルサスとリカードは、お互いの精神的性質が正反対だったが、それでも生涯を通じて平和かつ友愛をこめて対話を続ける支障にはならなかった。リカードの死の直前にマルサスにあてた手紙の末尾は次の通りだ。

さあ、わが親愛なるマルサスよ。私はもうおしまいです。他の論争者たちと同じく、大いに議論したあげくに、私たちはお互いにまだ独自の意見を保ったままですね。でもこうした議論は、決して私たちの友情には影響しませんでした。私の意見に同意したからといって、あなたに対する好意がこれ以上増すことはなかったでしょう。

マルサスは友人より十年長生きし、彼もまたおしまいになった。彼は死の直前にこう書いている。

私の見方は世に示した。何かを変えるにしても、表現を変えるくらいしかできない。そしてそれも改善になるかどうかはわからない。

1833年、死の一年前に、マルチノー嬢が彼をヘイリーベリーに訪ねた。彼女は「植生豊かなハートフォードシャー郡が気に入りました。私たちは仕事が終わるとほぼ毎日外出いたしました――五、六人の素敵な騎乗集団が、緑の並木をすべて探検し、ご近所の見事な眺めをすべて楽しんだのです。他の教授方のご家族は、とても素敵な仲間でしたし、もちろん生徒たちの中に、将来のインド行政官たちを見るのは実に興味深いものです。若者たちの慎ましいおふざけと、外に見える敬意と、たまの反抗。ペルシャ教授の奇妙な礼儀正しさ。レバス校長の見事な教養と熱心な就学ぶり、そして夏の晩の旧弊な礼儀正しさは、いまやすべて終わってしまったのです」

9.2 ロバート・マルサス: 没後百周年訓示

『イスラムの反乱』序文でシェリーはこう書きました。

形而上学と道徳科学や政治科学の探究は、破砕された迷信を復活させようという空しい試みか、あるいは人類の抑圧者を永続的勝利の確保へと引き寄せるべき計算された、マルサス氏のもののような屁理屈でしかなくなってしまった。

これがゴドウィンの義理の息子の発言です。ゴドウィンが抱いていた、人類に対するよい希望に反対する形で、『人口論』は書かれていたのです。あるいは別の詩人、ジーザスカレッジでのマルサスの同窓コールリッジの見方も、これよりさして好意的ではありません。「貧困から生じる大いなる悲惨とひどい悪徳を教わり、パンの斤数より口が多く、脳みそより頭が多いときには最悪の形の貧困が必ず起こる、などということを見せてもらうのに、いまやいちいち四折本が必要なのか？」ボナー博士によると「残りの余白への書き込みは主に合いの手じみた性格のもの（たとえば「バーカ！」など）であり、その多くはあまり洗練されていない」。

このように、霊的革命の詩人と、霊的保守主義の詩人のどちらにとっても、マルサスは経済学者たちの屁理屈の象徴に思えたのです——人道主義のケツから、当たり前の話を使って、貧困と悲惨を軽減しようとするあらゆる試みは、それをかえって増やすのだという証明をひり出す、小利口で憎悪に満ちた同義反復屋ども。衝動的な慈善は、啓蒙的な利己性よりも社会的美德に劣ると論じる連中。そして悲惨な世界において、実業家たちがなるべく邪魔をされないまま、適者生存——つまりいちばんの金持ちの生存——の有益な追求をするに任せておけば、考えられる最高の状態になるのだと主張する輩ども。

二人のまったくちがう詩人が、最高度の知的洞察をもって、語られていたことをこのように解釈したわけです。また19世紀の経済学者たちに向けられていたこうした糾弾が、まったくまちがっているわけでもありません。また今日の私たちがそこから完全に逃れられたわけでもありません。マルサスが始めてリカードが歓声した作業は、確かに現状を正当化するためのすさまじく強力な知的基盤を提供し、実験を追い払い、熱意を鈍らせ、人々みんなに場をわかまえるようにさせました。そして、彼らが私生児としてカール・マルクスを吐き出してしまったというのは、実に天網恢々と言うべきでしょう。

マルサスの思い出がこのように関連づけられるというのは、まったく不当というわけではありません。『人口論』初版がゴドウィン『政治的正義』に反対するものだったように、その第二版にはしばしば引用される、ペイン『人間の権利』に反対する一節が登場します。

すでに十分持っている世界に生まれ落ちた人物は、公正に要求できる相手となる両親から食料を得られず、社会がその労働を求めなければ、ごくわずかな量の食べ物にすら権利主張ができず、実際問題としてその場にいることが許されない。自然の強力なる宴会の席に、その人物をが入れる空いた隅の座席はない、自然はその人物に消えうせると告げ……

そしてサミュエル・ウィットブレッドが「教区に小屋を建てる力を与える」よう提案すると、マルサスは「住まいを調達する困難」はどんなことがあっても軽減されてはならないと促すパンフレットを書いたのです。

しかしながら、このマルサスからの連想は、彼の人生と業績が二つのちがった部分に分かれ、それぞれが彼を取り巻く出来事や影響から生じたのだということを見すごしています。そして、その第二部はリカードとその学派がわたしたちの首筋に鋌打ちしていた理論をひっくり返そうという、果たせぬ努力だったということも見すごしています。さっき引用したシェリーの一節は、こう続いています。

われわれの小説と詩の作品も、同じ感染性の陰鬱さにより陰りを見てきた。だが見たところ人類は、その催眠状態から目覚め始めているように見える。私は、ゆっくりとした、段階的な、モノ言わぬ変化が見られているように思う。

そして脚注で彼は、『人口論』後の版に見られるいくつかの変化について親切にも「公的な希望復活の症例」として言及しています。シェリーがまちがいなく念頭においていた、『人口論』第二版の結論近くの一節を読み上げさせてください。

したがって全体として、人口の原理から生じる邪悪の軽減に関する将来の見通しは、我々の願うほど明るいものではなくとも、まったく絶望的というにはほど遠いのであり、この問題についてのかつての荒っぽい考察以前に合理的に期待されていたような、人間社会における段階的で持続的な改善を排除するものではまったくない。不動産と結婚の法則と、各個人は自分の状況を改善するために頑張るという明らかに偏狭な自己愛の原則に対し、我々は人間の天才ぶりの最も高貴なる応用、文明国と野蛮国とを分けるすべてを負っている。人口の原則の厳密な探究は、これほどの高みにまで人類がのぼってきた梯子を、我々が決して捨て去ることはできないという結論に強くたどりつく。だがそれは、同じ手段を使って人類がさらなる高みに登れないと証明するものではまったくない。社会の構造は、その大きな特徴の点ではおそらく常に変わることがないだろう。どう考えても社会は常に、資産階級と労働階級に分かれるだろう。だがそれぞれの条件と、その両者の比率は、全体の調和と美しさを高める形で如何様にも変えられる。物理科学の視野が日々広がって、きわめて遠くの地平線にすら縛られないかのように見えるのに、道徳哲学と政治哲学の科学はこれほど狭い範囲に押し込められ、あるいはよくてもその影響力において、人口増大から生じて高まる人間の幸福に対する障壁に対抗もできないほど弱いなどというのは、憂鬱な考えにまちがいない。だがこの作品の一部でこうした障壁がいかに強大に見えたとしても、この検討の一般的な探究の結果は、人間社会の改善という大義を絶望して諦めるようなものではないと願うものだ。実現可能に見える部分的な善は、全力で頑張るだけの価値を持つ。それは人間の努力をふり向け、見通しを活気づけるに十分なものだ。そして、人類の美德と幸福は、物理的発見の見事な経歴に追いつけないにしても、それでも自分でやらないにしても、それが決してつまらなくはない規模でその進歩に影響を受け、そしてその成功の一端を担おうとするだろうという希望には、自信をもって耽溺できるのである。

18世紀最後の時期に、労働階級の悲惨はマルサスから見ると、主にその生活水準の低さから生じているように思えました。ウォーテルローの戦い後と英仏戦争の後の年月には、それは主に失業の問題に思えました。この二つの問題に対して、経済学者としての彼の取り組みが順次適用されたのです。最初のものに対する解決策として、彼は人口原理を提起しました。この生産要素に対する報酬の低さを引き上げるには、その供給を抑えるしか

い、というわけです。しかし書などでかれはその供給を抑えるむずかしさを強調していましたが、後の版では供給を抑えるのが重要だというふうに変りました。人生の後半においては、英仏戦争後の失業に没頭していました。当時これは、かなりの規模であらわれたもので、彼はその説明として有効需要の不足と呼ぶものを考案しました。それを直すために、彼は自由な支出の精神、公共事業と拡張主義政策を呼びかけたのです。今回は、「経済学者の屁理屈」に圧倒されたのはマルサス自身でした。偉大なりカードに対する彼の強力で有無を言わせぬ攻撃を、かけらほどの共感と理解を持ってだれかが読むまでに、百年が過ぎることとなります。だからマルサスの名前は彼の『人口原理』で不滅のものとなり、はるかに広範な有効需要の原理のしばらしい直感は忘れ去られてしまったのでした。

しかし今日は、マルサスをケンブリッジ経済学者の最初の人物として考えましょう——何よりも定式化された嗜好の枠組みを、日常的な出来事の世界の複雑な混乱に適用した大いなる先駆者なのです。マルサスは経済理論の中心的な問題に、あらゆるものの中で最高の経路によりアプローチしたのです。ペイリー時代のケンブリッジで育った人間として、まず哲学者と道徳科学者として興味を抱き始め、政治哲学者の演繹的な手法を適用しました。それから数年にわたり経済史と当時の社会の事実の没頭し、歴史的な帰納の手法を適用して、心に経験からくる材料を大量に満たしました。そして最後に彼は演繹的な嗜好に再び戻ってきましたが、今回は正統経済学者の純粹理論に戻ってきて、定式化された思考手法を出来事が提示した材料に適用して、直感的な選択と定式化された原理の混合物によりそうした出来事を理解して、問題を解釈して解決策を提案する、本当に最初の人々の一人となったのでした。要するに、道徳科学者というイモムシから歴史家というサナギを経て、彼はやっと思考の翼を広げ、世界を経済学者として見渡せるようになったのです！

ですから、最後にここで、経済学者にとって経験と理論との関係がどうあるべきかをマルサスがまとめた一節を読み上げさせてください。

私たちは絶えず、自分は実務的なのだと胸を張る人々から発せられる、理論や理論家への糾弾を耳にし続けている。確かにダメな理論はとてもダメな代物であり、そういったものの著者は社会の成員として役立たずで、ときには有害ですらあることは認めねばならない。だがそうした実務の支持者たちは、ご自身たちもまたきわめてしょっちゅう、こうした記述があてはまる存在となっていて、その相当部分がそれぞれの時代の最もろくでもない理論家に分類され得ることにお気づきでないようだ。人が誠実に、自分自身の観察の範疇にやってきた事実を、それがどんなに限られたものであっても関連づけるときには、まちがいはなく人類の知識の合計に寄与するのであり、社会に便益をもたらす。だがありがちなこととして、その限られた体験、自分の小さな農場の経営や、ご近所の作業所の細部をもとに、一般化された洞察を引き出すとき、その人は即座に理論家として台頭し、もっと危険な存在となる。というのも理論の唯一の公正な基盤は体験なので、人はしばしばそうした言葉の響きだけに囚われてしまい、主題によっては公正な理論の基礎にはまったくならないような部分的な体験と、公正な理論を打ち立てる唯一の基盤となる一般化された体験とをきちんと立ち止まって区別しなくなってしまうのだ。

私はマルサスに、深遠な経済学的直感と、経験の移り変わる図式への開かれた心、そして絶えずそれを定式化した思考の原理解釈に適用し続けた栄誉を主張したい。その後百年

経った現在、この彼の母校において、私たちは彼を衰えることのない敬意をもって記念しつづけるでしょう。

第 10 章

ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズ

*1



ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズ

スタンリー・ジェヴォンズはマルサス死亡の翌年に生まれました。でもマーシャルのたった七歳年上で、エッジワースの十年年配です。フォックスウェル博士はユニバーシティカレッジで、ジェヴォンズが教授職に就く前に、彼に代わって講義を行っています。1875年の道徳科学学位審査では、私の父の審査を行ったこともあり、私は幼い頃から、父の考える経済学者と論理学者のあるべきパターンとして、彼の名前を知っていました。したがって、今日の私たちが（遅ればせながら）彼の生誕百周年を祝ってはいても、そしてフォックスウェル教授が彼にかわって講義したのが六十年前でも、彼の死後五十年以上

*1 「ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズ：経済学者と統計学者としての彼の人生と生涯に関する百周年訓示」、1936年4月21日に王立統計学会で朗読されたもの。文書としては *Journal of the Royal Statistical Society*, Part III, 1936 初出。

たっている、それでもジェヴォンズは、経済学分野を1873年のミルの死後半世紀にわたり支配してきた学派の経済学者集団に属しています。それは彼の思い出に敬意を表すべく本日ここに集まった、私たち自身の直接の教師であり先人なのです。^{*2}

彼の家族は教育の高い非国教派階級に所属していました。それは学術的なつながりはないものの、十九世紀前半にリバプール、マンチェスター、リーズ、バーミンガムの知識人階級を構成し、ベンサムによるロンドンのユニバーシティカレッジ創設(1826年)とマンチェスターのオーウェンズカレッジ(1846年創設)の屋台骨となったものです。一家とその関係者の多くはユニテリアン派でした。そして信仰面でのスタンリー・ジェヴォンズは、死ぬまでその信仰にとどまりました。彼の父は鉄商人でスティーブンソンの友人で、当時の工学イノベーションに大いに興味があり、海を航行する初の鉄製船舶を建造したと言われ(1815年)、テムズトンネルの建設を支持して自腹を切り、法律について小著を著し、経済に関するパンフレットも執筆しました。その母親(ジェヴォンズは九番目の子供でした)もまた詩人で、ウィリアム・ロスコーの才能豊かな一家の長女でした。ロスコーはリバプールの訴訟事務弁護士で銀行家であり、収集家でディレクターでもありましたが、教養豊かな歴史家でもあり、『ロレンツォ・ド・メディチの生涯』と『教皇レオ十世』などいろいろ書いており、そこには児童書の古典『チョウのぶとうかい』と『バッタのおいおい』^{*3}も含まれています。スタンリー・ジェヴォンズ自信は『マンチェスター・ガーディアン』を創刊したJ・E・テイラーの娘と結婚し、結婚によって『スペクテーター』のR・H・ハットンとも姻戚関係となりました。

父親と祖父のロスコーはどちらも、非凡な才能を持ち文句なしの清廉な人物だったのですが、二人とも破産しました。前者は1848年の金融危機で、後者は1816年に自分の銀行で取り付け騒ぎが起きたことが原因です。だから彼は、景気循環の現象を見ずごさないようにする、よい世襲的な理由を持っていたわけですね。スタンリー・ジェヴォンズ自身も自分の投資や財務ポジションにとっても注意を払い、彼の文通におけるいくつかのヒントを信じるなら、交易サイクルと石炭埋蔵量の段階的な消尽に関する理論を深く考慮しつつ管理したようです。彼自身の資本は少額でしたが、妻は独自の収入を持っており、ジェヴォンズは貯金を上手く投資して二人の収入を補っていたと聞いております。彼は、自分の行動のあらゆる重要な段階で、人生における大きな目的を確保するために自分の所得を無慈悲なまでに犠牲にした人物の見本でしたが、それでも決してお金を軽蔑するようなことはなく、犠牲が求められたときには毎回、かなりの苦痛を感じたのでした。多くの面で、いやむしろほとんどの面で、彼はよいヴィクトリア朝の人間であり、知的にも道徳的にも極左の見通しは忌避し、保守党は受け容れていたのです——彼自身の言葉を引用しましょう。「全般的な善の主要な橋頭堡たるこの国の継続的、独占的な繁栄を確保するためには[保守党が]あらゆる費用をかけても望ましい」。そして自由党については「慎重さがなく、抽象

^{*2} もちろんながら、ジェヴォンズの生涯に関する主要情報源である、彼の妻編集の *Letters and Journal* は大いに参照している。また今日われわれの評議会会員であるその息子 H.S. ジェヴォンズからの情報にも大いに助けられた。

^{*3} 「
とてもどうどうとカタツムリはすすみ
みまもるみんなに一分のダンスをやくそく
でもみんなが大わらいましたので頭を引っ込め
自分の小さなおへやに入ってお休み」

自分の子供を楽しませるために書かれたこの本は1807年に出版され、一年で4万部が売れ、その後少なくとも75年にわたり人気を保った。

原理と自然のそのままの傾向を盲信している」*4。

スタンリー・ジェヴォンズが育ったまわりの人々は社会経済問題に関心がありました。祖父ウィリアム・ロスコーは熱心な社会改革者で、奴隷貿易廃止で活躍しました。父親は『地主の繁栄は穀物法には左右されない』というパンフレットを書きました。母親は、ホウエイトリー枢機卿『おかねのもんだいについてのやさしいべんきょう』をいっしょに読んだと記録されています。彼が初めて通ったリバプールの機械工研究高等学校の校長ホジソン博士は、後にエジンバラ大学で政治経済学教授になりました。それでもジェヴォンズは道徳科学ではなく、数学、生物学、化学、冶金学を学んだのです*5。1852年、ダーウィン『種の起源』刊行7年前に、17歳の彼は日記にこう書いています。

ハリート、道徳哲学についていささか高度な議論をした。そこからすると、ぼくは明らかに「依存型道徳主義者」で、動物としての気質とはまったく別で種類のちがう「道徳感覚」を人間が持っているなどとはまったく信じていないとのこと。ぼくはまた、種の起源についても話をした。つまり、無数の動物の種類がどのように生まれたかということだ。ぼくは、現在理解している限りでは、あらゆる動物は何千、いや何百万年もにわたる気候、地理などの連続的な影響を通じて、ある一つの原始形態から変形して生まれてきたと確信している。この理論を唱えるラマルクをライルはえらくバカにするけれど、それに反対するまともな理由は何も挙げていないように見える。*6

18歳のときに家族の財務的な困難のため、彼はシドニー造幣局の試金検査人の仕事に就くことになりました。これはオーストラリアでの黄金の発見の結果として開設されたばかりでした。彼は五年にわたりこの職にとどまりました。彼の野心からすれば、ユニバーシティカレッジを勉学半ばで辞めるのは大いなる失望で、彼がオーストラリアを離れた大きな目的は、カレッジに戻って学位のために学士課程を終えることでした。しかし、純粋な独創性の力が最高に達する年齢において、オーストラリアでの孤独な思索とそのゆっくりした醸成はきわめて実り多いものとなったのです。というのも帰国して間もなく、彼の知識への主要な貢献の概略が、彼の頭の中でしっかり固まったからです。30歳以降のジェヴォンズの生涯最後の3分の1は、彼が基本的にすでに発見したことを敷衍して増幅することに主に充てられたのでした。

オーストラリアとそれ以降の彼の孤独な思索の成果は、1859年のイギリス帰国に続く十年強ほどでの一連の研究に示されましたが、まったくちがう二種類に分類できるもので、どちらも1862年英国協会ケンブリッジ集会での発表が先触れとなっています——最初のもは変動に関する帰納的研究についてのもの、もう一つは純粋理論への演繹的貢献です。でもこれらを詳細に検討する前に、『石炭問題』について触れておくのがよいでしょう。これは彼の処女作にして、今後の世間的な名声の最初の機会でした。

*4 『石炭問題』 p.xviii.

*5 経済学、統計、論理学へのアプローチにおける彼の科学教育の影響は、王立協会フェローへの選出(1872年)で認知された——経済学者としては、サー・ウィリアム・ペティ以来のはずだし、その後もギフェンとバルグレーブしかいない。

*6 *Letters and Journal*, p.23.

II

『石炭問題：国の進歩と我が国炭坑枯渇の可能性についての検討』は、どう見てもジェヴォンズ最高の仕事とは言えません。書きぶりはすばらしいしおもしろく、その魅力とそれが持った影響力を高められるものは何も省略されていません。しかしその予言は実現せず、その基盤となっている議論はあぶなっかしく、今日読み直すと勇み足で大きさに思えます。

この本でのジェヴォンズの理論は、大英帝国の繁栄と工業主導権の維持のためには重工業の発展が必要であり、その規模のため、石炭の需要が幾何級数的に増えることになる、というものでした。ジェヴォンズはこの原理を、マルサスの人口論の延長として展開しました。そして彼はそれを「社会成長の自然法則」と呼んだのです。彼がこの原理を宣言した表現——つまり「同じ性質と同じ状況におかれた生命体は同じ幾何的比率で増殖する」——は、彼が述べたように「言葉の意味を理解すれば自明である」*7。しかし「内面の性質を変えなくても外部環境は通常は変化している」という警告にもかかわらず、ジェヴォンズによるこの自明な議論の拡張はすぐに誤解を引き起こします。というのも、彼はこう続けているのです。

さて、人々の単なる数についてあてはまることは、その条件の他の要素についてもあてはまる。我々の両親たちが確固たる社会的な進歩を実現したのであれば、我々が親にふさわしからぬ不肖の子供でない限り、我々も似たような進歩を行うべきである。両親たちが所得を倍増したのであれば、あるいは鉄の利用や国の農業生産を倍増したのであれば、我々の性質や条件が変わったのでない限り、我々だってそうすべきなのだ。*8

ここからは、マルサスの理論で穀物が占めていた役割に石炭が収まるまではほんの一步です。

我々の生存はもはや穀物生産には依存していない。穀物法の歴史的な廃止で、我々は穀物から石炭へと投げ出されるのだ。これはどう見ても、国の主食産物としてやっと石炭が認知された画期を記すものだ。それは工業利益の台頭を示すものであり、これはつまり石炭利用発展の別名でしかない。*9

マルサスの粗雑なバージョンを疑問も抱かずに受け入れた世代にとって、ここからどれほどおっかない推論がもっともらしく引き出されたかは、すぐに想像がつきます。というのもジェヴォンズが指摘したように「消費される石炭の量は実際には二次元の量である。人間の数と、各人が使用する平均の量だ。概算で、人口は今世紀初めからおよそ2倍になったが、石炭消費量は8倍以上になっている。ここでも、一人あたり消費量は合成量であり、かつての石炭利用の規模に倍数をかけるか、まったく新しい利用法を見つけることで増える。確かに、ずっと鉄道の路線延長を倍増させたり、船や橋や工場を数倍増させることはできない。だが石炭の新しい利用法は、まったく限りがない性質のものなので

*7 『石炭問題』, p.149.

*8 前掲書 p.149.

*9 前掲書 p.150.

ある」*10

このあたりで読者はすでに、発端の慎重な但し書きつきの自明の理から、読者ははるか遠くへと運び去られてしまっています。ジェヴォンズは、その華やかでわくわくする用語で次のように結論します。

我々は豊かになり人口も増えているが、その元になる富の源泉の多産性は、まだ我々のそれに対する要求に伴ってまだ減少する様子はない。だからこそ、この国は現在、均一で驚くべき成長率を示している。我々は境界が未知で実感されていない新しい土地に広がる入植者のようなものだ。

だがここで、こうした成長率は間もなく、石炭の消費を総供給と同じくらいにしてしまうことを指摘せざるを得ない。石炭の採掘はますます深く困難になる中で、我々の進歩を止めてしまうような、漠然とした、だが避けがたい境界に直面することとなる。言わば、黒きインドの向こうの岸辺を見ることになるのだ。その岸辺で人口の波は砕け、そして自分自身へと退くことになる。そして入植者が、これまでにない肥沃な新しく未開拓のすばらしい内陸地を選べなくなれば、次善の場所に落ち着くしかなく、その耕作地を山肌にもまで広げると同様に、我々もかつてほど浅い新しい炭坑を見つけられず、苦勞して費用をかけていまの炭坑を深掘りするしかなくなる。

さらに、きわめて真剣なちがいがも指摘せねばならない。農場は、どれほど無理をしようと、きちんと耕作すれば、一定の作物を永遠に生産し続ける。だが炭坑では再生産がなく、いったん極度に推し進められた生産は、やがて減り、ゼロにまで落ち込む。

すると富と進歩が石炭利用の増大に依存する限り、我々は止まるだけではすまない——退行せざるを得なくなる。*11

言っておかねばなりません、ジェヴォンズはこの本を衝撃的にしようと思っていました。というのも、それが書かれている衝撃的な語り口は、自分の発想が見すごされてはならないという極度の懸念に基づくものだったからです。英国協会での彼のきわめて独創的な発表(1862年)はまったく顧みられませんでした。景気予測のための図式(同じく1862年)は、いま出回っている大量の生焼けパンの並んだ図より60年早すぎたものですが、自費出版されたのに、『タイムズ』『エコノミスト』でもほとんど言及されず、損をすることになりました。黄金についてのパンフレット*12(1863年)は、しばらく後に少し注目を集めはしましたが*13、74部しか売れませんでした*14。それでも彼はこの天職について情熱を抱いて降り、自分が何か世界に提供する価値あるものを持っているという感覚を抱き続けました。1863年4月25日に、彼は日記にこう書いています。

*10 前掲書 p.150, 151、わずかに短縮。

*11 前掲書 p.154。

*12 『黄金の価値の暴落を見極め、その社会的影響を述べる二葉の図』

*13 フォーセットがこれを英国協会への演説で引用し、ケアンズは『タイムズ』にそれについて投書した。ジェヴォンズは、『エコノミスト』(引用ママ)が「この問題を慎重な形で指摘するよう促され、私がこの件についていささか誇張していると指摘しつつ、かなり私の結論に近づいてる」と述べている。 *Letters and Journal*, p.191.

*14 「ちょうど黄金についてのパンフレットの請求書を受けとったところだが、印刷、広告その他の総費用は43ポンド、これに対して売上はたった10ポンド。今のところ74冊しか売れておらず、これはすさまじく少ない数だ」(1863年7月24日付けの手紙、*Letters and Journal*, p.188.)

さて、「黄金」についてのエッセイが出て、今のところだれもそれを誉めてくれる人がいないので、どん底に落ち込んでいるということになるんだろう。妹は別だが、もちろんそれは妹だから誉めてくれたというだけだ。私のやること、できることすべてがこんな風にしか受け入れられなかったらどうしよう？ まずは、自分自身についての確信すべては単なる妄想でしかなかったのかと疑問を抱くことになるかもしれない。第二に、最高の産物ですら世間的な商人と賞賛の息に捕らえられることはないかもしれないというのを、ついに学ぶことになるのかもしれない。最近の自分の立場について考えたことをすべて角には、無限の時間と場が必要になる。自分が多くの点でバカだとすら思ったので、自分がこれまで抱いたいろいろな考えがマヌケなものだったとわかっても、まるで驚きはしない。ようやく私は、この世界でやっていく唯一の優れた方法は友人を得て、彼らに自分の賢さの印象を植えつけることだとおおむね認めることになった。その友人たちを、自分の賢さの宣伝のために送り出し、彼らの証言をたくさんのお宝に持って、自分を望み通りのところに押し込むのだ。シェイクスピアは六十六番目のソネットを書いたとき、これをいかによく理解していたことか。

大量の手間、大金をかけ、ほとんどだれにも顧みられない作品を印刷し続けるのは無駄だというのはかなり自明に思える。人生をやり直して、別の方法で、できるときにどこかで自分をまとめなおさないと。長年のゆっくりした歩みの後でのみ、自分の考えを表明し、それを判断する能力のある人に観てもらえる可能性は出てこない。

実に多くの点で欠点だらけとはいえ、自分の最も奥底にある動機はまったく利己的なものではないと思う。そしてその利己性はどんどん減っていると信じる。ときには、自分の努力すべてが少しは役に立つと感じられさえすれば評判、富、安楽、あるいは生命そのものですらどうでもいいとさえ思う。すべて匿名で行えるなら、たぶんこれにも納得できるんだろう。でも友人たちからの糾弾と、出会うすべてが耐えがたいものばかりで、彼らの賞賛も崇拜も優しいものであるなら……別の方向に行くしかないのか。^{*15}

だから今回こそ、彼は世間が自分に耳を貸すべきだと確信していました。あらゆるショーマンシップの手管が動員されて、土星の政治経済学が呼び戻されています。アレクサンダー・マクミラン氏はものの数日で、自分に送られてきたのがベストセラーだと気がつきました^{*16}。一年以内に成功が実現しました。彼は日記にこう書いています。

1865年12月3日、日曜晩。思索家と発明家の作業は、確かに永遠に徒労で間違っただものとなるかもしれない。だがそれが真実と成功の道筋にあるとしても、それは一気に実現されるものではないし、またそれは不可能なのかもしれない。少なくとも、そういうふうには実現されなかった。ぼくが社会に対してわずかしか愛情を抱

^{*15} : *Letters and Journal*, p.181.

^{*16} 『石炭問題』はマクミランにより刊行されたが(その後のジェヴォンズの本もほとんどすべてここが版元になりました)彼の若き未知の著者に対する扱いは、その後の出版社世代すべてにとって、即応性のお手本になるべきだ。ジェヴォンズのノートへの記述は次の通り。「この問題に最初に注目したのが1861年か1862年。検討を開始したのが1864年1月。主に1864年6月と7月、ミュージアム図書館で作業。執筆はクリスマス前に完了。12月28日頃にマクミラン氏に送付。1865年1月6日に受諾。1865年4月24-30日の週に出版」*Letters and Journal*, p.203.

いていない主要な理由は、ほとんどの面でぼくの希望と気持ちが潰されたように思えるからだ。

1865年12月14日。昨日、サー・ジョン・ハーシェルから手紙が届き、ぼくが遅ればせながら彼に送った『石炭問題』についてほぼ全面的に賛成すること。長きにわたる労働と落胆は、この手紙が暮れたような満足の短い瞬間で報われるしかない——いや十分に報われたと言うべきか。ぼくにとって強烈な関心と気持による作品であるこの本が、わずかな人にしか読まれず、もっとわずかな人にしか理解されなかったとしても、ぼくがこの問題全体について最も有能な審判としてこの世で選択する、唯一無二の科学的人物の承認は得られたのだ。^{*17}

抜け目ない出版者は一部をグラッドストーン氏（訳注：当時の閣僚、後の首相）に送っていましたが、次のような返事が返ってきました。「これは莫大で、まさに果てしない問題についての見事な検討だと思います」^{*18}。そして著者に自分を訪ねてくるよう招いたのです。「だがぼくのグラッドストーン訪問は驚異的なできごとであり、容易には忘れられない——著者として偉大な大臣にその権力の絶頂と会うなんて」^{*19}。ミルは内閣での演説でこの本に注意を向けました。「その中で彼は、子孫たちのために国家債務を減らすためにもっと努力するのが今日の義務だと主張した」^{*20}。実はこの本は、減債基金を巡る論争での政治的な武器として、実に好都合なときにやってきたのでした。ジェヴォンズはこう書いています：

増大する人口が、絶えず満たすべき空虚を求める。歳入は増えるが課税は減る。利潤と利子が上がって資本が蓄積される。これはこれまで他のどんな国も享受したことがない幸せな条件の連合であり、どんな国もそれが長続きすると期待はできないのだ。^{*21}

したがって、私たちが自然資本を元に暮らしているという話を持ち出して、それだから死荷重となっている負債を急激に減らすのはいまが適切なのだというのは簡単だったわけです。しかしちょっと考えて見れば、もし石炭需要が無限に幾何学的な比率で増え続けるのであれば、将来の国民所得は現在の所得よりあまりに大きくなるから、死荷重の債務など小銭になってしまうということがわかったはずです。実際、ジェヴォンズの脅しには冷静な批判に耐えられるものはあまりありません。彼の結論は、どうも他の多くの人が持っているようですが、彼の中では異様に強かった心理的性向に影響されていたのではないかと私はにらんでいます。それはある種のため込み本能で、それがリソース枯渇という発想に直面すると、すぐに焦って喚起されてしまうのです。H. S. ジェヴォンズ氏は私に、これを示すおもしろい話を教えてくれました。ジェヴォンズは、適切な材料の供給に対して需要が莫大だからということで、紙不足が近づいているという似たような発想を抱いていたのです（そしてここでも彼は、技術手法の進歩を適切に考慮しませんでした）。さらに彼はその恐怖に基づいて行動を起こし、原稿用紙だけでなく、薄い茶色の包装紙を大量にためこんだので、彼の死後50年たった今日ですら、子供たちは彼が残した在庫を使い

^{*17} 前掲書、p.215.

^{*18} 前掲書、p.219.

^{*19} 前掲書、p.226.

^{*20} 前掲書、p.222.

^{*21} 『石炭問題』, p.179.

切っていないそうなのです。彼の購入は、自分の個人的利用目的よりは投機目的だったようです。というのもご当人のメモはもっぱら、本来ならゴミ箱送りにするのが適切な、古い封筒の裏や古い反古紙に書かれていたからです*22。

III

これでジェヴォンズの長い一連の商業循環と価格変動に関する帰納研究に目を向けねばなりません。この発端は論文「周期的商業変動の研究、図5葉」*23でした。この12ページにも満たない短い論文は、経済科学の新段階の幕開けとなるものです。ジェヴォンズ以前にも、季節変動や、よい景気と悪い景気の交互の到来に気がついた人はいました。経済統計をグラフ化したのも、ジェヴォンズが最初というわけではありません。実際、彼の図の一部はプレイフェアの図とかなり似ているし、ジェヴォンズはプレイフェアの研究を知っていたようです*24。しかしジェヴォンズは、経済統計を新しい目的のためにまとめて整理し、それを新しい形で考察しました。彼の手法の重要性を表現するなら、彼は現実世界の複雑な経済的事実に対し、文字通りおよび比喩的に、気象学者としてアプローチしたということになります。それ以前の彼の論文はほとんど気象学に関するもので*25、彼は経済学との自分の関わりを次の宣言で始めているのです。

すると、あらゆる商業的な変動は、他の複雑な科学、特に気象学や地磁気学などでお馴染みのものと同様の科学手法にしたがって検討されることが必要と思われる。*26

これから見るように、ジェヴォンズは純粹理論の単純化した抽象分野でもまったく違和感を抱きませんでした。それでも、扱うべき材料が変化するややこしいもので、それを並べて、比較して、分析して共通性や傾向を発見しないと答を吐き出してくれないという事実は見失ってはいません。ジェヴォンズは、自然科学者の観察眼と、肥沃で統制された想像力でもって自分の材料を検討する、初の理論経済学者でした。彼は何時間もかけてグラフをまとめ、それをプロットし、選り分け、解剖学者のスライドのように、繊細な淡い色でそれをきれいに彩色し、常にそれを中止して、あれこれ眺めてその秘密を発見しようとしました。今にして思えば、1862年からの50年間で、帰納的経済学の黒魔術で彼が得た追随者や模倣者たちが実に少なかったのには驚かされます。しかし今日の彼は、まちがいに無く無数の子孫を持っています。とはいえ、経済統計の流れる砂をきちんと読めるだけの科学的才能は、いまでも当時より大して一般的にはなっておりませんが。

ジェヴォンズは一義的には、**季節変動の発見と排除**に主に関心がありました。実際、英国協会に対する彼の初期の発表論文は、**ビジネスサイクル**についてのものだと示唆して

*22 グレゴリー教授は最近、エドウィン・キャンナンに似たような傾向があることを記録している。

*23 *Investigations in Currency and Finance* に収録。

*24 以下の p.272 の脚注で引用した下りでジェヴォンズが言及している「交易の図」というのは、まちがいに無くプレイフェアが1786年に刊行した『商業と政治アトラス』のことだ。

*25 彼はウォー『オーストラリア年鑑』1859年版に「オーストラリアとニュージーランドの気候に関するデータ」を掲載している。これは長さ50ページ以上の論文で、その結語が最も適切なまとめになっている。「私の狙いは、手には入りやすい形で、できる限り正確な数値データを提供することであり、さらに風、雨、川、洪水、国の地理的な特徴、地球のこの部分の気象学的な状況についての一般情報をまとめ、どんな驚くべき問題を解決する必要がある、因果関係のどんなおもしろいつながりが最終的にたどって証明できそうかを示すことだ」(*Letters and Journal*, p.112.)

*26 前掲書, p.4.

いる点で、誤解を招くものです。彼は、ビジネスマンの念頭には常に書かれざる季節変動の知識があったのに、それに対する科学的な研究は二つしか知らないと言います——銀行紙幣流通についてのギルバート論文と、クリアリングハウスの統計についてのバベッジ論文で、どちらも『統計ジャーナル』に、それぞれ1854年と1856年に発表されたものです。そして彼は、割引率、倒産率、コンソル債価格や小麦価格の季節変動の研究に進みます。もっと大きい変動にはまだ触れておらず、気象学的な関心はまだ太陽黒点には向かっていません。それでも、彼の1844年以來の多くの商品月次価格に関する研究が、ある考えをもたらしました。「1853年頃の巨大でほとんど全般的な物価上昇にはとても驚いたし、何か価値基準が変わったのではないかと思ったのだった」*27。結果として翌年(1863)には彼のパンフレット『黄金価値の大幅な下落』が循環運動ではなく長期的な動きに目を向けることになるのでした。

この無名の若者が貯金をはたいて、自分の考えを印刷したときのこの問題についての状況は、とんでもなく後進的でした。カリフォルニアとオーストラリアで黄金が発見されたことで、シュヴァリエは(1859年に)黄金の価値が大きく下がると予測しました。しかし黄金の価値という用語の意味合いと、この問題適切な計測手法は、深い不明瞭さの中にあつたのです。ニューマーチ(1857年)とマカロック(1858年)は、黄金の購買力がまったく下がっていないのではと疑問視し、その後『統計ジャーナル』(1859、1860、1861年)でニューマーチは判断を保留しています。ジェヴォンズは価格指数の問題を実質的にゼロから解決しなくてはなりません*28。そして、この短いパンフレットで、彼はそれまでの著者たち全員をあわせたのと同じだけの進歩を遂げたといっても、ほとんど誇張とは言えません。彼は論理的、弁証法的な問題を検討し、重量計測の問題、算術平均か幾何平均か、異常な動きを示したものを排除すべきか、そして全般に、どの種類の商品が代表的として考えられるかについて検討しています。そして1845年から1862年の各年について、39種類の商品の平均月次価格に基づいて、指数の時系列データをまとめます。そしてさらに37種類のマイナーな商品を検討することで、その結果を確認して補うのです。最終的な結論は以下のように述べられています。

黄金の価値低下という事実を最大限の自信を持って主張はするが、その数値的な量も同じくらいの自信を持って提示する。私が得た低下の最低量は9%だ。そして読者のみなさんがこれを受け容れるなら、それで満足だ。同時に、私自身の意見だと、下落はむしろ15%に誓い。それ以上かもしれない。だが数値推計が、わずかな確率以上のものを持つと適切に述べるためには、長年が経過する必要がある。*29

最後にジェヴォンズは、お金の価値がもたらす社会的影響を検討し、価値低下で所得が低下するものから順に分類し、それが国の予算と国の負債に与える影響を推計し、「それに対する療法が必要か可能か」「価値の基準としての黄金は廃止されるべきか?」「新発見の黄金は世界の富に貢献したのか?」という問題を検討しました。そしてこう結論したのです。

私はマカロックに同意せざるを得ない。個別の困難事例(そんなものがあれば)さ

*27 *Investigations*, p.16.

*28 ジェヴォンズではいつものことだが、彼は先人たちの研究を見つけて記録するのに大いに興味を示した。

*29 前掲書, p.17.}

え見なければ、黄金の価値の下落じゃ、きわめて強力に有益な影響を持つはずだし、すでにそれが現れている。それは他のどんなものよりも強力に、古い債務や習慣の拘束から国を解き放ってくれる。それは富を作り、獲得している人々に対しては高まる報酬を与えてくれる。社会の活発で技能の高い階級を奮い立たせて新たに頑張らせ、長いこと返済負担の重荷に苦しんでいる人を債務から解放してやったのと同じように、こうしたすべては、何ものにも替えがたい国民的な善意を損なうことなしに実施できるのだ。^{*30}

材料についてのしっかりした扱いとまちがいのない手練をもって、頭脳の絶え間ない生産性と独創性を大量の統計に適用し、しかも作業を楽にしてくれるような先例も、労働節約装置もなしに、孤立無援の個人が道を切りひらくためのすさまじい労働を費やしたこのパンフレットは、この問題についての歴史において比肩するものはありません。そこに含まれる無数の図表もまた、統計記述の歴史においてきわめて興味深いものです。

ちょうどジェヴォンズの季節変動研究が物価の長期変動の検出につながったように、長期変動を分析する作業は、その同じ時期の周期的運動の性質も明るみに出しました。後者の分析と排除は、実際彼の議論の多い目的において重要な役割を果たしました。というのも黄金の長期的な価値下落について存在していた疑念は、そこに景気循環により物価変動が重なっていたから登場していたのです。基準となる黄金の長期価値変動を否定した人々は、目に見える動きを好景気と不景気のお馴染みの交互発生のせいだとしていました。したがってジェヴォンズは、後者の影響を取りのぞこうとしなければならず、これが彼を偶然にも、景気循環の日付と計測を新たな精度でもって行うよう仕向けたのでした。これは後に彼を有名な結論へと導きます。この時点では、彼の景気循環の根底にある原因についての彼の観察は、単なる傍論とはいえ、後に彼が普及させたものよりも私の見立てでは、深いところを突いていると述べるにとどめましょう。彼はそれを次のようにまとめています。

十年ほどで一巡するあの大きな商業変動は、交易の進展を多様化させるもので、商業的な問題に注目する者ならだれでもお馴染みだ。こうした商業的な潮の満ち干の遠い原因は、あまりきちんと見極められていない。それはどうやら、**永続的または将来の投資に向けられた資本が、すぐに回収されるべく一時的に投資されるだけの資本に対して持つ比率の変化にあるらしい。**(強調ママ)

国の資本のある決まった割合が毎年、こうした長期投資のために取っておかれたら、それが生み出せる資本収益は、資本吸収と同じくらい一定のものとなる。だが実際にはそうはなっていない。こうした巨額で永続的な作業は特定の時期に激増するという奇妙な性質を持つ。^{*31}

ジェヴォンズはこの結論を裏付けるのに、イギリスで生産されたレンガの量、材木輸入量、鉄の価格の37年にわたる年次変動を示すグラフを示しました——ジェヴォンズの人生のこの時期における、帰納的な好奇心と彼の強烈な生産力の見事な例です(しかも単なる余談のためなのです)^{*32}。

^{*30} *Investigations in Currency and Finance*, p.96.

^{*31} 前掲書, p.28.

^{*32} この余談はもともと、彼が1861年に取り組んでいた『統計年鑑』の一部だった。兄への手紙(1861年4

この場でお話をしているので、この時点でジェヴォンズは、われらが学会への会員応募する用意ができたと考えたことを述べておくのがふさわしいでしょう。1864年6月4日の日記にはこうあります。

統計学会のフェローとして推薦を受け、選出されようと思っている。というのも FSS の肩書きの使用、図書室の利用、他の統計学者との知己の可能性は、大いに有益なものとなるからだ。^{*33}

次の貢献『1782年以來の通貨の価格と価値の変動について』で、彼はさらに指数の理論を發達させて、自分の時系列データを18世紀までさかのぼらせるというすさまじい努力を続けた結果であり、1865年5月に統計学会の前で口頭發表されました。そして翌年には、学会の前でその広範な研究『お金の市場におけるひんぱんな秋期の圧力とイングラント銀行の行動』を口頭發表しました。この論文は学会との密接な関係の皮切りで、おかげでついに1877年には学会書記となり、評議会の理事にもなったのです。この頃にはロンドン住まいとなり、しばしば学会会合にも参加しました。1880年には書記を辞任して副会長に指名されています。

1862年から1866年までの四年間は、精神の強烈な活動の時期でした^{*34}。ジェヴォンズはオーストラリア時代の貯金で暮らしていました。役職もなく、孤独と失敗の気分を抱いていたのです。すでに名声が確立した1866年初期ですら、日記を見ると不安とうつに苦しんでいたようです。彼はずっとそうでした。1866年5月には、マンチェスターのオーウェンズ大学で論理精神道徳哲学教授に指名され、また政治経済学コブデン教授にも指名されました。日記に彼はこう書きます。「これで大学から年に300ポンドほどもらえる。そして自分の貯金からは108ポンド近く。これだけあれば、できないことなどあるか？」が、いまや考えて著述する以外にやるべきことがたくさんでできました。そして1867年には結婚。大きな統計的探究を試みるまでには、さらに十年が過ぎる必要がありました^{*35}。

ジェヴォンズが、景気循環の期間の説明として太陽の変動を持ち出す理論を發達させたのは、キャリアのかなり後になってからだというのは、よく忘れられています。この理論は彼の名前にいつまでもついてまわるものとなっています。これは1875年と1878年

月7日)に彼はこう書いている。「この作業の主な関心は、1793年、1815年、1826年、1839年、1847年、1857年などの商業的な大混乱に光をあてることです。その原因が概ね明らかになるでしょう。私はパニックが接近しているという最高の指標は、議会の法案数、特許件数、生産されるレンガの数だということを発見しました。そのパニックは、一般には目先では利潤を挙げない作業への大量の労働投資から生じます。そうした作業とは、機械、運河、鉄道などです。生産されたレンガ量の曲線がこれを実に見事に示すのは、まさにおもしろいものです。レンガとモルタルは、産物の中で最も耐久性のあるものだからです。ほとんどの統計はもちろん一般に知られたものですが、これほどきちんと組み合わせたり、図として示されたりすることはありませんでした。特許の統計や、文献に関する一部統計は、かなり新しいものとなります。曲線や直線で数字を示すやり方は、もちろんノアの洪水以来ずっと行われてきたことではありません。実際、前世紀末には、『交易の図』の本が刊行され、原理としては私のものとまったく同じです。でも手法としての統計はあまり使われず、その後まったく使われなくなってしまいました。それは私が思うに、地理学で地図が使われるのと同じくらい利用されるべきなのです」(Letters and Journal. pp.157, 158.)

^{*33} Letters and Journal, p.199.

^{*34} ここで述べたもの以外に、1863年には『純粹論理、あるいは量とは別の質の論理、および仕組みと論理学と数学の関係についての考察』が發表されている。

^{*35} 『イギリスの金貨鑄造の条件について、國際通貨の問題を考慮して』は1868年に統計学会で口頭發表されたもので、二次的な重要性にとどまるが、獨創的だし労作だ。

の英国協会の前で口頭発表された論文二編として発表されました。片方は短くて、単にこれが検討すべき問題だと示唆するにとどまります。1801年にサー・ウィリアム・ハーシェルが「穀物価格と太陽黒点の十年周期が示す日照力との関係を突き止めようとした」*36。1861年には R. C. キャリントンが「太陽に関する標準研究で、穀物価格と太陽黒点曲線を、前世紀と今世紀の一部について比較した図を示した」*37。この検討の結果はどちらも否定的でした。しかしオーウェンズ大学のジェヴォンズの同僚アーサー・シャスターが「西ヨーロッパの豊作の年は、11年におおむね近い感覚で生じ、これは主要な太陽黒点周期の平均長さだ」と指摘しました*38。ソロルド・ロジャース『英国農業と価格の歴史』は1866年から刊行され、ジェヴォンズに長期の小麦価格を分析する材料を提供しました。ジェヴォンズ自身の生涯の経済危機は、10年から11年感覚で起きています。1825, 1836-39, 1847, 1857, 1866の各年です。この二つにはつながりがあるのでは？ ジェヴォンズは次のように結論しています。「この種の憶測は、いささかとんでもなく、かなり無理があるように思えることは承知している。だが金融崩壊は、過去50年間にこうした規則性に近い形で過去50年にわたり起きており、これではなければ何か別の説明が必要だ」*39。それでも彼は間もなく、ただの賢い思いつきでしかないものを公表したことを後悔した。「その後の検討で、自分の数字はそこから引きだした結論を支持しないと納得したので、論文を公表から撤回した」*40

でもウイルスは彼の体内に入り込んでしまいました。偶然に深くのめりこんでしまった人物——この性格にはありがちなことですが、その研究によってかいた恥をそうそう簡単に覆したりはしないのです。1878年にジェヴォンズは英国協会で発表した二本目の論文でこの問題に戻り、『ネイチャー』に投稿した論文でこの議論が蒸し返されました。その弁明は、新しく三つの発見があったというものです。まず、10-11年周期の商業危機の歴史が18世紀始まり近くまで遡れたということ。二番目に、天文学者の友人たちから、太陽周期がかつて思っていたような11.1年ではなく、10.45年だと助言されたことで、これは彼の商業危機の時系列データにずっとよくフィットしました。三番目に、太陽黒点が事業に与える影響の仲介者として、いまや価格統計が否定的な結果をもたらすヨーロッパの収穫を捨てて、インドの収穫を使ったこと。これはインドの農民たちが輸入材を買うための購買力のマージン拡大を通じて、ヨーロッパの繁栄として伝わるのだと言います*41。

ジェヴォンズの議論はどう見ても、いつもの彼ほどは明確ではありません。商業危機が10½年で起きてきたという見方についてはかなりの証拠を出します。天文学者たちは、太陽周期が10½ほどだと言いました。この彼の言う「美しい偶然の一致」が、因果的なつながりの異様に強い確信を生み出したのです。『ネイチャー』論文に彼は書きます。「私がこれほど本気だったことはなかったと、是非とも強調しておきたい。そしていくつか慎重な検討の結果、私はこれらの十年ごとの危機が、確かに似た周期の気象学的変動に依存していると完全に確信している」*42。しかし彼は、不作の厳密な日付と商業危機の日付との

*36 *Investigations*, p.206.

*37 前掲書, p.195.

*38 前掲書, p.195.

*39 前掲書, p.204.

*40 前掲書, p.207. この論文は死後に *Investigations in Currency and Finance* に再録された。

*41 J. C. オラレンショー氏はマンチェスター統計学会への当初で1869年に、「ランカシャーのよい景気秘密は、インドでの米などの穀物が安いことだ」と説明している(前掲書, p.236)。

*42 前掲書, p.204.

関係について、あまりに注意を欠いています。これは中間のつながりをたどるにあたり、まっ先に必要なステップです。1875年論文で、彼は自分の証拠がヨーロッパの証拠に依存すると信じていたとき、彼はそのつながりを豊作のもたらす楽観精神に見出しました：

ジョン・ミルズ氏は、『マンチェスター統計学会論文集』(1867-68)の信用サイクルに関するきわめて優れた論文で、こうした周期的な崩壊が実は精神的な性質のものであり、落胆、希望、興奮、失望、パニックの変化に依存するのだと示した^{*43}。(中略) 商業信用と事業が基本的に精神的な性質のものだとすると、ある時期に希望をかきたて、別のときには失望と落胆をかきたてる外部の事象があるはずではないだろうか？ イギリス国の商業階級は、その現在の構成では太陽黒点の周期にほぼ対応した、完全な振動を行うような、精神その他の条件を持つような身体を構成するのかもしれない。そうした条件においては、食品価格の比較的わずかな変動が、似たような形で、振動の適切な地点で繰り返されれば、それだけで激しい影響が生じるに10分なものとなる。^{*44}

しかし1878年に彼はこの理論を「いささか非現実的な仮説」^{*45}と呼び、すべてをインドなどの周期的な作柄変化の結果として生じる、外国貿易の十年変動に依存するようにしました。残念ながらこれは日付上の困難をもたらすのですが、それを彼は驚くほどあっさり片づけてしまいます：

一つ登場する難点は、イギリスの商業危機はデリーの高価格と同時か、ヘタをするよりそれより先に起こるということだ。原因が結果より先に生じることはないし、商業的な話では、インドの悪い天候の影響がここで感じられるようになるまでには、一、二年の間隔が空くはずだ。しかし現実には、ベンガルの期がはマドラスでの似たような出来事に続いて起こる。^{*46}

このように、帰納的な議論の詳細は明らかにいい加減です。しかし、一般的に言って、各種の作物や国の平均で見たとき、世界が現在の消費のためにある収穫から別の収穫へと持ち越された在庫を食い潰す年が、太陽周期にしたがって、豊作が持ち越される在庫を増やす年と交互に起こるのだということが示されれば、ジェヴォンズは自分の理論を考えられる最も大ざっぱな根拠に基づき、事業サイクルが投資の変動に依存するのだという、忘れられた1863年の理論と結びつけることもできたのです。なぜなら、大地の産物が当期消費を上回る分による総在庫に対する投資とマイナス投資の入れ替わりは、耐久財の新規投資率の変動について彼が以前に指摘したのときわめて似た結果をもたらすこともできたかもしれないのです。

帰納的研究に基づいて彼が構築した仮説において、ジェヴォンズがまちがっていたり性急だったりしたかどうかはさておき、論理学者で演繹的な経済学者だった人物にとって、こうした形で対象にアプローチするというのは、革命的な変化でした。こうした手法を使うことで、ジェヴォンズは経済学を、先験的な道徳科学から、しっかりした経験の基盤に

^{*43} すでに1869年に(マンチェスター統計学会への入会演説で)ジェヴォンズはミルズの事業サイクル理論を採用している。

^{*44} 前掲書, pp.203-4.

^{*45} 前掲書, p.226.

^{*46} 前掲書, pp.239-40.

基づく自然科学へと、長足に進歩させたのです。しかし経済学の材料は、複雑であると同時に揺れ動いています。ジェヴォンズは、とにかく難しい技芸を追求していたし、彼ほどの技能を達成した人物は、ほとんど空前絶後なのでした。

太陽黒点をめぐる論文群は、『黄金価値の大幅な下落』のような業績や天才ぶりとは同じ水準に並べられるものではありません。彼の時代以降、彼の結論にとっては残念なことです。天文学者は平均の太陽周期が 11.125 年だという見解に逆戻りし^{*47}、その一方で景気循環は 10-11 年ではなく、7-8 年周期とされています。1909 年にはこの問題は彼の息子 H・S・ジェヴォンズ教授により巧妙な方法で再検討されました^{*48}。彼は、収穫統計を解釈すると $3\frac{1}{2}$ 年と解釈できて、これを二つ組み合わせるか、三つ組み合わせるか、7 年周期と 10 年周期が出てきた、というのです。戦後に、サー・ウィリアム・ベヴァリッジの収穫統計に関するずっと入念な研究がこれをさらに深め、複雑な 15.2 年周期という結論を出しました。そしてそれを彼はさらにサブ周期に分割したのです^{*49}。現在では、収穫周期が太陽周期やもっと複雑な気象学現象と結びついているとわかったとしても、これが景気循環の完全な説明には成り得ないと一般に合意されています。この理論は、あまりに厳密で確定的な形で述べられていることにより歪められていました。それでも、気象学的な現象が収穫の変動に影響し、収穫の変動が景気循環に一役買うという発想は（これは今日よりは当時のほうが顕著だったとはいえ）、軽々しく一蹴すべきものではありません。

IV

一方、ジェヴォンズは同じ独創性を持って、単純化した抽象的な前提を持つ演繹経済学の研究にも貢献していました。彼の思索は、1858-9 年に 22 歳か 23 歳だった頃のオーストラリアでの孤独な思索期にまで遡れます^{*50}。1860 年までに、ユニバーシティカレッジで研究していた頃、彼の頭の中では決定的な理論が形成されつつありました。1860 年 6 月 1 日に彼は兄ハーバートにこう書いています：

先学期にぼくは政治経済学の勉強をかなりしました。過去数ヶ月で、ぼくは**経済学の真の理論**だとまちがいに感じず打ち出したのです。あまりに一貫性を持ち整合しているの、いまやこの問題を扱った他の本を読むと軽蔑せざるを得ません。理論の原理は完全に数学的なものですが、同時に計算のデータがあまりにややこしく、現時点では絶望的であることも示します。それでも数学原理から、政治経済学者たちがこれまで導き出した主要な法則がすべて得られるのです。一連の定義、公理、理論として、各種の幾何学問題のように厳密かつ相互につながった形で並んで得られます。最も重要な公理の一つは、人間が消費するために保有するあらゆる商品、たとえば一般の食べ物の量が増えると、その人が使った最後の部分から

^{*47} これがいまや平均周期と考えられているものの、決して均一ではない。そしてジェヴォンズが特に検討した限られた時期を見ると、平均周期は実際に、彼が考えた通り 10.45 年ほどだった。

^{*48} *The Sun's Heat and Trade Activity*, さらに “The Causes of Fluctuations of Industrial Activity and the Price level,” *Statistical Journal* (1933) vol. XCVI, pp.545-605 で補われている。

^{*49} 1920 年と 1921 年 *Economic Journal* と 1922 年 *Statistical Journal* に発表。統計学会では、ユール氏らによって、(一見して見える) 15.2 年周期というさらなる分析について強い反対が表明された。

^{*50} 1862 年 12 月に彼は日記にこう書いている。「当時(つまりシドニーで)自分のやったことがとても巧妙だと思ったのですが、いまやバカげて思えるし、経済の理論についての自分の最初の活動は、次第に目の前に開けてきた理論以外は、変に思えます」

得る効用または便益はだんだん下がる、というものです。食事の始まりと終わりとして楽しみが減るのがその一例です。そして平均では、雇用の比率はなにか商品の量に対する連続的な数学関数になると考えます。この効用の法則は、実はもっと複雑な形で、需用と供給の法則と称して常に想定されてきたものです。しかしこうしてひとたび単純な形で記述すると、そこからこの問題のすべてが開けるのです。結論のほとんどはもちろん、古いものを一貫性ある形で述べ直したものです。しかし資本の定義と資本利率の法則は、ぼくが見た限り、まったく新しいものです。だれか他の人が思いつくまでこれを寝かせておくつもりなどないので、来春には刊行するつもりです。^{*51}

しかしその理論の概略が発表されるまでには二年以上がたちました。ジェヴォンズは**政治経済学の一般数学理論の報せ**と題した短い論文を、英国協会のF部会に送り、ケンブリッジでの1862年會合で自分の不在中に発表させました。ここではマーシャルが、学部一年生でした。その価値についてジェヴォンズはまるで臆することはなく、その影響については大きな希望を持ちつつも、不安に思っていました。1862年9月には兄にこう書き送っています。:

あの論文が、あそこで発表される他の論文をすべてあわせたのと同じくらいの価値があるのは自分で十分にわかっているが、それがどう受け止められるかはまったくわからない——そもそも読まれるのか、あるいはまったくナンセンスと思われないかどうか。(中略) 自分の理論が、友人たちや世間一般にどんな影響を持つか、とても興味がある。砲兵が自分の砲弾や銃弾の軌跡を見るような思いでそれを見守ろう、その影響が意図通りかをね。^{*52}

論文はまったく注目されず、印刷すらされませんでした。英国協会書記長は彼にこう書いています。「これほどむずかしい問題を確立するための、もっと適した時期がやってくるまでは上述の理論のさらなる説明と刊行は差し控える」。4年後にそれは、『統計ジャーナル』(1866年6月)に5ページほどを割いて発表されます^{*53}。現代の読者には、ジェヴォンズの27段落は完全に明晰で、完全な理論の要約またはシラバスでしかありません。しかしその後の彼のアイデアの本質はすべてそこにあります。ヘドニック解析により、消費の効用と労働の負の効用とを均衡させることができます。商品価格はその総効用で決まるのではなく、その消費の限界効用あるいはジェヴォンズの言う「そのモノの最後の増分または無限小の供給と、それがもたらす喜びとの比率である、効用の係数」に、その生産の負の効用、つまり「得られる産物の増分が喜ばしい以上に、労働のさらなる増分が苦痛になるまで、強度の面でも期間の面でも労働が実施される」^{*54}をバランスさせるものなのです。「資本の量は、楽しみを遅らせることによる効用の量で推計される。(中略) 労働は何らかの資本の助けを得ると想定されねばならないので、利率は常に、新しい生産物の増分が、それを生産するのに使った資本増分に対して持つ比率により決定される」^{*55}。結論において、古典派から彼がどれほど離脱したかが示されます。「資本の利率は、労働の絶対

^{*51} *Letters and Journal*, p.151.

^{*52} 前掲書, p.169.

^{*53} ジェヴォンズ *Theory of Political Economy*, 第四版 H. S. Jevons 編 (1911) に(補遺として)再録。

^{*54} *Statistical Journal* (1866), vol. XXIX, pp.283,284.

^{*55} 前掲書, p.286.

収益とは何の関係もなく、資本の最後の増分が可能にする収益の増加だけに関係する」*56

さらに五年がたって、初読以来まったく注目を集めなかったこの概要が完全な装いをまとって、『政治経済学の理論』として1871年10月に刊行されました。H. S. ジェヴォンズ教授の記録*57では「父の手書きメモ*58によると、もしフリーミング・ジェンキン教授の論文が1868年と1870年に登場していなければ、1871年よりかなり遅れていた可能性もある、とのこと」。本は十年近く前の概要を、順番でも内容の面でもきわめて忠実になぞっています。しかしながらこれは、概要では単なる公約でしかなかった「この学問の主要問題を数学的な形に還元する」という約束を、グラフの導入と、議論を数式の形で、微分解析の表記を多用することで述べることにより実現しているのです。

ジェヴォンズ『政治経済学の理論』とそれがこの学問の歴史に占める位置はあまりに有名で、その中身を改めて説明する暇をかけるまでもないでしょう。それは1871年には、1862年ほどの独自の独創性は持っていませんでした。というのもクルノー、ゴッセン、デュプイ、フォン＝チューネンなどの先人は置いておくとしても、経済学者数名、特にワルラスとマーシャルが、1871年までに x だの y だの、でっかいデルタだの小さな d だのを使った方程式を書き殴っていたからです。それでもジェヴォンズの理論は、主観価値評価に基づいた価値理論、限界原理と、いまやこの分野でお馴染みの代数やグラフの手法の完成形を提示した初の論説でした。経済学の初の現代的な本として、それはこの分野に新たに取り組む明晰な精神すべてにとり、突出して魅力的なものでした。単純、明晰、淀みなく、マーシャルが毛糸を編むような書き方なのに対して、石を刻むような書きぶり。いい加減にこの本を開いて、それがどれほどの名文かを思い出しただくため一節を読んでみましょう。

事実を言うなら、いったん費やされた労働は、どんな物体に対してであれ、その将来の価値に一切影響しない。消えて永遠に失われてしまう。商業においては、過ぎたるは及ばざるがごとし。そしてみんな、各瞬間毎にまっさらで始め、将来の効用を念頭に物事の価値を判断している。生産は本質的に見込みに基づくものであり、懐古的ではない。そしてどんな事業の結果も、その実施者の当初の意図とまったく一致するなどということはめったにない。

だが労働は決して価値の原因にはならないが、それを決定づける状況の相当部分を占めるものではあり、それは次のような形による：価値は最終的な効用の水準だけに依存する。この効用の水準はどのように変えられるだろうか？——消費するためのその商品の多少によって。そしてどうやってその多少を変えようか？——供給を得るために使う労働を増やしたり減らしたりすることによって。この見方によると、つまり、労働と価値の間には二つの段階がある。労働は供給に影響し、供給は

*56 前掲書, p.287.

*57 In editing the fourth edition of *The Theory*, p.lvii.

*58 このメモは(解説できた範囲では——いつもながら古い封筒の裏に書かれている)次のように書かれている：「フリーミング・ジェンキン教授のこれや他の一部論文について、誤解を避けるため以下の説明を加えるほうが望ましいと思われる。私の理論はもともと英協会で1862年に口頭発表され「統計ジャーナル」に1867年(ママ)に掲載された。1868年3月にジェンキン教授は英クォーターリーレビュー(ママ)に論文を書いて、需要供給の法則を数学言語で述べ直した(?)。彼は親切にも論文を送ってくれて意見を求めた。その返答で私は上述の論文を送り、理論の正しさをめぐる文通が始まって、その中で両者により曲線が使われるようになった。1870年にジェンキン教授の「図解(ママ)」が登場したが私のそれまで(?)に何の言及もない。一部はこの結果として私は理論を1871年に執筆出版することになった。1872年にフリーミング・ジェンキン教授は王学会 Edin(?) 論集に発表」。

効用の水準に影響し、それが価値または交換比率を決める。このきわめて重要な一連の関係について、まったく誤解の余地がないようにするため、それを箇条書きで述べ直そう。以下の通りだ:

- 生産費用が供給を決める。
- 供給が効用の最終的な水準を決める。
- 最終的な雇用の水準が価値を決める。^{*59}

近年ではジェヴォンズは、資本の理論について大いに賞賛されています。つまり資本の量と、それが生産を生み出すために雇用されねばならない期間という二つのちがった側面を強調することで、オーストリア学派を先取りしていたというのです。しかし彼の扱いは全体として(ロビンズ教授が指摘したとおり)「賃金資金」の思想の残響によっていささか価値が下がっています。ジェヴォンズによると、資本は「どんな種類や分類であれ仕事にたずさわる労働者を支えるために必要な商品の総量として存在するにすぎない」^{*60}。彼はこう言いたがります。「工場やドックや鉄道や船は**資本そのもの**ではなく、**その事業に投入された資本の量をあらわすもの**だ」「したがって、鉄道が**固定資本そのもの**だとは言えない。むしろ**鉄道に資本が固定化されている**と言おう。資本は鉄道ではなく、その鉄道を作った人の食べ物なのだ」^{*61}。その一方で、資本が供給側では見送った現在の効用で計測され、需要側ではそこから期待される将来の効用の割引価値で計測されると着想している見事な一節もあります。

この本が即座の成功をまったく収めなかったというのは、いささか驚くべきことです^{*62}。数少ないまともな書評は老世代代表のケアンズと、若い世代を代表するアルフレッド・マーシャルのもので、マーシャルの書評は彼の文が印刷された初の間でした。ケアンズは数学がわからないので本のほとんどは理解不能だと宣言しましたが、それでも平気で、この本が完全にまちがっていると結論づけました。マーシャルの書評は鈍重でイヤイヤながらのものでした。「この本をかなり読み進んでも、内容的に目新しい重要な命題は何も見つからないだろう」^{*63}。「本の主な価値は、その大きな定理にあるのではなく、多くの些末な点の独創的な扱い、その示唆的な見解と慎重なアナロジーにある」^{*64}。そして実に彼らしくこう結論します。「ここにある本は、数学を削除しグラフだけ残したら改善されるであろう」^{*65}。ジェヴォンズは、ある文通相手に次のようにコメントを送っています。「確かに1872年4月1日の『アカデミー』に書評が出ましたが、『サタデーレビュー』のものよりは公平ながら、あなたをご覧になる価値のある批判は含まれておりませんでした」^{*66}。1874年になってもジェヴォンズはこう書いていました。

私は自分の見方が有名なイギリスの経済学者のだれ一人にも受け容れられたとは知りませんが、若手の数学者や経済学者がこの分野に入ってきて、それをまったくくちがう扱いをしております。そうした中には、あの有名な自然学者の息子ジョージ・

^{*59} *Theory of Political Economy*, p.164.

^{*60} *Theory of Political Economy* (4th ed.) p.223.

^{*61} 前掲書, p.243.

^{*62} 1000部売するのに7年かかっている。

^{*63} *Memorials of Alfred Marshall*, p.94.

^{*64} 前掲書, p.95.

^{*65} 前掲書, p.99.

^{*66} *Letters and Journal*, p.309.

ダーウィン氏がおります。とても優れた数学者で、鋭敏な経済学者です。^{*67}

ジェヴォンズとマーシャルの関係はちょっとおもしろいものです。20年近く後、ジェヴォンズの死後7年たって、『経済学原理』でのジェヴォンズへの言及はいまだにいささか不承不承な感じです^{*68}。マーシャルは、自分がジェヴォンズに何か負っているのを認めるのをとんでもなく嫌がりました。『アカデミー』書評を書いたのがマーシャルだとジェヴォンズが知っていたという証拠はありません。彼は道徳科学学士試験を受ける1847年までケンブリッジを訪れたことがありませんでした。マーシャル夫人によると「ジェヴォンズに会った唯一のときは、1874年に彼が私の試験管だったときで、それがケネディ博士の次の戯れ歌になりました。

「そいつは六位や七位だったか
おおフォックスウェル、ガーディナー、ピアソン、ジェヴォンズよ」^{*69}

彼はもちろんフォックスウェル教授とは親しく、しょっちゅう文通しており、1880年未頃にもケンブリッジに彼を訪ねています。1875年と1879年にジェヴォンズからフォックスウェル教授に宛てた手紙で、フォックスウェル教授がどうやらマーシャルの主張を紹介していたらしき会話の名残が見られます。1875年に彼はこう書いています。

私の論文についてのお手紙に大いに興味を抱いております。ケンブリッジでの哲学問題について、現在主流の発想について、私がこれまで知りようがなかったことがいろいろ書かれておりました。マーシャルがそんなに昔から政治経済学の定量理論の考えを抱いていたとは知りませんでしたし、この問題について彼が何かを発表するのにこれほどかかったというのは残念なことです。もちろん、あなたも彼も、私が数学を適応した特別なやり方に反対するのはご自由です。私も、別の方向での他の試みを見たいものです。しかし私は、自分の高揚の概念こそが正しいもので、数学理論の基盤を敷く唯一のしっかりした方法なのだという見方に固執します。^{*70}

そして1879年にはこう書いています：

賃金と地代の法則のアナロジーについて言えば、もちろんわたしはマーシャルが1869年の講義で何を述べたかは知りません。その講義に出席もしていないし、講義ノートを見たこともないからです。ただし、候補者の回答の中にそれが出てきたかもしれませんが、そこにそんな話が出ていた記憶はありません。(中略)マーシャルの独創性について言えば、私はそれを露ほども疑ったことはありませんし、そんなことをする願いもなければ根拠もないのです。一方で、あなたはどうぞ、私の理

^{*67} 前掲書、p.311 (直前の引用と同じ手紙より)。

^{*68} 現在の *Principles* pp.154-5 参照。

^{*69} アルフレッド&メアリー・マーシャル『産業の経済学』が1879年に出たとき、著者たちはジェヴォンズに一冊献呈し、それがいま彼の息子の手元にあります。その巻頭と巻末にジェヴォンズはマーシャルからの手紙を糊付けしています。その最初のものは *Memorials of Alfred Marshall*, p.371 に収録されていますが、マーシャルは「あなたが主要な著者だと私が認知している、経済学における抽象的定量理由づけの結果」について語っています。二通目はジェヴォンズの本についてのお礼に反応したもので、こう始まっています。「親愛なるジェヴォンズ様、妻と私は、私たちの拙著をあなたがどう思われるか、しばしば思案したものです。他のだれよりも、あなたからの好評を期待するものです(後略)」。マーシャルがブリストルでの教授職に応募したとき(1877)、ジェヴォンズは推薦状を書いています(上のp.161参照)。

^{*70} *Letters and Journal*, p.331.

論の本質的な部分はすでに 1862 年の時点で、英国協会のケンブリッジ会合で完全に示されていたことをお忘れのようです。私は、マーシャルが私の最初の小論文について、何か印刷報告を見たと考えるべき理由は持ち合わせておりません。しかしもちろん、一方では、1871 年の拙著 (『政治経済学の理論』) で、私がマーシャルから何か拝借したことはあり得ません。しかしながら、こうした問題はゴッセン、クルノー、デュピュイなどの初期の本が見つかった以上、ほとんどまったくどうでもいいことです。みんなどっちが先かという問題は棚上げしております。ただしもちろん、細部や一般的な考察手法などについては別ですが。^{*71}

ジェヴォンズは、自分の全理論の概要が 1866 年に『統計ジャーナル』に発表されていることを指摘し損ねています——これは決して手に入れにくい情報源ではありません。実際、ジェヴォンズがマーシャルから何かを拝借したなどと示唆するのはほとんどもない話です。でもジェヴォンズが上記を書いたさらに十年以上にわたり、「マーシャルが 1869 年に講義で述べたこと」は他人の発表に対する抑止かつ禁忌となりました。後年、マーシャルはある種の根本的な反発のために、ジェヴォンズに不当な扱いをしたのでは、といささか落ち着いた気持になったようです。以下の日付なしの断片^{*72}が、彼の文書の中から見つかっています。

私はジェヴォンズの理論を大いに興奮して眺めた。だが私の困難について何も助けを与えてくれなかったので、わたしはむくれた。その後私は、彼をもっと高く評価することを学んだ。彼の多面性、統計研究と分析的な研究を組み合わせる力、その常に新鮮で正直な、輝く個人性と示唆性にだんだん感銘を受けるようになった。そして今の私は、彼を経済学者の最高峰の一人として畏敬する。だがいまだに私は、彼の理論の中心的な議論はクルノーやフォン＝チューネンの業績より低い水準にあると思う。彼らはその数学を優雅に扱った。ジェヴォンズは、サウルの甲冑を着たダビデのようだ。彼らは自然の力による多様な相互作用に鏡を向けた。そしてだれもお金や統計や実務的な問題については、それをジェヴォンズほど上手くはできなかったが、ジェヴォンズは中心的な議論においてあまりに数学に凝り固まり、自然の行動を長い待ち行列に引き伸ばしてしまう。これは部分的に、彼の他の面では忠実で鷹揚な人格の持つ唯一の弱点がここで顔を出したせいだ：彼はミルのほとんど教皇めいた権威が若き学生に講師するいたずらにはまってしまったのだ。そして彼は、自分のドクトリンを倒錯した形でひねくりまわし、実際よりもミルやリカードの理論との整合性が低いように見せかけようとしているようだ。だが数学的な立論のきわめて危うい道筋を安全に通じ抜けられるようにしたリカードの天才ぶり——ミルはそうではなかった——は、彼が数学的な教育の助けを受けていなくても、彼が私の英雄の一人である理由だ。そしてジェヴォンズの理論を読んだとき、私のリカードに対する若き忠誠心が怒り狂った。学会の編集者が、私も同じような方向性の研究をしていると訊いて、この本の書評を依頼してきたときだ。そして四半世紀が経ったというのに、私は自分の草稿に無理矢理入り込んできた怒りの一節を赤裸々に記憶している。それは削除されたがしばらくして別の形で再登場

*71 前掲書, p.408.

*72 明らかに 1897 年執筆。

し、それからまた削除されたものだ。(中略) 経済学の多くの点で、私は他のだれよりもジェヴォンズから多くを学んだ。だが私の『原理』序文で私が認知しなければならない負債は、クルノーやフォン＝チューネンに対するものであり、ジェヴォンズに対するものではなかった。^{*73}

この一節は、この現代経済学の創設者二人の間の共感欠如について、もっと根深い原因をあらわにするものです。それは、両者のアプローチの類似性からくるライバル意識にとどまるものではありません。むしろ、リカードが真の予言者だったか偽の予言者だったかをめぐり、いまだに決着のつかない論争において、二人がそれが引き起こす深い感情を抱えて正反対の立場に立っていたという、両者の相違から生じていたのです。1815年にジェヴォンズはフォックスウェル教授にこう書いています。「真の経済学の系譜は、スミスからマルサスを経てシニアに続くものであり、リカードからミルに続く別の分岐は、この学問に真実をもたらしたと同じくらい、まちがいがも入れたのではないかと思ひ始めています」^{*74}。そして彼の『政治経済学の理論』第二版(1879)の序文は次のように終わっています。

長い時間をかけて真の経済学大系が確立されたら、あの有能だが見当違いの人物デビッド・リカードは、経済学という学問の列車を、ポイント操作により別の路線に送りこんでしまったことがわかるだろう。だがその路線は、同じくらい有能で見当違いの崇拜者ジョン・スチュワート・ミルによってさらなる混乱へと追い込まれた。マルサスやシニアのように、真のドクトリンについてはるかによい理解をしていた(だがリカードのまちがいがから逃れられてはいなかった) 経済学者はいたが、彼らはリカード＝ミル学派の団結と影響力で、この分野から追い出されてしまった。砕け散った学問の断片を拾い集めて新しく始めるのはたいへんだが、経済学の進歩を見たい者は、その労苦にひるんではいけないのだ。^{*75}

ミルに対するジェヴォンズの敵意の激しさが、ほとんど病的だったことは有名です。ジェヴォンズの非国教派的な遺伝が、1860年代と1870年代にミルの権威がこの学問で持っていた力、特にその教育面での影響力に抗して立ち上がったのです。彼はある手紙で1874年にこう書いています：

ミル氏の著作を批判したら、敵意を引き起こさずにはいられないようだが、私がかんしゃくや一時の熱気で何か言ったことはないというあなたが正しいことを祈ります。ミル氏について私が言ったことやこれから言うことはすべて、彼の業績をとてもし長きにわたり考察してきた結果なのであり、それが思考を喚起して社会的な問題の研究へと導くにあたりどれほど価値あるものだろうと、それが新しい競技として教えられてはならないという確信がますます高まりつつあるのです。^{*76}

^{*73} *Memorials of Alfred Marshall*, p.99. これに加えて、フォックスウェル教授が『通貨と金融の検討』の序文(p.xliii)で印刷したマーシャルのジェヴォンズへの賛辞も加えてもいいだろう。ここでは、ジェヴォンズの業績の偉大な総体が「過去百年で行われた中で、おそらくはリカードを除くだれよりも大きな建設的な力だと判明するだろう」と述べ、「ジェヴォンズ氏の頭脳が持つ純粹な正直さと、この仕事に対する独得な知的適合性は、それをあらゆる時代のお手本にしている」と語られている。

^{*74} *Letters and Journals*, p.344.

^{*75} *Thory of Political Economy* (第二版) p.lvii.

^{*76} *Letters and Journal*, p.329.

親密だった若者のうち、フォックスウェル教授はジェヴォンズの見方に完全に鞍替えしましたし、そこには共感の絆がありました。しかし、かつてハンプステッド・ヒースと一緒に散歩したエッジワースは「相変わらずミルの誤謬にどっぷり浸かっている」ので許せなかったのです。二人とも彼の晩年はそこに住んでおりました。この反発の根っこの一部は、個人的体験にあったのだと思います。1860年にオーストラリアから帰ってすぐ、彼はユニバーシティカレッジで学士学位を目指していました。当時、彼自身の理論が頭の中で胎動しつつあったのです*77。内心で彼は、真実を着想した世界唯一の経済学者の幼生として自分を観ていたのでした。これは受験生としては危険な精神状態です。そして1860年6月のカレッジ考査で、彼はこのように告白しています。

政治経済学では、悲しい揺り戻しがあって、これまで出くわしたことがないような代物だった。というのもこの問題を独自かつ独創的に研究してきて、この問題について他の講義はほとんど無視されてきた最高の業績を何十冊も読んできたにもかかわらず、自分が一等賞になると思ったときに三等や四等にされてしまったのだから。これは見解の相違のせいとしか思えず、自分の答えに対して偏見を持つ教授がいるというのは、まったく仕方のないことではある。だがぼくが『経済学理論』を発表し、この学問をまともな基盤の上に再確立したら、十分に意趣晴らしができることだろう。*78

興味深い点として記録しておくとして、一等賞は後にイギリス控訴審所長となる H・H・コゼンズ＝ハーディに与えられましたが、彼はジェヴォンズの三つ下で、同年数ヶ月後の政治経済学リカード奨学金審査で、ジェヴォンズはコゼンズ＝ハーディを打倒してこの奨学金を得ているのです*79。さらに、精神哲学と論理学の試験で、ジェヴォンズは同率一位(セオドア・ウォーターハウスと同率)でした。だから、実はそんなに文句を言うほどのことはなかったのです。グウェンズカレッジで彼が教えた生徒たちは、ロンドン試験の受験になれておりました。自分自身が苦しんだような拒絶を自分の生徒に味わわせるのは不公平だと思ったため、自分の特徴的なドクトリンを彼は良心のために教えられませんでした。マンチェスターでの彼の講義はもっぱらミルの解説に限定されていました*80。私は

*77 上で引用した同時期に書かれた兄への手紙を参照。(第四節の冒頭)

*78 *Letters and Journal*, p.154.

*79 これを含めユニバーシティカレッジでの経済学の教育に関する情報は、親切にも C・E・コレット嬢に提供してもらった(彼女はロンドン学士号のために哲学的な問題について1880年にジェヴォンズに審査を受けた)。彼女の話では、試験セッションは教授(経済学者というよりは弁護士のジェイコブ・ウェイリー)の下でその年に行われた講義だけに限られ、この講義の外での卓越性を示す余地はほとんどなかったのに対し、奨学金試験はもっと広く、外部試験官が連れてこられた(1860年には R. H. ハットンで、その前の年にはバジョットが外部審査官だった)。実際に出た問題は1860-1年と1861-2年の U.C.L. カレンダーにある。

*80 オーウェンズカレッジでの教育手法を説明するにあたり、彼はこう書いています(*Letters and Journal*, p.284):「私は全般に、望ましいときにはミル『政治経済学』の内容の順番を、その見方や手法とはまったく独立に追っている。通貨の問題では、常に彼の本を完全に捨ててきた」。だがこれは、自分自身の理論の限界原理など特徴的なドクトリンを取って教えるところまではまったく行っていないと私は思うし、通貨についての彼の見通しはミルのものと大してちがわない。また *Letters and Journals*, p.409 も参照。ここで彼は長年たつてから(1879)自分がミル『政治経済学』を銀行家協会試験用に推薦したのを弁護して次の理由を挙げている。「有能な読者の理性的な判断のためにある見方を提示するのと、私見という手段によってそうした見方を若者に無理強いするのは話がまったくちがう」。コレット嬢の話では、政治経済学はロンドンの M.A(修士号)取得試験だけの課題で、ロンドン B.A(学士号)の課題ではなかったから、オーウェンズカレッジのジェヴォンズの生徒たちでロンドンの試験を受けた人は、論理学の講義を受けて学士試験を受けた人になればきわめて少なく、このため彼女に言わせると、ジェヴォンズのミルに

はるか昔に父からこれを聞いて、自分の理論の抑圧のおかげでミルへの反発が沸騰寸前になったのだと言われました。彼の講義の受講者がとった慎重な講義ノートの本に最近出くわしたのですが、そこでもこれがその通りだったと裏付けられています*81。

V

拙稿のアルフレッド・マーシャル回想録で、私は経済学者に必須と思われる多面性を指摘しました*82。ジェヴォンズはまちがいなく、この突出した例です。科学と実験の教育は、帰納的な研究につながり、論理的、分析的な傾向は、演繹的な研究につながりましたが、そこには異様に強い歴史的、いや懐古趣味的とすらいえるひねりが加わっていました。最初期からジェヴォンズは、自分の帰納的な研究に時間をさかのぼらせる本能的な傾向があり、自分が興味を持った理論はすべて、その歴史的起源を発見しようとしたのです。これがまずあらわになったのは、『石炭問題』を飾った大量の歴史的資料でした。他の著者であればその大半は、持ち出そうとすら思わないものです。彼は指数の時系列データを18世紀までさかのぼらせました。太陽変動を研究するようになると、事業サイクルの歴史を18世紀初頭までさかのぼり、何世紀にもわたる収穫党系を検討しています。したがって経済史の分野で彼は、価格と事業変動の歴史における先駆者となったのでした。

彼はそれよりはるかに深く、経済思想と理論の歴史に興味を持っていました。手を出すあらゆる問題分野で、彼は自分のお気に入りの理論について、未知の、あるいは忘れられた先人を探し出しました。この分野で彼の最も優れた貢献は、カンティリヨンの業績と重要性の発見です。この面で最も重要な貢献は、『政治経済学の理論』第二版の補遺として印刷された、「数理経済学書籍、回想記など刊行著作」の手書き一覧にまとめられた、経済書誌の先駆的な作業でした。そして金融問題に関する手書き一覧も『通貨と金融の探究』の補遺になっています。

これ以外に、ジェヴォンズは生まれつきの収集家で、経済学ビブリオマニア部族という傑出した種族の最初の間であり、図書館司書たちの間に流行りを作り出し、書店に経済文献の本当に些末な断片にすらすさまじい値段をつけるよう促すようになる存在となりました。ジェヴォンズは珍しい経済書やパンフレットの収集を発明したのです。とはいえ、この歴史的な情報源としての重要性に初めて注目を集めたのは、マコーレイ卿ではありませんでした。フォックスウェル教授はこの病気をジェヴォンズから伝染されたのでした*83。

対する苛立ちは、彼の政治経済学よりは論理学に対するものだったとのこと。だが私が思うに、ジェヴォンズがミル『政治経済学』に対して、少なくともその論理学と同じくらい敵対心を持っていたことは疑いようがない。

*81 ジェヴォンズが自分の数理経済学書一覧に補遺でつけた次のメモにより、多少の但し書きが追加される。「1863年頃から私は、オーウェンズカレッジでの講義で市場価格決定を示すのに、交差する曲線を普通に使っていた」。上で参照されている講義ノートは、確かに需要曲線のスケッチを含んでいるが、それに伴う文には限界原理への言及はまったくない。

*82 ジェヴォンズ自身が、経済学者に必要とされる複雑な性質について自分でわかっていたことを示す下りはたくさんあります。Letters and Journal p.101 参照 (また pp.116-18 も): 「経済学は、学問的に言って、とてもややこしい学問だ。それは実はある種漠然とした数学で、人の生産性の原因と結果を計算するし、それを最もよく適用する方法を示す。人間の条件と関連する、無数の関係知識分野がある。そうしたものが政治経済学に対して持つ関係は、機械工学、天文学、光学、音響、熱など、大なり小なり物理学のあらゆる分野が純粋数学に対して持つ関係に似ている。(中略) 物理学に従事する人はたくさんいて、実務科学や工芸は自分だけでも何とかやっつけていけるが、社会の原理を完全に理解することこそ、私にはいまや適切な仕事に思えるのだ」

*83 ある日、ジェヴォンズはフォックスウェルにこう言った。「大ポートランド街をたまには歩いてみてはど

ジェヴォンズは高い値段を払ったり、本の条件や収集家の「ポイント」が重要となるような段階には進みませんでした——彼の蔵書は巨大な作業用図書室で、読めるならどんな状態でもいいのでした。それでも、彼の手紙のそこら中には、現代の収集家にも魅力的な記述が散見されます。1879年4月8日に彼はソールズベリーのスリースワンズからこう書き送っています。

本の購入で大当たりだ。経済政治パンフレットを500冊ほどのコレクションを、一冊おおよそ半ペニーで買ったのだ。その一部は明らかに価値が高く珍しい。一冊は数世紀にわたる物価の銅版画のグラフを含んでいる。一、二冊はロバート・オーウェンのものだ。またそれらすべての慎重に書かれた一覧も手に入って、カタログも同然だ。^{*84}

1881年にはパリからこう書き送っています。

時間の相当部分はセーヌ川のほとりで猟書に費やしている。経済学に関する本をほとんどトランクいっぱい確保したよ。学問的、歴史的な価値はきわめて高いのに、しばしばとんでもない安値で買えた。^{*85}

彼の妻はこう記録しています。：

暇な午後に彼は、いくつか古本屋をまわるのを本当に楽しみにしておりました。そして彼の親切で礼儀正しい態度——対等な立場の者はもとより、目下の者にも礼儀正しいのです——は書店主たちに大いに歓迎されました。いちばんよく通っていた少なくとも二軒の店では友人として見なされ、本屋たちは店頭の本で彼が興味を持ちそうな本にいつも目を光らせ、彼が目を通すまではそれを他のお客からとっておいてくれたのです。^{*86}

生涯の終わりまでに彼は何千冊も集め、それが家の壁や廊下に並び、屋根裏に山積みとなって、妻子にとっては当時もその後の何度かの引っ越しのときにも、悩みの種でした。その引っ越しごとに、書籍は次第に散逸しました。1907年には、マンチェスターのオーウェンズカレッジ図書館が、何でも好きな本を持って行ってよいとされ、2,400冊ほどが特別なラベルつきで同図書館に編入されました。その後、ロンドンのユニバーシティカレッジが数百冊もらう機会を与えられました。その残りの中から、息子 H. S. ジェヴォンズ教授が、もっと最近の本を中心に作業用の蔵書を維持し、それをアラハバード大学での教授職を退官したとき、そこで構築した立派な経済学図書館に寄贈しました。ジェヴォンズはまた古い紙幣コレクションも持っていて、「こんなコレクションは他のほとんどだれも持っていないだろう」と述べています。^{*87}

うかね(当時は古本屋街で、特にユーストン通りとの交差点あたりにはたくさんあった)。あそこで何か出物が見つからない日はほとんどないからね。そしてフォックスウェル博士によると、それが始まりだったとのこと。1881年に彼はフォックスウェル教授にこう述べた。「ときどき本やであなたの話を聞きますので、おそらく経済書のかんりのコレクションをお持ちだろうと思います」。この台詞は、その後55年にわたりあらゆる日に、この通りに持ち出される一節となった。

^{*84} *Letters and Journal*, p.397.

^{*85} *Ibid.*, p.436.

^{*86} *Ibid.*, p.428.

^{*87} 前掲書, p.421.

VI

いまや経済学と統計学へのジェヴォンズの傑出した貢献をざっと見てきました。しかし、彼の全業績を見渡すにはほど遠いところですよ。存命中には、論理学者としてのジェヴォンズの評判は、経済学者としての評判に迫るほどのものでした。ポストミル期の論理学イギリス学派は、最近の方向性において後塵を拝する立場であり、ジェヴォンズの業績に対する関心も、同時代人への興味とともに低下しています。しかし1866-1876年頃の彼の第二期の業績で、論理学がその時間と思考の相当部分を占めており、また(オーウェンズカレッジに在る間は)講義も論理学がかなりを占めていました。生涯で刊行された本の半分以上は論理学関係です。その一冊、『論理学と科学的手法論考』は彼の最大の本で、長年にわたり広く使われてきました。それでも、ジェヴォンズが論理学の発展に果たした役割は、経済学と統計学の歴史に占める彼の地位にはまるで比肩しないものです。しかしながら、その分野における知識に関する彼の貢献をレビューするのは、現在の私の仕事の一部ではありません。

生涯最後の十年間で、彼は自分のお気に入りの主題について、単純明快でおもしろい書きぶりにより基本的な概略を記述する見事な能力を己に見出しました。アメリカや、6、7カ国語で印刷された無数の版はおいておいても、現在までに『論理学基本教程』(1870)は13万部、『論理学初歩』(1876)は14.8万部、『政治経済学入門』(1878)は9.8万部が売れています。別の入門書は、もう少し大規模ではありますが、『お金と取引の仕組み』(1875)はイギリスで2万部ほど売れ、それ以外にかつて安い海賊版が出回っていたアメリカでもたくさん売られています。半世紀にわたり、イギリスとインドと各種自治領では、論理学と政治経済学の入門学生はみんなジェヴォンズで育ってきたのです。彼の小著はわけのわからない部分がまったくなく、退屈だつたりもしないし、無用な教条主義なしに、明晰さと見通しの確実性という高価をもたらしています。それを使えば、単純で明解な試験問題が設定できます——ジェヴォンズからすれば願ったりかなったり。彼は、試験精度の大きいなる信者でした。そしてそれは正当なことです。というのも試験制度は、教育と行政に対して彼の世代が行った大きな貢献の一つだからです。『マインド』(1877)に発表された、彼の「詰めこみ」に関する論説の結語は、引用に値します。

私は、大学試験をそれに対するあらゆる反対論から守るつもりはない。私の狙いは、試験が知性に対する厳しくしっかりした訓練を強制する最も有効な方法であり、この厳しい試験に最も耐えられることを示した者を高い役職に選出する最善の方法だというのを示そうとすることで果たされた。私が答えようとしたのは、世間の「詰めこみ」に対する反発に対してであり、それを終えるにあたり、ある候補者を厳しくしっかり実施される公開試験で高い順位につけるようにする教育方式はすべて、よい教育システムだという信念を述べておく。それをどう呼ぼうがお好きなように。だがそれが知的、道徳的、そして身体的な力すら呼び起こすものであり、それは疑問の余地なき経験を通じて、人を人生の稼業へと適合させるものだと証明されてきたのだということは、否定しようがない。

私が教育と考えるものはこれだ。各種の哲学者や学者や天才を作り出すのは教師の仕事だと考えることはできない。こうした人々は詩人と同じで、生まれつきのもの

であり、作り出せるものではない。また私が示した通り、生徒を生涯通じて導くはずの有用な知識を、精神に抜きがたく押しつけるのも教育者の仕事ではない。これぞまさに「詰めこみ」だ。教育の目的とは、精神の機能を活動させて、その後の人生での無限に多様な体験が、最もよく観察され理由づけられるようにすることだ。一般に「詰めこみ」として糾弾されているものは、しばしばこの何より重要な目的を目指すための、もっともうまく考案され、もっともうまく実施された訓練の仕組みなのだ。^{*88}

最後に、人生の最後の時期にジェヴォンズは、国家と社会の経済生活との関係に大いに関心を抱くようになりました。道徳と感情の面で、ジェヴォンズは常に変わることなく、熱烈な個人主義者でした。1868年マンチェスター統計学会で彼が行った、えらく奇妙な初期の演説があつて^{*89}、あらゆる無料の病院や医療慈善活動は、貧困者の人格を貶めるものだと言って糾弾しているのです(どうやら彼は、貧困者の健康よりは人格のほうを重視し、両者は無関係だと思っているようです)。「我が国の医療慈善活動、これはあらゆる無料公共診療所、薬品配給書、病院、そして大量の民間慈善活動の相当部分を含みますが、これを疑問視せざるを得ないと私は考えます。どういうことかといえば、こうした慈善活動はすべて、最貧層に対して自分で調達するよう促進されるべき人生の通常のものについて、豊かな階級に依存することに甘んじる感覚を涵養してしまうということです」。そうした厳しい感情を再び感じ、荒々しい東風に直面して、未来をしっかりと信じるあまり、現在のどんなことにも耐えられるようになれば、われわれも鍛えられて強くなれるのかもしれない、というわけですね。というのも、このヴィクトリア人的な厳しさの背後にある感情はとても立派なものではあったからです。ジェヴォンズはこう結論します。「公共だろうと民間だろうと、ある階級が別の階級に対して向ける慈善をなくせるような地点に到達したとは、いまだに言えませんが、そうした物事の常態に向けて希望を持つべきだとは思うのです。真の進歩は、あらゆる階級を自立させて独立させる傾向にあるのです」

それでも、便宜的な配慮によりジェヴォンズは次第に、少し左派に偏ることになります。とはいえ、ミルが晩年に左傾化した水準にはほど遠いものではありません。彼はずっと、教育への巨額の公共支出を支持してきました(というのもこれは、明らかに医療対応とはちがひ、貧乏人の「人格」を改善するからということらしいのです)。そして、正しい種類の博物館に対しても公共支出を支持しました^{*90}。「人々の娯楽」についての論説^{*91}はアリストテレスに追随して、普遍的な消費による音楽を今日するのが公共的な責務だと考えます。ハレ・オーケストラは、彼によれば「この地に大量に住む文化水準の高いドイツ系中産階級人口」のおかげだとのことですが、彼にとってマンチェスターで最高のものでした。ロンドン時代の彼は「ときどきトロンボーンの気をそそる響き、ドラムの連打、オルガンの荘厳な響き、大オーケストラのわくわくするクレッシェンドを渴望する」と書いています。明らかにジェヴォンズは、病院についてどう思ったにしても、BBCは賞賛したはずで、さらに彼は、郵便局に代表される国の事業にますます関心を抱き、小包貨物量と電信の政策基準について、一度ならず執筆しています。存命中に刊行された最後の本

^{*88} *Methods of Social Reform*, p.99 に再録。

^{*89} *Methods of Social Reform* に再録。

^{*90} *Methods of Social Reform* に再録された彼の「博物館の利用と濫用」は今日読まれる価値があります。

^{*91} *Methods of Social Reform* に再録。

『労働との関係で見た国家』(1882) は慎重な中間的立場を採っています。序文ではこう説明されています。「何よりも重要な点は、可能であるなら、なぜ一般に我々が自由放任のルールを掲げつつ、それなのに大量の種類の場合においては、地元や中央の当局の介入を求めるのかを説明することだ。(中略) この検討の結論は、何か厳格なしっかりしたルールなど決めることはできず、あらゆる場合をその長所短所にもとづいて詳細に扱うしかないというものだ」

ジェヴォンズの本が、これまで述べた一般の教科書以外に現在までどのくらい流通しているのかを記録しておくとおもしろいでしょう^{*92}。

- *Pure Logic* (1863), 1,000.
- *The Coal Question* (1865), 2,000.
- *The Theory of Political Economy* (1871), 7,000.
- *The Principles of Science* (1874), 9,000.
- *Studies in Deductive Logic* (1880), 6,000.
- *The State in Relation to Labour* (1882), 9,000.
- *Methods of Social Reform* (1883), 2,000.
- *Investigations in Currency and Finance* (1884), 2,000.
- *Principles of Economics* (1905), 1,000.^{*93}

彼の人生の外面的な事実については、これ以上記録すべきことはほぼありません。1876年に彼は、ロンドンのユニバーシティカレッジでの政治経済学教授に進みました^{*94}。ハンプステッドの高みで、ヒースの端に家を構えました。1880年にますます健康が不安定となり、講義よりも執筆を大いに好んだために教授職を引退することになりました。三、四年をスイスで過ごして、予告された『経済学原理』を仕上げるはずでしたが、その断片が1905年に死後出版されています。1882年8月13日、彼はギャレーヒルはずれ、ベックスヒルとヘイスティングスの間で気を失って溺れ死にました。子供は三人、息子一人と娘二人です。息子ハーバート・スタンリー・ジェヴォンズは父と同様科学の教育を受けました——彼は地質学と化学です——しかし自然の性向で経済学へと進み、その後カーディフ大、アラハバード、ラングーンで順番に経済学教授となりました。ジェヴォンズの妻は夫より30年長生きして1910年に死亡しました。

ジェヴォンズは、その世界に大いに惜しまれつつ46歳で夭逝しましたが、私は彼の仕事は終わっていたと思います。彼が天才と聖なる直感を持ち、天職だという燃えるような感覚を持っていたのは1857年から1865年の若き日々でした。終わり近くになると、その炎は色あせ、もっと不安定となっていました。

^{*92} マクミラン氏らが親切にも提供してくれた。

^{*93} 最後の三冊は死後出版。

^{*94} コレット嬢は手紙でこう書き送ってくれました。「科学技芸の卒業まで政治経済学が大学試験の選択課題でなかったのは、(思うに) ミル自身の見方のせいだったと思います。1835年(マカロック引退の年)から、ジェイコブ・ウェイリーが講義を始める1853年まで、この分野はユニバーシティカレッジでは扱われませんでした。ウェイリーは1866年まで講義をして、その後ケアンズが後を継ぎました[1872年まで。その後は1872-1875年にレナード・コートニー、1875-1880年はジェヴォンズ、1881-1928年はフォックスウェル]」

VII

人間としてのジェヴォンズはどんな人物だったのでしょうか？ 彼の印象として記録されている強い個人的な印象はありませんし、死後 54 年たった今、存命中の数人の知人に彼が残した決定的な刻印を見つけるのはなかなか困難です。私が思うに、ジェヴォンズは人生のどの時点でも、仲間に強い印象を残したりはしなかったのでしょうか。現代的に言えば彼は、ひどい引きこもりだったのです。自分の内面の輝きに基づいて一人きりで作業するときに最高の成果を挙げました。外部世界との接触には、魅了されると同時にそれを嫌悪していました。少年時代から、自分自身の力について果てしない自信を持っていました。でも他人に影響を与える一方で、自分自身は他人に影響されたくないと考えていました。家族への愛情はとても深かったのですが、でも家族とも他のだれとも親密ではありませんでした。27 歳のときには、16 歳の頃の自分の精神状態について次のように書いています。：

1851 年の間、ゴウワー街——陰気な家で、いまだに振り返るとゾッとする——で、必ずしも悪いとは言えないが頭の悪い仲間たちの間できわめて不幸に暮らしていた頃、その頃に、家のでっぺんの小さな寝室で静かな時間が得られたとき、私は自分が他人よりもっと多くを成し遂げるべきだと考えはじめた。(中略) ぼくの抑制はあまりに完璧だったから、だれもぼくの動機や目的については、まったく理解できなかったはずだ。父は多分、ぼくのことをまるでわかっていなかっただろう。父とないしょ話をしたことはない。学校や大学では、学業成績だけがぼく的能力を示すものだった。意図したりやったりした他のすべては、自分の内面か、慎重に隠していた。よく思ったことだが、抑制した人格というのは、快適でも美しくもない。だがぼくのような人物には必要なものではないか？*95

オーストラリアではほとんど一人暮らしで、植民地生活の社交イベントに参加したがりませんでした。1857 年、22 歳のときに自分の力について以下の分析を妹に書き送っています。

ぼくは想像力のかけらもないし、ウィットのひらめきもない。他の大量の人が持っているような記憶力も乏しく、結果としてどの時点でも学んだことをごく一部しか保持できない。でもぼくは、財の倉庫よりはむしろ、そうした財を作る機械なんだ。事実や材料をいくつかくれば、それをきれいに並べて完成させた理論の布地に仕上げて見せるか、新しい形にして示してみせる。ぼくは精神はきわめて正規化された構造で、物事を分類したがる強い傾向があり、それがときには苦痛なほどだ。また、なんであれぼくが能力を得ることができるとするなら、それは独創性と、新しいものを打ち出す能力だと思う。これは新しい考えや意見をすばやく形成できるという話じゃない。むしろそうしたものを一つか二つ捕らえて、何か対称的なものへと発展させるという能力だ。まるで万華鏡みたいなもの。曲がった針だの小さなゴミのかけらだのを入れると、まったく新しく対称的なパターンが生み出される

*95 *Letters and Journal*, pp.12, 13 (また p.85 も参照).

んだ。^{*96}

1865年の結婚直前には日記にこう書いています:

たまに成功はすばらしい報酬を与えてはくれるが、その他すべてのときに、それは責務の重荷で自分を圧迫するようにしか思えない。ますます、生涯にわたる仕事が事前に決められてしまっていて、それを避けるのが不可能に思えてくる。何がこようとも、自分にはどんなリスクを冒してまでも涵養し発達させねばならない能力があり、それを誤用したり無視したりするのは、最も深遠な裏切りになるのだと、どうしても感じてしまうのだ。だがこれほど高度でむずかしい仕事をもたらす難題は、生やさしいものではない。また、ある責務が他のものと対立するように思えることもある。私の考えは矛盾を含んでいるようだ。愛し愛されたい。だが私が育てなければならないまさにその研究が私の考えを飲み込んでしまうので、他の形でなれるような自分には、とてもなれそうにないと思ってしまうのだ。そして何よりも、私は貧乏暮らしが運命づけられているようだ。望むほど他人を助けることはできない。また金儲けと愛情の世界では、貧困をもたらすような卑しさと欠乏に耐えるのが簡単というわけでもない。そして、自分一人でならそれに耐えられても、妻や親戚がそれに耐えることなど、期待もできないしまるで望みもしない。すると自分の気持と愛情の半分は、押しとどめられ、満たされずに終わるしかない。^{*97}

結婚後(奥さんも自分の稼ぎ口を持っていました)その性格はそんなに大きく変わりませんでした。ほとんど外出しません。仲良しはほとんどなし。音楽は彼にとって人生に不可欠でしたし^{*98}、入浴と孤独な散歩が常に最もお気に入りのくつろぎ方でした。なかなか面倒な同居人で、家族生活の妨害にはすぐ苛立ち、音に過剰に敏感で、うつで病弱、会話もほとんどなし。でも「彼の心からの笑いは、それ自体独得なもので、聞いた者はみんな幸せになりました」^{*99}。早い時期から彼は肝臓病と消化不良と便秘に悩まされ、後期にはそれがあまりに激しくなって、すべてを覆い尽くして仕事の邪魔をするようになったので、もっと深い原因があったようにも思われます。

彼は講師としては、あまりやる気がなく、成功しませんでした。ユニバーシティカレッジからの引退にあたり、彼はこう書いています「講義が楽しかったこともある。特に論理学はそういうこともあったが、ここ何年にもわたり、講義室に入るときにはおそらく、さらし台にかけられるような気分にならなかったためしがない」^{*100}。彼の講義は、自分自身の考えなどめったに紹介せず、自分が有害無益と信じていたミルの最も純粋な乳だけを売り歩こうという決意によって阻害されていました。彼は私の知る限り一人として、ろくな弟子を育てませんでした。晩年には、若手の同時代人フォックスウェルとエッジワースとは親密ではありましたが^{*101}。ロンドンにいる日曜日はほぼ常に、フォックスウェルがハ

^{*96} Ibid., p.96.

^{*97} *Letters and Journal*, pp.213-14.

^{*98} ジェヴォンズは熱烈なコンサート好きで、クラシック音楽を聴く機会は逃さず、初期のワグナーマニアで、ベルリオーズの崇拝者だった。ハンブステッドの自宅には小さなオルガンが作り付けになっている。

^{*99} 前掲書, p.451.

^{*100} 前掲書, p.421.

^{*101} また(コレット嬢の付け加えるところでは)フィリップ・ウィックステッドとも親しかったとのこと。ジェヴォンズはウィックステッドとエッジワースを経済学に引き込むのに大きな役目を果たしたかもしれない。どちらも古典教育を受けていた。エッジワースが学術界に入ったのは、英語と英文学をベッ

ンプステッドに彼を訪ね、ヒースで長い散歩にでかけました。そしてご近所だったエッジワースもしばしば同行しました。フォックスウェル教授に先日ジェヴォンズのことを話したら、当時は回想してこう述べました。「あまり喋らない人だったよ。あれ以上ひどい講師はなかったね。生徒は講義に行かないし、思いつきで仕事をして何も最後まで仕上げなかった」。そしてしばらく間をおいて、別の表情を浮かべてこう語ったのでした。「ジェヴォンズで唯一いい点はといえば、あの人が天才だったということだ」

晩年の彼の写真は、『手紙と日記』の巻頭に出っていますが、お馴染みのものです。くしゃくしゃのあごひげ、巻き毛、広いおでこ、四角い顔、鼻の穴が大きくて、下唇が太くいささか突き出したその相貌は、ほとんどまるでユダヤ人の型どおりとすら言えますが、フォックスウェル教授が裏付ける通り、これは彼が一部はウェールズ出身であることと、まちがいなく説明がつくものです。なぜならジェヴォンズはエヴァンスという家名の変形なのです。肌の色は血色がよく、紙は濃い茶色、目は青みがかった灰色。強力ではありませんが、見事とはいえない顔です。地位の高いヴィクトリア朝の銀行家だと言っても通るでしょう。また、彼が22歳か23歳くらいの写真もあります*102。こちらのほうがずっと面白く、圧倒的に力強く、鋭く、明晰で、きれいにヒゲも剃られ、まっすぐ細い鼻をして、見事な目と視線、そしてつれた黒髪のかたまりが、高く広いおでこからせり上がっています。——当時も天才で、まったく銀行家などには見えません。この二つの写真を見ると、ジェヴォンズの偉大さはその若き日にあったという印象が裏付けられます。

私は、しばしば彼の日記から引用しました。これは彼が17歳だった1852年から、1867年末の結婚までつけていたものです*103。この日記はそれ自体としても、それが彼の天性にあてる光の点でもきわめて興味深いものです。奥さんが、『手紙と日記』で選択した抜粋だけでなく、全文を読めたらと思います。この日記は彼の子供たちの所有下にあると思われるのですが、その現在のありかにははっきりしないし、参照できません。この日記は彼の告白や内省の成果、それも過剰すぎる内省の成果をすべて記録したものです。この日記はしばしば、落胆も記録していますが、ひらめきの瞬間における創造的な心の喜びも記録しています。たとえば1866年3月に、彼はこう書いています。「朝起きたとき、太陽がまぶしく部屋に差し込んだ。自分が未来の真の論理を発見したという意識があった。数分にわたり、めったに感じるはずのない喜びを感じた」。でも彼はすぐに付け加えます。「だがあまりに即座に、自分がそんなに偉大な成果を挙げるには、実に無価値で弱い道具でしかないこと、そして自分がそんなことを成し遂げるなんて、ほぼ期待できないことを思い出してしまったのだ」*104

ドフォードカレッジで講義し、キングスカレッジで論理学を講義したことから、ジェヴォンズに出会う前に彼が経済学に興味を持っていたという証拠は私は知らない。ウィックステッドとエッジワース、フォックスウェルは、ジェヴォンズの後継者と見なせるかもしれないが、この三人ともジェヴォンズと接触したのは、学位を得てからかなりたってのことだ。バルグレーブの『事典』でジェヴォンズの回想記を書いているのはウィックステッドで、彼の会話についてのウィックステッドの印象が参照されている。

*102 [編者注：この論説と同時に以下で掲載された。 *Journal of the Royal Statistical Society*, vol.XCIX, part III, 1936, p.516.] [訳者注：23歳頃の写真はもう一枚あるが、ヒゲが剃られているのはこれしかない。対比のため、言及されている本の巻頭にある晩年の写真も入れておく]

*103 少なくとも、この日付以降は *Letters and Journal* に抜粋はない。

*104 *Letters and Journal*, p.219.



ジェヴォンズ：*Letters and Journal* 巻頭の肖像（1880頃）と黄金検査官時代（1857）

第 11 章

アルフレッド・マーシャル (1842-1924)*1

I

アルフレッド・マーシャルは 1842 年 7 月 26 日にクラパムで、イングランド銀行出納係ウィリアム・マーシャルの息子として、レベッカ・オリバーとの結婚の結果として生まれた。マーシャル家は十七世紀末に、コーンウォールのサルタシュ住民のウィリアム・マーシャルから発する、西部の聖職一家だった。アルフレッドはウィリアム・マーシャル牧師の曾々孫だが、このマーシャル牧師はデヴォンシャーの半ば伝説的なヘラクレスめいた司教で*2、蹄鉄を素手で曲げて見せたので近郊の鍛冶屋たちは自分が悪魔のためにふいごを



アルフレッド・マーシャル

*1 この回想記の執筆 (1924 年 8 月) にあたっては、マーシャル夫人から大いに支援を受けた。多くの文書を自由に使わせてくれて、いくつか個人的なメモを用意してくれたことに大いに感謝する。こうした文書を私は縦横に使っている。アルフレッド・マーシャル自身もいくつか自伝的な断片を残していて、それもできる限り活用した。1924 年に私はアルフレッド・マーシャルの完全書誌一覧をまとめ、これが *Economic Journal* 1926 年 12 月号に掲載され *Memorials of Alfred Marshall* (A. C. Pigou 編, 1925) に再録された。

*2 三人目の妻メアリー・キットソンの子供で、このメアリーは彼が自分の教区で初めて洗礼を施した子供であり、そのときの冗談で彼は、この個は自分の可愛い妻になるべきだと言ったが、二十年後にはまさにそ

吹いてしまったのかと怯えたほどだ*3。彼の曾祖父はジョン・マーシャル牧師で、エクセターグラマースクールの校長であり、メアリー・ホートレーと結婚した。メアリーは、エクセターの教頭で聖堂参事会員だったチャールズ・ホートレーの娘で、イートン校長の叔母だ*4。

父親はイングランド銀行の出納係で、なかなか頑固な人物であり、決意が固く鋭いくて、長老派教会でも最も厳しい戒律の型にはめられ、首は骨っぽく、ゴワゴワのヒゲをはやして突き出したあご、ある種の独自発明版アングロサクソン言語による長老派叙事詩を書いて、しかるべき読者の間でそれなりに評価され、独裁的な気質のまま 92 歳まで生き延びた。そのご主人様気質に最も身近な対象は家族で、最もお手軽な犠牲者は妻だったが、彼らの帝国支配は理屈の上では全女性に及ぶもので、この老紳士は『男性の年利と女性の責務』なる論考を書いている。遺伝とは強力なもので、アルフレッド・マーシャルもこの親の型の影響から完全に逃れられたわけではなかった。女性に対する植えつけられたご主人様気質が、彼の内部で自分自身の妻に対する深い愛情と畏敬の念と戦っており、またその気質は彼を女性の教育と解放にきわめて近い立場に置くこととなった環境とも対立するものとなった。

II

年齢九歳にして、アルフレッドはマーチャント・テイラーの学校に送られた。そこは彼の父親が、子供の能力に気がついて、銀行の頭取を拝み倒して推薦を受けたものだった*5。愛情と厳しさの入り混じった彼の父親はジェイムズ・ミルを思わせる。彼は自分も息子について、学校のヘブライ語の勉強を夜の 11 時までさせることもしばしばだった。実際、アルフレッドは父親に勉強をさせられすぎたので、夏の長い休暇と一緒に過ごしたルイズおばさんに人生が救われたとよく言ったものだった。彼女はアルフレッドにボートと銃とポニーを与え、夏の終わりにになると、彼は日焼けして健康になって家に戻るのだった。マーチャント・テイラー校にいっしょに通っていた E・C・ダーマーによると、学校での彼はチビで色白で、ひどい服装で、疲れ果てて見え、「獣脂ロウソク」と呼ばれていたそうだ。そして遊びにはぜんぜん加わらず、チェス問題を解くのに熱心で*6、なかなか友だ

の通りになった。

*3 これはこの人物のとんでもない強さに関する多くの逸話の一つで、マーシャルはそれを話すのが大好きだった。たとえば、デヴォンシャーの狭い小道でポニー馬車を駆っていた彼は対向車に出くわし、ポニーをはずすと馬車を脇の植え込みの上に持ち上げたという。だがウィリアム・マーシャルの晩年の小さな装置には、アルフレッドを予見するようなものが見える。高齢になって異様に重たく動きづらくなってしまい、痛風にやられすぎて階段を上り下りできなかったため、彼は通常すわっていた部屋の天井に穴を開けさせて、すわったまま滑車を使って、上階の寝室に出入りしたのだという。

*4 だからアルフレッド・マーシャルは、『通貨と信用』の著者ラルフ・ホートレーのはこの息子ということになる。アルフレッド・マーシャルは、慎ましいホートレー家よりはヘラクレス牧師から多くを受けついだ。

*5 「200 ポンドよこせと言っているに等しいことはわかっただろうか？」と頭取は言ったが、推薦を出してくれたとのこと。

*6 マーシャル夫人はこう書いている。「子供時代のマーシャルはひどい頭痛に悩まされ、それを直す唯一の方法はチェスでした。だから父親はこのためにだけチェスを許しましたが、後にアルフレッドに、二度とチェスをやらないと約束させたのです。彼はこの約束を生涯守りましたが、新聞でチェス問題を見るたびに興奮していました。でも、その約束をさせた父親は正しかったのだ、と言っていました。そうでないと、ずっとチェスばかりやる誘惑にかられたでしょうから、というのです」。アルフレッド・マーシャル自身も一度こう言った。「われわれはチェスで遊んだり、先のないつまらないことで自分を行使したりしてはならないのだ。若者なら、身体的だろうと知的だろうと、単なる行動の楽しみを享受するのも結構だ。だ

ちを作らなかったそうだ*7。

モニター三年に進級して、1861年には古い規定に基づき、オックスフォード大学セントジョンズカレッジの奨学金をもらう視覚ができた。これは三年間のフェローで、当時はキングズカレッジやウィンチェスター・ニューカレッジのイートン学生と同じくらいの身分保障となったはずだ。これは長老派司教職の序列に向けた第一歩で、父親が望んでいたのはこれだった。だがアルフレッドにとっては、そっちはどうでもよかった——これは古典への隷属を続けなければいけないということだったのだ*8。彼は後年になって、圧政的な父親が夜遅くまでヘブライ語をもっと勉強させようと眠らせず、一方ですばらしい数学の道を禁止していたのを、苦痛とともに思い出している。彼の父親は数学書を見るだけで嫌がったが、アルフレッドは通学途中に、ポケットにポツ『ユークリッド』を忍ばせておくのだった。彼は定理を呼んで、歩きながらそれを頭の中で解き、ときにはつま先を内に向けてじっと立ち尽くした。マーチャント・テイラー校での六年目のカリキュラムが微分解析までであるというのは、彼の本性を沸き立たせた。数学主任エアリーは「彼は数学の天才だった」と言う。数学はアルフレッドにとっては解放であり、父親が数学を理解できないのに、彼は大喜びしたものだ。いや！ オックスフォードで死んだ言語に埋もれるなんて嫌だ。家出してやる——ケンブリッジで船乗りになって、幾何学の艤装をよじのぼり、天を望遠鏡で眺めるんだ！

この時点で登場するのが裕福な叔父で、アルフレッドに喜んでお金を貸してくれた（父親は貧しすぎて、オックスフォードの奨学金が放棄されたら、それ以上の学費が出せなかった）——これは学位を得てすぐに、教授職での稼ぎで返済した——この融資と、セントジョン・カレッジのパーキンス奨学金からの年額 40 ポンド*9 とのおかげで、数学とケンブリッジ大学への道が拓けたのだった*10。この叔父が残した 250 ポンドの遺産のおかげで、14年後に彼は訪米できたので、この叔父の財産の源もここで記録しておく価値はあるだろう。アルフレッドがしょっちゅう語っていた物語でもあるし。オーストラリアで一旗あげようとして、黄金が発見されたときにはすでに身を立っていたが、ちょっとした家系的な奇矯さのおかげで、間接的に大儲けすることになった。彼はずっと牧羊業者だったのだが、自分の場所では何らかの身体障害を持った人物以外は決して雇わず、足萎え、めくら、負傷者ばかりの職場となっていて、ご近所たちに嘲笑されていた。黄金ブームが頂

が時間が差し迫っている。われわれに課せられた責任は重い

*7 主な学友は H・D・トレイル（後にオックスフォード大ジョンズカレッジのフェロー）、およびシドニー・ヘイル（後に芸術家）だった。トレイルの兄はミル『論理学』をくれて、マーシャルはトレイルといっしょにそれを熱心に読み、モニターの食堂でそれについて議論した。

*8 晩年に A. M. は自分の古典学習について以下の彼らしい文を書いている。「学校ではギリシャ語の発音のアクセントなど一切意に介する（アカウントする）など言われたので、記憶にアクセントなどで負担をかけるのは中身（アカウント）に向けられるべき手間暇を奪うことになる結論づけた。そこで辞書でアクセントを引こうとはせず、おかげで人生唯一のひどい処罰を受けることとなった。これは古典の勉強は時間価値の評価をもたらさないと示唆したので、そこからできる限り遠ざかって数学に向かった。後年には、科学の立派な学徒たちは時間を惜しむが多くの古典学者は時間を軽視するという観察結果を得た。ついでながら、学長は心の広い人物であった。そしてラテン語の論説を、最初から最後までラテン語で書くように自分の頭を仕向けるのに成功した。英語で考えて、それをラテン語に翻訳するのではないのだ。私は彼がやったほかのどんなことよりも、この点で彼に感謝している」

*9 彼は同年、奨学金受給資格を得た。

*10 セントジョンの学長ペイトソン博士から、マーチャント・テイラー校の学長に充てた 1861 年 6 月 15 日づけの手紙があり、この奨学金を報せてペイトソン博士が——後年のジョウエット博士と同様に——アルフレッド・マーシャルに常に示した関心の初期の証拠となっている。A. M. が 1877 年にブリストルでの職に応募したとき、ペイトソン博士はこう書いた。「この人物の人格には大いに感じ入っております。これはそのすばらしい単純性、正直さ、自己犠牲的な良心の点で驚くべきものです」

点に達したとき、それが報われた。健全な労働者たちはみんな金鉱に移住してしまい、仕事を続けられた業者はチャールズ・マーシャルだけとなったのだ。数年後に彼は一財産築いて帰国し、賢く反抗的な甥っ子に興味を示すだけの余裕もあったのだ。

1917 年にマーシャルは、当時と後の自分の研究手法について以下のように書いている。

人生の画期が訪れたのは、確か 17 歳くらいのときだ。リージェント通りにおいて、店のウィンドウの前でじっと立っている労働者を見かけたのだ。だがその顔には集中したエネルギーが見られたので、私はそのままそれを見つめ続けた。彼はその店のウィンドウの目印線に、その商売に関係ある短い文章を描こうと準備していた。その文章は、窓に白い文字で描かれるはずだった。腕と手の一振りは優雅な結果をもたらすため、それぞれ自在な一筆でなければならなかった。その一筆は、鋭い興奮の二秒ほどだったろうか。一筆ごとに、彼は数分にわたりじっとして、鼓動を落ち着かせようとするようだった。このようにして失われた十分ほどを節約していたら、その雇用者たちはこの人物の賃金丸一日以上の損失を被っただろう。それを見て私はいろいろ考えたあげく、頭がすっきりしていないときには決して頭を使わず、次々に行う考えの間の合間を、絶対的な反応のための聖なるものとして扱うようにしようと決意した。ケンブリッジ大学にいて完全に自分の好きにできるようになったとき、数学書を読むときは 15 分ごとに必ず休憩をはさむと誓った。いつも身近に軽い文学を用意して、そうした休憩の合間に、シェイクスピアの全著作、ボズウェルの『ジョンソンの生涯』、アイスキュロス『アガメムノン』（無理をせずに読める唯一のギリシャ劇）、ルクレチウスの相当部分などを複数回読み通した。もちろん、しばしば数学で興奮してしまい、止まらずに半時間も読みふけることはあった。だがこれは、心が集中しているということだから、実害はない。

短期間にわたる強烈な集中と、連続的に集中する力の欠如との組み合わせは、生涯にわたり彼の特徴となった。何かそれなりの業績を、ものすごい熱意で実行できることはめったになかった。また長期の記憶力欠如にも悩まされた。学部時代ですら、数学教科書をたどるのは、問題を解くのと同じくらい苦勞させられていた。少年自体は数学能力がきわめて高かったのに、後にそれを失った。

一方、ケンブリッジ大学のセントジョンズカレッジで、アルフレッド・マーシャルはその野心を実現した。1865 年、レイリー卿が首席卒業だったとき、彼は次席卒業で^{*11}、すぐにフェローシップに選出された。彼は分子物理学の研究に取り組みようと提案した。一方で、しばらく大いに尊敬していたパーシヴァルの下、クリフトンカレッジで数学講師としてしばらく過ごすことで生計をたてた（そしてチャールズ叔父に返済した）。しばらく後にケンブリッジ大学に戻り、しばらくは数学学位考査のためのコーチングを手がけた。こうすることで彼に言わせると「数学は私の滞納分を払ってくれた。私は自分自身の心に自由に従えるようになった」

クリフトンで過ごした時間の中で最も重要だったのは、1862 年のクリフトンカレッジ創設のときに教師助手となった H・G・デイキンスと友人になり、彼を通じて J・R・モーズレーと親しくなったことだった。この友情を通じて、ヘンリー・シジウィックを核とす

^{*11} 次席卒業者の有名な一団の一人であり、そこにはウィーヴェル、クラーク・マックスウェル、ケルヴィン、W. K. クリフォードなどがいる。

る知的サークルへの扉が開かれた。この時点まで、彼が同時代人の名士たちと接触があったという証拠はないが、ケンブリッジに戻って間もなく、彼は「グロートクラブ」なる小さい非公式の議論サークルの一員となった。

グロートクラブの発端は、ジョン・グロート牧師のトランピントン副牧師宅での夕食後の議論だった。グロートは 1855 年から 1866 年の死亡まで、道徳哲学のナイトブリッジ教授だった。創設メンバーはグロート以外に、ヘンリー・シジウィック、アルディス・ライト、J・B・メイヤーであり、ジョン・ヴェン^{*12}、キングスカレッジの J・R・モーズレーとセントジョンズカレッジの J・B・ピアソンも間もなく加わった。このサークルとのつながりについて、マーシャルは以下のように書いている^{*13}

1867 年に入会が認められたとき、実動メンバーは F・D・モーリス教授 (グロートの後継者)、シジウィック、ヴェン、J・R・モーズレー、J・B・ピアソンだった。(中略) 1867 年か 1868 年の後で、このサークルは少し停滞したが、W・K・クリフォードと J. F. モールトンの参加で新しい活力がもたらされた。一、二年ほど、シジウィック、モーズレー、クリフォード、モールトン、私が活発なメンバーだった。そしてみんな定期的に参加した。クリフォードとモールトンは当時、哲学をほとんど読んでいなかったの、議論の最初の半時間ほどはだまっただま、他のみんな、特にシジウィックの言うことに熱心に耳を傾けた。それから下を解き放ち、すさまじい勢いになった。自分が耳にした最高の会話を一ダース、省略なしで報告できるとするなら、そのうち二つか三つはシジウィックとクリフォードが主にしゃべった晩から持ってくるだろう。もう一つはまちがいなく、グロートクラブの会合前のあるお茶席での会話になるが、それについては残念ながら記録がない (確か 1868 年初頭だったか)。そこではモーリスとシジウィック以外ほとんどだれも口を開かなかった。シジウィックは、30 年代、40 年代、50 年代のイギリスの社会政治生活の記憶をモーリスからひたすら引き出そうとしていた。シジウィックの質問や示唆に応えるモーリスの顔は、その独得な聖なる放射とともに明るく輝いていた。そして我々他のみんなは、その晩の喜びすべては彼のおかげだと述べた (後略)

この時期、こうした影響の下で、彼の精神発達の中で彼が後年よく言及した危機がやってきた。物理学を勉強しようという彼の計画は (当人の言葉では) 「知識の哲学的基盤、特に神学との関連についての深い関心がいきなり台頭してきたことで中断した」

マーシャルのケンブリッジ大学における学部生時代には、古典より数学を好む傾向は、初期の宗教信仰のまとまりを阻害するようにはなっていなかった。いまだに聖職任命を楽しみにしていたし、その熱意がときには外国伝道のほうに向かわせた。確かに彼は生涯にわたり伝道師ではあったが、他の嗜好との闘争はすぐに決着がついて信仰は抜け落ち、彼はその後生涯にわたり、かつて不可知論者と呼ばれていたものになった。当時のシジウィックとの関係について、マーシャルは以下のように述べている (シジウィック記念式典会合にて、トリニティロッジ、1900 年 11 月 26 日):

名前の上では彼の生徒ではなかったが、実質的に私は彼の道徳科学における学徒で

^{*12} ヴェン博士によるヘンリー・シジウィックとの初期の出会いについては *Henry Sidgwick: a Memoir*, p.134 を参照。

^{*13} *Henry Sidgwick: a Memoir*, p.137 掲載。

あり、ここに寄宿する者の中で私が最年長だ。私は彼に形作られた。彼は言わば、私の霊的な父母だ。というのも困惑したときに私は彼に助けを求め、悩みがあれば彼に慰めてもらったからだ。そして満たされぬまま戻ってきたことはない。彼とともに過ごした一分ごとが、普通の一分ではなかった。私が生きるのを助けてくれたのだ。私も、彼がもっと広い知識と強さを持ちながらも苦闘しなければならなかったのと同じような、問題や疑念の中を進まねばならなかった。そして彼に感謝すべき理由を持つあらゆる人物の中で、私ほど多くの理由を持つ人はいないかもしれない。

マーシャルのケンブリッジでの日々は、ちょうど有識な歴史学者たちによって、イギリスの真面目な哲学世界からキリスト教教義が抜け落ちた決定的な瞬間として捉えられるはずの時代と一致していた。1863年にヘンリー・シジウィックは24歳にして、フェローシップの終身条件としてイギリス国教会の39カ条受入を行い^{*14}、ヘブライ語で申命記を読んで、使徒行伝についての講義を準備しているところだった。当時の若者に最大の知的影響力を持っていたミルは、1865年『ハミルトンの検討』まで受け容れられていた宗教的見解との決別を明らかに示唆するようなものは何も書いていなかった^{*15}。この頃、レスリー・スティーブンはアングリカン派の司教で、ジェイムズ・ワードは反イギリス国教会の牧師、アルフレッド・マーシャルは聖職候補者で、W・K・クリフォードは教会の高位だった。1869年にシジウィックは「ドグマ的な義務から自分を解放するため」トリニティカレッジのフェローシップを辞退した。その後まもなく、このだれもキリスト教徒とは呼べないものになっていた。それでもマーシャルはシジウィック同様に^{*16}、「反宗教的」態度の採用からはできる限り遠いところにいた。彼はキリスト教の道德とキリスト教の理想、キリスト教のインセンティブに共感していた。彼の著作には宗教をどんな形であれ否定するようなものはない。生徒の中で彼の宗教観について何か断言できるような者はいない。晩年に彼は言っていた。「宗教というのはどうも態度のように思える」。そして神学をあきらめたとはいえ、ますます宗教を信じるようになったとも語っていた。

1860年代末の大きな転換は、知的な変化であって、後の世代に属する倫理的・情動的な変化ではなかったし、それをもたらしたのも完全に知的な論争だった。マーシャルは、自分自身の精神的な転換の始まりを、H・L・マンセルの『バンプトン講義』から生まれた論争のせいにしたがる。これはJ・R・モーズレーに渡された本だった。いまの世代はマンセルなど聞いた事もない。だがキリスト教教義を知的な基盤の上に構築しようという最後の試みの主人公として、1860年代には最大級の重要人物だった。1858年にマンセルは、当時オックスフォード大学の教員でセントポールカレッジ学長だったが「ハミルトンから^{*17}、カントを英国教会に奉仕させようとする奇妙な理論を採用した」^{*18}——人間精神の変なごまかしではあるが、丸50年にわたりオックスフォードでは大きな影響力を

^{*14} 彼は1861年に聖職に就かないと決意した。

^{*15} ミルが最終的に意見表明をした『宗教論』は、死後1874年まで刊行されなかった。

^{*16} 晩年のシジウィックの態度についてきわめておもしろいまとめとしては、彼の *Memoir*, p.505 を参照。あるいはマーシャル世代の反応の別の典型例としては W. K. Clifton “Ethics of Religion” (*Lectures and Essays*, ii. 244) を参照。

^{*17} 1836年にサー・ウィリアム・ハミルトンは、系図を確立して男爵の地位の申し出を実現させ、エジンバラ大学で論理学・形而上学の主任教授に指名され、その後八年にわたり、カントやドイツ哲学者たちから引っ張って良いな影響力を、スコットランドの常識の伝統に重ねるといふ危険な試みをおこない続けた。

^{*18} Stephen, *English Utilitarians*, iii. 382.

持っていた。マンセル『バンプトン講義』(1858)はキリスト教正統教義の知的旗振り役最先端としてもたらされたのだった。1865年、マーシャルが学位を得て精神を天の四方に向け始めたとき、ミル『サー・ウィリアム・ハミルトンの哲学検討』が登場し、そこにハミルトンをキリスト教神学に拡張したマンセルの批判も含まれていた。マンセルは反論した。マーシャルによると、マンセルによる正統教義の「弁護は、どれほど弁護しなければならないものが多いかを示してくれた」。この大論争がマーシャルの考えを支配して、しばらくは彼を形而上学研究に向かわせ、そこから社会科学へと向かわせたのだった。

一方1859年、『バンプトン講義』の翌年に『種の起源』が登場し、天や雲から地上の開けた道を指し示した。そして1860-1862年にハーバート・スペンサー『第一原理』(いまは読むに耐えない代物)もまた、ハミルトン-マンセル論争から生じ、新しい方向性を示して、形而上学を不可知論に解消し、根っからの形而上学的な精神の持ち主以外あらゆる人々をその袋小路から引き離れた。形而上学的不可知論、進化論の進歩——そして前世代からの知的遺産としてまだ残っている遺物——功利主義倫理学が、いっしょになって若き精神を新しい方向性へと向かわせたのだった。

だからマーシャルは形而上学から倫理学へと精神を向けた。たぶん、マーシャルが彼に先立つ経済学者世代を支配していた功利主義的思想から決して明示的には離れなかったと言ってもウソではないだろう。だが彼がこうした問題すべてを扱ったときの慎重さは驚くべきものだ——この点で彼はシジウィックをはるかに超えるし、ジェヴォンズとは対極に位置する。たぶん彼の著作の中には、経時在学研究をある特定の倫理学ドクトリンと結びつける記述は一つもないはずだ。経済問題の解決策はマーシャルにとって、ヘドニック計算の適用ではなく、人間の高次機能の行使における慈善条件なのであり、「高次」というのがどういう意味かにはほとんど依存しない。経済学者は「貧困の原因の研究は、人類の相当部分の墮落原因の研究である」*19と主張できたし、またこの主張は経済学者の目的のためには十分なだった。したがって、進歩の可能性は「事実と推測に相当部分が依存している。そしてこれは経済学の範疇にある。これが経済学研究において、主要かつ最大の関心事となるのである」*20。この問題はまた「部分的には人間の天性が持つ道徳・政治能力にも依存する。そしてこうした問題については、経済学者は何も特別な情報手段を持っていない。他人と同じように、精一杯の推測をするしかない」*21とはいえ、これはいまでもその通りだ。

これが彼の最終的な立場だった。それでも、経済学に最初にやってきたのは、倫理学経由でだった。晩年に引き出された彼の精神史の回想で、彼はこう述べた。

形而上学から倫理へ向かい、社会の既存状態の正当化は容易ではないと考えた。現在は道徳科学と呼ばれるものを大量に読んでいたある友人がいつも言っていたのが「ああ、政治経済学を理解したらそんなことは言わないだろう」という話だった。そこで私はミル『政治経済学』を読んで、大いに興奮した。私は物質的快適性ではなく、**機会**の格差の適切さに疑念を抱いていた。そして休暇中に私はいくつかの都市の最貧地区を歩き、次々に通りを歩いて、最貧者たちの顔を見た。次に、政治経済学について、できる限り徹底した研究をしようと決意した。

*19 『経済学原理』(初版) pp. 3, 4.

*20 Ibid.

*21 Ibid.

経済学への転身はまた、彼自身の言葉で数ページにわたり記述されている*22。それが1917年に『貨幣、信用、商業』の序文向けに書かれたものだ:

1867年頃(ケンブリッジで主に数学を教えるのに没頭していた頃)、マンセル『バンプトン講義』が手に入って、人が研究すべき最も重要な主題はその人間自身の可能性だと考えるように仕向けた。そこで私は少し時間を割いて形而上学を研究した。だがやがて、もっと進歩的な勉強に思えた心理学に移った。人間機能の高次で急速な発展の可能性に関するすばらしい検討で、私はある疑問にとらわれた。イギリス(および他国の)労働階級の生活条件は、人生を十分に享受するにあたりどのくらい満足できるものだろうか? 高齢で賢い人々は、生産リソースは、大半の人々に勉強の余裕や機会を与えるには不十分なのだと言う。だから政治経済学を勉強しろという。その助言にしたがい、自分を無味乾燥な事実の土地の放浪者と考えた。純粹思考の奢侈に素早く戻れるのを楽しみにしている存在だ。だが経済科学を勉強すればするほど、それについての自分の知識は、必要な知識に比べてますます小さく思えてきた。そしていまや、ほとんど経済学だけを研究してきた半世紀近くの最後になって、研究を始めたときよりも、経済学についての無知をさらに意識するに到っている。

1868年、まだ形而上学期の頃、カントを原語で読みたいと思ってドイツに渡った。彼はかつてこう語った。「わが導きのカント。崇拜した唯一の人物だがそれ以上は行けなかった。その彼方は霧だらけのようで、社会問題が明らかに前景にやってきた。本物の人生の機会が少数者に限られるのか?」彼はかつてヘンリー・シジウィックを教えたドイツ人教授とドレスデンで暮らした*23。ヘーゲル『歴史哲学』には大きな影響を受けた。またドイツ経済学者、特にロッシェルの研究にも触れた。最後にセントジョンズカレッジの学長バイトソン博士は、カレッジに彼のために道徳科学特別講座を設立するよう説得し、人生のキャリアを提供する重要な役割を果たした*24。ほどなく経済学に落ち着いたが、しばらくは道徳科学の他の分野の短い講義もした——論理学とベンサムについてだ*25。

経済学研究への献身——というのも彼は、父親の願いを満たした場合に比べて精神の聖職任命という意味で、それが劣るものだと考えたことはなかったからだ——はいまや実現した。二年にわたる疑念と精神の迷いは彼の想像力に深い印象を残し、後年になっても、科学的な不偏不党の目で人生の日常活動の様式や原理を研究するという、気高い天職——と彼は考えていた——にふさわしいと考えた生徒たちに、しばしばこれを語った。そうした日常活動こそが、人間の幸福やよい生活の機会を大半を決定づけるものなのだ

*22 マーシャル夫人によりゴミ箱から救出されたものだ。マーシャルの精神的苦悶のあまりに多くの成果はそこに向かってしまった。これは彼の曾々叔父リチャード・マーシャル牧師と同じで、よい詩人で詩を刊行しろとかなりせつつかれたのに、それに対してあまりに賛成できず、死後に出版されないようにと自分の書類を全部焼き捨ててしまったのだ。

*23 仏独戦争中の1870-71年にも彼は再びドイツに渡りベルリンで暮らした。

*24 死の数週間前の会話で、彼は特にヘーゲルの『歴史哲学』と自分の人生の方向性を最終的に決めたバイトソン博士の友情あふれる行動の話をしてきた。ケンブリッジ初の「道徳科学講師」であるJ・B・メイヤーがしばらくセントジョンズカレッジで似たような講師職を持ち、J・B・ピアソン牧師もジョンズにいて道徳科学者でもあったので、別の講師をこの科目に割り当てるのはいささか異様な処置だった。前年1867年にヘンリー・シジウィックがトリニティカレッジの道徳科学講師に指名され、ヴェンも1862年にカイウスの道徳科学講師としてケンブリッジに戻ってきていた。

*25 マーシャル夫人の話では、1870年代初頭にニューンハムで、メアリー・ケネディ(R・T・ライト夫人)と「ベンサムと禁欲主義者の対話」を彼のために書いてやらねばならなかったとのこと。

から。

まだ彼が経済学者ではなかった初期段階を終える前に、少し立ち止まって、この時点において、彼に定められていた人生の見通しの色合いを検討しておこう。

同輩ヘンリー・シジウィックとジェイムズ・ワードと同じく、19世紀最後の数十年にケンブリッジの道徳科学の教授職にあつて、アルフレッド・マーシャルは聖人や説教師の部族に所属していた。だがその二人と同様に、彼は二重の性質を与えられていて、科学者でもあった。人類に対する説教師であり指導者としての彼は、他の似たような性質の人々より特に優れているわけではなかった。科学者としての彼は、自分自身の分野においては、百年にわたり世界最高だった。それでも、彼が高く評価したがったのは、この天性の前者のほうだった。こちらの自己が主だ、と彼は考えた。二番目の自己は、知識をそれ自体のために求める。前者は抽象的な狙いを、実務的な進歩の必要性に従属させる。ワシの貫く目と遠くに飛ぶ翼はときに、道徳屋の使い走りとして地上に呼び戻されるのだった。

この二重の性質は、マーシャルの強みと弱みの混合へのヒントとなる。彼の対立する狙いと強さの無駄遣い。彼について常に言える二面性。彼が引き起こす共感と反感。このすべてへのヒントがここにある。

別の意味で、彼の天性の多様性は純粋な利点となった。経済学の研究は、異様に高水準な専門の才能は特に必要ないようだ。それは知的に見れば、高次の哲学や純粋科学に比べれば、ずいぶん簡単な分野と思われているのではないか？ だがよい、あるいは有能な経済学者ですら、きわめて珍しいものとなる。簡単な分野でありながら、傑出した者がほとんどいない！ このパラドックスの説明としては、偉大な経済学者が珍しい才能の組み合わせを持たねばならないということがある。いくつかちがった分野で高い水準に達し、あまりいっしょに見られないいくつかの才能を組み合わせなければならない。数学者、歴史学者、政治家、哲学者のすべてをある程度は兼ね備える必要がある。記号を理解しつつ言葉で喋らねばならない。個別の問題を、一般的な用語で考察し、抽象と具体に同じ思考の中で触れねばならない。現在を過去に照らして、将来のために考察しなければならない。人間のどんな天性もその制度も、完全に考慮外にしてはいけない。目的意識を持ちつつ、同時に不偏不党でなければならない。芸術家のように浮世離れして誘惑に負けない一方で、ときには政治家のように地面近くにいななければならないときもある。この理想的な多面性の、すべてではないが相当部分をマーシャルは持っていた。だが主に彼の入り混じった教育と分裂した性質が、経済学者に必要な才能の最も本質的で根本的なものを彼に与えていた。彼は明確に歴史学者でもあり数学者でもあった。個別と一般の両方、一時的なものとしてと永遠のものとしての両方を、同時に扱う人物だったのだ。

III

マーシャルの経済学の発展を詳述する作業をむずかしくしているのは、最初の発見と、生徒たちへの口頭報告から、外部世界への本としての刊行までとを一般に隔てる、長い間隔だ。これをやる前に1868年のケンブリッジ大セントジョンズカレッジで講師任命から、1885年に政治経済学主任になるまでの人生の外的な道筋をざっとたどると有益だろう。9年にわたりマーシャルはセントジョンズカレッジのフェローと講師を続け、自分の研究の

基盤を敷きつつ何も発表しなかった^{*26}。グロートクラブへの参入後、彼は W・K・クリフォード^{*27}とフレッチャー・モルトンとことさら親密だった。クリフォードが一番の親友だったが「彼は人を驚かせるのが好きすぎた」。そのしばらく後、「エラヌス」の会員として彼はシジウィック、ヴェン、フォーセット、ヘンリー・ジャクソンなどケンブリッジ啓明第一世代指導者たちと交流があった。当時の彼は、長い休暇ごとに海外旅行をした。マーシャル夫人はこう書く：

彼は 60 ポンド^{*28}とナップサックを持っていき、ほとんどの時間はアルプス高地を歩き回って過ごしたものです。この徒歩は夏毎に彼を弱い男から強い男に変えました。6月初頭にケンブリッジを、へろへろで過労の人物として出発し、10月には日焼けして頑健で姿勢良く戻ってくるのです。ナップサックをかつぐことで背筋のがび 80 歳を過ぎるまでその状態でした。その歳になっても痛々しいまでに頑張っていて腰が曲がらないようにしていました。アルプスを歩くときのやり方は、朝 6 時に起きて、8 時にはもうかなり進んでいるというものです。ナップサックをかついで二、三時間歩くのです。そして、ときには氷河などにすわり、何か本を長々と読みます——ゲーテ、ヘーゲル、カント、ハーバート・スペンサーなど——そして次に、夜を越す場所まで歩き続けるのです。これは彼の哲学段階のことでした。後に彼は、国内取引と外国貿易の理論についてこの山歩きで取り組みました。ある場所から次の場所へと本の大きな箱が送られました。彼は一週間かそこらはナップサック一つでした。シャツを洗うには、急流にそれをつけて、そして肩にかついでアルペンストックにそれをかけて乾したのです。いちばんのむずかしい思索はこの孤独なアルプス散歩で行ったものでした。このさまよう日々で彼はアルプスがお気に入りとなり、それはずっと続いて、1920 年 (最後でした) にさえ私たちは南チロルにでかけて、彼は高山の空気の中ですわって仕事をしました。

アルフレッドが最高の仕事をしたのはいつも屋外でした。セントジョンズのフェローになったとき、主要な思索は朝 10 時から午後二時までにと、夜 10 時から朝 2 時までに行いました。日中は野生を独占できたし、夜はニューコート修道院を独占できたのです。1880 年代初頭のパレルモでは、静かなホテルの屋根で仕事をして、風呂のカバーを日よけに使っていました。オックスフォードでは執筆する庭園に「檻」を作りました。ケンブリッジではバルコニーで作業をして、後には書斎にしたてた「箱船 (アーク)」と呼ぶでかい回転シェルターにこもり、チロルでは石の山とキャンプ用のスツールとエアクションを作って「玉座」と称するものを作り、後年になるとテントシェルターを持ち歩いて、その中で日中を過ごしました。

1875 年にマーシャルは四ヶ月にわたり訪米した。東部全域を旅して、サンフランシスコまで足を伸ばした。ハーバード大とイエール大では、どこでも主要な市民にたくさん紹介を受けた。だが主要な狙いは、「新興国における保護貿易の問題の研究」だった。これにつ

^{*26} この時期に属するたまの論説は、『エコノミック・ジャーナル』1924 年 12 月号に私が載せた書誌にまとめた。

^{*27} マーシャルより三年下だったクリフォードは 1863 年にトリニティにやってきて、1868 年にフェローシップに選ばれ、ケンブリッジに暮らし、1871 年までその部屋は「無数の友人たちの物理的出会いの場となった」(サー・F・ポロック回想記参照)

^{*28} 彼は独身時代のフェローとしての必要経費は年額 300 ポンドで、うち 60 ポンドは休暇旅行の費用だと述べていた。

いて彼はあらゆる方面に問い合わせ、旅の終わり近くには故国に手紙でこう書き送った。

フィラデルフィアで私は、主要な保護貿易支持者と何時間も話をした。そしていまや、彼らが奨めてくれた本を読んだから、彼らの主張の全貌がわかる。そして他にイギリス人でこれを主張できる人物はこれまでも今もないと思う。

イギリスに帰国して彼は、1875年11月17日にケンブリッジ道徳科学クラブで、アメリカの産業についての論文を口頭発表し、後の1878年にはブリストルで「アメリカの経済状態」について講演を行った。米国旅行は大きな印象を残して、将来のあらゆる研究に影響した。なんでも、実際に学んだことではなく、何を学びたいかについて知ることができたのが大きいとのことだった。物事を重要性に応じて見ることを学び、来るべきアメリカの優位性を理解して、その原因とそれが採る方向性を知ることができたとのことだった。

一方で彼は教授のフォーセットとヘンリー・シジウィックを助けて、ケンブリッジ大学で政治経済学を真面目な研究として確立しようとしていた。最初期の学生H・S・フォックスウェルと、後にわが父親のジョン・ネヴィル・ケインズは1875年に道徳科学学士資格審査を受け、この三人に加わってケンブリッジにおける道徳科学講師となった。

1876年にアルフレッド・マーシャルは、メアリー・ペイリー嬢と婚約した。彼女は有名な大司教の曾々孫だ。ペイリー嬢はマーシャルの元生徒で、ニューンハムの経済学講師だった*29。彼の処女作『産業の経済学』(1879)は彼女との共著だ。実は当初は彼女の本であって彼のものではなく、ケンブリッジ大学拡張講師たちの求めで彼女が執筆を進めていた。二人は1877年に結婚した。結婚生活47年で、彼女の献身への依存は全面的なものだった。彼女の人生はアルフレッドとその仕事に捧げられ、その無私と理解の度合いのため友人たちや古い生徒たちは二人を切り離して考えたり、彼の知性が達成したことのため相当部分を彼女の輝く人柄の贈り物のおかげと思わなかったりするのにはむずかしいほどだった。

結婚は、フェローシップ喪失を意味したので、しばらくケンブリッジを離れるということになった*30。マーシャルは、ユニバーシティカレッジの初代校長および政治経済学教授としてブリストルにかけた。

ちょうどそのとき [とマーシャルは記録している) オックスフォード大学のベイリオルカレッジとニューカレッジは、ブリストルに初の「ユニバーシティカレッジ」つまり、大都市の住民に高等教育の機会が手に届くようにするカレッジを設立しようとしていた。そこには独自の大学がなかったからだ。私は初代学長に選ばれた。妻は午前中に、主に女性主体の学生たちに政治経済学を講義し、私は主に若きビジネスマン主体の生徒たちに晩に講義を行った。

*29 ペイリー嬢は、ニューンハムカレッジ創設前に、1871年にリージェント通り74番でクロウ嬢の下で暮らすようになった先駆者五人の小集団の一人だった。この家は、ヘンリー・シジウィックがこの目的のために購入してしつらえたものだった。「ケンブリッジにおける個性高等教育促進協会」の学生として道徳科学学士資格審査を1874年に受けた彼女とブレイ嬢は、この集団の中でケンブリッジの優等学生となった初の二人だった。

*30 一、二週間にわたりマーシャルは、自分を養う手段としてケンブリッジのエスクワイヤー・ベデルシップ候補生になろうかという考えを弄んだ。だが「その趣意書を見れば見るほど気に入らなかった」。実は彼は短期にわたりセントジョンズの管理人だった。

定期的な講義に加えて、彼は多数の一般向け夕べの講義を行い^{*31}、ヘンリー・ジョージ『進歩と貧困』についての連続講義もあった。ブリストルでのマーシャル夫妻の活動は大いに感謝され、町は彼がそこを離れたあともずっと、マーシャルのキャリアに関心を抱き続けた。だが事務作業、特に大学の乏しい基金からして学長の主要な仕事となったお金の無心は、苛立たしく気性に合わないものだった。結婚後間もなく、主に腎臓結石のために健康と神経が衰え始めた。彼は学長職を辞職したくてたまらなかったが、1881年まではよい機会がなかった。この都市にラムゼイ教授が化学部にやってきたので、彼がよい後任となった。彼は妻と共に一年近くイタリアで過ごし、パレルモの小さなホテルの屋根で5ヶ月にわたり仕事をしてから、フィレンツェとヴェネツィアに引っ越した。1882年に健康がかなり回復したので、まだ政治経済学教授の職があったブリストルに戻ってきた。だがその後生涯にわたり、いささか心気症ぎみのままで、病弱寸前なのだと自分のことを考える傾向にあった。実際には、身体はきわめて頑健で、きわめて高齢になるまでは著述家として健在だった。だが精神の均衡はすぐに、過剰な没頭や論争や意見の相違ですぐに乱された。むずかしい精神作業に継続して集中する力は、自分が望むほどではなく、気まぐれや思いつきにさえ適合するような生活のルーチンに頼るようになった。実際には、彼は自分の身体的な強さと連続的な集中力が、先に広がっているのが見える仕事の分野と、自分が思いついたがまだ世界に発表していない実際の理論構築には不足しているのだという気分に関わっていた。35歳だった1877年に、彼は頭の中で新しい学問とほとんど言えるものの基盤を構築し終えており、それが人類にとって大きな影響を持つものとなるのも知っていた。そしてその後五年にわたる、そうしたすべてを世界に提供しているべき時期での健康と強さの崩壊は、彼の士気を少し破壊したのだった。ただし、その決意は不動だった。

ブリストルのユニバーシティカレッジの理事には、ベイリオル学長のジョウエット博士とヘンリー・スミス教授がおり、この二人はときどきブリストルを訪れるとマーシャル家に滞在するのが常だった。ジョウエットの経済学への関心は常に活発だった。ベイリオル講師として彼は政治経済学の決まった講義はして、生涯の終わりまでこの学問の個別の学部生を導き続けた^{*32}。ジョウエットのアルフレッド・マーシャルに対する興味と信頼は、理事会会合に続く長い晩の会話で激しく書き立てられ、1883年にアーノルド・トインビーが夭逝すると彼はマーシャルを招いて、トインビーにかわりベイリオルのフェローとなり、インド公僕候補者に選ばれた人々に政治経済学講師となるよう招いたのだった^{*33}。

オックスフォードにおけるマーシャルのキャリアは短かったが成功裏に終わった。有能な生徒を集め、一般向け講義は生涯の他のどんな時期よりも、人数が多い熱心な聴衆が参加した。別々の機会に、ヘンリー・ジョージとハインドマンとの公開論争に参加して面目を保ち、大学で有力な地位に就いていた。だが1884年11月にフォーセットが氏に、

^{*31} 特におもしろいのが「国富の一部としての水」というもので、再録されている。

^{*32} マーシャルが『エコノミック・ジャーナル』(vol. iii, p.745) 寄稿した、ジョウエットの魅力的な短い追悼文にはこうある。「彼は現代の経済学者を悩ませるほとんどの疑問を抱いていた。だが彼自身の英雄はプラトンとリカードだった。彼らの言ったこと、そして彼らの発言から直接出てくることはすべて、彼にとって特別に興味あることなのだった。(中略) 純粋経済学でお気に入りの主題は通貨で、それをめぐる最近の論争には大いに興味を示していた。彼の見方は一般に保守的だった。そして金銀複本位制に宗旨替えしたことはなかった。だが彼はリカードが指し示したところなら、どこへでも行く用意があった。そしてしばらく前の手紙で彼は、世界が価値基準として金では不足するようになり、ギッフェン氏の魂を悩ませた各種の人工的な基準を採用するようになるのではという疑問を提示していた」

^{*33} ジョウエットはずっとアルフレッド・マーシャルが気に入っていて、マーシャル夫妻がオックスフォードを離れたら、ケンブリッジを訪れるときには彼は夫妻のところに滞在するのが常だった。

1885年1月にマーシャルは、政治経済学教授としてケンブリッジに復帰した。

IV

経済理論をめぐるマーシャルの真面目な研究は1867年に始まり、1883年には最終形になりつつあった。それでも、適切な形で世間一般に少しでもそれが発表されたのは1890年で(『経済学原理』)、彼が最初期に取り組んで1875年にはほぼ完成していた主題は、50年近くたって1923年なるまで本としては刊行されなかった(『貨幣、信用、商業』)。その一方で自分のアイデアを秘匿していたわけではなく、講義や友人と生徒との話の中では、惜しみなく出していた。それが指摘に印刷されたパンフレットや生徒たちの著作を通じてもっと広く出回り、王立委員会によって質疑応答として抜粋された。だから当然、本が登場したときには、一世代前に絶賛されていた目新しさと画期性はなくなっていたから、刊行物を通じてしかマーシャルを知らない世界中の経済学者は、イギリスの同時代人や後継者たちが彼に与えている突出した地位をなかなか理解できないかもしれない。したがって、彼のアイデアの進捗をたどってみるのも一興だろう。これは完全なデータがないので必然的に不完全なものとなる。そしてその後、刊行の不幸な遅れの理由または弁明を述べてみよう。

経済学についてのマーシャルの真剣な研究が始まったのは1867年だった。この時代の感覚をしっかりとさせよう。ミル『政治経済学』は1848年に登場した^{*34}。ミルが自分で校閲した最後の版、第七版は1871年に登場し、ミルは1873年に死んだ。マルクス『資本論』は1868年に登場した。ジェヴォンズ『政治経済学の理論』は1871年^{*35}、メンガー『国民経済学原理』も1871年、ケアンズ『主導原理』は1874年だ。

つまりマーシャルが始めたときには、ミルとリカードが相変わらず至高の存在でそれに挑む者はなかった。他に唯一重要な影響は、マーシャルがしばしば話をしたロッシェルだけだ。数学手法を適用するという発想は出回っていた。だがこれといった成果はあがっていなかった。クルノー『富の理論における数学原理』(1835)は『経済学原理』初版の序文で特に大きな影響として言及されている。だがこの本を彼がいつの時点で入手したのかは知らない^{*36}。これと、当時のケンブリッジ数学者に対する自然な影響^{*37}と、ミルの第3

^{*34} この有名な本の執筆は、マーシャル『原理』と何と対照的なことか！ミル『政治経済学』は1845年に執筆開始で、1847年末には印刷所にまわっていた。この2年強の期間のうち、ミルがアイルランド農民問題について『モーニングクロニクル』紙に記事を(時に週に五本も)書いていた六ヶ月間は筆が止まっていた。同時にミルは昼間はインド局にずっと詰めていたのだった(ミル自伝を参照)。

^{*35} ジェヴォンズ『黄金の価値の暴落を見極め、その社会的影響を述べる』は1863年に登場し、『価格変動』は1865年。この日本の論文からは、現代的な指数という手法が出現した。彼の『商業危機の周期性』の主要論文はもっと後だった(1875-79年)。

^{*36} 数学的処理に関する初期のヒントや先触れについての完全な書誌は、アーヴィング・フィッシャーの持つクルノーの本のバージョン補遺を参照。フリーミング・ジェンキンの1868年の小論文は一般に1870年まで出回らなかったが、マーシャルはその頃には確実に知っていた(彼がジェヴォンズの本について『アカデミー』に1872年に書いた書評を参照)。ジェヴォンズ「政治経済学の一般的数学理論について的小論」は1862年に英国教会ケンブリッジ会合で口頭発表され、『統計ジャーナル』に1866年に掲載された。だがこの論文は数学処理を実はまったく含んでいない。この論文の狙いは、「効用係数」(つまり最終効用)の発想を漠然と示し、この概念により経済学の基盤はヘドニク解析の数学的な拡張として解けるのだと主張することだった。

^{*37} これはクラーク・マックスウェルとW. K. クリフォードの時代、数学学位考査の子供たちが、その道具を実験科学に適用しようとした時代だった。道徳科学にそれが拡張されるのも時間の問題と思われつつあった。少し前のブルとレスリー・エリスは同じ方向を目指す重要な影響をもたらした。1876年のアルフレッド・マーシャルは、その教育からして、図や代数を弄ぶようになるのは当然だった。それ以上の

巻第18章における「国際的価値」をめぐる代数例の算術的な処理の痕跡が^{*38}、一義的にマーシャルが取り組まねばならないものすべてだった。1867年から1875年の米国旅行までの思索の進捗についてマーシャル自身が書いたものを^{*39}、ここに示すのが適切だろう。

数学の個人授業をまた行っているうちから^{*40}、彼はリカードの論理展開をできる限り数学に翻訳した。そしてそれをもっと一般化しようとした。一方で彼は、ロッシェンらドイツ経済学者たちや、マルクス、ラサールなどの社会主義者たちが採用した新しい見方に惹かれた。だが、歴史経済学者たちの分析手法は、彼らが経済的事象の原因だとしたものが、本当の原因なのだとあれほど自信たっぷりに言うのを必ずしも正当化できないように思えた。確かに経済的な過去の解釈は、将来の予測とほとんど同じくらいむずかしいと考えた。また社会主義者たちは、自分たちの問題のむずかしさを見くびっているように見え、私有財産さえ廃止すれば人間の天性が持つ欠点や不足が排除されるという結論に拙速に飛びつきすぎているようだった。(中略) 彼は、実務と、労働者階級の生活ともっと密接なつながりを持つようとした。一方で彼は、あらゆる主要産業の技法についておおまかな特徴を学ぼうとした。その一方では、労働組合支持者、協同組合主義者や、その他の労働者階級の指導者の集まりを求めた。だが生活や仕事の直接研究が長年にわたりあまり成果を挙げないのを見て、彼はその間に、外国貿易について別のモノグラフか、特別論考を書いて暇を潰そうとした。というのもこれに関する主要な事実は印刷物から得られるからだ。彼は、これが特別な経済問題についてのモノグラフ群の皮切りになると提案した。そして、いずれそのモノグラフを集めて、ミルのものに匹敵するスコープを持った、一般論考にしたいと考えた。その巨大な論考を書いたあとなら、もっと短い一般向け論考も書けると思ったが、その前ではダメだ。これが最高の仕事の順番だという意見は決して変えなかった。だがその計画は状況の力によって却下され、ほとんど逆転されてしまった。確かに、外国貿易モノグラフの最初の草稿は書いた。そして1875年には、新興国における保護主義の問題を研究したいと思い、アメリカ産業のトップの人々を訪ねた。だがこの仕事は結婚により中断させられた。そして婚約中に、妻との共著で、産業の経済学について短い説明を書いた。これは労働階級の読者向けに無理に単純化したものだった。その過程で彼はかなりの重病にかかり、しばらくはそれ以上の重労働はできそうにないと思えた。だがしばらくして、経済問題の図式的な記述をやりなおせるくらいには健康が続くのではと思うようになった。1873年には故ワルラス教授にそれを刊行しろと促されたものの、彼はそれを断った。というのも、実際の条件に関する具体的な研究すべてから切り離したら、それが実際よりも現実の問題ともっと直接関連しているように思われかねないと考えたからだ。したがって彼は、いくつか不可欠な制約や条件をつけはじめ、このようにして彼の『原理』第五巻の核が書かれた。その核から、前後に拡張する形で現在の『原理』が書かれ、1890年に刊行されたものの形を採るようになったのだった。

説明も影響も必要ない。

^{*38} 特にミルが第3版(1852)に加えた §§ 6-8 を参照。

^{*39} この記述はマーシャルによって1867年にドイツで編集された『主要経済学者の肖像と短い生涯』に寄稿された。

^{*40} 1867年。

運命の決断は、「特別な経済問題についてのモノグラフ群」を書くというプロジェクトの放棄で、むしろ経済的な大御所の親玉から、完璧な形で完全武装して出版される、総合論考が優先されることになった——特に、マーシャルが真っ先に取り組んだ特別な問題である、お金と外国貿易が論理的に、この論考のいちばん最後にまわされることになったときにその宿命が決まった。結果として、お金や外国貿易の話は50年にわたり日の目を見なかったのだった。

彼の研究の順番は、証拠から見て次の通り。1867年に彼は図式手法の開発から始め、特に外国貿易の問題について、リカードとミルの影響下で考察した。ここにクルノーの影響も加わり、程度は劣るがフォン＝チューネンの影響も加わった。フォン＝チューネンからの影響について彼はこう書く。

我々の自然についての観察により、物理世界だけでなく道徳世界においても、総量ではなく量の増分と関連しており、特にあるモノの需要が連続関数で「限界」増分が安定した均衡では、それに対応する生産費用増分とつり合っているという事実を重視するよう仕向けられた。この側面における連続性の全貌は、数学記号やグラフの助けを借りないとなかなかはっきり見通せない。^{*41}

1871年にはこの路線でかなり進捗していた。新しいアイデアを生徒たちに説明し、図式化された経済学の基盤が本当に敷かれつつあった。だがその都市に登場したのが、独立した研究の結果であるジェヴォンズ『政治経済学の理論』だった。この本の刊行は、マーシャルにとってはかなりの失望と苛立ちだったにちがいない。それはマーシャルがゆっくりと積み上げつつあった新しいアイデアから、目新しさのクリームを奪ってしまったのだから——しかもマーシャルの判断では、それに適切または正確な取り組みをしていない。それでもこの本はまちがいがなく、「限界」（あるいはジェヴォンズの呼び方では「最終」）効用の発想とつながったアイデア群の発表において、ジェヴォンズを一番乗りにした。一番乗りをめぐるマーシャルの言及は、きわめて控えめだ。慎重にジェヴォンズが一番乗りについては疑問を呈さず、一方で間接的にながら、かなりはっきり決然と、自分の研究はほとんど何もジェヴォンズに負っていないと指摘するのだった^{*42}。

1872年にマーシャルはジェヴォンズ『政治経済学』を『アカデミー』で書評した^{*43}。この書評は^{*44}決して否定的ではなかったもの、いささか冷淡で、いくつか明確なまちが

^{*41} 『経済学原理』初版の序文。

^{*42} 特に以下の二つを参照。(I)「限界」という用語の利用に関する彼の脚注(『原理』初版序文など)。そこで彼は、この用語はフォン＝チューネンを読んだ結果として示唆されたものであり(ただしフォン＝チューネン自身はこの用語を使っていない)、それはジェヴォンズの本が登場する前だったと匂わせている(1862年英国教会論文(刊行1866)で、ジェヴォンズは「効用係数」という用語を使っている)。そして、ジェヴォンズの著書が登場したときには一時的にジェヴォンズに敬意を表して、彼の「最終」という用語を採用した(たとえば処女作『産業の経済学』など)。そして、後に自分の元の用語のほうがいい(またメンガーの「Grenznutzen」のほぼ文字通りの等価物だ)と思って戻したのだと示唆している。(2)第III巻 chap. vi. § 3の消費者レント(あるいは余利)についての脚注を参照。そこで彼はこう書く。「消費者レントの厳密な計測という概念は、1844年にデュビュイが刊行したものだ。だが彼の業績は忘れ去られた。そして、送稿用と限界(または最終)効用の関係について初めて明解な分析を英語で発表したのは、1871年のジェヴォンズで、彼はデュビュイを読んでいなかった。この私に消費者レントという概念が浮かんだのは、クルノーやフォン＝チューネン、ベンサムの影響下で需要と効用の数学的な側面を研究しているときだった」

^{*43} 私の知る限り、マーシャルは生涯で書評を二本しか書いていない。1872年にこのジェヴォンズの本を書評、そして1881年にエッジワース『数理心理学』の本を書評を書いた。

^{*44} この書評は、私の知る限りではマーシャルの印刷物として初のもの(年齢三十にして)だが、その主な関心

いを述べている:

本の主な価値は [マーシャルの結論では]、その大きな定理にあるのではなく、多くの些末な点の独創的な扱い、その示唆的な見解と慎重な分析にある。我々は絶えず、新しい服をまとった旧友たちにお目にかかる。(中略) だから何か商品の総効用は、その最終的な効用の度合いに比例するものではないというのは、お馴染みの真実である。(中略) だがジェヴォンズ教授はこれを衣装の主導的なアイデアにして、それを使って多くの経済的事実を示している。

だがマーシャルが後年『原理』を書いたときには、ジェヴォンズについて一点の曇りもなく公平でありたいという願望と、嫉妬の色をすべて回避したいという願望とがきわめて明確になっている。確かにある下り^{*45}で彼はこう書いている:「残念ながらここでも他の部分と同様、自分の主張を強力に述べようというジェヴォンズの熱意が、不正確なばかりか誤解を招きかねない結論に到達してしまった。(後略)」。だが別のところ^{*46}ではこう述べる。「現代で、リカードのすばらしい独創性にジェヴォンズほど接近した著述家はいないも同然だ」。そして「我々の感謝の対象として最も高く多様なものに値する思想家はジェヴォンズしかいない」。

正直言えば、ジェヴォンズ『政治経済学の理論』は見事ながらも性急で、不正確かつ不完全な一冊であり、マーシャルの細心の注意を払った、完全で、きわめて良心低位で、きわめて地に足の着いた手法の正反対の代物だ。それは忘れがたいかたちで、最終効用と、労働の負の効用と製品の効用のバランスという概念を持ちだしてくる。だがマーシャルの辛抱強く、一貫した苦闘と科学的天才が発達させた見事な稼働機械に比べると、単に利発なアイデアという貧弱な世界^{*47}に暮らしているものだ。ジェヴォンズはやかんを見て、子供の喜びに満ちた声で叫んでみせた。マーシャルもまた沸いたやかんを見て、黙ってすわり蒸気機関を作ったのだった。

一方のマーシャルは、「外国貿易と国内価値の純粹理論」についての論文群で明かされた図式方式の検討を続けた。これは1873年にはほぼ完成していたはずで、生徒たち(特にサー・H・H・カニングム)にはその頃に伝えられていた。それは『外国貿易の理論およびレッセフェールドクトリンと関連した関係問題』の連続していない章^{*48}として執筆され、彼はこれをアメリカからの帰国後の1875-77年にはほぼ完成させ、1869年以降の研究をまとめたものとした^{*49}。1877年には寄り道をしてマーシャル夫人と共著で『産業の経済学』を書いた。1879年にヘンリー・シジウィックは、マーシャルの一番乗りの権利が奪われかねないことに危機感を抱いて、各種論文を私的な回覧のために印刷し、そのコピーがイギリスや外国の主要経済学者に送られた^{*50}。こうした章は、いまやその元の形ではなかなか手に入らないもので、世間一般に公開されたことはなかったが^{*51}、その最

は、それが自分の主題についての永続的な態度を多くの点で先触れしているという点だ。

^{*45} P. 166 (3rd ed.).

^{*46} *Note on Ricardo's Theory of Value* での記述。この論文の主眼はジェヴォンズへの回答だった。

^{*47} いまや実際に手にしてみると、経済学をベンサムへのヘドニック解析の数学的応用に還元しようというご大層なアイデアの果実は、なんともがっかりするものではないだろうか!

^{*48} 『外国貿易』(こちらが先にくる)の最終命題は命題 XIII だ。国内価値の最初の命題は、命題 XVII だ。

^{*49} 「主に1869-1873年」——『貨幣、信用、商業』p.330を参照。

^{*50} 『原理』初版の序文参照。ジェヴォンズはこれについて1879年刊『理論』第2版で参照しているし、パントレオーニはそのほとんどを *Principii di Economia Pura* (1889) に再録している。

^{*51} ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスは、『経済学と政治学における希少論考のリプリント』シリー

も重要な部分は『経済学原理』第 V 巻の 6-7 章に組み込まれ、(初出から 50 年後に)『貨幣、信用、商業』の補遺 J に再録された。

マーシャルの数学的、図式的な経済理論の展開は、その把握力、包括性、科学的精度の面できわめて優れており、先人たちの「利発なアイデア」をはるかに超えたものだったから、彼こそ現代の図式的経済学創始者だと主張しても正当だろう。図式は、一般に賢い入門者にきわめて強力な魅力を行使し、われわれみんなが直感をもらい、それをチェックするための道具として活用して、結果の簡潔な記録として使っているが、その問題の深みを探るにつれて、一般には背景に退いてゆくものだ。マーシャルの結果が一滴ずつ外部世界に染みだし、完全な形でそれを受けとったのは限られた集団だけだったという事実は、本来なら彼が得ていたはずの国際的な名声をかなり失わせることとなり、そしてこの分野の進歩を遅らせることになったかもしれない。それでもわれわれは、考えて見れば、マーシャルが自分の図式的な道具立てを単独で発表することでキャリアの皮切りとしたがらなかった理由を理解できると思う。

というのも、それは経済学への彼の知的アプローチにおいて必要な付属物ではあったが、そうした手法の利用を強調したり称揚したりするように見られるのは、彼が生涯のごく初期から経済的探究の正しい態度と考えていたものから、正反対に遠ざかることなだった。さらにマーシャルは、ケンブリッジで数学第二位で卒業し、分子物理学を検討したいという野心も抱いていた人物として、数理経済学を構築する基礎的な代数、幾何学、微分解析のいささか「貧相な」寄せ集めについて、知的・審美的な観点から常にちょっと軽侮の念を感じていたのだった^{*52}。たとえば物理学とは違い、経済理論の中で数式であらわせる骨ばかりの部分は、経験的に得られている複雑で不完全な事実の経済的な解釈に比べれば、きわめて簡単なもの^{*53}であり、有益な結果を確立するのにほとんど有益な道を導いてはくれないのだ。

マーシャルはこのすべてを心底まで確信しきっていたが、その確信は生徒たちの全員が共有するものではなかった。主要な数学など、彼にとっては見聞に等しかった。彼は世界という広大な実験室に入り、そのうなりを聞いていくつかの音を聞き分け、事業主の舌で語り、同時にきわめて知的な天使の目ですべてを観察したいと思った。そこで彼は、上述の引用にある通り「実務と、労働者階級の生活ともっと密接なつながりを持つ」とした

このようにマーシャルは、現代の図式手法を創始しながら、それらに分をわきまえた扱いをさせるべく、かなりの自己否定を使うことになった。『原理』が登場したとき、図は脚注に投獄するか、あるいはいちばん自由なときでも、短い補遺の縛りの中、裏庭で体操ができる程度にされたのだった。1872 年のジェヴォンズ『政治経済学の理論』書評という早い時期にすら、彼はこう書いている。

ズの第 1 号として、1930 年にこの二つの論文のコピー版を刊行した。

^{*52} 数理経済学はしばしば、専門数学の訓練をそれまであまり受けていない生徒たちに、しばしば過剰な魅力と影響力を行使してしまう。数学はほとんどだれでも理解できるほど易しいが、小規模にとはいえ、学生を純粋形態の構築知覚の喜びへと紹介し、自分でいじれるおもちゃのレンガを渡すので、現代数学の摩天楼建築や入念に構築された記念碑を見たこともない人々には、新たなスリルを与えてしまうのだ。

^{*53} ベルリンのプランク教授は、量子理論の有名な創始者だが、あるとき若い頃には経済学を学ぼうかと思っただけで、それがあまりに難しくやめた、と語ってくれた！ プランク教授は、数理経済学の総体を数日で楽々と習得できるだろう。彼が言っていたのはそういうことではない！ だが最高の経済解釈で必要とされるような、論理と直感と、ほとんどはあまり厳密でない事実の広い知識のごった煮は、かなり高い精度で知られている比較的単純な事実の意味合いや前提条件について、極限まで想像してつきつめる才能を主に持っている人にとっては、確かに圧倒的に難しい。

手練れの数学者たちが、イギリスでも大陸でも、そのお気に入りの手法を経済問題の扱いに適用した多くの検討から、いくつか有意義な示唆を得たことは評価しよう。だがその理由づけや結果において重要だったことのすべては、ほとんど例外なしに、普通の言葉でも表現できた。(中略) ここにある本は、数学を削除しグラフだけ残したら改善されるであろう。

1881年にエッジワース『数理心理学』を書評するときにも、「本書は明らかな天才の徴を示すものであり、今後きたるべき偉大なものを約束している」と始めつつ、彼はこう付け加える。「特に、彼がどこまで数学の暴走を抑え、実際の経済学の実事の見えないところに連れて行かれないようにするかは、興味深いところだ」。そして最後に1890年に、『原理』の序文で彼は、数式より図が好きだと強調し、そしてその図も有用性は限定的だと述べ^{*54}、後者は指摘な利用のための便宜的なものに貶める^{*55}。

こうした手法への過剰な中毒に対する反発と、自著を「ビジネスマン」に敬遠させてしまうのではという(かなりどうでもいい動機)懸念から、マーシャルはやりすぎたかもしれない。結局のところ「多くの純粋理論の問題は、いったん図の利用を覚えたら、好き好んで別の形で扱おうとはしなくなる」ならば、そうした図式はどう考えても経済学の中級以上の課程の一部になるはずだからだし^{*56}、学生たちにはもっとも十全かつ明解な形で提供されるべきだからだ^{*57}。

だが一方で、自分の最初期の検討を印刷物にしたがらないというマーシャルのためらいは、自分の対象の真の性質に対する洞察が、その最も高次で有益な発展においてどれほど深遠だったかを示し、また自分が世界に提供するものについての理想の高さからくるものでもあったが、おかげで『外国貿易の理論およびレッセフェールドクトリンと関連した関係問題』が不完全な形ですら1877年に発表されなかったのは、残念きわまることではあった^{*58}。なんとといっても、この検討に乗り出したのは、「これに関する主要な事実は印刷物から得られるからだ。」そしてこうした事実は、新興国での保護主義の実際の仕組みについて訪米注に実地に入手した事実とあわせて、モノグラフには十分と考えられそう。その説明としては、病気に倒れたとき、余命数年と思ったので、それを価値と分配についての根本的な思想のとりまとめに費やさねばと思ったから、というものが考えられる。

^{*54} 「文中の議論は決して図に依存はしていない。削除しても大丈夫だ。だが経験的に、図なしの場合にくらべて重要な原理について、もっとしっかりした把握を可能にする。そして多くの純粋理論の問題は、いったん図の利用を覚えたら、好き好んで別の形で扱おうとはしなくなる」

^{*55} 「経済問題における純粋数学の主要な用途は、自分の考えを自分で使うために、手早く簡潔で厳密に書き下すのに役立つ、ということらしい。(中略) 経済ドクトリンの他人による数学翻訳を長々と読むのが、だれにとっても時間の有効利用となるかは怪しい」

^{*56} マーシャル自身は講義ではいつも使いまくっていた。

^{*57} マーシャルの門下生二人、サー・ヘンリー・カニングムとA・W・フラックス氏は、この需要を満たすために多少は手を売った。だが50年後の今も、このための理想的な教科書はまだない。ポウリー教授が最近出した、*Mathematical Groundwork of Economics* は、全体として図式手法より代数手法を好むという点で、マーシャルの考え方といささか逆行している。

^{*58} 実際、なぜ彼がこの本の刊行をあきらめたのかはよくわからない。1877年半ばまで、彼はまちがいがなく出版するつもりだった。父の1877年2月8日の日記によると「マーシャルは執筆中の外国貿易に関する本の原稿を一部持っていて、目を通してくれと言った」とのこと。シジウィックもジェヴォンズもその原稿を読んで、高く評価し、それをブリストル教授職任命の推薦状で述べた。シジウィックはこう書く。「彼の近刊はすでに大半が書き終えられているが、それが彼を一気に存命中のイギリス経済学者の中で高い地位に押し上げることは疑問視していない」と書き、ジェヴォンズは「貴殿の外国貿易理論についての本は、その中身を知る者たちに大いに期待されており、この分野で貴殿を最も独創的な著者の地位へと押し上げることでしょ」と述べる。

それ以上に残念なのが、マーシャルが『お金の理論』出版をきわめて高齢になるまで遅らせたことだ。その頃には、彼のアイデアからは新鮮さが失われ、その議論展開からは刺激と強さが失われていた。経済学において、マーシャルの独創性と思考の先駆性がこれほど発揮された分野はないし、同時代人に比べて洞察と知識の優秀性がこれほど大きかった分野もない。

ここにもまた、経済学の半独立部分として、モノグラフで別に扱うのが理想的な主題があった。それなのに、王立委員会への提出証拠やたまの論説に埋め込まれたものを除くと、自分の言葉と自分の雰囲気と適切なタイミングで世界に与えられたものはひとつかけらもないのだ。お金は、1870年代初頭以降、彼の講義で最もお気に入りの主題だったので、彼の主要な発想は一般的な形では生徒たちに知られるようになり^{*59}、結果としてケンブリッジではマーシャル自身の講義と、その引退後はピグー教授の講義から、最近までは印刷された本に見られるものとはまったく別の、そしてずっと優れた（と言っていいと思う）口頭の伝統が生じた^{*60}。この時点で、金融理論に対するマーシャルの主要な貢献を簡単にまとめてみるのがよいだろう。

マーシャルは金銀複本位制論争以前には、お金について何一つ印刷物にしなかったし^{*61}、その論争のときですら介入までにかなり待った。この問題についての彼の初の真面目な貢献は、1886年の貿易と産業停滞に関する王立委員会の質問への回答に含まれている。続いて、1887年3月『コンテポラリーレビュー』の記事「一般物価変動への対処方法」記事がやってくる。そしてその少し後に、1887年と1888年の金銀委員会に対する膨大な証拠がきた。1899年には、インド通貨委員会に提出された彼の証拠がある。だが彼の理論は、1923年に『貨幣、信用、商業』が登場するまで系統的な形では展開されなかった。

その頃には、彼の主要なアイデアはほぼすべて、他人の成果の中で表現されてしまっていた。彼は80歳を超えていた。体力的にも、以前の断片をつなぎあわせる以上のことはあまりできなかった。そしてその貧相な処理は、困難な部分やややこしい部分を慎重に回避するものでしかなく、20年前や^{*62}、30年前（こちらのほうがよかった）に彼が抱いていたものの、抜け殻でしかなくなっている。だが実は、1871年頃に書かれた現存する最古のマーシャルの原稿は、貨幣数量説についての彼の分析についてのものだ。そこに『貨幣、信用、商業』第一巻第4章のすべての内容が含まれていて、しかもその展開と説明の強力は五十年後よりはるかに上だという事実は、1867年と1877年から始まった、彼の思索の連続性を見事に示すものだ。『コンテポラリーレビュー』誌の論説や金銀委員会への証拠の根底にある主要アイデアに彼がいつ到達したかという証拠はない^{*63}。だが『産業の経済学』に見られる商業危機に関する下りは、交易停滞理事会への回答で大いに引用

^{*59} 彼の講義は系統だったものではなかったため、平均的な学生は愚か優秀な生徒ですら、講義ノートに何か継続性のあるものや完全なものを記録はできなかった。

^{*60} マーシャルがずっとはやい時期に解明していたものと似たアイデアを、本の形で何度かにわたって刊行したのは、アーヴィング・フィッシャー教授が最初だった。

^{*61} 『産業の経済学』（1879）はこの問題を扱う意図はなかったし、それについてごく短く言及しているだけだ。だがこの本における景気循環への言及は重要だ。

^{*62} この点については個人的な回想からも言える。というのも私が彼のお金についての講義に出席したのは、そのほんのわずか後のこと（1906年）だったからだ。

^{*63} 理事たちに「合成金属本位制」を主張するにあたり、彼はこう語っている（Q.9837）：「私も自分なりに金銀複本位制を趣味としており（中略）もう10年ほどそれを弄んできた」。ここから考えると、彼はこの考え方を1878年以前から抱いていたことになる。

されているものだが、同じ流れの発想を 1879 年に抱いていたことを示している。経済学のこの部分について、マーシャルの独創的な貢献の最も重要で特徴的な部分を以下にまとめよう。

1. **価値の一般理論の一部として貨幣数量説を展開。**彼は常に、お金の価値は一方ではその供給と、もう一方ではその需要によって決まるのだと述べていた。そしてその計測は「各人がすぐ使える形で手元に持ちたいと考える、各種商品に対する支配力の平均在庫」で行われる。彼はそこから、各個人がすぐ使える形で手元に置きたいかを、これがもたらす利点と他の資産形態の利点との**バランス**の結果として決めるのだ、と説明した。上述の 1871 年原稿で、彼は次のように書いている。

王国における硬貨の総量が持つ交換価値は、その社会の人々がこのすぐ使える形で購買力を維持しようと思った商品の総量とちょうど等しい。だから銀の通貨では、流通している銀のオンス数がわかれば、一オンスの銀が他の商品でどのくらいの価値になるのかを求めるには、上で得られる商品の量を、そのオンス数で割ればいい。仮に、その社会の各個人が平均で、自分の年間所得の十分の一について、そうした形で他の商品への購買力を維持することにしたとしよう。そのお金は、この場合はすべて銀と仮定しているが、王国の年間所得の十分の一の価値ということになる。各人の習慣が変わって、みんなが自発的に、他の方法での利得のために、欲しいと思ってもすぐにそれが満たされないような形で求めるようになったとしよう(訳注:ごめん、この文意味がわからん)。平均で各人が、所得の 20 分の一だけすぐ使える形で購買力を保ちたくなるとしよう。かつての価値で今までほどの銀は求められなくなるので、その価値は低下する。すると製造業で銀が使われるようになり、一方で鉱山からの銀の生産は抑えられる(後略)*64

このアプローチ手法の大きな利点は、それが「流通の急速性」というぎこちない概念を避けられるということだった(とはいえ、彼はこの二つの概念の間の厳密な論理的関係を示しているのだが)。「だがしかし、『流通の急速性』とお金の価値とのつながりを確立しようとする、そこには大きなややこしさが導入されてしまう。ミル氏はこの邪悪について知っているが(『政治経済学』第 3 巻第 8 章 § 3 後半)、その対処法は示していない)*65

マーシャルはまた、通貨に対する不信が、人々が現金在庫を保有しなくなるため、物価を引き上げるという点を説明している——これは最近の出来事で、みんなの注目を集めた現象だ。そして彼は、物価水準の変動(これは景気循環に伴うものだ)は社会が手元に置きたがる「すぐ使える購買力」*66の量の変動に対応するものも気がついてた。

2. **「実質」金利と「金銭」金利とのちがいと、お金の価値が変動するときにそれが信用サイクルに対して持つ意味合い。**これについての初の明確な説明は、たぶん『原理』(1890)第六巻 6 章(結語)のものだ*67。

*64 私が 1906 年に彼の講義に出席したときには、この理論をとってもエレガントなグラフで説明したものだ。

*65 この抜粋と上の抜粋は、1871 年の原稿からのものだ。

*66 これは私が「実物バランス」と呼んだものについてのマーシャルの用語だ。

*67 この内容を「インド通貨委員会へのメモ」(1899)で繰り返すにあたり、彼は当時は目新しかった、アーヴィング・フィッシャー教授『物価上昇と金利』(1896)における展開について、非常に鷹揚な言及をしている。また似たようなアイデアとしてマーシャルの処女作『産業の経済学』第 3 巻第 1 章 §§ 5, 6 を

3. 現代の信用システムにおいて、お金の追加供給が物価に影響する因果的な仕組みと、割引率が果たす役割。これについての定番文献にして、長年にわたり学生が参照できる唯一の詳細な説明は、マーシャルの 1887 年『金銀委員会への証拠』(特にこの証拠の最初の部分) で、これに 1899 年『インド通貨委員会への証拠』が補遺となる。金融理論の最も根本的な部分が四半世紀にわたり、移行期の実務問題にしか関心のない政府委員会に提出された質疑応答に埋め込まれた形でしか生徒たちの手に入らなかったというのは、実に奇妙な状況ではあった。
4. 相互に兌換性のない通貨の為替レート決定手段としての「購買力平価」体系化。内容的にはこの理論はリカードによるものだが、カッセル教授による現代の条件への適用可能な形での記述は、『金銀委員会への証拠』(1888) に補遺されていたメモ^{*68}の中でマーシャルに予見されていた。これはまた、1899 年に印度通貨委員会に提出された結論の中でも重要な役割を果たしていた。マーシャルが金銀委員会に提出した意見の概要からの次の部分は、彼の理論を完結にまとめている。「B が不換紙幣(たとえばルーブル)を持っているとしよう。各国で、物価は通貨量とそれが行うべき仕事との関係で決まる。ルーブルの黄金価格は、A での黄金価格が B でのルーブル価格との間で持つ比率(輸送費も考慮する)でちょうど決まる」
5. 指数作成の「連鎖」方式。この手法が初めて言及されるのは、「一般物価変動への対処法」(1887) 最終節への脚注(「購買力一単位の推計方法と題されている) だった。
6. 金銀合成金属本位制に基づく紙幣流通の提案(リカード「経済手金で安全な通貨の提案」に沿ったもの)。この提案が最初に見られるのは交易停滞理事会への 1886 年回答だ。彼は通常金銀複本位制は常に、代替金属主義へとつながるのだと論じた。彼はこう続ける。

金銀複本位制のために通貨を大幅に乱すのであれば、それが確実に実現されるようにすべきである。(中略) 私の別の提案は、彼(リカード) から得たもので、たとえば 2000 グラムの銀の延べ棒を、たとえば 100 グラムの金にくっつけることですぐに実現できる。政府は常に、決まった通貨量でこのくっつけた延べ棒を売買するものとする。(中略) この計画は多くの国が同意するのを待たなくても、どの国でも開始できる。

彼は、このやり方をすぐに採用しろとは言わなかったが、少なくとも金銀複本位制よりは望ましいものとして提示した。同じ提案が 1887 年に、「一般物価変動への対処法」(1887) 論説と、『金銀委員会への証拠』(1888) でも繰り返された^{*69}。

7. 長期契約に選択的に使える、公式の将来貨幣価値標準表の提案。この提案が最初に登場するのは、雇用の不連続性への対処法についての論文補遺だ。この論文はマー

参照。

^{*68} 『ちがった国々の通貨のちがいが国際貿易にもたらす影響についての覚書』と題されたもの。彼が例に挙げたのは、イギリスの黄金とロシアのルーブル紙幣との場合だった。そしてイギリスの黄金とインドの銀でも議論を行った。購買力平価(という用語を彼は使っていない)からの乖離は考えにくい、と彼は論じた。ただし例外は、「ロシアの経済的な未来についての全般的な不信により、投資家たちがロシアから資本を引き上げたいと思う」場合だ—最近の出来事を考えれば驚くべき予見性だ。この覚書の一部は、『貨幣、信用、商業』補遺 G の冒頭部分として再掲された。

^{*69} また『貨幣、信用、商業』p.64-67 も参照。

シャルが 1885 年「産業補償会議」で口頭発表したものとなる^{*70}。彼はそこで述べたことを、1886 年『交易停滞理事会への回答』でも繰り返している。彼はこう述べた。

産業の中断の大きな原因は、しばらく先にポンドがどの程度の価値を持つのかという確実な知識の不足である。(中略) この深刻な害悪は、経済学者たちが昔から提案してきた計画により大幅に低減される。この対処法を提案するにあたり、私は政府が事業を助けるようにすることを望むが、自ら事業を行うことは望まない。政府は、黄金の購買力の変化をできるだけ忠実に示す表を発表し、支払い契約は固定された購買力単位で行えるように支援すべきである。(中略) 定常一般購買力の単位が、契約者双方の自由な選択として、金利支払いや融資の返済、賃料や賃金や給与の契約におけるほとんどあらゆる契約で自由に選択できる。(中略) この提案は通貨の形とは関係ないものであり、それを変える必要は一切ないのだと強調しておきたい。この計画は国際貿易の場合にはめったに当てはまらないことは認めよう。だが、我が国内の取引への安定化にとってはとても重要なものとなり、これを導入するのはとても簡単だし、事業への政府介入を一般医取り巻く邪悪とはまったく無縁なので、この主張を敢えて皆さんの即座の関心のためにお奨めしたいと思う次第である。

この重要な提案はすでに述べた、マーシャルの「一般物価変動への対処法」についての見事な論説でさらに展開された。この論説の最初の三節は次のように題されている。「I. 価値基準変動の邪悪」「II. 貴金属はよい価値基準にはなれない」「III. 金や銀と独立した価値基準について」。マーシャルはそのあらゆる著作で、主張の中で最も目新しい、重要なものを脚注に入れるという特徴的な習慣があり^{*71}、この論説でも以下で抜粋するものが脚注に含まれていた。

通貨の供給を統制してその価値が一定になるようにするというあらゆる計画は、国ごとに行うべきで国際的であるべきではないと私は考える。そうした計画の二つを簡単に紹介するが、私はそのいずれも支持しない。最初の計画だと、通貨は不換となる。自動的な政府部局が、1 ポンドが一単位以上になったらコンソル債を通貨で買い、それより下がればコンソル債を売る。(中略) もう一つの計画は、兌換通貨によるもので、一ポンド紙幣は政府部局に対し、その時点で購買力 0.5 単位を持つ量の黄金と、その時点で 0.5 単位の購買力を持つ銀を要求する権利を与えると定めることである。^{*72}

『エコノミスト』は合成金属本位制と選択的表基準をバカにした。そしてマーシャルは、常に非実務的とか「ビジネスマン」(あの伝説の怪物) の理解を超えとか思われるのを過剰に恐れていたのでは、固執しなかった^{*73}。

^{*70} 「対処可能な原因が (a) 雇用の継続 (b) 賃金水準に、どこまで悪影響を与えるか？」と題された発表。

^{*71} マーシャルの原著は、脚注と補遺だけを読んで本文は無視したほうが、その逆よりもよいとすら言える。

^{*72} この文章の最後の部分は合成金属本位制の採用を想定している。二つ目の計画はアーヴィング・フィッシャー教授「補償ドル」の案と似ている。

^{*73} 1923 年 12 月、拙著『お金の改革論/貨幣改革論』を送ると、彼はこんな手紙をくれた。「年月がたつうちに、国際通貨があるべきだというのがますますうなずけるものに思えてくる。そして、それ自体としてはバカげている、黄金こそが価値を「自然」にあらわすという発想が、実に見事な役割を果たしたとも思える。私は自分を素人通貨治療師と自認してきた。だがその能力について、自分にギリギリのよい評価すら

V

上で、図式手法に関するマーシャルの手法や理論、外国貿易の理論、お金と信用の原理に関する出版が遅れた理由や口実を説明してみると約束した。思うにその理由は、彼の生涯あらゆる時期にあてはまるものも多いが、一部はよいもので、一部は悪いものだった。まずはよいものから見よう。

マーシャルは、すでに上で指摘した通り、経済理論の骨格はそれ自体としては大した価値はなく、有益で実用的な結論の方向にあまり導いてくれないという見方に、かなり早い時期に到達していた。そもそもの意義は、その理論を目下の経済生活の解釈に適用することだ。これは産業や商売の実際の事実について深遠な知識を必要とする。だがこうしたものや、それが個別の人々に対して持つ関係は、絶えず急速に変わっている。彼のケンブリッジでの就任講義*74から抜粋してみると、彼の立場がわかるだろう。

この世代が経済学の観点からもたらした変化は、人そのものが相当部分まで状況の僕であり状況とともに変わるといふ発見からきている。今世紀初めのイギリス経済学者たちの主要なまちがいは、彼らが歴史や統計を無視したということではなく、人間を言わば定数としてとらえ、そのバリエーションの研究にあまり注意を払わなかったことだ。したがって彼らは需要と供給の力に、実際よりもはるかに大きな機械的、規則的な動きを付与してしまったのだ。その最も致命的な失敗は、産業の習慣や制度がどれほど変わりやすいか見なかったことだ。だが社会主義者たちは、経済学者たちがまったく考慮しなかった人間行動の秘められた源泉について、きわめて強烈に感じ、何かを知っていた人々だった。その荒っぽい狂詩曲の中に埋まっていたのは、哲学者や経済学者が大いに学ぶべき、鋭い観察や有望な示唆だ。今世紀初頭のイギリス経済学者たちの偏狭さがもたらした悪い結果の中で、最も残念かもしれないものは、社会主義者たちに経済学ドグマを引用してまちがった適用をする機会を与えてしまったことだ。リカードとその主要な支持者は、自分たちが構築しているのが普遍的な真実ではなく、ある真実の集合の発見における普遍的な応用の機械でしかないのだということ、他人にもはっきり示さなかったし、自分たち自身ですらはっきり理解していなかった。経済的な理由づけの中心的な仕組みには高い超越的な普遍性を見出すものの、私は経済学ドグマに何ら普遍性を見出さない。それは確固たる真理の体系ではなく、確固たる真理発見のためのエンジンなのだ。^{*75}

こうした見方を持ち、上で彼が注目を即して先人たちの失敗が最大級の被害を引き起こして、経済学者への反発が大きかった時代に生きていた者として、彼は当然ながら適切な応用と切り離れた経済学の道具を独立して発表するのは気が進まなかった。図や純

与えられない。そして私は間もなくこの世を去るはずだ。だがもし機会があれば、天国にやってきた新参者たちに、通貨の疫病に対する治療法を見つけたかどうか尋ねるだろう」。国別通貨と国際通貨の選択について言えば、私は彼が 1887 年に書いたほうが真実に近く、価値一定通貨は、少なくとも一義的には国別通貨でなくてはならないと思う。

*74 *The Present Position of Economics*, 1885,

*75 これはツギハギの引用だ——つながない下りを私が勝手につなぎあわせている。この講義の一部は『原理』第一巻第 4 章でほとんどそのまま書き起こされている。

粹理論は、一人歩きすると数理学の対象や手法と、社会科学の対象や手法との間の混乱を増してしまい、利益より被害のほうが大きく、彼の考える正反対の力点を強調することになりかねない。自分の知的練習問題について、それが現実世界と持つ接点を見つけないという苦勞なしに公開するというのは、悪い例に追随してそれを広げるだけだ。その一方で、関係する事実はきわめて手に入れにくかった—現在よりはるかに困難だ。1870年代と1880年代の事態の進展は、特にアメリカでは異様に急速で、いまやたくさん存在するまとまった情報源はほとんどなかった。1875年から1895年の20年間で、彼は実際には大いに本当の事実に対する把握力と経済的な判断力を大いに高めており、1875-1885年で刊行できたはずの仕事は、1885-1895年で刊行できたものに比べるとずっと劣ったものになっていただろう。

もう一つのまともな理由は個人的なものだった。人生の決定的な瞬間に彼は健康を害した。それが回復してからも、講義の準備や生徒への対応時間で、書籍執筆に大きな中断が生じた。また精度をあまりに入念に追求しすぎ、また簡潔な表現にもこだわったので、すばやい執筆は無理だった。彼は特に、断片を大きな全体像の中にはめこんで、他の部分とのやりとりや関係の中でそれを絶えず書き直すという仕事にはことさら不向きだった。彼はいつも大著を書こうとしていたのに、そのすばやい実行と継続的な集中力を欠いていた(J・S・ミルはこれができた)し、また全体についての連続的な芸術的感性も(アダム・スミスとはちがって)もちあわせていなかった。これがないと、大論考の完全な成功はおぼつかない。

話はだんだん、ダメな理由と認めざるを得ないものの説明に近づいてきた。経済学においてはどんな最終的な見解もあり得ず、物事が実に急速に変わることを考慮すると、自分の文章能力や書籍執筆の余裕の制約から考えて、一大論考を重視する余り別々の独立したモノグラフを放棄するという決断は致命的なものだったのではないだろうか？ 私はそう思うし、ある種の弱さがそれを悪化させたと思う。

マーシャルは、自分の能力が存命中の同時代人よりずっと高いのを認識していた。1885年の就任講義で彼はこう語った。「12年前にイングランドは、ある国にまとめて存在した最も有能な経済学者の集団を擁していた。だがそれが一人ずつ奪われていった。ミル、ケアンズ、バジヨット、クリフ・レスリー、ジェヴォンズ、ニューマーチ、フォーセットだ」。その時点では、地位的にマーシャルの足下にも及ぶ人はだれも残っていなかった。未来の経済学を受けつぐ彼の生徒たちに対して、マーシャルは時間と戦力を喜んで割いた。だが彼は、自分の生焼けのパンを世間に出して、多くの頭脳による協力の有効性を信頼し、世間がそこから得られる糧を自由に引き出すに任せようという意欲はなかった。彼は自分自身の原理原則とは裏腹に、不可能なはずの最終的な成果を目指していたのではなかったか？ 経済学論考は、教区的な価値は大いにあったかもしれない。各世代毎に、メインディッシュとして論考が一つ必要なのかもしれない。だが経済的事実の一時的な性質と、独立した経済原理のあられもなさから見て、経済学の進歩と日常的な有用性のためには、先駆者やイノベーターたちが大論考を捨てて、パンフレットやモノグラフを重視すべきだということになるのではなかろうか？ 私はさっき、ジェヴォンズ『政治経済学』について、それが見事なパンフレット以上のものではないと言って貶めた。だが彼の偉大な個人的地位と、他の精神を刺激する無敵の力を与えたのは、自分のアイデアを発表しようという意欲なのだった。ジェヴォンズが経済学にもたらした貢献のすべてはパンフレットの性質のものだった。マルサスは『人口論』初版の後で、それを大論考に仕立ててダメ

にしてしまった。リカードの最高の業績は、一過性のパンフレットとして書かれた。ミルは、その独得な才能により成功した論考を実現はしたものの、それは科学よりは教育のほうに大きく貢献し^{*76}、次世代の航海するシンドバッドたちのために、海の老人のようにそこにじっとすわっているだけの存在になったのではなかったか？ 経済学者たちは、四つ折り版の大著の栄光はアダム・スミスに任せて、現在を生き、風にパンフレットを撒いて、常にその時代に応じて書かねばならない。不死性など実現できるとしても、偶然のものでしかないのだ。

さらにマーシャルは、自分の叡智を完全に着飾らせるまで家に缶詰にしておくことで、自分自身の真の才能について誤解していたのではないだろうか？ 上で引用した一節で、彼はこう述べる。「経済学は確固たる真理の体系ではなく、確固たる真理発見のためのエンジンなのだ」。私たちが使うこのエンジンは、おおむねマーシャルが作り出したものだ。彼はそれを世界に提供するはるか前から、生徒たちの手に委ねた。このエンジンの構築が、マーシャル特有の天才の本質的な業績だった。だが彼は、自分が否定して、特にその才能もなかった「確固たる真理」を大いに追いかけてまわした。私は経済学というのがどういう意味かを知る以前のかかなり早い時期に、父が悲しくグチっていたのを覚えている。父は生徒および同僚として、マーシャルの思想の発展をほとんど発端から見てきたし、自分の固有の強みと弱みがどこにあるのかを頑固に理解しようとしなかったのも見てきた。そして、実現不可能な彼の野心が、世界に彼の頭脳と天才の真の宝を与えるのを阻んできたのも見てきた。世界中の経済学は、この気性が少しちがっていれば、ずっと急速に進歩し、マーシャルの権威と影響力もはるかに高まっただろう。

他に二つの特徴に言及しておかねばならない。まず、マーシャルはまちがいをあまりに恐れ、批判への耐性がなく、どうでもいい話ですら論争ですぐに頭に血が上った。あまりに感受性が強くて、批判者や論敵に対する懐の深さがなかった。拙速にしゃべると訂正を受けかねないという恐れが、他の傾向を悪化させた。結局のところ、たまにまちがっていたところで別に害はない—特に早めにそれが見つかっていれば、それでも、この性質は彼が決して緩めようとしなかった、科学的精度と真理の高い基準—生徒たちはそれを畏敬の念で崇めた—の欠点でしかなかった。

第二に、マーシャルはよいことをしようと腐心しすぎた。彼は人間の厚生や労働階級の状況といったものに直結しない、議論の知的な部分を過小評価する傾向があった。その知的な部分こそが間接的に最も重要な部分であってもだ。そして、そういう部分を追求するのは、最も気高いことに取り組んでいないと感じてしまうのだった。それはすでに述べたように、固く冷たく批判的で感傷のカケラもない知性と、まったくちがう種類の感情やほぼ口にされることのない大望との対立から出てきたものだ。知性がグラフや外国貿易やお金を追求すると、彼の体内に住まう長老派的な悪鬼じみた道德屋が出てきて、そいつはあまりに分からず屋なのでそれに反対してしまう。人生の終わり近く、知性が鈍くなり説教する悪鬼が表面に出てきて、その生涯にわたる抑圧に文句を言うようになると、彼はこう言った。「人生をやりなおせるなら、心理学をやるべきだった。経済学は理想とのつながりがあまりに薄い。それについてあれこれ語ったら、ビジネスマンに四でもらえなくなる」。でもこうした考え方は常に彼につきまとうっていた。彼は若い頃のこんな話をよくし

^{*76} ジェヴォンズは、『政治経済学』を福音書じみた教科書として講義で使わなければならなかったからというだけで、ミルを死ぬほど嫌っていた！

てくれた。「政治経済(当時はまだ経済学という言葉は発明されていなかった)についてできる限り徹底した研究をしようと初めて決意した頃、店のウィンドウに小さな油絵を見かけて[それは「落ちぶれ果てた」人物のような、驚くほどやつれて悲しそうな男の顔の絵だった]それを数シリングで買ったんだ。それを大学の部屋の暖炉にかけて、それを我が守護聖人と呼び、こんな人物をどうやって天国に入れるようにするか考え抜くのに身を捧げたんだ。一方、私は純粋経済学の準数学的な面にもかなり興味を持ち、自分が単なる思索家になるのではと恐れた。だが、我が守護聖人を一目見ると、正しい道に引き戻されるようだった。最終的な狙いの研究から、一時は支配的だった金銀複本位制についての問題などで脇道に逸れたときには、これはことさらに有益だったよ。私はそんな問題は大好きだったが『追跡本能』のおかげでそっちのほうに惹かれてしまったというわけだ。これは、常に生徒たちの胸を打った、もう一つの偉大な性質—そのすさまじい無私の心と公德心—がもたらす欠点だったのだ。

VI

とにかく 1877 年にマーシャルは脇道にそれて、妻の『産業の経済学』(1879 年刊)を手伝った。これはケンブリッジ大学拡張講義のマニュアルとして意図されたが、執筆が進むにつれて、ますますマーシャル自身の作品となった。後年に、マーシャルはこの小著にかなりつれない扱いをするようになった。『原理』出版後には、その刊行を差し止めて、1892 年にはまったく同じ題名の完全に別の本で置きかえた。この新しい本はおもに『原理』の抜粋版であり、「それを入門学生のニーズに適合させようとする試み」なのだった。思うにマーシャルの気持は、自分が初めてここで世に発表した価値の理論が、どうしても短く不完全な形でしか述べられておらず、それなのに、11 年間にわたって世間はそれを元に評価を下すしかなかったということから来ているのだろう。1887 年と 1888 年の『クオータリー・ジャーナル・オブ・エコノミクス』で、この小著を読んだアメリカの経済学者たちとの論戦はこの気持をさらに強めた。また後の彼は、まともな講義とは言えない拡張講義の入門学生たちに、あまり真面目でない本で軽く簡易に教えられるようなものとしての経済学という発想に反発していた^{*77}。1910 年に彼は、1879 年版の日本語翻訳者への手紙でこう書いている。「この本は、単純さと科学的精度を組み合わせるのが可能かもしれないという期待から書き始めたものだった。だが一部の話題については簡単な本は書けるものの、経済学の中心的な教義は簡単ではないし、簡単にすることもできない」

だがこうした気持は、この本に本当に不当な扱いを強いた。この本は有能な審判から高い評価を得て、その出版期間ずっとにわたり、小さな教科書としては最高のものだった^{*78}。もし入門教科書がほしいのであれば、この本は同時代やそれ以前の他の本に比べると、書かれた最高のものだった—フォーセット夫人やジェヴォンズやその多くの後継本に比べてもずっといい。さらに第 3 巻の産業組み合わせ、労働組合、労働紛争、協力についての後半は、こうした重要な問題について現代的な初の満足できる解説となっている。

^{*77} だが拡張講義運動(またはその現代版の WEA)の根底にある理想への共感がないどころではなかった。マーシャルは、発端からこの運動と関わっており、自分でも 5 年にわたりプリストルで拡張講義を行っている。

^{*78} 世間はこの本を実に気に入ったので、絶版にされるまでに 15,000 部が売れた。

この本が片付いたとき^{*79}、マーシャルの健康状態は最悪だった。1881年に療養で外国にでかけたときには、お金や外国貿易に戻ったりはせず、『原理』にやがて登場する中心的な理論に専念した^{*80}。オックスフォードでの校長職、ケンブリッジへの転職、そこでの講義準備、金銀複本位制論争への寄り道と『金銀委員会への証拠』といった邪魔が次々に入りつつ、その後9年はこの本の準備に費やされた。

マーシャルは当初、単一の巻で経済学の全分野をカバーするつもりだった。分配理論は1883年と1884年に形成されつつあった^{*81}。1885年夏(湖で)、初のケンブリッジ長期休暇の間に、その本は最終形を取り始めた。彼はこう書いている^{*82}。

今年やった作業はあまり満足できるものではなかった。その一部は、私が次第に自分の本の古く狭い着想よりも成長しつつあったせいだ。もとの構想では、この学問の根幹となるべき抽象的な理由づけが全面に出るはずだったし、また自分のライフワークの(次第に改良される)主要な産物となるはずの二巻本に直行するだけの勇気をすぐには奮い起こせなかったせいでもある^{*83}。

1886年:

主要な仕事は本の計画の見直しだった。これは夏の間、クロマー近くのシェリಂಗム滞在中に危機を迎えた。それから本の中身を、最終形態に近いものにまとめた。少なくとも第一巻についてはそうした。そしてその後、初めて個別の章について、印刷されるべき形にまとめ始めた。

1887年(ガーンジー島にて):

本の執筆をかなり進め、マクミランと出版の取り決めをして、この学年のちょうど終わりに印刷所にゲラを送り始めた。そのすべてだが、第六巻の半分は除く。これはまだ出版の準備ができていない形でタイプされているが、出版の準備をするための用意はできている—つまり中身はほぼできあがり、配置もほぼ決まっている。

1888年には:

長い休暇の終わりに、第五巻を印刷所に入れた。第六巻もほぼ手から離れた。後に通常価値または分配と交換の本の前に、生産費用についてもっと考える新しい巻を入れることにして^{*84}、そこに通常価値に関する巻の後半にまわすつもりだった議論を(いささか拡大して)入れることにした。その巻がいまや第7巻になる。この決断はゆっくりしたもので、この暦年の間にはそれ以上の進展はあまりなかった。

1889年には:

^{*79} その序文には「交易と金融の経済学」に関する姉妹編が近刊と書かれているが、結局書かれなかった。

^{*80} マーシャル夫人の手紙によると「第3巻の需要の話はもっぱら、パレルモの屋根の上で1881年11月-1882年2月に考え抜かれて書かれたものです」

^{*81} これは1884年夏に、ガーンジー島のロッカミ湾滞在中の二日ほどで書かれた論説の中であらずじとして登場している。これは1885年「組合年鑑」の中で「賃金の理論と事実」と題して発表され、同年に産業報酬会議における口頭発表論文の補遺として採録された。

^{*82} 以下の抜粋は、1885-1889年の自分の仕事をまとめたいくつかのメモからのもの。

^{*83} また「夏の間の仕事はマディングリー通りの新居の計画作りで大いに邪魔された」

^{*84} 初版の後でこの巻は第五巻に組み込まれたので、価値は再び第六巻となった。

1889年最初の4ヶ月間では第六巻に取り組み、最初の四章の初稿を仕上げ、五巻を終えた。一方、数学補遺をかなり検討して、その相当部分を印刷にまわした。長期休暇は、うち八ヶ月をボルドー湾で過ごしたが、主に第六巻の5章と6章および第七巻の1-5章に費やされた。

作業はいまや急速に終わられて、1890年7月に刊行された。

1890年にマーシャルの名声は高く^{*85}、『経済学原理』^{*86}第一巻^{*87}は待ち受ける世界に送り出された。それは即座に完璧な成功をおさめた。この本はマスコミのあらゆるところで、主要な記事と全ページ書評の対象となった。ジャーナリストたちは、この本が経済学に貢献した厳密な業績や革新を見分けることはできなかった。だが驚くほどすぐに、それが経済思想の新時代をもたらしたことは見分けた。『ポールモール・ガゼット』曰く「我が古き大学の一つにおける教授が、生涯の研究を政治経済の科学を社会的完全性の科学へと練り直すのに捧げたというのは素晴らしいことである」。新しい政治経済学がやってきたのであり、古い政治経済学、かの陰気な科学は「個人を純粋に利己的で何でも欲しがらぬ動物として扱い、国家をそうした動物の寄せ集めとして扱っていたが」、これにより死んだ^{*88}。『デイリー・クロニクル』によると「これは政治経済学の揺らいだ信用を復活させ、おそらくは現在の世代にとって、先代にととのミル『原理』に相当するものとなるだろう」。『マンチェスター・ガーディアン』によると「これは経済学についてのその他あらゆる記述のほとんどを、古びさせるか陳腐化させる。マーシャル教授の論考が、政治経済学の発達における画期となると予想しても尚早ではないし、経済的探究の方向と性質に対するその影響はきわめてよいものとなるのもまちがいない」。これらは全般的なコーラスの一例だ。

マーシャルとその教科書の影響だけの下で育ってきたわれわれには、ミル『政治経済学原理』からマーシャル『経済学原理』までの長い空位期間におけるこの学問の地位を理解するのはむずかしいし、マーシャルの本が出たことでどんな差が生じたのかもわかりにくい。以下はエッジワース教授からのメモの助けを借りて、この本がもたらした知識への驚くべき貢献をまとめたものだ^{*89}。

1. 価値の決定において需要と生産費用がそれぞれ果たす役割は、リカードのわかりにくさとジェヴォンズの復権で無用の論争を引き起こしていたが、それがやっと明確になった。マーシャルの分析の後では、それ以上何も言うことはなかった。エッジワース教授はこう書く。

^{*85} 「現代において、これほど刊行物が少ないのにこれほどこの問題の権威として高い評価を得ている人物はめったにいない」と『スコツマン』は述べた。

^{*86} これはイギリスで純価格で発売された初の本で、出版産業の歴史で重要な位置を占める。(サー・F・マクミランの純書籍契約 x899, pp.14-16 を参照)。これは持続的な流通の見事な例となった。初版から最初の30年で27000部が売れ、戦時中を除けばずっと年間千冊という安定した勢いで売れ続けた。その後十年にわたり2万冊が売れた。つまり年に二千部ずつだ。現時点(1932年末)までに57000冊が売れている。

^{*87} この第一巻という部分は、1910年に第六版が出るまでそのまま残った。

^{*88} 別に古い政治経済学が本当にそんなものだったわけではないが、これはマーシャルの見通しがそこに与えた影響を表現するジャーナリスト的なやり方なのだった。

^{*89} それに先立つ著作での示唆や予想も含む。というのもエッジワース教授が『原理』初版の書評(*The Academy* 1890年8月30日)で書いたように:「マーシャル教授の主要アイデアの一部は、大なり小なり前著(小著『産業の経済学』)や、未完とはいえ決して知られていないわけではなかった論文で、完全に述べられていた。夜明けの光は、太陽の姿が地平線の上に姿をあらわす以前に広まってしまっていたのだ」

生産費用に投げかけられた新しい光は、それが価値決定に果たす役割についてもっとはっきり見分けられるようにしてくれた。マーシャルが他のところで語っていたように、古典派著者たちは直感に導かれて、供給の力を需要よりも上に置いたが、それは正しい方向だった。ジェヴォンズ、ベーム＝バヴェルクなどが前世紀の70年代や80年代に大いに貶められた古い著者たちの復活は、初版の書評子に対して次のように表現される印象を残した。「かりそめの批判の霧が取り払われ、永遠の山が、その同様の高みから眺められた自然な崇高さを持って再び現れる」

2. 価値は需要と供給の均衡点で決まるという一般的なアイデアが拡張され、経済宇宙のあらゆる要素が相互の均衡と相互作用により己の位置に置かれるというコペルニクス的仕組みの総体が見出された^{*90}。経済均衡の一般理論は、二つの補助的な概念、**限界と代替**によって強化され、有機体としての有効性を得た。限界の概念は効用を超えて拡張され、ある値の周辺で微小な変動としてとられられるものや、ある値に対する機能的な関係が小さい変動ととらえられるあらゆる経済要因のどんな条件でも均衡点をあらかずのものとなった。代替の概念は、均衡が回復または導入されるプロセスをあらかずのために導入された。特に**限界での代替**は、消費のちがう対象についてだけでなく生産要素についても導入され、きわめて実りの多い結果をもたらした。さらに次の点がある。

各種生産エージェントたちが相互に占める、二重の関係がある。一方で彼はしばしば雇用での競争相手となる。費用との比率で他のものより高率の高いエージェントは、他に代替して使われ、これにより他に対する需要価格は抑えられる。そしてその一方で、そのすべてはお互いにとって雇用の場を構成している。他のエージェントが提供しない限りそのだれにも雇用の場は存在しない。万人の共同の産物である国民配当は、そのそれぞれの供給と共に増えるが、それはお互いの需要の唯一の源となる^{*91}。

この手法のおかげで、賃金や利潤は価値と需要供給の一般法則の中に吸収されることになった—ちょうど前のお金の理論が吸収されたのと同じだ。同時に、労働者の賃金や雇用者の利潤を決める、需要と供給のふるまいの特異性も十分に分析された。

3. 経済分析における要因として、時間要素を明示的に導入したのは主にマーシャルのおかげだ。「長期」「短期」の概念もマーシャルのもので、彼の狙いの一つは、「需要供給の均衡の一般理論への様々な期間への適用を貫きつなげている連続的な糸」^{*92}をたどることだった。

これと結びついているのは、いまや明瞭な思考に不可欠とみんなが考える「外部」経済と「内部」経済のちがい^{*93}、および「主要費用」と「補填費用」のちがいで、これはマーシャルが最初に明確にしたものだ。この対概念の中で、前者は確か

^{*90} すでに1872年にジェヴォンズの書評で、マーシャルは経済要因の位置が相互に依存し合っているというアイデアを持っていた。彼はこう書く。「太陽系のあらゆる体の運動が、その他すべての動きに影響し、影響されるのと同様に、政治経済の問題の要素でもそうなる」

^{*91} *Principles*, bk. vi. chap. xi. § 5.

^{*92} *Principles*, bk. vi. chap. xi. § 1.

^{*93} 収穫逓増条件の下での均衡に関する正しい理論においてこの区別が果たす決定的な重要性はもちろん、現在では自明だ。だが『原理』以前はそうではなかった。

『原理』が登場したときにまったく目新しいものだったはずだ。だが後者は、経済分析にはなくとも製造業では言われていたことだった。

長期と短期の区別により、「通常」価値の意味が厳密になった。そして二つの実にマーシャルらしい概念——準レントと代表的企業——により通常利潤のドクトリンが生まれた。

こうした画期的なアイデアはすべて、明瞭に考えたい人なら不可欠なものだ。それでも、私から見れば、ここはマーシャルの分析が最も不完全で不満足な部分だと思うし、今後やるべきことの多い部分だ。『原理』初版でマーシャルが述べるように、時間の要素は「あらゆる経済問題の主要な困難の中心にある」

4. 消費者レントまたは消費者余剰という特別な考え方は、ジェヴォンズのアイデアの自然な発展だが、当初思っていたほどの実用的な結果にはつながっていないかもしれない^{*94}。だが思考の道具の一部としては欠かせないものだし、特に『原理』では重要だ。というのもそれは(エッジワース教授の言葉を借りれば)「レッセフェール、つまり無制限の競争で得られる最大の利得は、必ずしも実現可能な最大の利得ではないことを示す」のに有用だからだ。レッセフェールが最大の社会利益をもたらす原理なのだという考えが、単に実務的だけにとどまらず、理論的にもある条件では崩壊するというマーシャルの証明は、哲学的にとっても重要なものだった。だがマーシャルは、この議論自体はあまり展開せず^{*95}、この分野のさらなる探究はマーシャルの一番弟子で後継者ピグー教授に残された。ピグー教授は、これをきちんと理解するよう訓練を受けてきた人々が使うと、ややこしく面倒な国をマーシャルの分析で解明するのがいかに強力かをはっきり示している。

5. マーシャルの独占分析にも、ここで言及すべきだろう。そして彼の収穫逡増分析、特に外部経済がある場合の収穫逡増は、上で言及した部分よりはここに収めるのがふさわしい。

マーシャルのこの分野における理論的な結論と、社会主義的な発想への強い共感、競争の力の強さについての昔ながらの信念と相容れるものだった。エッジワース教授はこう書く。

初めてマーシャルに会ったときに受けた強い印象を記録しておこう——はるか昔の1880年代のこと、確か競争はかなり長期わたり価値の主要な決定要因となるという信念を、強い表現で打ち出したことからくる印象だった。彼の使った言葉はこの通りではなかったが、これは彼の「経済学者の旧世代と新世代」論説^{*96}における次の格言と一体になっている。「ある人物が何かをある値段で売りたいと思い、相手

^{*94} とはいえエッジワース教授が指摘するように、『原理』刊行以前からマーシャルは、このドクトリンの批判者が一般に理解しておらず、擁護者すらきちんと強調していないことを理解していた。つまりこの手法は、お金の限界価値を乱さない手小渡の規模で行われる取引にしか正確には当てはまらないということだ

^{*95} だが『産業と商業』は部分的にはこれを示すのに費やされている。彼はその本の序文にこう書く。「本書は主に、未だに派閥や階級的な利己性を生み出す影響について考察している。利己性の傾向として、各個人の行動は他人に最も有益になるような形ではなかなか導かれられないという点も考える。そして資本家などの事業家やその従業員が、産出や行動全般を、国民の利点よりは派閥の利益になるよう行動を揃えるという未だに生き残った傾向についても考える」

^{*96} *Quarterly Journal of Economics*, 1896, vol. xi. p. 129.

がそれを払いたいと思ったら、両者は王や議会や、トラストや業界組合がどんな禁止をかけても、何とかして出会うものだ」

6. 思考を助けるための用語と道具だとして、マーシャルは「弾性」概念を明示的に導入したことで、経済学者たちに何よりも貢献してくれたと思う。『原理』初版の第3巻第三章は、「需要弾性」の定義を導入している^{*97}。これは、価値と分配の高等理論を進める上で欠かせない概念に関するほぼ最初期の記述だ^{*98}。需要は価格変化に対し、正比例以上または以下の動きを見せるかも知れないという概念は、もちろん小麦の価格と需要の関係について、19世紀初頭以来の議論でお馴染みのものだった^{*99}。実際、この概念がミルかジェヴォンズにもっとはっきり整理されなかったというのはいささか驚くべきことだ。だが、実際されなかったんだから仕方がない^{*100}。おかげで $e = \frac{dx}{x} \div -\frac{dy}{y}$ という考え方は完全にマーシャルのものだ。

マーシャルが弾性を導入するやり方は、その発想が目新しいものだという示唆は一切無く、驚くべきものだし、実に彼らしい。この思考道具により開かれた検討の分野は、またもやその完全な実りの多くが、マーシャル自身よりはピグー教授により実現された分野でもある。

7. 『原理』の歴史的な導入部は、少しコメントしておく価値がある。初版の第一巻は、「自由な産業と事業の成長」と題した章を含んでいる。最後の版では、その内容の中で生き残った部分はほとんどが補遺にまわされている。マーシャルは常に、これについて相反する考えの板挟みになっていた。一方で彼は、経済学という対象が絶えず変わり続けるという性格のものだと思っていたので、今日の公理が永続的なものだという発想を矯正するものとして、歴史的な背景を大いに重視していた。またドイツ歴史学派の、いろいろ詳しく勉強はしているが整理されていない研究にも不満だった。その一方で、こうした問題にあまり時間をかけるのを恐れてもいた（あるとき、歴史的な検討に手を染めてみたが、それをやったら六巻かかるだろうと彼は語っていた）。そして自著の本質的な部分に歴史の話を詰めこみすぎることになりかねないと思っていた。彼が経済史に没頭していたときには、出来合の使える材料はほとんどないも同然で、おそらく歴史的な脇道で無用にさまよい続け、歴史的な背景の中で自著に与えられるべき重要性についてあれこれ迷っていたことだろう。結果として『原理』で実現した妥協は、あまり満足のいくものではなかった。すべ

*97 補遺の数学ノートがそれを補っている。

*98 厳密に言えば、「弾性」への最初の言及が見られるのは『王立統計学会戴冠記念号』（1885）p.260に掲載されたマーシャル「統計のグラフ手法について」の中だ。だがそれは、短い結語の中で導入されただけで、しかも弾性の簡単な図式表示は、軸の間に存在する需要曲線に接する部分の2つの区分が、接点により分割される比率により与えられることを示そうとして言及されているだけだ。マーシャル夫人によると、彼が弾性概念を思いついたのは、1881年にパレルモの屋根で、風呂の覆いの陰にすわっているときで、その思いつきに大喜びしていたとのこと。

*99 ミルはこの関連で、Tooke, *History of Prices* に言及している。

*100 エッジワース教授は『バルグレーブの事典』における「弾性」の項目で、特にミル『政治経済学』第3巻第二章§4と、第8章§2を、この問題についてのマーシャル以前の扱いの代表として挙げている。この前者の下りは、需要が価格の変動に対してちがった比率で反応することを指摘している。後者は（実質的に）お金の需要についての一意的な弾性について扱っている。エッジワース教授はいまや、第3巻第八章§5にも言及している。ここでのミルは、内容的に国際需要方程式に弾性が与える影響について扱っている。その章の他の部分でミルは需要が「安さによってもっと拡張しやすくなる」（§4）という話と「自国での商品需要に対する外国需要の拡張しやすさ」（§8）について述べる。

ては広い一般論に煮詰められ、その裏付けは示す余裕がなかった*101。マーシャル最高の歴史研究はおそらくその業績のほとんどが終わって長年たった1919年刊の『産業と商業』にある。『原理』の歴史的な部分は、王立歴史学会での演説(『エコノミック・ジャーナル』vol. ii, 1892に掲載)でウィリアム・カニンガム博士によりズタズタにされ、マーシャルは批判には答えないという通常のルールを破って、同誌の同じ号に印刷された回答により、この論争での勝者となった*102。

マーシャルの『経済学原理』の書かれ方は、流し読みする読者が気がつくよりも異様なものとなっている。それは激しさを持たずに感情を込めないよう入念に意図されているのだ。そのおレトリックは最も単純で、最も飾り気がない。それは安定した明晰な流れとなっており、経済学をほとんど知らなくても、知的な読者が立ち止まったり混乱したりするような下りはほとんどない。著者自身が自分の目新しさや独創性を主張する部分は一切ない*103、他人のまちがいを指摘する場所もめったに無く、初期の定評ある著者たちは、実際にどんなことを言ったにせよ、正しくまっとうなことを言おうとしていたはずだと説明されている*104。

経済の各種要素のつながりと連続性は、マーシャルの二つのモットー「自然は飛躍しない」と「多の中に一があり、一の中に多がある」に顕著だが、これがその困難の大きな原因だ。だがそれを置けば、この本が詳しくない読者—特に第四巻までしか読まない人—の心に残す主要な印象は、それが明瞭で適切で人道的な扱いはしているが、かなり当然のことしか言っていないというものになるはずだ。

この文体上の成果により、マーシャルは狙いの一部は達成した。本は一般読者にも届いた。経済学の世間的な名声も高めた。論争はほとんど引き起こされなかった。平均的な書評子は、著者がその主題や先人たちや読者に対して示す態度に満足し、マーシャルが倫理的な要素に置いた適度な強調と、陰気な科学が彼によって受けた、大いに必要とされてい

*101 マーシャル自身はこう書く(カニンガム博士への回答、*Economic Journal*, vol. ii. p. 507):「かつて経済史の論考を書こうと提案したことがあり、長年にわたりそのための材料を集めた。その後、私はその中から、産業の現状や問題の多くのものが、最近ものでしかないのを説明するような部分を選び出した。そしてそれを、問題の章に組み込んだ。だがそれは、使える紙幅よりずっと多くを占領してしまったので、まとめなおして圧縮した。その過程でそれはまちがいがなく、概略のシャープさを失い、特に記述も鈍った」

*102 クラバム博士はこう書く。『産業と商業』補遺を読むと、30年前の論争の時期に知られていた17世紀以降の経済史についてのマーシャルの知識には感銘を受ける。当時マーシャルのほうが、17-19世紀についてはカニンガムよりも理解が深く、当然ながらその定量的な扱いについての勘所も、カニンガムにはおよびも着かない水準になっていたはずだ」

*103 ある知的な書評子が述べたように(*The Guardian*, 1890年10月15日):「この本には二つの側面がある。一つにはそれは、真実を見つけようという正直で愚直な試みだ。もう一つは、それはその真実発見についての自分の業績をすべて否定しようとする見事な試みでもある。そのすべては先人たち、特にリカードの業績の中に暗黙に含まれていたのだから、というわけだ。だがほとんどの読者はそれを真に受けてしまった。以下の書評はその典型だ(*Daily Chronicle*, 1890年7月24日):「マーシャル氏は新しい発見や新しい飛躍を何も指摘していない。彼は単に古いドクトリンの現代版を、もっと最近の調査結果にあわせて提示しただけだと認めている」

*104 マーシャルはこれをいささかやり過ぎている。だが、この話題について特別な天才を与えられていて、強力な経済的直感を持つ人々は、彼らの説明や明示的な主張よりも、その結論や暗黙の想定においてもっと正しい場合が多いというのは、彼が堅持していた本質的な真理だった。これはつまり、彼らの直感は分析やその用語よりも進んでいるということだ。したがって、彼らの全般的な考え方には大いに敬意を抱くべきで、口先だけのものでしかない批判で彼らの思い出を汚すのは哀れなことだ、というわけだ。マーシャル自身の経済的な直感は驚異的なものであり、偉大な先人たちの明らかなまちがいに對する寛容さは、将来的に彼自身が傑出した権利主張を行うことになる手法だろう。

た人道化に注目することで、マーシャルを大いに喜ばせた*105。そしてそういう書評子はまた、本の知的な中身について平然と無理解なままでいられた。さらに時間がたつにつれて、この本の知的内容はイギリス経済学思想に何の雑音も邪魔もなく浸透したが、その度合いは容易に見すごしてしまうほどのものだ。

この手法は、一方では深刻な欠点も持つ。強調がなく、強い光と影もなく、荒っぽうところや重要な部分や予想をひたすらコツコツとこすり取るうちに、きわめて斬新なものが見つからないものに見えてしまい、読者はそこをあっさり読み飛ばしてしまうのだ。水から上がるアヒルのように、このアイデアのシャワーをほとんど濡れずに脱出できてしまう。むずかしい部分は隠されている。最も頭の痛い問題は脚注で解決されている。実りの多い独創的な判断が陳腐なものに見せかけられる。著者は自分のアイデアについて、いささかも売り込もうとする気配を見せず、心の衣装だんすにかけておくためのフックもほとんど提供してくれない。学生は『原理』を読み、そこに広がる魅力に魅了されて理解したつもりになっても、一週間後にはほとんど何もわかっていない。『原理』で育てられた人々ですら、新しい問題や新しい解法らしきものを思いついて、もう一度読み返して見ると、実はその問題やもっとよい解決方法がずっと前からそこに書かれていて、それが単に目に入らなかっただけ、という経験が起きなかった人がどれだけいるだろうか！あのきれいに磨かれた知識の球体に隠されたクレバスに含まれるものの半分でも理解するためには、読者のほうに大量の勉強と独立の思索が必要となる。それがマーシャル『経済学原理』なのだ。

VII

フェローの結婚についての制限をやっと取りのぞいた改革後まもなく、マーシャル夫妻は1885年にケンブリッジに戻った。マディングリー通りのセントジョンズカレッジの敷地内に、ベイリオル・クロフトと名付けた小さな家を建てた。ボックスに近いが、町のすぐ外れなので、片側には開けた田舎がマディングリー丘陵に向けて開けている。アルフレッド・マーシャルはここに40年近く暮らした。この家は十分な庭園に建てられ、できるだけ外光が入るような異例の床構成となっており、住むのは夫婦二人と忠実な女中一人だけだった。本が壁にぎっしり並び、棚だらけの書斎には、暖炉脇に椅子二つの場所があった。ここでは生徒たちとの無数の対談が展開され、その生徒は午後がふけるにつれて、隣接するスツールか棚の上に、紅茶とケーキが一切れ置かれてふるまわれるのだ。もっと大きな集会は階下で行われ、娯楽の場合には食堂とマーシャル夫人の居間をつなげることもできた。周辺の変わらぬ性質——上階は本と原稿の入った大量の引き出し、階下はシスティナ大聖堂のミケランジェロの彫像が置かれた家具と、戸口には女中サラの顔*106——は、毎年のように師匠を訪ねる人々にとって、聖者の小屋や祈祷所のような魅力とすばら

*105 流行は変わるものだ！この30年近く前に『産業と商業』が登場したとき、ある書評子はこう書いた（*Athenaeum*, 1919年10月31日）：「この最も不満な特徴は、その道徳的な口ぶりかもしれない。それが弱いということではない——まったく逆で、むしろ科学的な論考においては、道徳的な口調はいかに立派なものだろうと、まったく場違いに見えるということだ」

*106 彼女は四〇年以上にわたり二人と暮らし、ほとんど親密とさえ言える関係だった。マーシャルはしばしば彼女の判断力と英知を讃えた。小さな台所は彼自身が、船室のように設計したもので、サラはベイリオル・クロフトではそこに暮らしていた。ジョウエットはマーシャル夫妻のところに滞在していたとき、そこにサラを訪ねては宗教的な困難について話し合った。マーシャルは使用人たちや大学の用務員たちには大いに愛されていた。みんなを人間扱いし、自分で興味を持っていることについて彼らと話しあったのだった。

しさを備えていたのだった。

このケンブリッジにおける既婚者社交の最初の時代において、カレッジ学長の有力な伴侶や教授たちの少数の細君の狭い集団が初めて拡張されたときには、最も著名な教員たちの数人、特に道徳科学学科の人々が、ニューンハムの生徒たちと結婚した。夫たちと妻たちの二重のつながりは、きわめて単純で傑出した、小さな教養の高い社会を生み出した。このサークルは私の少年時代の最大の強さを見せており、昼食やディナーに招かれる年齢になった頃には、赴く先はそうした家だった。記憶にあるのは、家庭的ながら知的な雰囲気であり、これは今日のふくれあがった異質なケンブリッジでは見つけにくいものとなっている。マーシャル邸での娯楽は一般に、後年になると同じ経済学者の訪問にかこつけて行われた。通常は有力な外国人であり、小さな昼食パーティーには通常、学部生数名と、ニューンハムの生徒や若い講師も含まれていた。特にこうした形で、アドルフ・ヴァーグナーと N. G. ピアソンに会ったのはおぼえている。二人ともいまやほとんど過ぎ去ってしまった経済学者の世代を代表する人々だ。マーシャルは、あまり他の人の家を訪ねたりはしなかったし、お客を居心地のいい形で狭い場所に押し込み、妻に恥じることなく、半分気後れした雰囲気ですべてを投げ、笑いつつ、甲高い声でいつもの冗談や台詞を放っていた。あらゆる話題について大いに会話力を持っており、その朗らかさと楽しさは決して破られず、その輝く目とにこやかな話と異様なバカ話の中では、だれも退屈などしようがなかった。

初期、特に 1885-1900 年には、労働者の指導者たちを招いて週末をいっしょに過ごすのが好きだった——たとえばトマス・バート、ベン・ティレット、トム・マンなど多くの人々だ。とくにはこうした訪問は、その訪問者が演説をする社会問題討論ソサエティの集会にあわせたものとなった。こうすることで、彼は前世代の主要な組合論者や労働組合関係者のほとんどと知り合いになった。実は彼は、労働運動や社会主義と、知的な面を除くあらゆる面で共感していたのだった(ちょうど J. S. ミルのように)*107。

マーシャルはいまや、変化することのない環境と習慣に落ち着いていた。だから 1885 年から 1908 年に教授職を辞するまでの間の、人生の外部でのできごとをざっと記録しておくべきだろう。1885 年から 1890 年まで、彼はこれまで見てきた通り、『原理』にもつぱら没頭していた。だが他の活動としては、特に 1885 年産業報酬会議で発表した論文、1887-1888 年の金銀委員会に提出した証拠、1889 年共同組合会議での会長演説がある。1890 年夏には、リーズで開催された英国協会の経済部会で「競争のある側面」について興味深い会長演説を行った。また、講義にもかなり注力し、この五年間は彼の生涯で最も活発で生産的なものとなった。

*107 『産業と商業』序文で彼はこう書いている。「十年以上にわたり、私は『社会主義』という言葉と関連する示唆は、世界中で一番とは言わないまでも、私にとってのあらゆる出来事の中で、最も重要な研究対象であるという確信を抱き続けてきた。だが社会主義者の著作は一般に、惹かれるのと同じくらい嫌悪を抱かせる。というも現実からあまりに乖離しているようだからだ。そして一部はそのせいで、私はこの問題について、もっとよく考えて見るまで何も言わないようにしてきた。いまや、高齢のため自分の思索や発言の時間がほぼ終わりにかけていると示唆されるときになって、あらゆる面で労働階級の能力がすばらしい展開を見せているのがわかる。そして一部はその結果として、ミルが書いた頃よりは社会主義的な仕組みについて、もっと広くしっかりした基盤が見られる。だがいまのところ提案されているどんな社会主義的な仕組みも、高い実業生と個人の人格力維持について適切な考察を行っていないようだ。あるいは、事業工場や多の生産の物質的な設置の十分にすばやい増加を約束もしてくれない。(中略)理想的に完璧な社会組織という遙かな目標に向けて最大の本当の進歩を実現したのは、エネルギーをその障害となる具体的な困難に向けた人々であり、その横を慌てて通り過ぎるのに力を無駄遣いしていない人々だと思える」

一般課程では週に二コマの講義を持ち、特別な理論的困難について週に一コマ持っていた。だが規則として彼は、三学期のうち二学期しか講義を持たなかった。だから年に45回ほどの講義をしたということだ。週に二日間の午後は、4時から7時まで、「家にいて、自分の講義の受講有無にかかわらず、大学のあらゆる成員に対して助言と支援を与える」と発表されていた。1880年代後半には、一般講義の出席者は40人から70人の間で変動し、特別講義はその半分程度だった。だがその手法は—おおむね意図的に—あまり真剣でない生徒をふるい落とし、年度が進むにつれて出席者はもっと減っていった。

マーシャルは自分の講義をあらかじめ書き出しておいたりはしなかった。マーシャル夫人によると：

彼は経済史の講義以外は、めったにメモは使いませんでした。ときには講義前に少しメモ書きをして、講義に出向く道すがら、それについて考えました。自分の頭で考える生徒をこんなにたくさん擁している理由は、講義の名用を秩序だった系統的な形で提示しようなどとは思わず、情報も与えようとしなかったからだ、と言っていたものです。講義で留意したのは、生徒たちが自分といっしょに考えるようにすることでした。週に一度、講義で触れなかった内容について問題を出し、その問題に講義の中で答えました。彼は答えの検討に多いに腐心して、大量に赤インキのコメントを加えたのです。^{*108}

たぶん彼の講義の非定型化ぶりは、次第に高まっていったと思う。私が受講した1906年にはまちがいなく、まとまった講義録を作るのは不可能だった。だがいまのは常に彼の一般的な手法だった。彼の講義はシジウィックとはちがい、作成途上の本ではなかった。このやりかたはちなみに、彼の刊行作品の質を下げる結果をもたらしたかもしれない。だが、本による指導と講義による口頭指導に明確なちがいを設けるという彼の好んだやりかたは、それが発展するにつれて、優秀な生徒にとっては学生数があまり多すぎなければ、きわめて刺激的なものだった。学生数が最大で40人を超え（私が受講したときの記憶では、その規模は常に40人よりは20人に近かった）るとなかなか使いにくい手法だし、経済学に本当に意欲も嗜好もない生徒には向かない（今日の大量の経済学文のカリキュラムは、主にそういう学生のために作られている）。

以下の連続的な講義の題名は、ケンブリッジにやってきた直後のものだが、彼が扱おうとしていた範囲を示している。

学期	内容
1885-86.	10月学期：外国貿易とお金 復活祭学期：投機、課税等（ミル、IVとV）
1886-87.	10月学期：生産と価値 受難節学期：分配

^{*108} 私も彼のために書いたレポートが手元にあるが、彼の赤インキによるコメントや批判は私の答えと同じくらいの分量を占めている。

1890年に『原理』が出版されると最初の仕事はその抜粋版『産業の経済学』*109の準備で、これが1892年初頭に出版された*110。また『原理』の度重なる改訂版にもとりかかった。最も重要な変更は1895年の第三版と、1907年の第五版で導入された。もたらされた改善が、そのための努力に見合うものだったかは怪しい。こうした改訂は、もともと『原理』第2巻として意図されていたものを進めるにあたり、大きな障害となった。

だが主要な妨害は、王立労働委員会に1891-94年に参加したことでやってきた。自分の分野の生材料と密接に関われるこの機会を彼は大いに歓迎し、最終報告書の執筆に大きな役割を果たした。業界組合、最低賃金、雇用の不規則性を扱う部分は特に彼の手になるものだ。

一方、彼は『原理』の続きの作業をしていた。マーシャル夫人によると：

でも彼は、その扱い方をしょっちゅう変えてばかりいたので、えらく時間を無駄にしていました。1894年には歴史の話を始めましたが、後にそれを「白いゾウ」と呼びました。あまりに規模が大きくなり、完成には何巻もかかりそうだったからです。後にその白いゾウの断片を使い、『産業と商業』の説明部分に入れました。

労働委員会のマーシャルの仕事は、政府調査への数多いサービスの一つでしかなかった。1893年に彼は高齢貧困者についての王立委員会に証拠を提出し、慈善組織委員会を救貧法実施と関連づけるよう提案した。1899年初頭には、インド通貨委員会の前に慎重に準備した証拠を提出した。金融理論をめぐる証拠は、一部は11年前の金銀委員会に述べたことの繰り返しだったが、彼自身、この新しいバージョンはずっと改善されていて、お金の理論についての説明としては自己最高だと考えていた。インド固有の問題を扱う部分は、多くの統計グラフの裏付けがあった。インドの経済および通貨問題についての彼の興味は、最初はオックスフォード大学時代に、インド公僕候補者たちに講義するのが仕事だったときに最初に喚起されたものだ。彼はインド問題についての自分の詳細な現実的検討に満足していて*111、未完のものも含めインドについてのグラフの大量の巻物が、書歳の家具の一部となって常に手元に置かれていた。

同年1899年の後になって、彼は地方税王立委員会のために、「帝国および地方税の分類と発生についてのメモ」を用意した。1903年には関税改革論争のまっただ中で、彼は財務省の求めに応じ、「国際貿易における財務政策」の見事な覚書を用意した。これは1908年には当時財務大臣だったロイド＝ジョージ氏の求めで「内容的には元の文書とまったく同じ」議会資料となった。刊行までに5年という致命的なほどの遅れが生じた理由を、マーシャルは実に彼らしく次のように説明している。

この覚書への大量の訂正と加筆が、1903年8月に外国の郵便で失われた*112。そして未修正のゲラを秋に読み直すと、あまりに不満でそれを独立に発表してよいという親切な許可を活用しようとはしなかったのだった。

*109 この本は何度も増刷され、1896年と1899年には改訂版が用意された。現在(1932年末)までには108,000部が印刷されている。出版当初から年に2500という安定した売れ行きを示し、40年たった今も同じ売れ行きだ。『原理』の売れ行き(前出)とあわせると、これは半世紀近くにわたり経済学教育に対してマーシャルが行使した圧倒的な影響力を示すものとなる。

*110 最終章の「業界組合」についての話は『原理』の範囲を離れ、以前の『産業の経済学』からの材料を一部採り入れている。

*111 多くの熱心なインド人(および日本人)学生を彼は得た。

*112 チロルの地元郵便局女性によって、封筒の切手のために盗まれたのだった。

急いで書かれたことと短いことが、その構成のまずさと、慎重な議論のほうがふさわしい場面ではほとんどドグマ的に私見が何度も表明されている原因となっている。それは、論争的な問題は避けるという私の原則に逆らうものだ。そして、学徒の研究が本来行うべき原因の奥深い追及を試みるのではなく、主に近似的な理由やその影響を扱ったものとなっている。だから私は、もっと慎重で十分な議論の中で言うべき事を組み込めるまでは、財政問題については沈黙する道を選んだ。そしていまや私はその作業をしている。だがその歩みは遅く、光陰矢のごとし。

マーシャルの抑制の悪化がこの文章であらわになっている。自分の頭の仲にあるものを外に出させる困難は、もはやほとんどあり得ないほどのものとなりつつあった。1908年に彼は教授職を辞した。講義と教育の重い負担がなくなれば物事が加速するのではという期待のためだ。

VIII

23年にわたる教授職の間に、彼は三つ重要な運動に参加したので、別個の述べておくだけの価値はある。イギリス経済学会の創設(現王立経済学会)、ケンブリッジの女性学位競争、ケンブリッジ経済学位考査の設立だ。

1. 「イギリス経済学会の組織提案」と題された回状は、王立経済学会設立に向けた初の公的な一歩で、1890年10月24日にアルフレッド・マーシャル一人の署名で発行された。だがもちろん、他の人々も協力していた^{*113}。それは大英帝国のどんな大学や公的カレッジの経済学講師でも、ロンドン、ダブリン、マンチェスター統計学会の評議員でも、ロンドン政治経済学クラブの会員でも、その他英国協会の第F部会のメンバーを含むその他数名に、1890年11月20日にロンドンのユニバーシティカレッジで開催される、財務大臣ゴッシェン卿を議長とする私的会合に出席して「経済学会か経済学協会を設立し、それと関連した経済学雑誌を刊行する提案をお検討する」よう招くものだった。この最初の回状は、その後学会が成立してからの数年で実際にたどった道筋のおおまかな方向性を示している^{*114}。唯一の声高な反対はG・バーナード・ショー氏によるもので^{*115}、その他すべては承認したが、

^{*113} マーシャルが署名したのは、1890年英国協会経済部会の会長としての権限においてのことだろう。その年の会合で、経済雑誌の創刊が強く促されていたからだ。

^{*114} 当初に見られた主要な意見の相違は、協会の範囲についてのもので、以下のように示されている。「これまで意見の相違があらわれた唯一の問題は、協会が経済学会に会費を払うだけの関心を抱いたあらゆる人に開かれるべきか、という点についてだった。(中略) 一部は、一般的な方向性はイギリス式の「学者協会」を目指すべきだと考え、別の人は、かなり間隔をおいてのみ総会を開き、会員資格は何ら学位を与えるようなふりをするものではない、アメリカ経済学会のような方向を目指すべきだと考えた」。会合での決議は、コートニー氏が提案し、シジウィック教授とエッジワースの支持を得た次の提案が全員一致で採用された。「協会の狙いを促進し、評議会に承認された人はすべて、会員として認められる」。学会憲章の用語は、この二つの考え方の妥協の痕跡を少し残しているが、実際にはアメリカ経済学会の先例が常に採用されている。

^{*115} バーナード・ショーは1888年に英国狂気の経済部会で論文を読み上げ、L・L・ブライス(当時は書記)が伝えるところでは、自分が街角で新聞を読んでいた立場から、知識人へのの上り上がったのが時代のしるしなのだと述べた。このときにシジウィックはこう書いた。「委員会は、現代社会が社会民主主義へと平和的に移行するための一連の急速なステップを描き出す、本当に見事な演説で説明してくれた、生きた社会主義者を自分でも認めるように『街頭から』灼熱した状態で招待したのだった。修辭的にも大胆かつ有効な、華々しい演説も行われた。全体として、大したパフォーマンスではあった——その御仁の名前はバー

「ゴッシェン氏にはあらゆる敬意を払いつつも、会長は国家のどこかの政党と同一視されるような人物であるべきではない」と示唆した。

2. 女性に学位を与えるのを認めるべきかどうかという論争は、1896年にケンブリッジを二分したが、マーシャルは女性の主張に反対する一派に属することとなった。彼はニューンハムとは創設以来、妻を経由してもシジウィック夫妻を経由しても、きわめて密接な関係にあった。ブリストルに行ったときには、当人のせりふでは「それが女性に自由に門戸を開いたイングランド初のカレッジだったという事実により主にそこに惹かれた」。生徒のかなりの割合は女性だった。初の印刷された論説(1873年の「労働階級の未来」について)の冒頭部分には女性の解放について、雄弁でミルと同意する主張が書かれている。その論文で彼は、ミルの例はすべて「女性の心を包んでしまった人工的な習慣の産着をほどき、女性に女性らしく世界に対する責務を果たすだけの自由な視野を与えることで、人類の進歩はどれほど加速することか」示しているのだと述べる。したがってマーシャルの態度は、彼自身の小さな取り巻きにとっては悲しい打撃であり、それを相手に利用されたことで、改革者たちがやがて苦しむことになる圧倒的な敗北にもなりがしかの役割を果たしたのだった。この道筋を選ぶにあたり、マーシャルの知性は立派な理由を見つけることはできる。実際、彼が上院の議員たちに回覧した長いピラは、その気性と親切な言葉づかいの点では、女性の教育を完全に男性の教育と同じにすることに對する見事で、説得力のあるとすら言えそうな議論となっている。それでもこの男性の54年の生涯の中で秘かに強さを集めてきた先天的な偏見のほうが、従順な知性よりはこの結論において大きな役割を果たしたのかもしれない。
3. 最後に、ケンブリッジ大学経済学部創設におけるマーシャルの貢献がある。

マーシャルが1885年にケンブリッジに戻ってきたとき、政治経済学の論文は、道徳科学学位考査と歴史学位考査の両方に含まれていた^{*116}。この二つの学部が20年ほど前に別々に創設されたのは、この大学での研究を自由化するにあたり大いなる革命を引き起こした^{*117}。だがマーシャルは教授になるのとほぼ同時に、さらに一歩先に進むときが来たときと強く感じた。そして彼は特に、経済学が何か従属的な勉強として満足に行えるものだという既存カリキュラムの含意を嫌っていた。1885年にケンブリッジに戻ってほぼ即座に彼は、自分の講義が経済学がごく一部でしかない試験の要件にあわせねばならないという発想に反発した^{*118}。彼の就任講義は、実質的に経済学が新しい地位を得るべきだという要求だった。そしてシジウィック

ナード・ショー。マイヤースの話では、読む価値のある本も書いているとのこと」(*Henry Sidgwick: a Memoir*, p.497)。

^{*116} 1880年代後半のマーシャルの講義では、他の学部の学生や、この話題に興味を持った学部生たち以外に、一ダース未満の道徳科学の学生や、二ダース未満の歴史学の学生がいた。

^{*117} マーシャルはこの問題の歴史を、「経済学カリキュラム創設の訴え」(1902)で次のようにまとめている。「外国では経済学は常に歴史や法律や政治学、あるいはこうした研究の何らかの組み合わせと強く関連づけられるのが常だった。初の(ケンブリッジの)道徳科学試験(1851-1860)は倫理学、法学、歴史、経済学を含んでいた。だが精神科学や論理学はなかった。だが1860年には哲学と論理学が導入されて倫理学と関連づけられた。一方、歴史、政治、司法、政治経済学が別のグループになった。1867年には、法学と歴史学は別扱いとなった。そしてそれ以来、精神科学と論理学が道徳科学学位考査における主要な音符となった」

^{*118} これについてのマーシャルとシジウィックとの対立(そして実際にシジウィックらしい、楽しげで半ばユーモラスな批判回答)については *Henry Sidgwick: a Memoir*, p. 394 を参照。

もそう解釈した。その講義からの以下の宣言は、経済学がいまやほぼどこでも勝ち取った独立の地位を求める闘争での最初の一撃に近いものとして、ある程度の歴史的重要性を持つ。

事実についてのもっと広く科学的な知識が求められている。もっと強く完全な組織、時代の経済問題を分析してその解決に貢献できる仕組みが要る。そうした仕組みを正しく開発して適用することが、我々の最も緊急のニーズとなる。そしてこれは訓練された科学的な精神のあらゆる機能を必要とする。経済学のために、雄弁と博学が豪勢に費やされてきた。それはそれで結構だ。だが現在最も求められているのは、多くのからみあった原因のからみあった働きをたどり、分析するため、頭を冷静かつ明晰に保つ力だ。例外的な天才を除くなら、この力をもっと進んだ科学で厳しい研究過程を経てきた者の間以外ではめったに見つからない。ケンブリッジ派、世界中のどんな大学よりもそうした人々を擁している。だがやんぬるかな！この任に向かう人はほとんどいない。その理由の一部は、経済学がとても重要な役目を果たす唯一のカリキュラムが、道徳科学学位考査だけだということだ。そして、最高かつ最も難しい経済研究にふさわしい人物は、その学位考査の敷居に横たわる形而上学研究には惹かれないのである。

このマーシャルの主張は、彼自身の研究を支配している、この対象についての考え方に対応するこのだった。マーシャルは、これまでに登場した初の偉大な純粋経済学者だった。この対象を別の学問として構築し、独自の基盤の上に立ち、物理学や生物学のような科学的精度の高い基準を持つものにしようと生涯を捧げた初の人物だ。「トリマー夫人だの、マーセット夫人だの、マルチノー嬢だのが、経済原理を警句や単純なお話にしたて、それを使えば知的な女性家庭教師がまわりの子供たちに対し、経済の真理のありかをはっきり説明できるようになって好評を博するようなことは二度と起きない」^{*119}ようにしたのはマーシャルだった。だがそれよりはるかに大きい——彼の時代以降、経済学は二度と、道徳哲学者がまとめて習得すべき数多くの教科の一つにはならない——ミル、ジェヴォンズ、シジウィックが習得したようなやり方はもうできなくなった。彼は初めて、この問題について専門的な科学的態度を取り、現在の論争より高くその外に位置するもので、一般的な実務家にとって政治学や生理学と同じくらい遠いものだと考えるようになったのだった。

やがて政治経済学は、道徳科学学位考査における第二部を占めるようになった。これはマーシャルの理想に少し近づいた地位だ。だが彼は満足せず、1903年には独立学部と経済学学位考査と、関連した政治学分野を確立することで完全な勝利を収めることとなった^{*120}。

だから正式な意味でマーシャルはケンブリッジ経済学部の創設者だ。そして、それよりはるかに大きな意味で、多くの世代にわたる学生たちとの非公式な関係において、彼はその創設者なのだ。その関係は、彼の生涯の仕事で大きな役割を果たすと共に、その生徒たちの生涯の仕事の方向性を決めたのだった。

同僚たちから見ると、マーシャルはときに退屈で頑固に思えたかもしれない。外部世界

^{*119} 彼の論説「経済学者の新旧世代」 *Quarterly Journal of Economics*, January 1897 より。

^{*120} シジウィックは1900年、死の直前についてこの発想に改宗した。マーシャルの経済学教育についての理想は「経済学カリキュラム創設の訴え」「経済学学位考査入門」にある。

から見れば、お高くとまった実務性のない人物に移るかもしれない。だが生徒たちにとって、彼は昔からずっと、真の賢者であり、師匠であり、批判の外にあって、精神の父親であり、他のどんな源泉からも得られないような、靈感と慰めを与えてくれる人物だった。奇矯さや独自のやり方は、彼と世界の壁になったかもしれないが、生徒たちにとっては、その愛すべき一部となった。みんなマーシャルをめぐる物語を構築し(これについてはフェイ氏が主に集めているようだ)、彼が妥協なしの独自の自分自身でなければみんな満足しなかった。若者たちは、自分のソクラテスが少し変わり者でなければ満足しないのだ。

紙上でそれをやった彼の手法のもたらす影響を表現するのはむずかしい。生徒は、自分が世界でも最もおもしろく重要な航海に乗り出しているのだという壮絶な印象と共に彼の元を離れる。マディングリー通りを歩きつつ、対話が進むにつれて柵から引っ張り出されてきた、持てないほどの本の下で苦闘しつつ、ここには生涯の研究の値する内容があるのだと確信するのだ。マーシャルの二重の性質が、形式張らず突発的に出てきて、隣にすわる生徒を二重の啓発で満たす。若者は、知的誠実さの基準を示され、同時に知的のみならず道徳的にも自分を満足させるような公平無私さも示される。対象そのものが、師匠と生徒の対話の中で拡大するようだった。果てしない可能性があり、それも手の届かないものではない。「すべては親しみやすく、形式張らなかつた」とサンガー氏はこうした機会について書いている(『ネーション』1924年7月19日):

経済科学が——文法や代数のように——すでに片のついた問題で、学ぶだけで批判の余地はないなどというそぶりはなかつた。発展途上の問題として扱われた。かつてアルフレッド・マーシャルが有名な本を一冊生徒に与えたとき、そこに「——へ、いずれきみがこの論考を陳腐化させてくれることを祈って」とサインしている。が、これは単なる謙遜のポーズではなく、経済学が成長している学問であって、まだ何一つ最終的だと思つてはいけないうのだという信念へのこだわりなのだった。

マーシャルが生徒に分け隔てなかつたなどと思つてはいけないう。彼はきわめて非難的で、かなり厳しい口もきいた。生徒を鼓舞しつつ、同時にまるでおだてたりなどしなかつた。後の人生で生徒たちは彼に著書を送るとき、どう思われるか、何を言われるかと戦々恐々だった。講義中の彼の洞察とすばやい観察力の逸話について語るの、クラパム博士だ。彼はある大学講師にこう語つたという。「おたくのカレッジからは二人、とても興味深い人物が出席しておりますな。私がとてもむずかしいところにくると、A. B. はこう思うのです。『こいつはキツすぎる。理解しようとするのはやめておこう』。C. D. は、理解しようとはしますが、失敗するのです」——マーシャルの声はここで甲高くなり、破顔一笑する。それはこの二人の人物の知性と気性についての見事な見立てなのだ。

マーシャルが今日イギリスに存在するような経済学の父だというのは、著作以上に、その生徒たちを通じてのことだ。はるか昔の1888年にすら、フォックスウェル教授はこう書けた。「大英帝国の経済学の教授職の版数は彼の生徒で占められており、イングランドにおける一般的な経済指導で彼らが占める割合はさらに大きい」^{*121}。今日、生徒と、その生徒の生徒を通じて、彼の支配はほぼ完全なものとなった。この世を去るときに、自分が以下の1885年就任講義の結語で設定した目標と業績を比べたとき、マーシャルはほとんどの人よりも *Nunc Dimittis* という資格があつたのだ。

*121 “The Economic Movement in England,” *Quarterly Journal of Economics*, vol. ii. p. 92.

私の最も大切な野心、わが最高の探究は、自分の乏しい能力と限られた力を持ってできる限り、強き男性の大いなる母たるケンブリッジが*122、世界に冷静な頭と温かき心をもって送り出す人々で、その最高の能力の少なくとも一部を身の回りの社会的な苦しみに取り組みのに使う者を増やすことなのだ。洗練された気高い生活のためのあらゆる物質的手段を解き放つのがどこまで可能かを発見するために、自分の中でできるだけのことをやるまで休まないという決意を持つ人々を増やすことなのだ。

IX

マーシャルは1908年にケンブリッジの政治経済学学部長から、66歳で引退した。彼は安月給に年金なしの時期に属していた。それでも、自分の丘陵(フェローシップ込みで700ポンド)の中kから、試験やジャーナリズムでそれを補うこともなしに*123、自腹で学部生用に小規模な貸出図書館を維持し、独創的な研究奨励のために、三年ごとに60ポンドの論文賞を創設し*124、自腹で大学が支援しない若い講師を一人、ときには二人も100ポンドの報酬を出して、経済学部の教員として本来ならとどまれなかった人材を維持した。同時に本の売上げによる収入から*125、彼は引退が財務的に可能になるだけの貯金を得た。実は『産業と商業』刊行後に本からの収入があまりに多額になり、人生の終わりになって、それまでのどの時期よりも豊かになったのだった。そしてマクミラン社からの年間の小切手がやってきたら、そんなお金で何をしたらいいか見当もつかなかったとのことだった。経済学蔵書はケンブリッジ大学に遺贈し、財産や著作権により将来の収入はすべて、経済学研究奨励のために最終的に大学に入るようにした。

講義の労働と生徒たちへの責任から解放されて、彼はいまや残されたわずかな時間と体力*126を、壮年期の収穫をまとめるのに費やせるようになった。『原理』出版から18年たっており、大量の材料が手元にあって、集約と圧縮により本となるのを待っていた。後の本の範囲と内容について、かれは何度も計画を変え、処理すべき材料の量は、彼の調整能力を超えるものだった。『原理』第五版(1907)の序文で彼は、1895年には手持ち材料を三巻構成にするつもりだったと説明している。I. 産業と商業の現代の状況、II. 信用と雇用、III. 晴雨の経済的な基盤だ。1907年には4巻構成が必須となってきたので、彼はそのうち二つだけに注力することにした。つまりI. 国の産業と商業、II. お金、信用、雇用だ。これが最終計画だったが、時がたつにつれて雇用の部分は第2巻から押し出され、代わりに国際貿易や商業が入ってきた。それでも、77歳にして『産業と商業』が刊行されるまでにはさらに12年が過ぎたのだった。

この時期には、手元の主要な仕事に対する邪魔はほとんど入らなかった。たまたま、『夕

*122 ジョウエット博士はこの一節に大いに文句を言った。

*123 国家への多くの奉仕はもちろん完全に無報酬だった。

*124 1913年に彼は大学に、それに相当する収入を永続的に提供するだけの資本金を移転した。

*125 彼は常に、同じくらいの規模と性質の作品の相場よりも、自分の本の値段を抑えるように固執した。彼はゲラに壮絶に朱入れを行う人物であり、出版に何年も先だって版組をさせた。『産業と商業』の一部は、ゲラの形で出版までに15年も彼の手元にあったので「新記録」と呼ばれた。彼は本を偶然以外での収入源と考えたことはなかった。

*126 彼は、戦争のときに到るまで、午後には生徒たちとの面会は続けた——とはいえ、新しい生徒よりは元生徒(その頃には若き教官)が多かった。

イムズ』に投書しただけだ——ロイド・ジョージ氏の予算について (1909)、「アルコール中毒と効率性」をめぐるカール・ピアソン教授との論争、開戦をめぐる「終結のための戦い」「戦争での文民」について (1914)、プレミアム債について (1919)。1916年には『エコノミスト』に投書し、戦費をまかなうための増税を訴えた。そして1917年には、W・H・ドーソン氏編『戦後問題』に「戦後の国民課税」について一章を寄稿している。

開戦についてマーシャルが『タイムズ』に行った投書は、少しおもしろい。実際の宣戦布告前に、きたるべき戦いなど利益にならないから戦争をするべきではないという宣言に署名を求められたとき、彼はこうこ答えた。「平和か戦争かという問題は、我々の利益と同じくらい、国民としての責務にも左右されると考える。私は即座に軍を動員し、ドイツ人がベルギーを侵略すれば宣戦すると発表すべきだと考える。そして、連中が侵略するのはみんなわかっていることだ」。長年にわたり彼は汎ドイツの野心を本気で懸念しており、その投書は「終結のための戦い」と題されていたのだった。つまり彼はまちがいがなく反和平主義的な態度を採り、その後時間がたってもその立場は揺らぐことがなかった。だが彼は国際的な反感を煽るのには大いに反対していた。自分が「ドイツを知り、愛する」のを覚えていて、それが「きわめて良心的でまっとうな人々」だと述べる^{*127}。したがって彼は、「彼らを尊重し、彼らの友情を求めはするものの、全力で戦うというのを明確にすることが、我々の利益でもあり責務でもある」と述べた。そして「通俗的な講演が煽るような熱情は、勝利を確保するのにほとんど何の役にもたらず、ドイツの攻撃的な傾向に抵抗するための必須の対価となる両側の虐殺を大幅に増やすことになるだけだと懸念する」という。こうした主張は、もっと野蛮な愛国者たちの怒りの矛先を彼に向けることとなった。

やっと1919年に『産業と商業』が刊行された。ほとんどの人が仕事から引退する年齢をはるかに越えた人物としては、大いなる意思と決意の産物だ。

『原理』とはまったくちがった種類の本だ。そのほとんどは記述的だ。丸3分の1は歴史的で、その分野での彼の長い作業をまとめたものとなっている。その各部分を一冊にまとめたやり方は、いささかぎこちない。こうしたとりまとめの困難は、長年にわたり彼を悩ませたものだが、完全に克服されたとはいえない。この本は、構造的な一体というよりは、マーシャルが世間に対して価値あることを言えるような、部分的に関連しあった話を大量に寄せ集める機会というべきものだ。これは特に、16本もある補遺に顕著だ。これは無数の個別モノグラフや論文を生み出すために彼が使ってきた装置だ。そのいくつかは、この本がでる何年も前に書かれている。別建てで出版するのにきわめてテキシしたものとなっているし、それがこんなふうに住め込まれていたというのは、マーシャルの落ち度と判断されねばならない。

この本は三巻構成になっているが、補遺と同じく別々に出版しても、ほぼ何の問題もなかっただろう。第一巻は「産業と商業の現代の問題の起源の一部」と題されており、主に19世紀後半に、イギリス、フランス、ドイツ、米国が工業の主導国と名乗るに到った歴史について述べる。第二巻「事業組織の支配的な傾向」は、必ずしも歴史的とはいえないが、やはりもっぱら19世紀後半における事業組織桂太発達に関する説明になっている。第一

^{*127} 1914年8月22日に彼は『タイムズ』にこう投書した。「ドイツを知り、愛する人々は、彼の地でこよりも強く見られる空威張りの軍事主義には反発しつつも、彼らを毛嫌いする理由などなく、それでも戦うべき立派な理由があうのだと固執すべきである。(中略) 国民としての彼らはきわめて良心的でまっとうな人々であると信じ、己の責務に敏感で、家族への愛情も優しく、友情においては誠実で信頼できる。したがって、彼らは強力であり、恐れるべき相手だが、悪者視されてはならない」

巻は全国的にその時期の経済発展について述べた記述だ。第二巻は、それを専門的に検討した記述だ。第三巻「独占的傾向について：その社会の厚生との関係」は輸送とトラスト、カルテル、組合がその同じ時期にもたらした特別な問題をもっと詳しく扱っている。

だからこの本が持つような一体性は、1900年頃に西ヨーロッパに確立したような、個人主義的な資本主義形態の説明になっていることからもたらされている。それがどのように成立するに到り、それが公共の利益にどれだけ奉仕したか、という話だ。この全体としての一冊はまた、マーシャルが常に強調したがっていたこと、つまり事業組織の形態の性質が一時的で常に変わり続けるということ、そして経済活動が内包される形態もまた一過性なのだという事を明らかにするのに役立つ。彼は特にイギリスの工業主導性が載っている基盤の危うく一過性の性質をことさら指摘しようとする。

だがこの本の主要な価値は、その中心的な主題よりももっと不明確で分散したものにあり。それはマーシャルが各種のちがった問題について学んだ果実と、成熟した叡智を示しているのだ。この本は、鉄道よりはむしろ鉱山だ——『原理』と同じく、掘り進んで埋まった宝を探すべき本なのだ。やはり『原理』と同様に、一見するとやさしい本に思える。だが思うにそれは、初心者よりはすでにある程度わかっている人にとって有益なはずだ。それは多くの検討のための示唆や出発点を含んでいる。何かを検討したい読者にとって、独自の検討の方向性を示唆するのにこれ以上の本はない。だが無知な人々にとって、この本の広範な一般化はあまりに静かで、なめらかで、上品で、教条主義色が薄く、とりつく島がないだろう。

『産業と商業』は一般向けにも驚くべき成功をおさめた。すぐに第二版が求められ、1932年末までに16000部が刷られた。それが広い読者層に受け入れられ、ひどい批判もなかったという事実は、高齢の著者にとっては大いにやる気の出る慰めとなった。結局のところ自分は、敵となる時間により、己の言葉を世界に届けるのを妨げられたりはしなかったのだと感じられたからだ。

だがそれでも、時の翼をつけた馬車が急速に迫っていた。『産業と商業』序文に彼が書いたように「高齢は、私の思索と発言の時間がほとんど終わりかけていることを示している」大論考の著作は、偉大な絵画とはちがひ、極度の高齢まで続けられるものではない。彼の秩序化された知識の完全な体系は相当部分が決して発表されないが、それでも彼の決意と勇気は、最後に一冊の刊行にちょうど相当するものとなっていた。

集中力と記憶力がいまやかなり急速に衰えつつあった。ますますその本だけのために暮らし、そのためにあらゆる強さのかけらを温存しなければならなかった。訪問者との談話は疲れすぎるし、作業の力を深刻に阻害するものとなった。マーシャル夫人はますます訪問者から彼を遠ざけるしかなく、彼は妻と孤独に、時間に追われつつ暮らした。たくさん休息して、自動ピアノでお気に入りの曲を聴くのだった。これは人生最後の十年間で彼にとっての大きな慰めだった。あるいはマーシャル夫人が何度も何度も、お馴染みの小説を朗読するのを聴く。毎晩、マディングリーン通りの暗闇の中を一人で散歩した。78歳の誕生日には、来世などあまりほしくないと言った。マーシャル夫人が、(たとえば)百年くらい間を置いてこの世界に戻ってきて、何が起きているか見たくはないのかと訪ねると、彼は単純な好奇心でなら戻りたいと言った。そしてこう続けた。「私自身の思いは、我々の世界が暮らせるようになる以前に高い道徳性の状態に達した、何百万もの世界や、我々の太陽が冷却してこの世界が暮らせなくなった後に、似たような発展を遂げる他の何百万もの

世界にますます向けられているのだ」*128。彼によると、来世を信じることに自分の最大の難点は、存在のどの段階でそれが始まるのかわからないことなのだという。サルに来世があったとは信じられないし、初期の樹上に住んだ人類の初期段階すら持っていなかっただろう。すると、どの段階で来世などという実に壮大な変化が始まるのだろうか？

消化の弱さは生涯彼を苦しめたが、それが晩年に悪化した。1921年9月、人生80年目に、彼は以下のメモを遺している。

仕事に頭に圧迫感をもたらす傾向と、それに伴う疲労感が増えている。そしてそれに困惑している。健康が許す限り、私は許されるのであれば今後九二年働き続けねばならない(あるいは半分だけ働く四年間だ)。それが終われば、「人生を終わらせてください」と言える。寿命の長さそれ自体は気にしない。主要な重要性を持つと考えることを言う可能性を増やすために、自分の仕事を整えたいだけだ。

1922年8月、80歳の誕生日の直後、『貨幣、信用、商業』が完成し、翌年1923年に出版された*129。この本の範囲は計画とはちがって、「人の人生と仕事に対して、雇用できるリソースによるもたらされる条件の影響についての研究」は含まれていなかった。だがこの本の中に、彼はお金と外国貿易の理論への主要な貢献をなんとかまとめおこせた。この本は、以前の断片の寄せ集めで、中には以前触れたように五十年前にこうした主題に対する彼の主要な貢献がまとめられたときに書かれたものもある。『産業と商業』には見られなかった高齢のしるしも出ている。だが大量の材料とアイデアを含んでおり、それまで学生の手に入らない、あるいは入りにくい下りも集めてある。エッジワース教授はこの本について『エコノミック・ジャーナル』でこう書いた。「この相当部分が前世紀の80年代に書かれていたとしても、その大半は今世紀の80年代にも読まれるであろう」

『貨幣、信用、商業』の序文で彼はこう書く。「高齢が迫っているとはいえ、私は社会進歩の可能性について構築した考えの一部をまだまとめられるのではという希望は捨てていない」。最後の病気まで、失われる記憶と身体の極度の弱さにもかかわらず、彼はあと一冊まとめようと苦闘した。それは『進歩：その経済的条件』と題されるはずだった。だがその仕事は大きすぎた。ある面で彼の精神は未だに強力だった。短い手紙を書くときには、昔ながらのマーシャルだった。その82年目のある日、彼はプラトン『国家』を読むと言った。というのも、プラトンが現在生きていたら望むような国家について書いてみたいと思ったから、という。だが昔のようにすわって書いてはみるものの、執筆が進むわけがなかった。

こうした最後の日々に、奥深い輝く目と、白髪のかたまり、頭には黒い帽子をかぶり、彼はこれまで以上に仙人か予言者めいた様子となった。長い時間をかけて、彼の強さは失われていった。だが彼は毎朝起きると、自分の状態を忘れ、いつも通りに一日を始めようとするのだった。1924年7月13日、82歳の誕生日の二週間前に、彼は永眠した。

*128 Cf. *Money, Credit and Commerce* p.101 の驚くべき脚注。

*129 すぐ5000部が売れ、1932年末までに全部で9000冊が印刷された。

第 12 章

メアリー・ペイリー・マーシャル (1850-1944)



メアリー・ペイリー・マーシャル

メアリー・マーシャル^{*1}は、祈りと回想の記録に値する人物でした。それも単にアルフレッド・マーシャルの妻としてだけでなく（彼女の理解と献身がなければアルフレッドの業績は十分な実りを実現できなかったでしょう）、ニューンハムの歴史の中でも、75年近く前にケンブリッジ大学で初の女性経済学講師となった人物として、そして晩年20年におけるマーシャル経済学図書館の発展に果たした役割において記憶されるべき人物です。

彼女は、我が国のほとんどの美德と価値が生じるあの高貴な家系の出身です——16世紀以来自分の土地を所有してきた自作農たちの家系で、それが18世紀に儉約家の牧師や学者になったのでした。ペイリー家はこうして何世代にもわたり、ヨークシャーのギグルスウィックに定着していました。その曾々祖父は1733年にケンブリッジのクライスツカレッジで学位を得ており、54年間にわたりギグルスウィック・グラマースクール学長でした。彼女の曾祖父は二百年強ほど前に生まれたウィリアム・ペイリーで、クライスツカレッジのフェローで講師であり「談話室の喜び」と呼ばれ、カーライルの大執事、ベンサ

^{*1} 訳者注：原文および全集版では、これは『エコノミック・ジャーナル』が初出とされている。が、文中の言い方、特に『産業の経済学』について、「青いヤツではなくこっちの緑のヤツ」という言い方をしていたりする部分から見て、明らかに人の前で話されたもの。少なくともそれを意図したもの。このため、訳し方もそれに殉じている。

ムに先んじていた『道徳と政治哲学の原理』著者、そして一般に「ペイリーの証拠」として知られるもの(『自然神学、あるいは自然の外見から集めた神性の存在と属性の証拠』)の著者でもあります。ちなみのこの後者を読んだことで、別のクライスツカレッジの人物であるチャールズ・ダーウィンは正しい道へと進んだのです。彼女は拙稿の著者に、いつも彼女の部屋にかかっていたこの大執事の小さな絵を遺贈し、この哲学者の中でも最も非ロマンチックな人物のラブレターが入った小さな包みを、詩集付きケースに入れたものを見せてくれたことがありました。その大執事の孫の一人が F. A. ペイリーで、19世紀半ばのギリシャ学者で、もう一人がメアリー・マーシャルの父、スタムフォード近くのアフフォード説教師、もっともまっとうなシメオン派に属する長老派教会の聖職者です。彼女の母親はヨークシャーのウォーマルド一家の出身でした。

晩年にメアリー・マーシャルは、『私の記憶』という短い伝記メモをまとめました。それを最後の日々まで自分の椅子の脇におき、ときどきそこに一人ですわって、過去からの新たなこだまがよみがえってくる度に、そこに新しい下りを加筆したものです。これは近刊予定です。というのもニュンナムと、1882年に結婚禁止令が取り除かれたときの砂漠から花開いた、新婚時代のケンブリッジについて、これほど優しくユーモラスな記録は他にないからです。一方で、私は以下で、そこから許される限りあちこちつまみ食いさせていただきます。いやそれ以上かもしれません。ただし、この回想録自体が彼女の書いたままの形で近刊予定になっていなければ、ずっと多くを引用したでしょうが。

そのメモで彼女は、1850年10月24日に生まれたレクトリーの田舎育ちについて回想しています。「この20年間ほどは古いボロ家で過ごし、その正面は赤と白のバラで覆われ、目の前には芝生とその向こうには森があって、長い草の生えた境界と緑のテラスを持った庭がありました。老女として長年たつてそこを訪れるまで、どんなに美しいところか気がついていませんでした」。その時代の彼女の思い出を、コールドトンが自分のノーフォークでの少年時代について回想したものと同じ週に読むのは(彼もヨークシャーの自作農一家の出で、記録は16世紀にまでさかのぼり、それが聖職と弁護士へと転身した一族です)、単純な暮らしと気高い思考と、厳しく制約された美と愛情の雰囲気は何を失ったかを理解することでもあります。そして、これは多少なりとも価値を持つ唯一の教育なのです。ひょっとすると、福音派または非イギリス国教派として育てられていない人は、成長するにつれて自由に考える資格が得られないのかもしれませんが——つまりしばらくすれば、だれもそういう資格を持たなくなるということになります。そして実際、まさにそうなっているのは、見れば明らかでしょう。メアリー・マーシャルは、生まれだけでなく育ちからももたらされた、人格の優雅さと尊厳とユーモアとまっとうさが衰えることなく94年生きたことで、図書館の最も若い学生に、すでに失われてしまった文明の時代の、美しさ、ふるまい、慎みを教えてくれたのです。

しかし厳しい原理とは何とも奇妙で、ときにひどいものです! ある時代が偉大なものになれるのは、それが何を持ってとんでもないことだと信じるか、あるいは少なくとも信じるように育てられたか次第だったりするのでしょうか? 彼女の父たるシメオン派説教師の信念はあまりに厳格で、ご近所の他の司祭と仲良くなることさえできませんでした。ディケンズなんて、怪しげな道徳を持つ作家だと思っておりました(これはその通りかもしれません)。愛しい娘メアリーがその偏狭な教義から逃れると、両者の関係は決定的に決裂しました。そして彼女は自分の子供時代についてこう記録しています——「妹と私は人形を持つことを許されていましたが、ある悲劇的な日に、父はそれを燃やしてしまいま

した。私たちがそれを偶像にしているというのです。そして、二度と持たせてもらえませんでした」

それでも彼は娘メアリーが、前例がまったくなかったのにケンブリッジに学生として出かけるのを許したのです。彼は、子供たちの愛情あふれる遊び仲間だったし、彼が考案したものとしてメアリー・マーシャルが80年後に回想したもの以上の教育を、だれが望めるでしょうか？

9歳までの教育についてはあまり覚えていませんが、マーカム夫人『イングランドの歴史』は朗読してもらったし、「家の近く」「ずっと遠く」という二冊の本で学び、ピアノで音階を演奏したのは記憶にあります。1859年にドイツ人家庭教師がきて、もっと規則的な授業が始まりました。確かに歴史は日付ばかりで、「Casibelud Boadorp」を筆頭に暗記術を使って学びましたし、地理はもっぱら町や川の名前でした。でもフランス語とドイツ語はかなり徹底して教わり、食事中に一家はドイツ語で話をしていました。科学は「子供の知識ガイド」と「醸造主ガイド」で学びました。この二冊でいま覚えているのは、イングランドに黒い絹のストッキングがやってきた年と、「嵐の夜にはどうしたらいいですか」という問題だけで、後者の答は「ベッドを部屋の真ん中に引っ張って行って、魂を全能の神さまに委ね、眠りなさい」というもの。父と少しラテン語やヘブライ語、そして多少のユークリッドもやりました。物語の本となると「ひろいひろいせかい」と「サンフォードとマートン」を読みました。日曜日には教会の教義問答や特祷、賛美歌、カウパーの詩を学び、「家の日曜日」という雑誌があって、「巡礼の行進」と「フェアチャイルド一家」を何度も何度も繰り返し夜見ました。これは章の終わりごとにお祈りと賛美歌があり、知り合いの子たちはそのお祈りや賛美歌を一気に覚えてそれを片づけ、そしてその楽しい本を自由に楽しんでいました。でも文芸の主要な知識は版に、父がみんなに朗読してくれたときに得られたものです。『アラビアンナイト』『ガリバー旅行記』『イーリアス』『オデュッセイア』、ギリシャの悲喜劇、シェイクスピアの戯曲、そして何よりもみんながスキだったスコットの小説を通読してくれたのです。それを庭で演じ、お互いにその英雄たちの名前呼び合ったものです。一日中、みんな晩を楽しみにして、その思い出は生涯私についてまわりました。この朗読で一点だけ、いつも不思議だったことがあります。スコットは大丈夫だったのにディケンズは禁止だったのです。『デビッド・コパーフィールド』を読んだのは大きくなってからで、そのときもこっそり読みました。たぶんスコットには、ディケンズにはない宗教的な論調があったのでしょう。

1869年には、ケンブリッジ女性向け高等地元試験が開始され、この新しく上った太陽の温かさの中で田舎のさなぎは翼を広げる準備をしたのです。彼女と父親は神学と数学をいっしょに勉強しました。彼女のフランス語とドイツ語はすでに優秀でした。そして、彼女は受験のためにロンドンにでかけたのです。「ライヴィング教授が試験監督をして、私が円錐曲線についての論文でボコボコにされて大泣きしていたとき、クロウ嬢がやってきて慰めてくれました」。試験での成績のおかげで、クロウ嬢といっしょにケンブリッジに行くなら奨学金が出ることになりました。「父は誇りに思っ喜び、クロウ嬢に対する賞賛の念が、娘をケンブリッジにやること(当時ほとんどもないことでした)への反対を乗り越えたのです。父と彼女は親友となり、後年にマートンホールでダンスを開くと、

二人がサー・ロジャー・デ・カバーレイで先導しているのが見えました」。彼はクロウ嬢を、自由思想の持ち主であるその兄の私人アサー・ヒュー・クロウ (マシュー・アーノルドの杖持ち役) とあまり深く関連づけなかったのでしょうか。実際、彼女の慎重なやり方は、彼女の先祖リチャード・クロウにむしろ近いものでした。彼はエリザベス女王の御代に、サー・トマス・グレシャムの有名な代理人となった人物です (ちなみに思い出すのも奇妙なことです、グレシャムはスレイル夫人の先祖でもあります)。メアリー自身とアン・クロウとの間にも、深く長きにわたる友情がありました。

というわけで 1871 年 10 月にメアリー・ペイリーはリージェント通り 74 番 (現在はグレンガリーホテル) でクロウ嬢と暮らしにやってきた五人の学生の一人となったのでした。これがニューンハムカレッジの核となりました。翌年、この活発なお嬢さん方は 12 人となり、マートンホールに引っ越しました。「そこには美しい庭があって、ナイチンゲールが夜も私たちの目をさまし、古代ピタゴラス校が呪われているはずでしたが、実際は私たちをおとずれた唯一のお化けは、巨大なクモたちだけでした」。スキャンダルがまったくないというのは極度に重要なことだったし、きわめて厳しい規律と礼節が、ヘンリー・シジウィックを主導者とするこの新運動支持者たちによって強制されました。だが彼女たちは当時の『パンチ』がおそらく予想したような蓮葉な集団ではありませんでした。メアリー・ペイリーは気高い顔立ち、美しい髪、見事な肌色をしていましたが、それについては自分では記録していません。そして

私の相棒、メアリー・ケネディもおり、アイリッシュの目と美しい顔色のたいへんな美女でした。おかげでシジウィック氏ははずいぶん心配し、後年に献身的な友人であるペイレ夫人は、あの運動の初期の日々に彼が彼女の客間をうろうろと歩きまわっては手をもみしだき、「彼女たちの残念な外見えなければ」と語っていた様子について、楽しげに話してくれたものでした。ケンブリッジのご婦人方の一部は、女学生がお気に召さずに私たちの服装を見張っておりました。シジウィック氏は、私たちが「後ろで結わえた」ドレス (当時の流行でした) を着ているとの噂を聞いて、クロウさんに、それがどういう意味かを尋ねました。彼女はどうすべきかについて、私たちに相談したのです。それをほどけないか、と言って。

[この実に彼女らしい一節は、かつて私たちに話をしたときとまったく同じ口調だが、マーシャル夫人が 93 歳で書いたものです。]

三年が過ぎ、そして女性二人、メアリー・ペイリーとエイミー・ブリーがニューンハム最初の先駆者として男子用の学位資格考査を受けるという大きな興奮がやってきました。1874 年の道徳科学学位資格考査で、政治経済学が学科の一部でした。それはすべて、試験管たちの合意に基づいてきわめてインフォーマルなものでなければならなかったのです。考査の最終段階についての物語は、メアリー・マーシャル自身の言葉で語ってもらいましょう。

ベイトマン通りのケネディ博士の客間で試験が行われました。ラテン語文法のケネディ先生です。彼はいささか興奮しやすく短気でした (私たちの間では紫坊やと呼ばれておりました)

学位資格考査の結果通知書は「伝令たち」と呼ばれた人々が運んできました。それをセナットハウスから受けとって、急ぎベイトマン通りまで運んでくるのです。そ

の伝令の中には、シジウィック、マーシャル、セドリー・テイラー、ヴェンがおりました。試験官の会議では当時、キャスティングボートを投じる議長がおらず、二人が私を一位に、二人が二位に選んだので、私はシジウィックさんの言い方では「天国と地獄の間」に宙づりになったままだったのです*2。そしてケネディ博士が次の詩を作りました。

二人は栄光を彼女に詰め込み
二人は少し低い栄光をあたえ
だがその精神と道徳スタミナは
どの試験官からもお墨付き
そいつは六位や七位だったか
おおフォックスウェル、ガーディナー、ピアソン、ジェヴォンズよ！

私たちはクロウ嬢の学生として学位資格考査に挑んだ初の二人だったので、かなり気を使ってもらいました。ケネディさんたちはずいぶんと繊細な軽い昼食を用意してくれて、すべてが終わってから、結果が出るまでイーライでいっしょに滞在するよう連れ出してくれました。興奮が私たちにはあまりに大すぎるかもしれない、と懸念してのことです。

「伝令」はみんな、私の若き日々の、ケンブリッジでお馴染みの人々です。マーシャルを除けばみんなかなりチビで、長く流れるあごひげを生やしていました。でも当時のヒゲは、25年後に私がそのみんなに出会った頃ほどは長くなかったかもしれません。私は彼らをお姫様たちを知的まどろみから揺り起こし、男性的な人類の覚醒へともたらす魔法の処方箋を抱えて急ぐ、賢く親切な小人たちとして見えています。

そして彼女の「精神と道徳スタミナ」について言えば、続く世代がその後70年にわたり証言できるようになります。

翌年の1875、シジウィックはメアリー・ペイリーをニューンハムのオールドホールに住むよう招きました。そこではクロウ嬢がいまや学生20人ほどを集めていたのです。そして、マーシャルにかわって女学生たちに経済学の講義をしてほしいというのです。その初期のニューンハムには、何と立派で驚異的な女性たちが集まっていたことでしょう！マーシャル夫人はメモの中で、その初期の女学生の中でも「『ニューンハムの女性詩人』キャサリン・ブラッドレー(彼女の姪とともにマイケル・フィールドとして有名)、アリス・ガードナー、メアリー・マーティン(ジェイムズ・ワード夫人)、エレン・クロフツ(フランシス・ダーウィン夫人)、メリーフィールド嬢(ヴェラール夫人)、ジェーン・ハリソン」を挙げていますが、天才肌でない女性は一人もいません。そしてジェーン・ハリソンの名前が出たのをきっかけに、彼女はこう続けます。

これはラファエル前派の時期で、部屋はモリスの壁紙、バーン＝ジョーンズの写真を買って、それに応じた服装をしました。芝テニスをして、ジェーン・ハリソンはテニスドレスの刺繍をデザインしました。彼女はザクロ、私のはヴァージニアクリーパーで、二人で晩にすわってはその作業をしておしゃべりをしたのです。彼女は少女時代から知っていますが、当時ですら「イングランドで最も賢い女性」と呼

*2 これは文字通り、マーシャル夫人の書類の中から見つかった学位資格考査結果の羊皮紙証書から出てきたものだ。本当に試験官たちはの二人は彼女を一位に、二人は二位にして、そのまま結論を出していない！

ばれていました。最終的には古典の学位資格審査を受けましたが、マーシャル氏により道徳科学で受けるようほとんど説得されかけ、その後はずっと彼を「ラクダ」と呼んでいたものです。というのも、ウマがラクダを見て身震いするように、彼女もマーシャル氏を見ると身震いするから、というわけです。私が彼と婚約したのは自分のおかげだと彼女は宣言しておりました。というのも、その日にきれいな白いフリルを私のドレスに自分が縫い付けたから、というのです。

というのも翌年の1876年、メアリー・ペイリーとアルフレッド・マーシャルは婚約したからです。彼女のほうからすると、それはどうやら五年前からの一目惚れだったようですね。リージェント通り74番でのケンブリッジ第一学期について、彼女はこう回想しています。

シジウィック氏とマーシャル氏についての最初の記憶は、みんなですわって、家のリネンをクロウさんの茶の間で縫っていたときのものでした。マーシャル氏を見たのはそのときが初めてでした。そのときは、こんな繊細な輪郭と輝く目をした、これほど魅力的な顔は見たことがない、と思ったのです。私たちは一言も言わずに座って、二人がクロウさんに高級な話題について語っているのを聞いておりました。

第一学期に彼女はマーシャルの講義に出るようになりました——女性講義用に貸し出されたグローブロッジの馬車置き場でのことです。「マーシャル氏は黒板の横に、いささか不安げに立ち、指先で羽根ペンを曲げておりましたが、それが指の間から飛びだしてしまいました。彼はとても真面目そうで輝く目をしておりました」。セントジョンズカレッジの学長夫人ベイトソン夫人が、ロッジのホールで小さな舞踏会を開きました。「マーシャル氏がいささか憂鬱そうなのを見て、ランサーズを踊りませんかと申し出ました。彼は驚いたようで、踊り方を知らないと言いましたが、それでも同意したので、私とその迷路を案内してあげたのですが、自分でも己の大胆さにはショックを受けました。一言もしゃべらなかつたし、向こうも何も言わなかつたはずです」。お次は彼の部屋でのお茶への招待でした。それはセントジョンズカレッジのニューコートで一番高い部屋で、クロウ嬢が付き添いました。マーシャルの講義については、実におもしろい記述があつて、そこからはどうしても以下の抜粋は抜かせません。

こうした講義で彼は、多くの実用的な問題についての見方を語ってくれました。たとえば踊り、結婚、博打、密輸入などです。結婚について言うと、「結婚生活の理想はしばしば、夫と妻がお互いのために生きることだと言われている。もしこれが、お互いの満足のために生きるためだということであるなら、それは私にはきわめて不道徳なことに思える。男と妻は、お互いのために生きるのではなく、何らかの目的のためにお互いいっしょに暮らすべきなのだ」

そしてこれについてマーシャル夫人はこうコメントを加えています。「彼は大した説教師でした」

一方、彼女はスチュアート教授に、拡張講義の教科書を書くことと約束していました。婚約後は、マーシャルもそれを手伝い始めました。

この本は共著として1879年に出版されました。アルフレッドはこれに固執しまし

たが、次第に私はそれが本当は彼の本であるべきで、特に後半はほぼ彼一人が書いており、後に「原理」で登場したものの多くはここで胎動し始めているのです。彼はこの本がずっとお気に召しませんでした。というのもそれは「短くて簡単なあらゆるドグマはまちがっている」という信念に反するものだったからで、この本についてはよくこう言いました。「真実を半クラウンでなんか語れるわけがない」

でも実のところ、それはきわめてよくできた本でした。長年にわたり、この目的のためにこれほど優れた本はなかったし、いまだにないかもしれません。私の父は、マーシャルがこの本を嫌うのは何だか意地悪だといつも感じていました。もともと彼女の本だったのに、まだ強い需要があるうちにマーシャルがそれを絶版にしてしまっても、メアリー・マーシャルは一言も文句を言いませんでした。似たような題名でそのかわりに登場した彼の単著は、かなりちがう性格のもので、『原理』の抜粋版です。1879年の本は、それ以前に出版されたものに比べると実に大きく進歩した本でした。この緑の表紙の小さな本で、マクミランの青い布装の分厚いものではありません。

1877年7月に二人は結婚しました。でも二人の本当の蜜月は、たぶん1881年に、ブリストルのユニバーシティカレッジの学長を四年務めてからマーシャルが健康を害し、彼女が彼をつれて、パレルモに長い療養治療にでかけたときだったのでしょう。たぶんこれは、彼女の人生において最も邪魔の入らない幸せと完全な満足の時期だったろうと思います。それを六〇年後に回想して彼女はこう書いております。

パレルモでは五ヶ月にわたり屋根の上において、何か楽しいことを考えたいと思うときにはいつもその時のことを回想してみるのです。それは小さなイタリアのホテル「オリヴァ」の屋根でした。もちろん平らで色つきタイルを敷いてあり、その上でアルフレッドは、日中はアメリカンチェアにすわり、その頭上に移動式風呂の蓋を日よけがわりに設置していました。そしてそこで彼は「原理」の初期の教章を書いたのです。ある日、彼は屋根からおりてきて、たったいま「需要弾性」の概念を発見したと話してくれたのです。

これはシチリアの風景を描くすばらしい章の冒頭部分です。マーシャルは腎臓結石に苦しんでいましたが、寝たきりではありませんでした。その生産性は最大となっていました。論道もなく、講義も無く、面倒な同僚もおらず、メアリーがその後生涯にわたりなだめ続けることになる、過敏すぎる精神へのちょっとした苛立ちもまったくなし。自然は優しく美しかったのです。「屋根からはコンカ・ドーロ、あの内陸数マイルにわたり広がる、オレンジとレモンの黄金の皮が見られ、両側で海と出会い、各種の形の反映を形成する山々が見えました」。見下ろせば小さな中庭です。「小さな中庭ですが、それが最大限に利用されていました。小道の上を覆う垣根は、ブドウの実るツタで覆われ、レモンの木とオレンジの木と大量の花がありました。周辺の家は色つきタイルで飾ったバルコニーを持ち、特にクリスマス近くになると、そこに七面鳥が飼われ、一方のハトたちは穴や隅に暮らしておりました」。彼女は朝に市場にでかけて果物を買うのが大好きでした。生涯の、ほぼ晩年に到るまで、メアリー・マーシャルは才能あるアマチュア水彩画家で、スケッチをしているときほど幸せなことはありませんでした。アルフレッドが屋根で『原理』をまとめている間、メアリーは絵筆と絵の具を持ってでかけたのです。

私がいちばん気に入って長時間過ごし、絵を描こうとしたのは、カペッラ・パラ

ティーナでした。小さくてスリット状の窓で照明も暗く、日差しの中からそこに入ると、暗い黄金の陰の塊以外はほとんど何も見えません。でも次第に、輪郭と細部のすばらしい美が現れてきます。その輪郭はノルマンで、サラセン労働者たちが豊かな色彩と東洋的な装置を満たすのです。中でも最も美しいのは黄金のアプスで、そこから大きなキリストの頭がそびえているのです。

それは完璧な至福の数ヶ月でした。

というのも、その後40年にわたり、彼女の人生は完全に夫の人生と融合したからです。これはウェッジ夫妻のようなパートナーシップではありませんでした。両者の気質がまったくちがうものだったら、そうになっていたかもしれませんが。初期の共感や、妻の精神的な判断力から常に得ていたものすべてにも関わらず、マーシャルはますます、女性の知性から有益なものは何も得られないという結論に傾いていったのでした。1896年に、女性に学位を与える提案をめぐる大きな論争が生じたとき、彼は生涯にわたる友人たちを振り捨て、妻がどう感じ、どう思おうとおかまいなしに、反対の立場を採ったのでした。しかしメアリー・マーシャルは、「厳格な原理原則」の男性のあり方を知って育ったし、それを尊重して受け容れるように育てられました。彼女の人形(偶像にする危険が会ったというわけです)が愛する者に燃やされるのは、これが初めてではなかったのです。

そうではあっても、二人の関係は知的なパートナーシップでもありました。それは、片側の根深い依存症(「彼女なしでは一日たりとも生きられない」と、その相手の深い献身と愛情(それは極度の洞察力によって、損傷するどころか深まるばかりでした)に基づくものだったのです。彼女の明晰ですべてを見抜く真実あふれる目を逃れるものは何もありませんでした。彼女は、彼が立ち向かわずにすむようにするため、あらゆるものに自分が対応しました。人柄と、明晰な頭と、たぶん付け加えるなら私がこれまで他に見たこともないある種の天与の才により、ケチなもの、苛立たしいもの、無用なものを、台頭でユーモラスで愛情あふれる優しさの魅力により追い払ってしまえるのです。アルフレッドの存命中もそれ以降も、彼女が自分のために何かを求めたり、期待したりしたことはありませんでした。彼女の考えで常に筆頭に來たのは、他人に迷惑をかけてはいけないということだったのです。

このように見事な備えを持ちつつ、彼女はいまや自分の人生を彼のものに融合させたのでした。ブリストルでも二人が間もなく赴くことになるオックスフォードでも、彼女は経済学の講義をして、ケンブリッジに戻ったときにもニューンハムでの講師職を再開し、長年にわたり生徒たちを担当していた。『原理』の初期の版ではグラと索引について目を光らせ、そして偉大な本の方向や進行に影響を与える方法は、公開の直接的な批判以外にいろいろやり方があります。ブリストル大学の文学博士の学位が与えられました。でも彼女は私の知る限りでは、訪問者と経済問題について対話したことはなかったし、ベイリオル・クロフトでの果てしない経済談義に参加することさえありませんでした。真剣な議論になると彼女は居間を男たちに任せるか、あるいは訪問者が上階の書齋へと出かけ、最も無知なお嬢さんですら、学術的な業績の面で彼女以下であるというふりをするのは、なかなか難しかったでしょう。彼女の休日の役目はオーストリア学派の経済学者たちの理論を論争することではなく、南チロルの水彩画を描くことでした。実際、彼女の芸術的な才能はかなりのものでした。友人に作品を見せることはめったになかったのですが、ケンブリッジ絵画協会ではしょっちゅう展示を行い、C・R・フェイ氏にその絵を遺贈し、彼は

それをマーシャル図書館に寄贈しました。各種場面を描いたかなりの数の絵で、そこに彼女はスケッチ用スツールとイーゼルを持ってすわる一方、ご主人は、「その『玉座』にエアクッションとキャンプスツールを持ってすわっていたのです。それは、石の山にたてかけるように開くと、もたれかかるための快適な背となったのです」。そしてそこにすわり、彼女よりも不安定な手つきで、代表的企業を定義していたのです。

パレルモから戻ると、ブリストルでもう一年過ごすことになりました。1883年にマーシャルは、ベイリオルでアーノルド・トインビーの後を継ぎ、オックスフォードのインド学生向けの講師となったのです。オックスフォードで彼は、他のどの時期よりも多くの生徒を抱えていました。というのも「グレーツ」の人だけでなく、気鋭のインドの民間人たちも彼の講義に出席したからです。彼女はこう述べています：

当時はヘンリー・ジョージ『進歩と貧困』が大いに関心を持たれておりました。アルフレッドはこれについてブリストルで三回講義を行いました。エリオット嬢によるとそれは、獲物を飲み込む前になめ回すと言われるアナコンダを思わせるものだったそうです。オックスフォードで彼はヘンリー・ジョージ当人と出会い、ヨーク・パウエルが議長となってマックス・ミラーも演壇にいたとか。間もなくハインドマンと別の決闘が行われ、それがアーサー・シジウィックの「ハインドマンなど悪魔に喰われる」発言を生み出しました。当時は金銀複本位制と植民地自治が大論争となっており、ディナーパーティーで持ち出すには危険すぎる話題でした。

ベイリオルは当時、その輝きと名声において頂点にあり、そこで短い間奏期を過ごしたおかげで、アルフレッド・マーシャルはまちががなく、それまでよりも広い世界に引き出されることとなりました。彼はジョウエットの若者の一人となったのです。ジョウエットは、ブリストル大学評議員の一人でしたが、初めてマーシャルに出会ったのはベイリオルでのことで、オックスフォードでの時期はマーシャル夫妻の両方との友情を確立することになり、後にケンブリッジに移ってからの二人のところによく訪ねてくるようになりました。マーシャル夫人はこう回想します：

学長を初めて見かけたのは、パーシヴァル夫妻の開いたディナーパーティーの席でした。彼とヘンリー・スミスはカレッジ評議員で、年に三回定期的に会合にやってくる、通常はうちに滞在しました。こうした訪問は実に楽しいものでした。彼らは実に息の合ったペアで、いっしょにいると実に楽しそうでした。というのもジョウエットはかなり気心の知れた相手とでない限り、いささか口数が少なくだまっているのですが、ヘンリー・スミスとはずいぶん胸襟を開いていたのです。ヘンリー・スミスは、私が出会った中でもっとも理髪でユーモアあふれる話し手でした。二人とアルフレッドといっしょに、深夜をはるか過ぎてまで起きていたものです。ジョウエットの前で緊張せずにいられるようになったのは、五年ほど後でした。というのも彼の口数の少なさが障害になったからですが、しばらくすると、かなり折り合いがつくようになり、話したいときにしか話をしないようになりました。ときにはいっしょに散歩をしましたが、彼はたまに何か意見を述べて、そして間をもたせるために、ちょっとした曲をハミングするのです。

このようにマーシャル夫妻は、ベイリオルとオックスフォードの社交界に楽々と入り込んだのです。イヴリン・アボット、ルイス・ネトルシップ、アンドリュー・ブラッド

レー、ストラチャン・デヴィッドソン、アルバート・ダイシー、アルフレッド・ミルナーはベイリオルのフェローでした。

女子大学がその頃始まって、私はワーズワース嬢と知り合いになるという実にすばらしい幸運に恵まれました彼女はレディ・マーガレット・ホール初の舎監です。賢くてウィットに富み、その台詞は格言に満ちて、彼女との散歩は楽しいものでした。当時ラスキンがオックスフォードにいてドローイングの講義をしており、混雑した慣習に講演をして、学部生たちに道を切りひらくよう促しておりました。トインビー・ホールが創設されるところで、バーネット夫妻がしばしばベイリオルにやってくるまでは、積極的に参加するよう若者たちを鼓舞していました。慈善組織協会が発足したばかりでした。フェルプス氏が議長で、アルバート・ダイシー氏とエレノア・スミス嬢が(イヌをつれて)定期的にその会合に出席しました。またシドニー・ボール氏主催の、社会問題議論のための集まりがあって、だからオックスフォードでの人生の四期は興味深いことや興奮に満ちていたのです。

そして、ジョウエットのディナーパーティーもありました。

彼は友人たちを引き合わせるのを好み、学期中ほぼ毎週末ごとに、彼はお互いに知り合いになりたがっていきそうだと思うたり、お互い助け合えると思ったりした人々に声をかけて、ロッジに滞在しなさいと言うのでした。彼の計画は、土曜日にかなり大規模で、慎重に手配したパーティーを開くことで、アーサー・シジウィックはそれを「ノアの箱舟」ディナーと呼んでおりました。というのも、実に多くの不思議な動物たちが、ペアになって入っていったからです。なかなかおもしろいペアは、かなり巨大な女性レディ・ローズベリーと、小さなシャムの王子でした。ゴッシェン夫妻、ハックスレー夫妻、マッシュュー・アーノルド夫妻、ロバート・ブラウニング、「ダム神学」ロジャース、オーストラリアの首相、サー・ロバート・モリエ、コーネリア・ソラブジと、アルフレッド・グレイ夫妻、その他実に多くの人々が参りました。彼は友人たちと静かな晩を過ごすのがお好みでした。いちど、アルバート・ダイシーとエレノア・スミスに会いにきました。エレノアはヘンリー・スミスの妹で、ヘンリーが愛想のいいユーモアで知られていたのと同様に、直裁な鋭い真実で有名だったのです。またあるときには、ラスキンをつれてきました。彼は笑話をして、子ぶたについての気の利いた詩で笑わせてくれました。彼をよく知っているスミス嬢によれば、これほど上機嫌な彼は見たことがないとのこと。アルフレッドはある日、たまたまヴィノグラドフ教授に出会い、実に魅了されて、食事に来てその晩にやってくる手はずとなっていたジョウエットに会いませんか誘ったのでした。当初は少しごちなかつたのです。というのもジョウエットはヴィノグラドフ教授とは初対面で、いつもながら見知らぬ人が相手だとあまり口をきかないからですが、晩が進むにつれて会話がますます自由闊達になりました。夕食後には小さな裏庭で、カバノキの下、満月の下にすわり、そしてそれはジョウエットが、哲学と詩において「よい」と呼ぶものになったのです。あの晩ほど彼が自由闊達にしゃべるのは聞いたことがなく、その会話を思い出すためならかなりの犠牲を払うところでした。彼はアルフレッドに経済学の質問をするのを楽しみ、小さなノートを取り出して、特に興味を惹かれた発言を書き留めるのでした。彼はかつて、アルフ

レッドの談話が知る限りで最高だと語ってくれました。別のときには「アルフレッドは私が知る中で最も公平無私な人物だ」とおっしゃいました。我が家の忠実な使用人「サラ」に興味をおぼえ、彼女が自分の宗教的な困難について話すのはジョウエットだけでした。ケンブリッジで彼が我が家に滞在するときには、彼は台所で彼女とすわり、そうした問題を語り合うのです。

1885年のケンブリッジ期間も、マーシャル夫人自身の言葉で語ってもらうのがいちばんいいでしょう。

四学期の終わる頃には、オックスフォードに完全に腰を据えた状態でした。ウッドストック通りの小さな家と庭は私たちにぴったりでした。私は女学生を教え、アルフレッドは大きな教室を教えるのを楽しみ、ずっとケンブリッジこそ自分の真の故郷と思ってはいたものの、未来はオックスフォードにあるのだと思っていました。でも1884年にフォーセットが死に、アルフレッドがその後任に選ばれたのです。唯一のまともな競争相手はイングリス・パルグレイブだったもので。そして1885年1月に私たちはケンブリッジにでかけ、チェスタートン通りの家を一年借り、1886年にベイリオル・クロフトが建てられ、私たちは完全にそこに腰を据えたのです。1885年には物価はまだ低く、家の建設費は900ポンドでしたが、建築家のまぢがいのせいで、実際には1100ポンドかかりました。すうねんにわたり、それはマディングリー通りにある唯一の家で、その敷地を選んだのも主に森の木々のためでした。アルフレッドはその家の計画と場所の節約にえらく腐心し、特に台所を小さくしようとしました。書歳は絶対にもっと上の階だと述べていて、それはケンブリッジではなるべく地面から離れてくらすほうがいいと思っていたからです。でも建築家J・J・ステイーブンソンは、二階とバルコニーで満足するよう説得したのです。

マーシャル夫人の死後、ベイリオル・クロフトは60年近い敷地リースが切れ、またもやベイリオルからケンブリッジに引っ越してくる別の教授に2500ポンドで売却されたというのは、お金の価値の変化を如実に示すものです。この家に投資されたのは、マーシャル夫人が遺産として大執事の著者としての巨額の利益から未だに温存されたわずかな遺産、18世紀のギグルスウィック学長の長きにわたる勤務、時の霧にまでさかのぼるヨークシャー自作農から引き継がれた遺産だったのです。それがいまやケンブリッジ大学に、マーシャル図書館となって流れ込んできました。その遺産の最初の果実は、1944年6月にマルサス『政治経済学』オリジナル原稿を購入したことでした。

その後40年にわたり「どの年もその前と大差ありませんでした」。マーシャル夫妻はとても小さな家と忠実な使用人一人を持っていましたが、そこは大いなる世界からの訪問者に負けず劣らず、最もつまらない学部生にも果てしないもてなしを提供してくれたのです。この「忠実な使用人一人」も改めて言及しておくべきでしょう。43年間にわたりサラと、彼女の死後はフローレンスでした。サラは(マーシャル夫人の文によれば)「ほとんど毎年11月に、あの最もつらい月になると、退職予告をするのですが、無視しました。というのもここを辞めたりしないとわかっていたからです」。彼女はあの陰気な宗教の中でも最も陰気な宗派プリマス・プレザレンの一員でした。

彼女はすばらしい料理人となり、大きな責任を任されるのが大好きでした。「楽し

む」のはまちがっていると考えておりましたが、人生で最も楽しい1週間は、英国教会がケンブリッジで会合を開き、食事ごとに十二人ほどがやってきたときだとよく語っていたものです。彼女はその面倒をすべて切り盛りして、夜も横になったまままんじりともせず、翌日のメニューを考えていたのです。あるとき彼女は、自分が世の中に十分役にたっていないという気持に襲われましたが、よい料理によってアルフレッドの健康を維持し、彼が重要な本を書けるようにしているのだと気がついて、安心したのです。

マーシャル夫人は献身を得る方法を知っていました。彼女はレディ・ジェブについて回想しています。この人物は「1870年代に若いアメリカ人未亡人としてイングランドにやってきて、一世を風靡し、教員たちが次々に恋に落ちました」が、あるとき使用人についての話になると、彼女は誉めたおすのが一番だと信じていて、こう締めくくったそうです。「神さまだつてあれほどいつも讃えられていないといけないでしょうに」

労働運動の最初期に、マーシャル夫妻は労働階級の指導者を招いて滞在してもらいました。「ベン・ティレット、トム・マン、バーネットも我が家を訪問し、特に楽しかったのがトマス・バートでした」。エッジワースもしばしば滞在しました。「もちろん、アメリカ、ドイツ、イタリア、フランス、オランダからの経済学者たちがたくさん訪問してきました。何度かうちに滞在したピアソン教授とその奥方、そしてタウシグ教授と奥さんがとても気に入っていました」。そしてもちろん、その生徒たる私たちは、見物すべきおもしろい訪問者がいればいつもそこで昼ご飯を食べ、あるいは自分の魂と頭の糧を得るため、一人で書歳で紅茶を飲んだりしていたのです。

しかし訪問者だけでなく、当時のケンブリッジ社交会は驚くべき集団でした。

私は、婦人お食事社交界の一員となりました。10人から十二人ほどで、学期中にお互いの家で一、二度ほどお食事をするのです。夫たちは、同僚たちと食事をするか、書歳で孤独に食べるのです。女主人はよいディナーを提供するだけでなく(ただしシャンパンは禁止でした)、必要に応じて会話に適した話題も出さねばならず、外部の婦人をディナーで紹介するのも許されていました。でもこれは会員制の社交界でした。そして新会員の提案があっても、反対者が一人でもいればダメです。その会員は、クレイトン夫人、アーサー・ヴェラール夫人、アーサー・リトルトン夫人、シジウィック夫人、ジェイムズ・ワード夫人、フランシス・ダーウィン夫人、フォン・ヒューゲル男爵夫人、レディ・ホレース・ダーウィン、レディ・ジョージ・ダーウィン、プロテロ夫人、レディ・ジェブでした」

マーシャル夫人は、きわめて高齢になったときに、こう回想していました。「どうもかつての日に比べて、いまは『傑物』が少ないようですね」(そしてその通りではないかと私は恐れています)。

長期休暇のほとんどは南チロルで過ごしていました。特にアプテイトルのシュテルンで、小さな旅籠宿を維持していたフィロメナのところに滞在するのが常でした。

ある年、隣村に「オーストリア学派」の経済学者たちが大量に集まっているのを知りました。フォン＝ヴィーゼル夫妻、ベーム＝バヴェルク夫妻、ズッカーカンドル夫妻その他数名です。私たちは図々しくもその全員を、こちらの巨大な寝室でのお茶会に招待しました。そこはこの宿で最も広く素敵な部屋で、その後は近くの野原

のテント小屋で集まりました。フィロメナはこんな立派なお客がくるのを誇りに思い、朝四時に起きて新鮮なバターや各種のつまみを娯楽用に作りました。フォン＝ベーム＝バヴェルクは痩せた活発な小男で、熱心な登山家で毎日のように白雲岩を登っていました。おかげで経済学のエネルギーがいささか使い果たされ、金利理論についての話をしがりませんでした。彼とアルフレッドは最近、この話について温かい文通を繰り返していたので、私はこの話題をいささか恐れていたのです。フォン＝ヴィーゼン教授は高貴な外見の方で、実に楽しい方でそれに見合った奥様とお嬢さんがおり、オーストリア学派がその夏を過ごしていた、美しい古い農家で開かれたお返しのお茶会を、私は大いに楽しんだものです。

1920年に、海外旅行の最後の、そしていささか悲惨な試みが行われました。そしてその後、この甘きパートナーシップも終わり間近となったのです。

その後三回の夏は、アリッシュ・メルというドーセットの美しく人里離れた入江で過ごしました。そこで彼は、第3巻の作業を進めたのです。しかし『産業と商業』が1919年に仕上がると、記憶力が次第にひどくなり、その後間もなく医者から「彼はもう構築できなくなる」と言われました。そしてその通りでしたが、ありがたいことに当人はそれを知りませんでした。というのも、老齢になった彼は書斎から下りてきて「実に楽しい時をすごした。建設的な仕事に比肩する喜びはない」とよく語っていたからです。

しかしアルフレッド・マーシャルの死後も、さらに20年にわたりメアリー・マーシャルは、その静謐な美と深い親密さでアルフレッドの古い学生たちやその妻たちに触れることになるのです。

40年前には学生向けの専門貸出図書館、生徒たちが本を持ち出せる図書館は、珍しいものでした。マーシャルの教育技法で不可欠な部分は、生徒たちがその主題について広く読みあさるよう進め、図書館の使い方を学ばせることでした。価格指数についての質問に答えるとき、三年生や四年生は、単に最新の標準権威を調べるだけでは許されません。少なくともジェヴォンズやギッフェンくらいまではさかのぼり、できればフリートウッド司教までさかのぼるよう求められました。過去20年にわたり『エコノミック・ジャーナル』に発表されたあらゆる関連論文を見なければならず、さらに興味が進めば、中世以来の物価の歴史を調べたり、ソロンやチャールズ二世の頃の小麦価格を賃金との比較で調べることになっても、何の問題もありません。答が出てくるまでに、その目が十から一ダース以下の文献しか参照していないようであれば、お気に入りの生徒は自分が値しない存在（つまり経済学者になるという偉大な使命にふさわしくなく、この高等聖職を継続する価値がない人物）と思われてしまうのです。彼はこれを可能にする方法を三つ持っていました。まず、講義室の中に当然見るべき本の図書館を確立してありました。小規模ですが、当然ながらどんな学部生の蔵書よりもはるかに徹底したものです。教授職を辞任したときには、この蔵書を後継者に寄贈しました。確か私が初代の公式司書で、初の印刷蔵書目録を作成したのも私のはずです。それ以上に、マーシャル自身の広いコレクションがあり、そこから生徒は、ベイリオル・クロフトでお茶をした後で、マディングリー通りからの帰路に運べるだけの本を抱えて持ち帰るよう期待されていました。最後に、ずっと昔に彼は専門誌を解体し、そのためにときには追加でその雑誌をもう一部購入し、記事をその主題

別に集めて綴じるという習慣をずっと昔に採用したのです。こうした巻がマーシャル図書館にはいまや大量にあり、これはそこについての脚注とともに、生身の学生をある参考文献から次の参考文献へと導き、やがてもしそれをやりとげたなら、すくなくともその週はその問題についての歩く書誌になれるのです。こうした巻の作成と、その後の著者別、主題別の目録を作って「茶色の箱」に入れるのは、もう記憶の続く限りマーシャル夫人専門の仕事なのでした。

こうしたすべてについて、教育手段と個人的なつながりや靈感の手段として、マーシャル夫人は熱烈に支持していました。本を抱えて帰途につく訪問者は、そこを離れる前に階下で彼女と言葉を交わし、そして彼女はその人物がドアを出て車寄せを出ていくのを、深い満足を目に浮かべて見送るのです。ですからアルフレッドが彼女の世話を超えたところへと旅立ったとき、この伝統を維持して彼の本をすべて、その後の世代の学生たちの手の中で生き続けさせることが、彼女にとって最も重要な目的となったのでした。

まず、彼の図書館は大学に寄贈され、学生たちが普通に使えるように、前出の既存の学生図書館と融合されてマーシャル経済学図書館となりました。次に彼女は支払い規定に基づくかなりの信託基金を設立し、そこに彼の本の印税からの年額を足しました。その本の売上げは、彼の死後数年にわたり、減どころかかえって増えたのです(遺言状で彼女は図書館に、さらに一万ポンドと夫の著作権すべてを遺しました)。しかし何よりも彼女は、自分自身が生身の人物として、本と台頭する世代の学生たちの守護女神になろうと決めたのでした。そこで75歳の誕生日に、万人は65歳に他界すべきと定めてよいとする大学の規定など無視して、彼女はマーシャル経済学図書館の名誉司書補に任命され、それを二十年近く続けたのでした。彼女は毎朝、90歳の誕生日近くに当人としてはいたくご不満なことに医者に禁じられるまで(それは彼女の身体能力の衰えによるものではまったくなく、部分的には友人のうながしによるものですが、それ以上にケンブリッジの交通がどんな健常者ですらあまりに危険なものになったためです)、マディングリー通りから図書館までのかなりの距離を自転車で行っていました(図書館は、1935年にかけてスクワイヤ法律図書館だった、ダウニング通りの地質学博物館に隣接するあの立派な広い建物に移転しました)。そのときにはいつも、60年前のラファエル前派の遺産であるサンダルを履いていたのです。図書館での彼女は、午前中は図書館の管理を行い、最初のうちは学部生がそれを手伝っていましたが、後には仕事の規模が拡大するにつれて、専門の司書助手が手助けするようになりました。1933年以降はミッセン氏です。こうして、その後の歴代マーシャル図書館司書、デニス・ロバートソン、ライル・フェイ、そして1931年以降は(断続的に)ピエロ・スラッファ氏の定型作業も軽減されることになりました。「茶色の箱」を整理するのが、彼女専門のお気に入りの作業でした。彼女は常にそこを「私の図書館」と呼んでいました。その心と頭はが、彼女のいつものやり方で、等しくそこに捧げられ、それが60年前にバイリオル・クロフトできわめて強力な鼓動を開始した、ケンブリッジ学派の経済学者たちの生活の流れと脈拍に彼女が触れる、主要な場所となったのです。

1936年11月7日^{*3}、図書館で小さな集會が開かれ、彼女はセントジョンズカレッジの廊下にかかっているマーシャルの肖像画を、ウィリアム・ローゼンスタインが複製したものを発表しました。その後彼女は図書館の奥で、その肖像画の下にある小さな中央テーブルにすわっていました(ありがたいことに、そのようにすわっているきわめて彼女らしい

^{*3} *Economic Journal*, December 1936, p.771 参照。



メアリー・ペイリー・マーシャル 92 歳、マーシャル図書館にて

写真が残っています)。1941年、91歳になると、気管支炎が発症して、初めて彼女の出勤が不規則になりました。1942年にはもう図書館にこられなくなってしまいましたが、11月14日には、夫の生誕百年記念祝祭に出席して*4、精神の完全な活発さを示す演説を行い、出席者に対して夫が自分の研究活動からどれほどの幸せと喜びを得ていたかを語りました。1944年3月7日、彼女は死亡し、その肺はバイリオル・クロフトの庭に撒かれたのでした。

朝のように慎み深く、真昼のように明るく
晩のように優しく、夜のように冷静。

*4 Ibid., December 1942, p. 289.

第 13 章

フランシス・イジドロ・エッジワース (1845-1926)



フランシス・イジドロ・エッジワース

フランシス・イジドロ・エッジワースは、名家の男系子孫の最後になりかけるところだった——お気に入りの、平均の法則を体現してみせたわけだ。というのも、その曾々祖父フランシス・エッジワースは妻 3 人と結婚し*¹、祖父のエキセントリックで高名なりチャード・ロヴェル・エッジワースは妻 4 人と結婚して*²、子供を 22 人もうけ、うち息子 7 人と娘 8 人が彼より長生きしたのだった。当の F. Y. エッジワースは、その六番目の息子の五男だった。だが 1911 年に、他の世継ぎたちが男の子孫を残さずに死んだので*³、彼はロングフォード郡のエッジワースタウンにある家族の邸宅を受けついだ。エッジワース家の名前はミドルセックスのエッジウェア家から採ったもので、これは元々エッジワースだったが、エリザベス女王の御代に身を立てたのだった。家を継いでから、彼は家族の記録をまとめて、エッジワースタウン・ハウスを既婚の姪のモンタギュー夫人管理下で、かつての伝統に近いものにある程度は戻そうとした。彼は毎年アイルランドを訪れたが

*¹ *Memoirs of Richard Lovell Edgeworth*, vol. i. p.15. これを見るとエッジワースの先祖についていろいろ楽しい話が出ている。このフランシスは今日、旧世界に男系の代表者はいない。

*² 最後の妻、F. Y. エッジワースの祖母は、エッジワースタウンで彼が人生最初の 20 年間暮らしていた家の主だが、1865 年まで生き延びた。つまり夫が生まれて 121 年、自分自身の 96 年目まで生き延びたわけだ。

*³ リチャード・ロヴェル・エッジワースの長男は、うら若き頃にルソーの原理を教わってから、アメリカに移住して父より先立った。その父はアメリカの孫たちを自分の相続人から排除したのだった。この息子の子孫を名乗るエッジワースたちがアメリカにはいるとのこと。

エッジワースタウンには暮らさなかった。だが「高齢」になったら、先祖たちの家で幸福に暮らすのを楽しみにしていると述べた——とはいえ、彼がいつ、いやついぞこの時期に自分が到達したと考えたのかは、私は知らない*4。

エッジワースは一世近く前の有名人たちと特筆すべきつながりを持っていた——小説家マリア・エッジワース*5の甥だ。彼女は1767年生まれ、18世紀にはすでに有名で、1847年に死んだ詩人トマス・ロヴェル・ベドーズの第一従兄弟だ。サー・ウォルター・スコットは『ウェイバリー』最初の出版時に一冊エッジワースの叔母に献呈し、その最終章(およびその後は小説の序文)で、彼女がアイルランド人の登場人物を描いて見せたことで、スコットランドでも似たような実験をしようという気が起きたのだと述べている。またジェイン・オースティンは『エマ』初版を献呈してくれた。マコーレーは『歴史』を献呈し、本文中にも彼女に言及がある。そして晩年に彼女はギャとコーム・パークのリカードを訪ねている。

F. Y. エッジワースの父、フランシス・ビューフォート・エッジワースは1809年生まれで、チャーターハウスとケンブリッジで教育を受けて、スターリング一味の有力な一員であり*6、トマス・カーライルにより、『ジョン・スターリングの生涯』(第二部、第4章)で三ページほども割いて、悪くなくもない形で描かれて不滅の存在となった。フランクは、カーライルによると「背の低い身ぎれいな男で、精悍で四角い無職の顔をして(彼の父親の肖像に似ている)、その小さな青い目には、不思議と喜びのない微笑がきらめいていた。その声はしゃがれて甲高く、意地悪い頑固さの調子があつて、ひよつとすると皮肉な調子もこめられている。しっかりした、教条主義的で、厳密で、流麗さのない人物。プラトンと、同じくカントを学んでいた。哲学や文学をたくさん読んでおり、信条を抱くのではなく、プラトンの、カント的な信条の幽霊を抱いていた。あらゆるトリー主義や迷信を、その喜びのない目の輝き、その甲高い声のどうしようもない喧噪により、冷たくせせら笑っては追い払う。その他については、完璧な精度を持つ人物、きわめて律儀などの価値を持っていた」

自分の『回想記』でフランク・エッジワースに一章を割いているトマス・モーズレー牧師は、カーライルの言う「善良なかわいいフランク」のこの記述を裏付けてはいない。「我が耳はいまだにエッジワースの声に含まれる甘さを覚えているし、その態度と調子の優しさも忘れられない。(中略) フランク・エッジワースは、子供時代から対立する仕組みと、

*4 彼は自分の生涯を誇りに思わず恥じていて、80歳の誕生日に私が *Economic Journal* で言及しようとしたところ、ものすごい勢いで何も載せるなどと言った。その理由は、自分がもうろくして足腰立たないなどと云われるのが嫌だから、とのことだった。かれは:

知らぬうちの衰退に融け
慎ましい無垢の中で飛び去る高齢

なのだった。

*5 エッジワースの父フランクは、実はマリアの物語数本の主人公だった。だが(T・モーズリー *Reminiscences* vol. i. p.41によると)「マリア・エッジワースは実際のフランクに対しては、向こうがマリアを気に掛けるのと同程度くらいにしか気に掛けていなかった。というのはほとんどまったく、ということだ。だから彼女のことは口に出さないうに越したことがなかった」。F. Y. E. はマリア叔母さんのことを「素敵な顔をしたとても普通の老婆」として覚えている(*Black Book of Edgeworthstown*, p.244)。彼女が死んだとき、彼は4歳だった。

*6 モーズレーによる彼の記述(*Reminiscences*, 41)は以下の通り。「彼は背の低い金髪碧眼の、詩白い顔の人物で、発言はすばやく滑らか、いつも頭に何かがあって、舌にも何かを用意していたし、チャーターハウスの小集団で大いに愛されていた。肥沃な想像力と無限の気の良さを持った彼は、どんな発想にもしばらくはつきあって、手助けしてくれる。(中略) 学校では彼は立ち止まることなく、しばしば行き止まりの梯子にまっ先に上り始める人物だった」

付け加えるなら対立する感覚により引き裂かれていた。きわめて親切で自己犠牲に満ちた人物であった」*7。スターリング自身の記述を見ると、この息子が受けついで気性の一端がかいま見られる。「エッジワースは私から見れば、単なる観念的な人生から先に進んではいけないように見える。彼は Wissen から Wesen (言うなれば、知るだけから実際にそれになる) への進歩が必要なのだということを知らないのは明らかだ。(中略) エッジワースがイングランドに来たのは、彼にとって実に幸福なことだと思う。イタリアでは、たぶん彼は「なる/存在する」の現実が、思索や知覚の力とはちがうのだという感覚は一切得られなかっただろう。そしてもちろん、それがなければ彼はいちばんつまらないグノーシスにしか到達できない。これは、単独ではひどい相続物で、権利書が入った箱だがそれに対する所領は溶岩に覆われたり海底に沈んだりしているというようなものだ」*8

だがスターリングの友人というのは、フランシス・イジドロ・エッジワースを構成する含有物の一つでしかなかった。というのもフランシス・ビューフォート・エッジワースは「ロマンチックな偶然によりロンドンで出くわした、若いスペイン人の奥さんと結婚したのだ」*9。エッジワースの母親はスペインのご婦人、ローザ・フロレンティーナ・エロルズだった。フランク・エッジワースは甥の T・L・ベデスといっしょに哲学を学びにドイツへ向かう途中で、大英博物館で読書のためにロンドンに立ち寄り、たまたまカタロニアからの政治難民の娘 16 歳のセニョリータ・エロルズの知己を得て、三週間で結婚し、彼女を連れてフィレンツェに移住して、数年暮らした。F. Y. エッジワースは語学に堪能で、フランス語、ドイツ語、スペイン語、イタリア語が読めたし、そのアイルランド＝スペイン＝フランスの入り混じった出自*10は彼の心の顕著な国際的傾向似貢献したのかもしれない。

エッジワースの生涯の外的な目印がやがてやってくる。彼は 1845 年 2 月 8 日、エッジワースタウン・ハウスで生まれた。フィレンツェと、不首尾に終わった就学の試みから戻ったフランク・エッジワースがそこに帰り、家族の所領を管理することにしたのだ。二歳のときに父親が死んだ。エッジワースタウンで家庭教師たちにより育てられ、17 歳でダブリンのトリニティカレッジに入った。その記憶と心の柔軟性は、その頃からすでに傑出していた。彼は死の二週間前に、若い頃に学んだ詩をいまでもよく覚えていて、ミルトン、ポープ、ヴァージル、ホメロスの本が丸ごとすぐに思い出せるとオックスフォードの親戚たちに語っている*11。生涯の終わりになると、彼はあらゆる場面であらゆる文脈において古典から自由に引用するという伝統の、きわめて数少ない生き残りの一人となった*12。

彼はオックスフォードに、マグダレン・ヒルの研究者として入り、そこからベイリオルへと移って人文学で首席となった。オックスフォードでは最終学校での彼の「口頭試問」をめぐる伝統がある。なんでも、何やら鈍重な質問を投げられて、「手短かに答えましょうか、それとも長く答えますか？」と尋ね、それから半時間にわたりしゃべり続けて、それで次席のはずが首席に昇格したそうな。1877 年にインナーテンプルで弁護士となり、ロ

*7 *Reminiscences*, vol. i. p.52.

*8 Hare の *Stirling*, p. lxxiv.

*9 Carlyle, 前掲書。

*10 彼の曾祖父はダニエル・オーガスタス・ビューフォートで、フランスのユグノー派難民の息子だった。ビューフォート一家の系図と、それと繋がったエッジワース家は、1886 年に W・M・ビューフォートがまとめて私家版として印刷頒布した *The Family of the Beaufort in France, Holland, Germany, and, England* に載っている。

*11 A. G. バトラー夫人とその娘 C. V. バトラー嬢宛。こうした詳細の一部について大いにお世話になった。

*12 マリア・エッジワースが記録している通り、その祖父と同じだ。

ンドンで貧窮したアイルランド所領の非長子の末っ子として困窮生活を数年にわたり送ってから、その多才な知的才能と関心のなかで最終的な方向性を見つけ出した。彼は論理学の講師となり、その後ロンドンのキングズカレッジで、トゥック政治経済学教授となった。1891年にはソロルド・ロジャーズを継いでオックスフォードサイ学のドラモンド政治経済学教授となり、オールソウルズカレッジのフェローに選ばれ、そこが残りの生涯にわたる彼の家となった。彼は1922年に名誉教授の肩書きを得て、オックスフォード大学教授の座を引退した。1889年英国協会の経済部門長となり、1922年にも再任。王立統計学会の元会長で、王立経済学会の副会長、英国協会のフェローだった。何よりもエッジワースは『エコノミック・ジャーナル』初代編集人で、この雑誌を設計し形作った。1891年3月の創刊号から1926年2月13日の死まで、編集者、編集委員長、そして共同編集人の一人としてずっと責任を負ってきた。同誌の共同編集者として私は、彼の死後にこの雑誌についての彼の最後の手紙を受けとることとなった。

ベイリオルで、エッジワースはジョウエットのお気に入りであり、ジョウエットはいつも政治経済学にかなり興味を持って、当時はたまに教えたりもしていたから、エッジワースがこの話題について初の衝動を受けたのは、ジョウエットからだったのかもしれない。だが彼の初期の経済学的思考で最も影響を与えたのは、たぶんロンドンで、ハンブステッドの下宿先がジェヴォンズの家から目と鼻の先だったために知り合いになったジェヴォンズからだと思う。圧倒的な敬意を抱いていたマーシャルとの出会いは、もう少し後だった。1881年『アカデミー』で、マーシャルはエッジワース『数理心理学』を書評した——彼が書いた書評はこれとジェヴォンズ『政治経済学の理論』だけだ。この書評をきっかけに二人は知り合いになって、生涯にわたる個人的、知的な友情へとつながった。マーシャル夫人は、エッジワースのケンブリッジ訪問についていろいろ楽しい思い出を持っている——とはいえ、フランシス・エッジワースとアルフレッド・マーシャルほど、会話手法がお互いに折り合わない二人はあり得ないのだが。

刊行された業績から判断するに、エッジワースが経済学にたどりついたのは、以前のマーシャルと同じく、数学と倫理学を通じてのことだった。だが類似点はここまでだ。マーシャルの関心は知的で道徳的なものであり、エッジワースは知的で審美的なものだった。エッジワースは、知的で審美的な興味を持てる定理を確立したがった。マーシャルは実務的・道徳的重要性を持つ公理を確立したがった。技術的な訓練とその手法の軽やかさや安定感からいえば、マーシャルは数学の面でエッジワースよりずっと優れていた——マーシャルは数学部を第二位で卒業したが、エッジワースの専攻は人文学だ。だがエッジワースは、数学的な手法の扱いで危なっかしく鈍くさかったとはいえ、独創性、業績、自然な関心の偏りの面ですべて偉大な数学者だった。彼が『数理心理学』と名付けたもの——社会科学への準数学的な応用——の精密さと広範さにおいて、彼が40年にわたり最も傑出して有力な主導者だったというのは疑問の余地がないと思う。

エッジワースの完全な著作一覧を作成するのは手強い作業となる^{*13}。そのほとんどは専門雑誌への寄稿という形になっているからだ。私を知っている最初期のものは、1877

^{*13} 1877-1887年に発表された書籍と論文25本Aの一覧が彼の *Metretike* 巻末にある。拙著『確率論』の書誌的補遺で、1883-1921年の上と一部重なる確率理論にかかわる業績29本を挙げた。経済学論文34本と、書評75本が *Papers relating to Political Economy* に再録されている。王立統計学会は、*Edgeworth's Contributions to Mathematical Statistics* でA・L・ボウリー教授による回想録を発表しており、その末尾には論文74本と書評9本をカバーした註釈付き書誌がある。

年にオックスフォードのパーカー社が刊行した『倫理学の新旧手法』だ。これは彼が 32 歳のときに発表されたもので、全 92 ページの紙装版だ。主に効用主義/功利主義の検討から生じる定量問題に関する議論で、シジウィック『倫理の手法』と『マインド』誌に 1877 年に発表されたバラットによるシジウィック批判へのコメントという形になっている。エッジワースの文体の特異性、見事な作文、つながりの奇妙さ、狙いの曖昧さ、方向性の落ち着かなさ、親切、用心、狡猾さ、ウィット、慎み、学習、その引っ込み思案——すべてがそこに、完全に育った形で見られる。ギリシャ文献からの引用が微分解析の直後に登場し、無教養な読者はそれがホメロスの一節なのやら、積分の途中で出てきた数学的抽象化なのか、まるでわからなくなってしまう。エッジワース初の飛行の結語は、彼の長い旅路の最後にきてもいいものだ。

大量の道徳科学研究が、すでにあらゆる方向から名手の導きにより、たった一つの静謐な至高の高みをめざして登攀して通り過ぎた場所、そこをこの議論は目指そうとする。上ろうとする落伍者が *non passibus aequis* (別の道筋から) 怪しげなルートでやってくるのだ。怪しげなルートであり、前節で偉そうに述べられた未踏の手法へと近づくものだ。少なくとも快樂の数学的処理が本当に物理的な倫理に適合するよう運命づけられている限りにおいて、 $\pi\rho\omicron\omicron\iota\mu\iota\alpha\alpha\nu\tau\omicron\upsilon\tau\omicron\upsilon\nu\omicron\mu\omicron\upsilon$.

これまた薄い一冊 (150 ページ) 『数理心理学：道徳科学への数学適用をめぐる論説』は 1881 年に登場した。これはエッジワースによる経済学への初の貢献であり、彼の行った最高の業績をいくつか含んでいる*14。生涯最後の数ヶ月、彼はこの本の一部を再版しようかという意図を弄んでいた*15。

倫理についての巻は、効用主義/功利主義に数学手法を適用しようとしたものだ。『数理心理学』でエッジワースは「快樂と苦痛の気分の解析学」処理を一段進めた。この論説は二部構成で、「それぞれ原理と実践、根っこと果実、数学の社会学への適用可能性と実際の適用を扱っている」。第一部はとても短く「数値データなしでも数学的な理由づけが可能だということを示そうとする」——この主張は執筆当時は、かなり独創的で重要なものだった。「生命の砂金は数えられはしない。愛の海の「無数の」微笑に 数を振ることはできない。だがこちらにある快樂単位の量が大きく、こちらのほうが小少ない幸福の量があるということは観察できるようだ。そしてそれで十分なのだ」

第二部は、エッジワースの数理経済学のルーツの相当部分を含むものだ。特に自由市場における契約の扱いと、その非決定性の可能性だ。そしてここに初登場したのが、彼の有名な**契約曲線**だ。

この初期の二作に不釣り合いなほど紙面を割いたのは、その中に、特に『数理心理学』には、エッジワースの精神と技能の完全な味わいと特異性が、遠慮なしに全開となっているからだ。後者はとても奇矯な本で、嘲笑されてもしかたない。思うに、後年の著作ではエッジワースは、自然な自分自身に全面的に手綱を委ねたことはなかったようだ。彼がその秘訣を持っていた、奇妙ながら魅力的な詩と術学、科学と芸術、ウィットと学習のアマ

*14 その間の 1879 年に、「快樂的解析」と題した論文が *Mind*, 1879 に掲載され、『数理心理学』に再録された。

*15 1932 年にはこの本の複製版が、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクスの *Series of Reprints of Scarce Tracts* の一部として発行された。

ルガムに対する野蛮人どもの批判をちょっと恐れていた。そして、いささか不首尾にとはいえ、自分の本来の文体に対し、部分的に隠蔽する覆いをかけようとした。だがこれは、彼が自分の知的料理を出すときの、わかりにくさと捉えどころのなさ、半ば言い訳めいた雰囲気が高めるだけに終わった。彼は生涯、賃金の男女差の問題に興味を抱き、1922年英国協会第F部会の会長演説のテーマもこれだった。だがあらゆる時空間のどこのだれが、この問題について80代のエッジワースのような扱いができれば、これを読むと、彼の小ずるいクスクス笑いが聞こえてくるようではないか。

性の貴族性も同様に、男性のほうが幸福、行動の $\epsilon \nu \epsilon \rho \gamma \epsilon \iota \alpha \iota$ と思索についての能力が高いという思いこみに根差している。つまり次のような感情だ。

女性は劣った男性で、その情熱は私のものに比すなら

日光に対する月光、ワインに対する水。

女性の一般に劣等とされる能力は、ある特定の情動、ある種の美と洗練により補われているとされている。そうした優れた美的感覚に適合し、現代女性は一部職業での比率が大きくなっている。一部奢侈品や世話などだ (Def. 2; *a sub finem*)。だが雄壮さ、つまりあの「古代騎士道精神から台頭した入り混じった感情」は他に多くの要素を持つ。それはあの礼儀正しきヒュームにより、弱き者への注意として説明され、あの情熱的なルソーには $\phi \nu \sigma \iota \kappa \omega \tau \epsilon \rho \omega \delta$ とされる (中略) 女性の性質についての、真偽は知らぬながら既存の各種意見を考慮すると、効用原理と現代の女性を取り巻く能力不足と特権との間に、素敵な融合が生じるのである。^{*16}

次にエッジワースは、道徳科学への数学適用として次の大きな話に進んだ。それは「信念への確率解析」の適用で、これは彼の最もお気に入りの研究になったようだ。1883年と1884年に彼は、確率と誤差の法則について論文7本を『哲学マガジン』『マインド』『ヘルマテナ』に発表した。これらは、きわめて長い一連の論文の皮切りとなった。その最後のものは誤差の一般法則についてのさらなる入念な議論であり、その死亡日に『統計ジャーナル』に掲載されることになっていたものだ。

確率そのものについて言えば、エッジワースの最も重要な著作は『マインド』誌の「偶然の哲学」論文 (1884) と、ブリタニカ百科事典の「確率」の項 (1911年まで改訂が続いた) だ。エッジワースは、確率の頻度理論の支持者として出発したが、この概念については論理的な基盤よりは物理的な基盤を強く支持する偏りを見せていた。ちょうど、功利主義的な倫理学の支持者だったのに、刑一条楽的な基盤よりは物理的な基盤に偏っていたのと同じだ。だがいずれの場合にも、彼はその反対論にも気を配っていたし、どちらの場合にも、反対論の重みが心の中で、下がるよりむしろだんだん増していった。それでも、どちらの場合もこの当初の想定を別のもので置きかえることはなく、結果として彼は哲学的な基盤に対してますます懐疑的になり、一方でその基盤がいかにか危ういものだろうと、その上にうまく構築された実用的な応用については、プラグマティックな態度を採るようになった。結果として、彼の関心は確率から次第に統計理論に移り、経済学でも効用主義から限界理論へと移っていった。論理的なドクトリンとして頻度理論が破綻したら、現代の統計学と関連の理論はどこまで成立するのかについて、何度も無理に意見を引き出そうとしてみた。するといつも、頻度理論破綻は統計理論応用の普遍性には影響するが、それ

^{*16} *Mathematical Psychics*, p. 78.

でも統計データの大半は、統計理論の有効性に求められる条件（それがなんであれ）を満足するはずだ、という意味の答が返ってきた。たぶんこれはその通りなんだろう。主に統計に関心があった人の採る立場としてはうなずける。だがこれはエッジワースにおいては、若き日々のもっと思索的な研究を見直したり、再び取り組んだりしたくないという意味合いも持っていた。同じ事が、経済学についての彼の研究にも言える。彼は、古典派の他のほとんどの経済学者と同様に、限界理論の当初の想定が、その出自である功利主義倫理学や功利主義心理学の興亡に伴ってどこまで成り立つのか、について、見直したがらなかった。功利主義倫理学や功利主義心理学は、かつてはその創始者たちによって本気で受けとられていたが、いまやだれもそんな受け取り方はしていないのだ。1870年代のミル、ジェヴォンズ、マーシャルと、1870年代から1880年代初頭のエッジワース^{*17}は功利主義心理学を本気で信じており、その信念に基づいてこの主題の基盤を固めた。後のマーシャルと後のエッジワースと多くの若い世代は、完全には信じていない。だがわれわれはいまだに、もとの基盤の堅牢性を十分に見当しないまま、その上部構造を信頼し続けているのだ。

だから次第に、エッジワースの技法的な統計学研究のほうが、確率理論への貢献よりも重要になった。1885年以降には、もっと一般向けの論説、特に『統計ジャーナル』(1885) 記念巻に掲載された「統計の手法」と、『国際統計学会ブレイク』(1910) 掲載の「確率解析の統計学への応用」はレクシスが確率したドイツ学派の成果にイギリスの学徒をなじませ、彼らが発端からイギリス統計学者たちの相関についての研究を奨励し、批判し、賞賛したことで、大きな意義を持っていた。特に晩年における彼の構築的な研究は、独自の「誤差の一般法則」に関するきわめて入念でむずかしい議論を中心としていた。エッジワースがここで採用した処置のやり方に対する独得の愛情は、たぶんそれが最低限の前提しか必要としなかったことからくるのだろう。このため彼は、他の統計の定式化を使った場合に比べ、自分の結果をもっと一般的な仮説から得られるようになる。こうすることで彼は、現在の統計理論の実用的ではなく論理的な根拠についての後ろめたさを、言わば埋め合わせることができたわけだ。

確率と誤差の法則についての最初の論文と同じ頃、つまり38歳となった1883年に、エッジワースは第5の主題に乗り出した。これは彼の生涯の主要業績の総覧を完成させるはずのものだ。つまり、指数、あるいは経済価値の計測への数学手法の応用だ^{*18}。この5つの応用というのは、『数理心理学』の5つの応用だ——効用または倫理価値、経済均衡の代数的あるいは図式的な決定、信念や確率の計測、証拠または統計の計測への適用、経済価値または指数への適用となる。これは、その拡張と意味合いと例示を含め、エッジワースの生涯の業績を構成している。もしも彼が『論考』を著すような人種だったら、まちがいなく1900-1914年のどこかで、五巻構成の大著『数理心理学』を刊行していたことだろう。だがそうはならなかった。彼は1877年と1881年のモノグラフに続いて『メトリック、または確率と効用の計測手法』を1887年に刊行した。これはがっかりするような一冊で、あまり読む価値はない（この判断はエッジワース自身も同意しているのを私

^{*17} 初期の効用主義/功利主義への支持において、エッジワースはまたもやこうした問題についてのマリア・エッジワースの哲学に対する自分の父親の反応を再演してみせた。モーズレー（前掲書）はフランク・エッジワースが「功利主義の空疎さ、冷酷さ、不毛さに対し、はやくから強い反発を見せた」と述べている。

^{*18} エッジワースの *Statistical Journal* (1883) への初寄稿, “The Method of ascertaining a Change in the Value of Gold” を参照。続いて、英国協会で口頭発表された1887, 1888, 1889年の有名な覚書と、その後の一連の長い論文も参照。その一部は彼の *Collected Papers, vol. i* 所収。

は知っている)。その後は、モノグラフから論考の著述へと台頭するにはほど遠く、マーシャルとは正反対の極に向かったエッジワースは、モノグラフから論文、論説、記事、やりとりへと低下していった。40年間にわたり、彼の明晰な頭脳から長い一連のかけらが、『統計ジャーナル』や『エコノミック・ジャーナル』のページを照らしだした(そして煙に巻いた)。

いちど、なぜ論考の執筆に乗り出さないのかと尋ねたことがある。すると、あの独得の微笑とクスクス笑いとともに、彼はこう答えた。論考執筆だの結婚だのといった大規模な事業には一度も魅力を感じなかったんだよ、と。ひよっとすると彼は、こうしたものを収穫通減するものと考えていたか、自分の力には余ると考えたか、局所的な宇宙において設定した極限の外にあると思ったのかもしれない。こうした説明はこれで十分すぎるものだし、オッカムの剃刀により、他の説明を持ち出す必要はないはずだ。が、そこに貢献した別の動機がもう一つあったかもしれない。

数理心理学は、学問としても研究としても、初期の約束を果たせなかったのだ。1870年代と1880年代には、たぶんそれが大に見込みがあると思うのは正当だったのだろう。若きエッジワースがそれを選んだときには、その後物理学者たちが発見したくらい素晴らしい秘密が見つかるかと期待していたのかもしれない。だが、アルフレッド・マーシャルによる数理経済学への態度のゆっくりとした変化についての記述(本書収録、原著 p.159)で述べたように、これは実現しなかった。起きたのは正反対のことだった。物理学であればほど見事に機能した原子仮説は、心理学では崩壊した。どちらを向いても組織的な総合性、離散性、不連続性の問題にぶちあたる——全体は部分の総和ではなく、量の比較は成り立たず、小さな変化が大きな影響を生み出し、一様で均質な連続体の想定が満たされない。だから数理心理学の結果は、根本的なものではなくは生物となり、計測結果ではなく指数になり、せいぜいが一次近似でしかない。しかもそれですら、あまりうまくない指数、怪しげな近似で、それが何の指数や近似なのかという点についてむしろ疑問が増えるような代物でしかない。これはエッジワース自身がだれよりもよく知っていた。知的生涯の間ずっと、彼は自分の基盤が足下から消え去りつつあるのを感じていた。彼の慎重で、批判的で、懐疑的で、臆病な性質に、こうしたためらいがくわわれば、巨大で重たい上部構造の構築に魅力を感じなかったのも無理はない。エッジワースは、自分が薄氷の上をスケートしているのを知っていた。そして人生が過ぎる中で、スケートへの愛と氷への不信が、悪意の運命によるかのように *pari passu* (同じ速度) で高まった。まるで、邪眼を避けようとして目を背け、運命による非難を多幸症により逃れようとし、荒海をエウクセイノス海と呼び、真理の意地悪い守護者たちを親切だと呼ぶようなものだった。エッジワースはめったに読者や話し相手と正面から向き合おうとしなかった。いつもとらえどころがなく、煙に巻き、気まぐれで、まるでだれにも気がつかれずに行きすぎようとして、別の旅行者に声をかけられても足早に立ち去ろうとする人物さながらなのだ。

1887年に『メトリック』を発表した後で、エッジワースは戦争中に行った4つの講義(パンフレット形式で印刷された^{*19})を除けば単著を出さなかったが、1925年には彼自身の編集により巨大な三巻本の『経済論文集』が王立経済学会から刊行された。この論文集は、経済学へのエッジワースの貢献で、彼自身が保存したいと願ったものをすべて手輕

^{*19} *On the Relations of Political Economy to War, The Cost of War, Currency and Finance in Time of War, A Le1y an Capital*. このいずれも彼の最高水準の作品ではない。

にアクセスできるようにしてくれるものだ。これ以外のものという、上で言及した『数理心理学』の一部くらいだ。

経済論集の刊行は、エッジワースには大満足だった。慎ましく自虐的な性格のため、昔からこんな事業を自発的に行うことはなかった。だが他人が責任を持ってくれるようになったら、印刷向けに論文を選んで整えるという作業は楽しいものだった。さらにその出版はあらゆる点で大成功で、世界中の専門雑誌で書評され、著者のこれまでの出版物では絶対に耳に入らなかったような敬意の表現が大量に見られた。エッジワースは、自分の国際的な評価の高さに本気で驚いたと思うし、それは彼にとって、驚きであると同じくらい喜びでもあった。

絶え間ない専門論文の発表にもかかわらず、晩年 35 年間のエッジワースは、その時間の相当部分を『エコノミック・ジャーナル』編集に割いた。編集者としての彼の実務的な才能は、まったく実務性がなく、ビジネスとは無縁で、浮世離れしていて、雲の中の抽象世界に暮らし、わけのわからないものをさらに煙に巻いて明らかにするという評判からはまったく予想外のものだった。『ジャーナル』実務で 15 年にわたり彼といっしょに活動してきた人物として、この評判が事実とは正反対だと断言でいい。彼は締め切りを守り、実務的で、定型作業すべての実施で頼りになった。自分自身が書いたものの誤植を見つけるのはまったく無能だったが^{*20}、他人の著作だと、異様に鋭い目をしていて、よい「コピー」については見事な直感を持ち（ただしここでも自分の著作は例外だった）、寄稿者たちから簡潔さを確保するために編集の権限をきわめて厳格に行使し^{*21}、常に自分の影響力を使って、時事的な関心を持つ論文を重視し、手法などのチマチマした論説（彼に言わせると、このせいでドイツの専門誌は使い物にならないとのことだった）は疎んじた。私はしばしば、こうした戒律に対して鈍重な論文を擁護する立場に置かれることになる。彼は常に、『ジャーナル』の国際的な共感や提携を確立し、それを維持しようと腐心した。イギリスで、彼ほど外国分権を読み込んでいる経済学者は他にいなかったのはまちがいない。加えて彼は、あらゆる国の世界中の経済学者ときわめて広い個人的な親交を結んでいた。エッジワースはきわめてもてなしのよい人物であり、評判の高低を問わず、外国人経済学者で当時ロンドンを訪れて、エッジワースのもてなしを受けなかった人はほとんどいないはずだ。彼は世界中の経済学者の連帯をととも重視していて、見つければどこでも才能を奨励し、アイルランドとスペインの最も素晴らしい伝統にしたがって例に報いたのだった。その寛容性はすべてを包み、既存の評判に対しては大いに敬意を抱いていた。これはときに、やりすぎに思えることもあったがそこに一筋の嘲笑も含めており、さらには若々しいもの、未知の物を奨励する自然な傾向もあった。彼の奇矯さと芸術的な奇妙さは、自分の著作だけがはげ口となった。実務的なよい間隔と日常的な巧妙さは、『エコノミック・ジャーナル』に捧げられていたのだった。

エッジワースに会った人ならだれでも、人間として強い個人的な印象を受けたはずだ。だが会っていない人に彼を描き出すのは不可能に近い。親切で、愛情深く、自分を犠牲にして、ユーモアのセンスがあり、人間性に対する鋭く正直な目があった。また一方では内にこもり、とげとげしく、複雑で、お高く、かんしゃく持ちで、わざとらしいほど慇懃無

^{*20} 彼の論文のむずかしさは、しばしばそれが誤植だらけだったという事実により拍車がかかっていた。特に記号の部分の誤植が多かった。

^{*21} 彼は論文報酬の収獲遞減法則と称するものを発明し、きわめて重視した。それによると、論文から得られるものは、10 ページを超えると低下し、20 ページを超えたらゼロになる、とのこと。

礼で、外部世界からの圧力に対して絶対に自分を曲げずに譲ろうとしなかった。マーシャルは彼の入り混じった生まれを記憶していて、こう言ったものだ。「フランシスは魅力的なヤツだが、イジドロには注意しないと」

彼の健康と身体的な活力は傑出していた。70歳を過ぎても、登山をし、パーソンズ・プレジャー (訳注: オックスフォード大内の男子専用ヌード浴場) の冷水に朝に浸かり、オックスフォードシャーの草原では疲れ知らずの歩行者だった。いつも働き、読書をし、ゲラの校正をして、「参考文献を確認」(これは、彼の度しがたい権威崇拜と、自分の責任で何かを断言するのを嫌う傾向のため、彼が大量に時間を無駄にした空虚な活動だった) して、紙切れに鈍重な定理を実際の数字で長々と解いてみたり (これは彼が大好きな活動で、ちょうどマリア・エッジワースが彼の祖父について記録したのと同じだ)、手紙を書いたり、壮大な建築を美しい煉瓦で作り上げつつも、モルタルが少なすぎて明確な建築デザインが皆無だったり。晩年近くなると、口頭で彼とまともにつながった議論をするのは容易ではなくなった——身体と関心に不満だらけの落ち着きのなさがある、それが年齢とともに悪化したし、それはあまり見て楽しいものではなかった。だが紙の上では、その知的能力は80歳を過ぎてもまったく衰えが見られなかった。そして死んだときも、おそらくは望み通り、工作中だった。

エッジワースは一度も結婚しなかった。そういう気持がなかったせいではない。人生についての見通しではなく、その気難しさのせいで、彼はどんな方向でも完全な親密さへの道を断たれていた。本当はもっと幸福になれたはずだったが。だが多くの点で独身者の生活は彼の性格にあっていた。彼は物質的な配慮を最低限にとどめたがった。家庭的な責任を一切背負わされたがらなかった。そして私的な快適性なしても満足だった。彼ほど共用室、図書室、クラブなどでずっと過ごしたり、あらゆるアメニティについてそうした場所の付加施設に頼ったりした人はいない。所有物はほとんどなかった——家具や食器もないも同然、本すらなく (手近な公共図書館を好んだ)、自分のまともなメモ帳も文房具もスタンプもなかった。私が彼のものと知っている物質的な私有物は、赤テープとゴム糊だけだ。だが自分の外見は気にして、独自のスタイルで立派な身なりをしていた。彼の外見には、エッジワースよりはスペインのほうが多かった。広いおでこ、長い鼻、オリーブ色の肌、刈り込まれたとがったヒゲと強い手など、彼の様子は立派だったが、自分の服や自分の身体に居心地悪くおさまっているという雰囲気、それがちょっと台無しになっていた。オックスフォードではオールソウルズのスパルタ的な部屋で暮らした。そしてロンドンでは、市街地の平野を見下ろす視界の開けた高いハンプステッドの崖の上にあるマウントヴァーノン五番の、何もない小さな部屋二つの借家を五十年前からずっと週決めで借り続け、その間ずっと住み続けてた。アイルランドでは、夏のローマの週をキングズタウンのセントジョージ・クラブで過ごした。食事は、バタリー、オールソウルズ食堂、アテナウム、サヴィル、アルベマール。本はそうした場所の図書室、大英博物館、トリニティカレッジ図書館、王立統計学会図書館。

話によると、エッジワースタウンの少年時代には、樹上のゴイサギの巣にすわってホメロスを読んでいたとか。彼はまるで、そこにずっとすわっていたかのようで、地上を訪れることなど、さして気に掛けなかったようではある。

第 14 章

F. P. ラムゼイ (1903-1930)



フランク・プランプトン・ラムゼイ

I. 経済学者としてのラムゼイ

キングズカレッジのフェロー、ウィンチェスターとトリニティの臨時講師でもあった、マグダレーヌの学長の息子でもあるフランク・ラムゼイが 26 歳にして死亡したのは、経済学の純粋理論にとっても大きな損失だ――主要な関心は哲学と数学論理ではあったが。ごく初期、確か 16 歳だったかで、その早熟な頭脳は経済学の問題にも強烈な関心を持っていた。ケンブリッジに暮らす経済学者たちは、彼の学部生時代から、その批判的、論理的技能の鋭い刃で自分の理論を試すのが習慣になっていた。もし彼が、単なる性向というもっと楽な道をたどっていたら、精神が自分自身の尻尾をつかまえようとする思考と心理の基盤をめぐる苦しい活動を、道徳科学の中でもわれわれ自身のきわめて楽しい分野と取り替えようとしなかったかどうか、私には確信が持てない。こちらの分野では、理論と事実、直感的な想像力と実務的な判断が、人間の知性にとって快適な形でブレンドされるのだから。

その慣れ親しんだ岩だらけの高みからやっと降りてくるときでも、彼はほとんどの経

経済学者が息もできないような希薄な空気の中で楽々と暮らし、われわれの学問の専門装置を、はるかにむずかしいものに慣れ親しんだ人物の、易々とした優雅さで扱うのだった。だが彼は印刷物として(哲学論文を除けば)その力量を証言する論文を二本しか残さなかった——『エコノミック・ジャーナル』に掲載された論文、1927年3月の「課税理論への貢献」と、1928年12月の「貯蓄の数学理論」だ。後者は、これまで行われた数理経済学への最も驚異的な貢献の一つだと思う。それはその本質的な重要性と、対象の難しさ、使用された技術手法の威力とエレガントさ、そして読者が感じる、著者の頭脳がその対象を弄ぶときの着想の明晰な純粋性の点のいずれでも驚異的なものだ。この論文は、経済学者にとってはひどくむずかしい読み物ではあるが、その中で科学的な性質と審美的な性質とがいかに組み合わさっているかを理解するのはむずかしいことではない。

したがってラムゼイを失ったのは、その個人的な性質がきわめてなめらかにその知力と混じり合っていた、友人たちにとっては、長く忘れられないこととなるだろう。彼の分厚いジョンソン式のメガネの縁、突発的なゴロゴロいう笑い、気分や反応の単純さ、その率直さと文字通りの意味合いのため、半ば恐ろしくたまに残酷にすらなるもの、その頭と心の正直さ、その謙虚さ、そしてその広いこめかみと、広い微笑する顔の背後で可動し続ける知的機械の驚異的かつ安定した効率性は、その優秀性の絶頂で、業績と人生の収穫が刈り取られる前に、われわれからうばわれてしまったのだ。

1930年3月

II. 哲学者としてのラムゼイ

論理学は、叙事詩のように、中年の出る幕はない。そしてこの一巻の書^{*1}には我々の世代が与えられる最も明晰な精神の一つがもたらした、最高の啓発がある。とはいえ、彼は26歳で他界した。根本的な問題について現代的な方法で考える人々にとって、これに匹敵する重要性を持つ本は一冊もないと思うし、その大半が仮のもので未完で最終的な修正を受けていないという状況は、完成した業績にきれいな表層を与えたいという著者の虚栄が純粋なごまかしでしかない主題においては、何ら障害にはならない。

フランク・ラムゼイの論理学論考がすべてまとまって刊行されたのを見ると彼の頭が向いていた方向性はかなりはっきりわかる。それは、前世代がちょっと息を切らせてもたらした地点を若者があっさり拾い上げ、そしてこれまで行われてきたすべてを、一週間以上はかけずにすべて消化して先に進み、たった十年しか年上でない人物にすら絶望的にむずかしく思えた代物を、明らかに易々と理解してしまうという見事な例だ。ラムゼイがマグダレーネ近くの保育園にいたとき、トリニティでだれかが言ったり書いたりしたことを、1903年から1914年にかけてすべて無意識のうちに吸収してしまったのだと信じたくもなる。フランク・ラムゼイが生まれた1903年、バートランド・ラッセル『数学の原理』が刊行され、形式論理学をよみがえらせて、その射程に新しい王国をもたらしたように見えた。この本はいくつか根本的な問題を提起しつつ、そのすべてを満足な形では解決できなかったが、その後7年にわたりラッセルとホワイトヘッドは、自分たちが構築していた基盤を強化するよりも、数学と形式論理学との実際のつながりを『プリンキピア・マテマ

^{*1} *The Foundations of Mathematics*. F. P. Ramsey 著. Kegan Paul. 1931.

ティカ』の中で低次するという専門的な問題のほうに注力していた。だがルードヴィグ・ウィトゲンシュタインがラッセルと話したくてケンブリッジにやってきて、ウィトゲンシュタインは論理分析の根本問題に完全に没頭していた。彼の『論理哲学論考』はおおむね戦前に完成していたが、1922年までは刊行されず、その頃にはフランク・ラムゼイが十九歳でその分野に登場し、英語版の用意を手伝い、そのわかりにくい内容を世界に説明した。今日のラッセルは、人生のそれぞれの時期にはそれぞれ適切な道楽があるのであって、論理学の根本的な研究は六十歳に達した者には向いていないことを認識しつつある。ウィトゲンシュタインは、自分の次の本が時間の馬車が近寄りすぎる前に仕上がるかどうか思案しており、そしてラムゼイは、嗚呼！若き領主がその領土に踏み込むように、かれらの成果へと入り込んでおきながら、死んでしまった。

本書の最初の部分は、これまでに発表済の論文集であり、ラッセルとウィトゲンシュタインの研究が投げ出したところで根本的な問題に取り組んでいる。それはすさまじい力量で扱われているのに、同時にその処理のエレガンスと流麗さがあり、おそらくは成功している。第二部は、未発表の論文を集めたもので、確立や関連する問題を扱っており、1921年の拙著『確率論』の批判で始まっている。この第二部は、断片的で完全に満足のものではなかったため、未発表だった。だがそれ自体としても、その直接の先人たちによる第一部で見た形式的で客観的な扱いから投げ出されたヒントの追求にあたって、彼の考えがどれほど離れつつあったかをかなり詳しく示している点でも大いに興味深い。ラッセルの作品がまっ先に伝える印象は、形式論理学の分野がものすごく広がったというものだ。ラッセルと、ウィトゲンシュタイン、ラムゼイの手になる形式処理の段階的な完成は、次第のその中身を空虚にして、ますます単なる乾いた骨に還元して、最後にはあらゆる経験だけでなく、通常は論理的でまともな思考と考えられている原理のほとんどを排除してしまうようだった。ウィトゲンシュタインの解決策はすべてを気の利いたナンセンスだと考え、それが個人には確かに大いに価値を持つが、厳密に議論するのは不可能だと考えることだった。ラムゼイの反応は、彼自身が一種のプラグマティズムと表現するもので、ラッセルにはまあ好意的ながら、ウィトゲンシュタインに対しては嫌悪するというこの。「プラグマティズムの本質を、ぼくは次のように考える。文の意味は、それを主張することからつながる行動の参照により定義される。あるいはもっと漠然とした言い方をすれば、その可能な因果で定義されるのだ。これについてぼくは確信しているが、それ以上の確固たるものはない」

だから彼は「形式論理」とは別の「人間論理」を考えることになった。形式論理は、**一貫性ある**思考ルールだけしか考慮しない。だがこれに加えて人間は、近くと記憶とおそらくその他が提供する材料を処理するにあたり、いくつか「役に立つ心的習慣」を持っていて、それを使って真実に到達したり、そのほうに向かったりする。そしてこうした習慣の分析もまた一種の論理だ。こうした発想を確率の論理に適用すると、きわめて実りが多い。ラムゼイは、私がかつて提唱した見方に反対するものとして、確率は命題の間の客観的な関係に関わるものではなく（ある意味で）信念の度合いに関わるものだと論じる。そして確率の計算論法は単に、人々が持つ信念の度合い体系が**一貫性を持つ**体系となるようにするためのルール群なのだと示すのに成功する。だから、確率の計算論法は形式論理学に帰属する。だが人の信念の度合いの根拠――あるいはかつてはアプリアリな確率と呼ばれたもの――は人間のしつらえの一部であり、自然淘汰により与えられただけで、形式論理よりは知覚や記憶にも似たものなのだ。ここまでは、私もラムゼイに降参しよう――彼

は正しいと思う。だが「合理的」な信念の度合いを信念一般と区別しようとするにあたり、彼はまだ成功しきっていないと私は思う。帰納原理について、単にそれが有益な心の習慣だというだけでは、その根底に到達したとは言えない。だが形式論理と「人間」論理を区別し、また記述心理学を一方で試みることで、ラムゼイは形式論理がしっかりまとめあがり、そのきわめて限られた射程が適切に定義された後の、次の研究分野を指し示していたのかもしれない。

ラムゼイは、他のだれよりもヒュームを思わせる。特に常識と、この問題すべてに対する一種の頑固な実務性が似ている。読者は、彼の精神の特異な持ち味を伝える下りをたくさん見出すことだろう。その表現は――彼としては哲学向けのものに含まれてはいなかったが！――実に楽しいものだ。

1931年10月.

III. 小論集

ラムゼイの著作のほとんどは、死後の作品集『数学の基盤』と『エコノミック・ジャーナル』『ブリタニカ百科事典』で刊行されたが、とても専門的なものだ。だが存命中には発表されず、また印刷向けに磨きもかかかっていない彼のメモが『数学の基盤』*2巻末にまとめられ、アフォリズムや断片的なエッセイとなっているので、以下にその抜粋をいくつか示そう。というのもそれは、私が上で「彼の精神の特異な持ち味」と述べたものを少し伝えられるかもしれないからだ。とはいえ、彼の知性と人格の働きがひとまとめの印象として与えるものに直接触れたことがない人々には、なぜブレイスウェイト氏が、彼の死によりケンブリッジ派主要な知的栄光の一つを奪われたと正当にも書けたのか、完全に伝わることはないだろう。また、ゴールズワージー・ロウズ・ディッキンソンが、フランク・ラムゼイとC・P・サンガーについて書いたものを引用しよう。サンガーもまたウィンチェスターとトリニティの学者であり、老いてからだがほぼ同時期に死亡している。

自分の大学をあまり自慢するのはケンブリッジ人らしからぬことだし、またそんなことをしたい気にもならない。だがわが母校と関連しているらしき、すべてのよきものと同じく珍しいあるタイプが存在すると私は思う。念頭にあるのは、レスリー・スティーブン(メレディスのヴァーノン・ウィットフォードのモデル)のような人物、ヘンリー・シジウィックのような人物、メイトランドのような人物、そして先日、あらゆる可能性を実現せぬまま死んだような人物だ。それは聖人にならずに浮世離れた人物、野心を持たないが不活発に陥らず、暖かい心を持ちつつ感傷的にならない種類の人物だ。そうした人々は、よい報せの中も悪い報せの中も働き続け、自分の見た通りの真実の光に従う。懐疑的になりつつも麻痺することはない。知り得るものを知ることで満足し、知り得ぬものについては判断を保留する。世界はこうした人々によって動かされることはない。というのも行動の源泉は、無知と狂気の奥深くにあるのだから。だが嵐の中の道程標となるのは彼らであり、いまやその必要性は下がるどころか、これまでになく必要とされているのだ。その系

*2 R. B. Braithwaite の編集で刊行された *The Foundations of Mathematics*, Kegan Paul 氏により 1931 年刊行。以下の文をここに再録する許可を与えてくれた出版社と編集者に感謝する。

譜が決して絶えませんが！

1. 哲学

哲学は何かしら役に立たねばならないし、みんなそれを真面目に受けとらねばならない。それは人々の考えをはっきりさせ、ひいては行動もはっきりさせなくてはならない。そうでなければそれは、ぼくたちが止めるべき傾向であり、そしてそれがそういうものなのだという検討となる。つまり、哲学の主要命題は、哲学はナンセンスだということになってしまう。そしてここでも、それならばそれがナンセンスだということをぼくたちは真面目に受け止め、ウィトゲンシュタインのように、それが重要なナンセンスだなどというふりをするのをやめねばならない！

哲学では、科学や日常生活で作る命題をとりあげて、それをプリミティブな用語や定義などを持つ論理体系の中で示そうとする。基本的に哲学というのは、定義の体系か、あまりに多くの場合に、単に定義がどのように与えられそうかという記述の体系でしかない。

ムーアに倣って、その定義こそがそれまで命題によって言わんとしていたことが説明されるのだ、などと言う必要はないと思う。むしろ、それはぼくたちがその命題を将来に向けてどう使おうとしているかを示すものだ。ムーアなら、これは同じであり、哲学は「これはテーブルだ」というときに意味していることを変えたりはしない、と言うだろう。でもぼくには、変えるかも、と思える。というのも、意味は主に潜在的可能性であって、したがって変化は珍しい決定的な機会にだけ登場してくるのかもしれないからだだからときには哲学は、それまで漠然として混乱していた概念を明確化し区別するべきで、これは明らかに、将来の意味合いだけを修正しようと意図するものだ。だが定義は少なくとも未来の意味を与えてくれるはずのもので、単にある構造を獲得するきれいな方法を与えてくれるだけのものではない、というのは明らかだ。

かつては哲学の性質について、過剰なスコラ主義を通じて自分で不安になっていた。単語を理解しつつ、それについて提唱される定義が正しいかそうでないか認識できないなどということがなぜあり得るのかわからなかった。理解という発想そのものの漠然性に気がつかなかったし、それに伴う参照が無数のパフォーマンスへとつながり、そのどれでも失敗して再構築が必要になるかもしれないというのに気がつかなかった。同義反復に見られる論理学の問題、同定における数学、定義における哲学、すべてトリビアルだが、すべて思考を明確にしてまとめるという重要な作業の一部なのだ。^{*3}

2. 哲学的思考

思うに、思考を明確にするプロセスの中で、人は意味を定義するという当然のやり方では明確にできない用語や文に出会う。例えば、定義できないが、その用法は説明でいえるような理論用語だ。そしてその説明の中で人は自分が話している対象だけでなく、自分自身の心的状態も見ざるを得なくなる。

さてこれは、意味について明確にしないとそうした用語や文について明確になれないということを意味している。そしてどうも、たとえば自分が時間や外部世界について言っ

^{*3} *The Foundations of Mathematics*, p. 263, 264. これらの引用では、あちこちちょっとした省略があるがすべてを表示はしていない。読者が原文の全文を参照したくなることを願う。

いることを、まず意味を理解せずには理解できないような状況に陥るけれど、その一方でまちががなく時間と、自分が関わっている外部世界についてもおそらくまず理解しないと、意味も理解できない。だから、哲学を目標に向けた秩序ある進歩にはできず、問題を全体として捉えて、同時解決へと飛躍しなくてはならない。これは何か仮説のような性質を持つ。というのも、それは直接的な議論の結果として受け容れるのではなく、思いつくものの中でいくつかの要件を満たす唯一のものだから受け容れるものだからだ。もちろん、厳密に議論の話をすべきではないけれど、哲学には「線形推論」に似たプロセスがあって、物事が段階的に明確になっていくのだ。そして上の理由から、これを最後まで突き進めるわけにいかないため、人は部分的な改善で満足するという科学者の一般的な立場に置かれる。いくつかの事柄についてはもっと明確にできるけれど、何一つ完全に明確にはできない。

ぼくは、この自意識がごく限られた分野以外では、哲学で不可避だと思う。人が哲学談義を始めるのは、自分が何を言っているか明確には知らないからだ。問題は常に「Xと言う時に自分は何を意味しているのか？」だ。そして意味を考えずにこれを解決できることは、ごくたまにしかない。でもこの、意味と対処する必要性は、単なる障害にとどまらない。これはまちががなく、真実への本質的なヒントだ。それを無視したら、以下の対話における子供のようなバカげた立場に陥りかねないように思う。「朝ご飯って言って」「言えない」「何を言えないの?」「朝ご飯って言えないんだ」

哲学への主要な危険性は、怠惰さと曖昧さを覗くとスコラ哲学主義だ。その本質というのは、曖昧なものを、まるで厳密であるかのように扱い、それを厳密な論理的分類におさめようとすることだ。典型的なスコラ哲学は、人の日常的な命題が完全に秩序だっていて、非論理的に考えるのは不可能だというウィトゲンシュタインの見方だ(この最後のやつは、コントラクトブリッジのルールを破るのは不可能だ、なぜなら、それを破ったらその辞典でそれはコントラクトブリッジではなくなり、C夫人が述べたように、非ブリッジでしかなくなるからだ、というようなものだ)。*4

3. 議論すべきことなんてあるのか?

科学、歴史、政治は専門家以外の議論には向いていない。それ以外の人々は、単にもっと多くの情報を求めるだけの立場にいて、手に入る情報をすべて得るまでは、もっと優れた資格を持つ人々の意見を、その権威に基づいて受け容れる以外にどうしようもない。これに対して哲学がある。これまた、素人にはあまりに専門的になりすぎた。この不利に加えて、最も偉大な現代哲学者の結論は、哲学などという主題はなく、それは活動であってドクトリンではなく、質問に答えるどころか、それは単に頭痛をなおすだけの狙いしかない、というものだ。論理学を核としたこの専門的哲学以外に、人と自然の関わりや道徳の意味といった主題を扱う、一種の通俗哲学があるという考えもありそうだ。だがそうしたトピックを真面目に扱おうとする試みはすべて、それを科学か専門哲学の問題に還元してしまう、あるいはもっと直接的にそれをまったくのナンセンスとして知覚してしまう結果になってしまう。(中略)

人はめったに、いやほとんど根本的な心理学の問題を議論したりしないと思う。単に自

*4 前掲書. pp. 267-69.

分のいくつかの体験を比較するだけの場合のほうがはるかに多い。これは議論の形態ではない。自分の議論が実に多くの場合に以下の形式だということを、人はあまりに認識していないと思う。A:「今日の午後にグラントチェスターにでかけたんだ」B:「いやぼくは行ってないよ」。みんながよくやるもう一つのことは、尊敬したり恥ずかしく思ったりするのが、どんな種類の人々や行動か、というのを話すことだ。たとえば愛情の一貫性を論じるとき、それはAが、自分は一貫性がないと後ろめたいと述べ、Bは自分はまるで後ろめたく思わないというのがしゅっちゅうある。でもこれは、暇つぶしとしては楽しいけれど、何一つ議論しているわけではなく、単にお互いのメモを突き合わせているだけだ。一方、本物の心理学は、ほとんどの人があまりに知識がなさすぎる学問なので、何かそれについて意見を言おうとすらだれも思わない。

最後に、文学を含む美学がある。これは常に人を他の何よりも興奮させる。でも本当はだれもそれをあまり議論しない。みんなの議論はあまりに弱々しい。みんなまだ「太った牛に乗る人はデブのはずだ」という段階にしかなく、美学を本当に公正する心理的問題についてはほとんど言うことがない。つまり、なぜある色彩の組み合わせが、こんな特異な気分を与えるのか、といったことだ。みんなが本当にやりたがるのは、ここでも体験を比べることだけだ。このやり方は、ここでは特異な形で有益だ。というのも批評家は他人の物事を指摘できて、人々はそれに注目すれば、そうでないときには獲得できなかった、価値を感じる気分を獲得できるようになるからだ。ある芸術作品が他のものよりいいかどうかは議論でいいない。単にそれが与える気分を比べるだけだ。

結論として、本当は議論することなどないのだ、ということになる。そしてこの結論は、一般会話についてぼくが抱いている気分にも対応する。それは19世紀を通じて次第に作用してきた二つの原因から生じた、比較的新しい現象なのだ。一つは科学の進歩で、もう一つは宗教の衰退であり、おかげで古くからの一般的な問題が、専門的になるかバカげたものになってしまった。文明発達におけるこのプロセスは、みんなそれぞれ自分の中で繰り返すしかない。たとえばぼくは、大学一年生時代には会話と議論をこの世の他のどんなことよりも楽しむ生徒だった。でも次第にそれをますます重要でないものと思うようになった。というのも、見せだの人の私生活だの以外、何も話す内容がないように思えたとし、このどちらも一般会話にはふさわしくない。(中略)

ぼくが世界観を披露するなら、それを「我が信念」などと呼ばず「ぼくを感じること」と呼ぶだろう。これは、哲学は人に信念など与えず、単に知的不快感の気分をよみがえらせるだけだという見方と関連している。またぼくがラッセルの講演^{*5}と口論するなら、それは彼が何を信じていたかを巡ってではなく、それが彼の感じていたことについて与える示唆をめぐってだろう。もちろん、人の気持ちと本気で口論したりはできない。自分では別の気持ちを抱けるだけで、自分の気持ちのほうがずっと立派か、幸福な生活に結びつくものだと考えるのがせいぜいだ。この観点からすると、つまり事実の問題ではなく気持ちの問題なのだという観点からすると、物事一般についてのいくつかの印象、あるいはむしろ、物事ではなく**人生全般**についての印象を述べて終わろう。

友人の一部とぼくがちがっているらしい部分は、ぼくが物理的な大きさをまるで重視しないということだ。天の広大さを前にしても、ぼくはちっとも謙虚さを感じない。星は大きいかもしれないけれど、考えたり愛したりできない。そして、そうした性質のほうが大

*5 「わが信念」

きさなんかよりずっとぼくに感銘を与える。ぼくは体重百キロだがそれを自慢しようとは思わない。

ぼくの世界像は遠近法で描かれており、縮尺模型のようではない。前景は人間に占められ、星はすべて、三ペニーのかけらのように小さい。ぼくは本当は天文学を信じてはおらず、単に人間と、おそらく動物の感覚経路の一部についての複雑な記述としか思っていない。ぼくは自分の遠近法を、空間だけでなく時間にも適用する。いずれ世界は冷えてすべてが死ぬ。だがそれはまだずいぶん先の話だし、複利の割引現在価値はほとんどないも同然だ。また将来が空白になるからといって、現在の価値が減るわけでもない。ぼくの図の前景を満たす人類は、おもしろいと思うし、全体としては立派なものだと思う。少なくともいまこの瞬間は、この世界は快適でわくわくする場所だと思う。あなたはそれを、陰気な場所だと思うかもしれない。そういうあなたは可哀想だと思うし、そういうあなたをぼくは軽蔑する。だがぼくには理由があり、あなたにはそれがない。あなたがぼくを軽蔑する理由があるとすれば、それはあなたの気持が事実に対し、ぼくとはちがう形で対応している場合だけだ。だがどちらも事実には対応していない。事実はそれ自体はよくも悪くもない。単に、私はそれに興奮するが、あなたはそれに落ち込むというだけだ。その一方で、ぼくはあなたを可哀想に思う理由がある。というのも落ち込むよりは興奮するほうが楽しいからだし、単にもっと楽しいというだけでなく、その人の活動すべてにとってよいことだからだ。

1925年2月28日*6

*6 前掲書. pp. 289-92.

第III部

科学者たち

第 15 章

人間ニュートン

ジョフリー・ケインズ氏によって、1946年7月17日にトリニティカレッジのニュートン三百周年記念祝典で朗読されたもの。したがって数年前にこれを執筆した著者による改訂は経ていない。

* * * * *

ニュートン自身の家で、ニュートン自身がやっていたようにみなさんに話をしようとするのは、かなりの畏敬の念をこめてのことです。私は長いこと、彼の記録を学んできたし、自分の印象を書き留めて、彼の生誕三百周年にあたる1942年クリスマスまでに仕上げようと思っておりました。戦争のおかげで、これほど偉大な主題を適切に扱うだけの余裕もなくなり、また自分の蔵書や論文を調べて印象を確認する機会も失われたのです。したがって、本日これからご覧入れるものが、本来あるべきものよりは不首尾なものだとしても、お許しいただければと思います。

もう一つ予備的な点を。私はニュートンが伝統的な印象とはちがった人物だったと信じております。でも、それで彼の偉大さが減るとは思いません。彼は、十九世紀が描き出そうとしたよりも常軌を逸した、驚異的な人物でした。天才というのは、ずいぶん特異なものです。ここにいらっしゃる誰一人として、ケンブリッジの最も偉大な息子を描く今日の私の狙いが、彼を貶めることだなどと思っはしくはありません。私はむしろ彼を、その友人たちや同時代人たちが見たとおりに見ようとしているのです。そしてそうした人々は例外なく、人類の中で最も偉大な人物の一人と見なしております。

十八世紀以来、ニュートンは現代科学者の最初にして最も偉大な人物、合理主義者、冷たく一点の曇りもない理性に沿って考えるよう教えた人物だと思われるようになりました。

私は彼をそのようには見ておりません。1696年に彼がやっとなケンブリッジを離れたときに荷造りして、その後一部は散逸したものの、現代まで伝わってきた箱の中身に分け入った人物であれば、だれもそんなふうには彼を見ることはできなかったと思います。ニュートンは理性の時代の最初の人物ではありませんでした。彼は最後の魔術師、バビロン人やシュメール人たちの末裔、一万年にも満たない過去に、私たちの知的遺産を構築しはじめた人々とまったく同じ目で、目に見える世界、知的な世界を見渡せた、最後の偉大な精神だったのです。アイザック・ニュートン、父親の死後、1642年のクリスマスに父なしで生まれたこの子供は、魔術師たちが誠実かつ適切なオマージュを捧げられる、最後の天才児だったのです。

時間が許せば、子供としてのニュートンについて、同時代の記録を朗読したかったところです。というのもそれは彼の伝記作者には有名な話ではあるのですが、これまで註釈なしにありのままの形で省略なしに刊行されたことはないからです。そこにはまさに、若き魔術師の伝説の成り立ちがあります。若者で学生の不安、憂鬱、神経質な激昂などとは無縁の天才の心が華開く、きわめて喜ばしい姿が見られるのです。

というのも、下劣な現代の用語で言えば、ニュートンは結構ありがちな、ひどい神経症の人物ではあって、しかも――あえて言うなら――きわめて極端な一例ではあったのです。彼の最も奥深い直感はおカルト的、秘教的、意味論的でした――そして世界から徹底して引きこもり、自分の考えを明かし、信念、発見をありのまま、世間の検分と批判に曝すことについての麻痺するような恐怖があったのです。「私の知中でも最も怯え、慎重で懐疑的な気質の持ち主」とケンブリッジ大学のルーカス数学教授職をニュートンから継いだウィストンは述べています。フック、フラムスティード、ライブニッツとのあまりに有名な対立や不名誉な論争は、これをあまりにはっきり示すものです。こうした人種の常として、女性にはまったく関心がありませんでした。世捨て人で、友人たちから極度の圧力を受けない限り何も発表しませんでした。人生の第二段階まで、彼は隠れ、世を捨て、孤独で、研究は極度の内省により、おそらく決して比肩するもののない精神的な忍耐力をもって進めたのです。

彼の精神へのヒントは、持続的に集中した内省の異様な力にあるのだと思います。これはデカルトについても言えることですが、彼を手練れの実験主義者と考えることはできません。彼が少年時代に作った機会仕掛けの物語ほど魅力的なものはありません。彼の望遠鏡や光学実験があります。こうしたものは重要な業績で、その比類無き全面的な技能の一部ではありますが、彼だけの才能でないのは確かだと思ひ、特にその同時代人にはそうした例が他にもあります。彼の特異な才能は、頭の中に純粹に心的な問題を持続的に抱え込んで、それをまっすぐ見通すまで続けるというものです。彼が傑出しているのは、直感の筋力が、これまで人に与えられた中で最強かつ最も持続的だったからだと考えます。純粹な科学思考や哲学思考を試みた人はだれでも、問題を一瞬は頭の中にとどめ、そこに自分の全集中力をかけて突破しようとするのは経験があります。でも、それが溶けて逃れてしまい、白紙をいじるような状態になってしまうのも知っています。ニュートンは問題を何時間、何日、何週間となく頭の中に抱え込んで、それが秘密を明け渡すまで維持できたのだと私は思っています。そして超絶数学技巧家としての彼は、それを何と言うか、お披露目のために飾りたてることはできますが、傑出して非凡だったのは彼の直感力だったのです。ド・モルガン曰く「自分の定理に満足しきっていて、まるでどう考えても証明手段がある以上のことまで知っているかのようだ」。証明というのは、そんなものに意味があるなら、後からの飾り付けだったのです。それは発見の道具ではなかった。

ニュートンがハレーに、惑星運動の最も根本的な発見の一つについて告げたときの逸話があります。ハレーは答えました。「なるほど。でもなぜそんなことがわかるね？ 証明したのかい？」ニュートンは啞然としました。――「なんだって、こんなの何年も前からわかってたよ。数日くれたら、もちろん証明は見つけといてあげるよ」――そしてまもなく、本当にそれが出てきました。

また、ニュートンが『プリンキピア』を用意するときに、最後の最後になって固体の球をすべての重量が中心に集まっているものとして扱ってかまわないという証明がないために進行がとまり、刊行の一年前になってやっと証明を思いついたという証拠があります。

でもこれは、彼が確信をもって知っていた真実であり、長年にわたって正しいと想定してきたものだったのです。

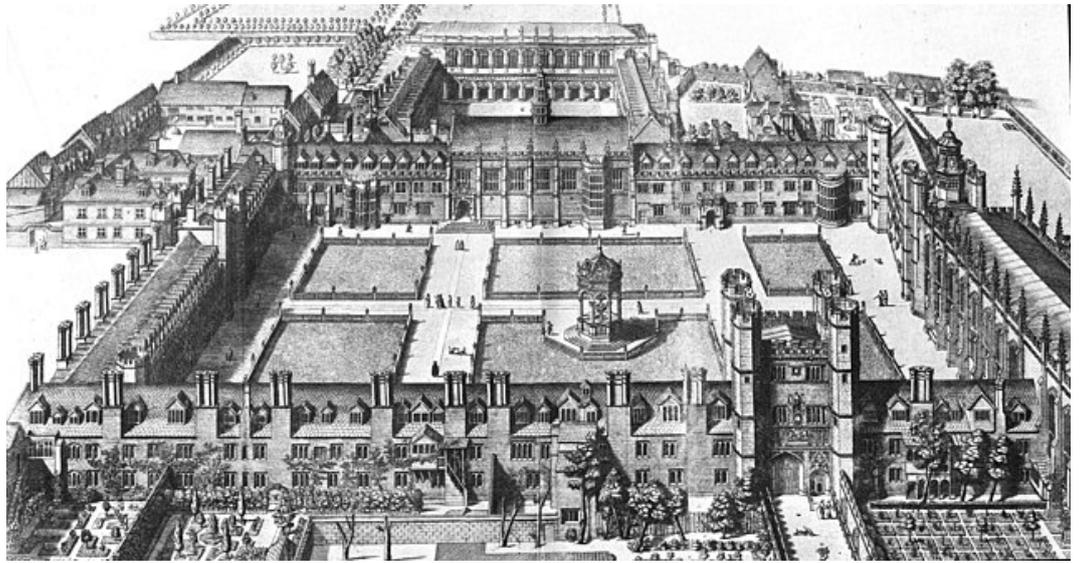
『プリンキピア』の記述が着飾られている特異な幾何学的形式は、ニュートンが自分の結論に実際に到達したときの精神的プロセスとはまるで似ても似つかないのは疑いないところです。彼の実験はすべて、発見の手段ではなく、常に自分がすでにわかっていることを確認する方法だったのではと私はにらんでいます。

なぜ私は彼を魔術師と呼ぶのでしょうか？ なぜなら彼は宇宙全体とその中のものすべてを謎として見たからです。一部の証拠に純粹思考を適用することで読み解ける謎です。秘教的な友愛組織の哲学的な宝探しのようなものを可能にするため、神が世界の中においた謎めいたヒントです。彼は、そうしたヒントの一部は天の証拠と、要素の構成の中で見つかると信じていました（そしてこれが、彼が実験的な自然科学者だというまちがった示唆を与えるものなのです）。そして他の一部は、原初的な謎めいたバビロニアの啓示にまでさかのぼる、絶えることのない連鎖として幾世代も伝えられてきた、ある種の書類や伝統の中にあると考えていました。彼は宇宙を、全能の神が設定した暗号文だと考えていました――ちょうど、彼自身が微積分の発見を、ライブニッツとのやりとりの中で暗号に包んだようにです。純粹な思考、精神の集中により、謎は秘儀参入者に明かされるのだと彼は信じていました。

彼は本当に、天の謎を解説しました。そして彼は、自分の同じ内省的な想像力の力を持ってすれば、神の頭の謎も解説できると信じていました。神によりあらかじめ定められた、過去や未来の出来事の謎、要素とそれが元の無差別の第1原因から構成される謎、健康と不死の謎も。最後まで邪魔されず、自分一人で、だれも入ってこない部屋で、読み、写本し、検証し、まったく頼むから何も中断なく、開示もなく、耳障りな乱入も、批判もなく、その半ば与えられ、半ば禁断の物事を攻撃して、母親の子宮に戻るように神の頭に忍び込むことさえできれば、すべてが自分には明かされるのだと思っていました。「不思議な海の中を、孤独に旅する」ようにであり、チャールズ・ラムが言うような「三角形の三辺のように明確でなければ何も信じなかった人物」ではないのです。

そうやって彼は二十五年続けました。1687年、彼が四十五歳になったとき、『プリンキピア』が刊行されました。

ここトリニティカレッジで、彼がその最大の業績の間にどんな暮らしをしていたか説明するのは適切なことでしょう。チャペルの東端は、大門よりさらに東に張り出しています。十七世紀後半には、トリニティ街と、大門をチャペルとつなぐ建物との間の空き地には、壁に囲まれた庭園があったのです。南側の壁は門の尖塔から始まり、少なくとも現在の舗石の幅くらいまでチャペルと重なるくらいの距離を伸びていました。だから庭園は慎ましいとはいえそこそこの大きさがあったのです。これは1690年のカレッジを描いたログガンの版画が示す通りです。これはニュートンの庭園でした。彼はフェローとしての部屋を、ポーターズロッジとチャペルの間に持っていました――たぶんいまブロード教授が入っているところです。庭園は、各種の建物から庭園にせり出す、木の柱で持ち上げたベランダにつながった階段で出入りするようになっていました。その階段のてっぺんに彼の望遠鏡がありました――ニュートンの生涯中（でも彼がケンブリッジを去った後）に大門のてっぺんに作られた天文台とは別物です。その天文台は、ロジャー・コーツとニュートンの後継者ウィストンのためのものでした。この木造の台は、たぶん1856年にウィーヴェルが壊して、ブロード教授の寝室の石の出窓に置き換わったのだと思います。庭園の



ロッグンのトリニティカレッジ版画 (1690)。ニュートンの庭は右下の部分か？ (不詳)

チャペル側の端には、同じく木造の小さな二階建ての建物があり、それが彼の実験室でした。彼が『プリンキピア』を出版用に整えようとしたとき、若き親族ハンフリー・ニュートンを筆記者としての役割で雇いました (『プリンキピア』の原稿を印刷所まで運んだのは、明らかにハンフリーの手です)。ハンフリーは、1684年から1689年まで五年にわたりニュートンと一緒にいました。ニュートンが死んだとき、義理の甥コンデユイットはハンフリーに手紙を書いてニュートンの遺物を要求しましたが、それに対するハンフリーの返事も私の手元にあります。

この25年間にわたる集中的な研究の中で、数学と天文学は、その関心対象のごく一部でしかなく、最も没頭したものですらないかもしれません。こうしたものの私たちの記録は、ほぼすべて、彼が保存しトリニティを離れてロンドンに向かったときに箱に入れたものだけです。

それらの主題について簡単な示唆を。それらはすさまじい分量です——彼の手書きで百万語以上が残っていると思います。それらは、疑問の余地なく、我らが最高の天才の精神にすばらしい横からの光を当てるものという以外には、本質的な価値はまったくありません。

過去200年にわたり実にせつせと構築されてきた、他のニュートン神話を否定する反応において、あまり誇張はしないでおきましょう。彼の狂気には極度に入念な手法があります。秘教的、神学的な問題に関する未完の研究は、すべて慎重な学習、正確な手法と、主張の角の冷静さを特徴としています。その中身と狙いが魔術でなければ、『プリンキピア』と同じくらい正気のものであります。それらはすべて、彼の数学研究と同じ25年間に書かれたものです。そしていくつかのグループにまとめられます。

人生のかなり初期に、ニュートンは三位一体の正統派教義を放棄しました。その頃、ソツィーニ派が知識人界界限のアレイオス主義者の中で重要な派閥となっていました。ニュートンは、ソツィーニ派の影響を受けた可能性はありますが、私はちがうと思います。彼はむしろ、マイモニデス学派のユダヤ的一神教主義だったのです。彼がこの結論に達したのは、いわゆる合理的または懐疑的な理由からではなく、完全に古代の権威に基づ

いてのことです。彼は、啓示文書は、後代の捏造に基づく三位一体の教義を一切支持していませんと確信しました。明かされた神は唯一神だったのです。

しかしこれは恐ろしい秘密であり、ニュートンは必死の苦労を重ねてこれを生涯にわたり隠し通しました。彼が聖職授与を拒否したのはこのためであり、したがってフェローシップとルーカス数学教授職を維持するために特別免除を得なければならなかった理由でもあり、トリニティ大学学長になれなかった理由でもあります。1689年の信教自由令でさえ反三位一体は例外とされています。多少の噂は流れましたが、まだトリニティのフェローとして若かった危険な時代にはそれもありませんでした。この秘密は概ね彼とともに死にました。しかし、大箱に入った多くの著作でそれは明かされています。死後にホースレー司教は、出版を念頭に箱の中身を検分するように依頼されました。彼はその中身を見て震え上がり、蓋を叩きつけて締めたのです。百年後にサー・デイヴィッド・ブリュスターが箱を覗きました。彼は慎重に選び抜いた抜粋と、露骨なウソによりその痕跡を隠しました。最新の伝記作者モア氏は、もっと正直でした。ニュートンの大量の反三位一体パンフレットは、私の判断では、彼の未完論文の中で最もおもしろいものです。彼のもっと真剣な信仰確認以外に、私の手元には、ニュートンが聖アタナシウスが行った極度の不正直さと記録捏造についてどう思うかを赤裸々に描いた完成版のパンフレットがあります。特に、アレリオスが便所で死んだというインチキな中傷を撒いたことについては厳しく批判されています。17世紀後半のイギリスにおける三位一体派勝利は、聖アタナシウスの元々の勝利と同じくらい、完全なだけでなくとんでもないものでした。ロックがユニテリアン派だったと考えるべき理由は十分にあります。ミルトンもそうだったという議論も見たことがあります。ルーカス数学教授職の後継者ウイストンは、ニュートン自身が過去五十年にもわたりこっそり抱いていた見解を公然と認めたことで、教授職と大学を迫われましたが、そのときニュートンが一言も発しなかったからといって、それがニュートンの経歴の汚点と言えるでしょうか。

異端説を信じていたため、彼の沈黙と秘密主義と引きこもりの態度はさらに加速しました。別の大きな部分は、各種の終末論的な著作を扱ったもので、彼はそこから宇宙の秘密の心理を演繹しようとしていました――ソロモン神殿の寸法、ダニエル書、黙示録、すさまじい量の研究で、一部は晩年に出版されました。これとあわせて、何百ページにも及ぶ教会の歴史などが、伝統の真理を発見すべく用意されたのです。

大量の部分が、最初期の手書き文書から判断すると、錬金術＝変容、賢者の石、生命の霊薬に関連したものです。こうした論文の対象と性質は、これを検討したほとんど全員によって、隠されたり、少なくとも矮小化されたりしています。1650年頃のロンドンには、クーパー出版社を中心にかかなりの集団がいて、15世紀のイギリス錬金術師だけでなく、中世や中世以降の錬金術師の翻訳への関心を復活させていました。

ケンブリッジの図書室には、初期のイギリス錬金術師の原稿が異様なほど大量にあります。ひょっとすると、この大学内にはなにか継続的な秘教伝統があって、それが1650-1670年の二十年間にまた突然活発になったのかもしれませんが。いずれにしても、ニュートンは明らかに誰はばかることなき中毒者でした。彼が『プリンキピア』をまとめたまさにその時期に、彼が「春に六週間、秋に六週間、実験場の火がほとんど消える間もなかった」ほど没頭していたのはこれだったのです――そしてこれについて彼は、ハンフリー・ニュートンに一言たりとも話していません。さらに彼が目指していたのは、真剣な実験などではなく、謎めいた詩の意味を見出し、過去の世紀の秘儀参入者たちが、行った

と主張はしているがほとんどは架空の実験を真似ることだったのです。ニュートンは、こうした研究の大量の記録を残しています。おそらくその相当部分は、既存書籍や原稿の彼の翻訳や写本でしょう。でも実験の大量の記録もあります。私はその相当部分をざっと観てみました。それが完全に魔術的で、まったく科学的な価値が皆無であるのは、まったく否定しがたいことです。そしてニュートンが何年もの研究をそれに割いていたことは認めざるをえません。いずれ、私よりももっと能力があってもっと暇な学生が、ニュートンが伝統やその時代の写本との間に持っていた関係をずばり解明したら、おもしろいでしょうが、役には立たないでしょう。

こうしたごたまぜの驚異的な研究の中、片方は中世に足をつっこみ、もう片方の足は現代科学の道を歩んでいたニュートンは、人生最初のフェーズをこうして過ごしたのです。トリニティで、彼の本当の業績すべてを実現した人生の時期です。では第二の時期に話を移しましょう。

『プリンキピア』出版後、彼の習慣と生き様は完全に変わります。彼の友人、特にハリファックスが、ニュートンがトリニティで送っていた生活から掘り出してやらないと、間もなく精神と健康の衰退につながるという結論に達したのだと私は思います。ざっと言えば、自発的にはあるいは説得されてか、彼は研究を放棄します。大学の業務に携わり、議会で大学を代表します。友人たちは彼に、立派で見返りある職を見つけてやろうと頑張りました――キングスカレッジの学長職、チャーターハウスの学長、造幣局の局長などです。

ニュートンはユニテリアン派で、聖職位に就いていなかったため、トリニティの学長にはなれませんでした。キングスカレッジの学長職を拒否されたのは、イートン出身でないというもっと泥臭い理由のせいです。ニュートンはこの拒絶に大いにお冠で、長い訴状を用意したのですが、これも手元にあります。そこには、なぜ自分が学長として受け容れられても違法ではないかという理由が書かれているのです。しかし、不運なことに、ニュートンの学長職への推薦は、キングスカレッジが王による学長指名権と戦おうと決めた瞬間にやってきたのでした。この紛争ではカレッジが勝ったのです。

ニュートンは、このどの役職にも十分な資格がありました。彼の内省、うわの空、秘密主義、孤独から、その気になれば物事をやり遂げるだけの気力がなかったと思ってはいけません。彼の大いなる能力を証明する記録はたくさんあります。たとえば、彼が大学の代表として議会で、1688年革命以降の宣誓という微妙な問題と対処しなければならなかったときの、副総理コヴェル博士とのやりとりを読んでみましょう。ピープスとロウンデスと並んで、彼は最も有能で偉大な公僕の一人となりました。彼はとても成功した資金投資家で、南海バブルを克服して、晩年はお金持ちでした。彼はほとんどあらゆる知的活動において、傑出した能力を発揮したのです――弁護士、歴史家、神学者、もちろん数学者、物理学者、天文学者は言うに及ばず。そして人生の転機がやってきて魔術書を箱に戻したら、17世紀を後にして、伝統的なニュートンたる18世紀の人物像へと進化するのは彼には簡単なことだったのです。

それでも、彼の人生を変えようという友人たちの動きはほとんど手遅れ寸前でした。1689年に、とても近しかった母親が死にました。1692年のクリスマス、五十歳の誕生日あたりに、現代なら激しい神経衰弱とでも言うべきものに襲われました。憂鬱、不眠、訴追の恐れ――彼はピープスやロックや、まちががなく他の人々にも手紙を書きますが、それを読んだら頭がおかしくなったと思うでしょう。彼は当人の言葉では「かつての頭の一

貫性」を失ってしまったのです。二度と昔のように集中することもなく、新しい研究も何もしませんでした。神経衰弱はおそらく二年近く続き、そこから登場したのは、多少「老いぼれ」ながらいまだにまちがいなく、イングランドで最も強力な頭脳を備えた、伝統的なサー・アイザック・ニュートンだったのです。

1696年に友人たちはやっと、彼をケンブリッジから掘り起こすのに成功し、そしてさらに二十年以上にわたり、彼はロンドンでこの時代最高のヨーロッパの有名人として君臨し、そして――彼の力が次第に衰えるにつれて愛想の良さは増しました――当時のひとにしてみれば、この時代はおろか、あらゆる時代で最高の有名人に思えたのでした。

彼は姪のキャサリン・バートンと家をかまえました。彼女はまともな疑問の余地なく、ニュートンの昔からの忠実な友人、ハリファクス公にして財務大臣チャールズ・モンタギューの愛人でした。モンタギューはトリニティの学部生時代にニュートンの親友の一人だったのです。キャサリンは、コングリーブ、スウィフト、ポープのロンドンにおける最も明晰で魅力的な女性との評判でした。彼女は、特にスウィフト『ステラへの日記』に登場する物語の華々しさで有名です。ニュートンはその高くない身長にしてはあまりに体重をつけすぎます。「馬車に乗るときには、片腕が馬車の片方からはみ出し、反対側から反対の腕がはみ出す」。大量の雪白の髪の下にあるピンクの顔は「カツラを取ったときには立派な様子」だったそうですが、ますます慈愛に満ちて神々しくなりました。ある夜のトリニティでホールの後、彼はアン女王にナイトの位を与えられます。二十四年近くにわたり、王立科学協会の会長として君臨します。彼はロンドンを訪れるあらゆる外国知識人にとって主要な見世物となり、彼も相手を歓待します。彼は身の回りに賢い若者を侍らしては、『プリンキピア』の新版を編集させます――そしてときにはそこに大してかきこくもない若者、たとえばファティオ・デ・デュイリエなどもおりました。

魔術はほぼ忘れ去られました。彼は理性の時代における聖人で君主となりました。正統な伝統のサー・アイザック・ニュートン――18世紀のサー・アイザック、17世紀前半に生まれた子供魔術師とはかけ離れた存在――が構築されつつあったのです。ヴォルテールはロンドン旅行から戻ったとき、サー・アイザックについてこう報告しています――「彼の特異な幸福は、自由の国に生まれただけでなく、あらゆる学術的な無礼が世界から追放された時代に生まれたことだった。理性だけが涵養され、人類は理性の敵とはなれず、その学徒になるしかないのである」。その秘密の異端信仰と学術的迷信を研究してきたニュートンの生涯丸ごと隠さねばならなかったのです！

しかし彼は決して集中せず、「かつての心の一貫性」を二度と回復しませんでした。「人前でほとんど話しませんでした」「その見かけや態度に何か怠惰なものがありました」。

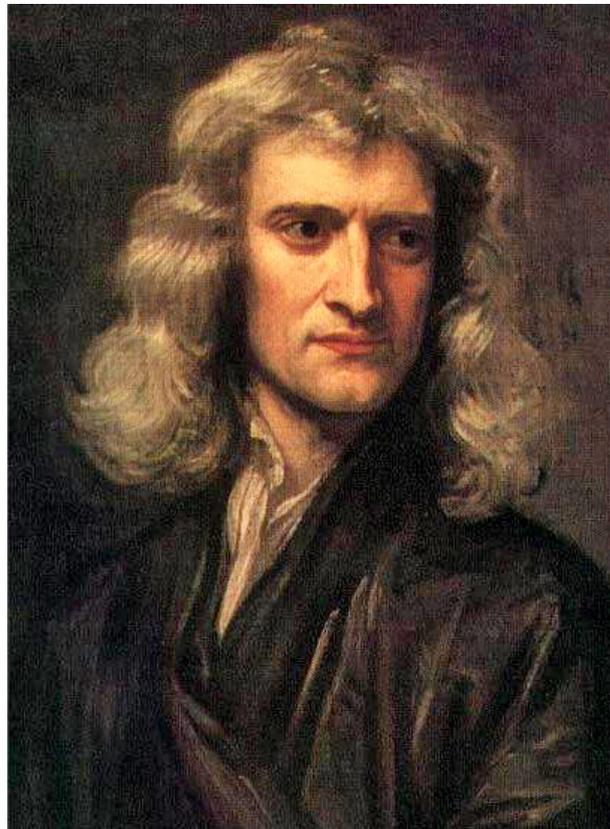
そしておそらくは、ケンブリッジを離れたときに、居室や庭園や大門とチャペルの間の実験所で、彼の強烈で燃えさかる精神を占拠し没頭させたものの証拠をすべて詰め込んだ長持ちも、ほとんど覗かなかったのだらうと思います。

でも、それを破壊はしませんでした。中身は箱の中にとどまり、それを覗く18世紀や19世紀の目に深い衝撃を与えました。それはキャサリン・バートンの持ち物となり、その後彼女の娘レディ・リミントンのものとなりました。だからニュートンの物入れは、彼の未発表の何十万語にも及ぶ著作を入れた状態で「ポーツマス文書」も含むに到ったのでした。

1888年に数学部分がケンブリッジの大学図書館に寄贈されました。索引はつきましたが編集はされていません。残りは、とても大量のコレクションですが、1936年にキャサ

リン・バートンの子孫、現在のリミントン卿によりオークションルームで散逸しました。この不敬に困惑して、私は次第にその半分ほどを何とか集め直しました。これは、伝記的な部分のほぼ全体をも含みます。いわゆる「コンジット文書」です。それをケンブリッジに戻し、願わくば二度とそこを離れないようにするためです。残りの大半は、シンジケートによって、私の手の届かないところへかささらわれました。最近の三百周年に際しておそらくはアメリカで高価格で転売しようとするのでしょう。

こうした奇妙なコレクションをためつすがめつすると、この奇妙な精神を理解しやすくなるようです――願わくば、それが反対方向に歪んだ理解ではありませんように。その精神は、この壁の中で彼が実に多くのものを解明していたときに、精神の純粋な力によって神と自然のあらゆる秘密に到達できると悪魔にそそのかされて信じてしまったのです――コペルニクスとファウストが一つになった存在だったのです。



アイザック・ニュートン

第 16 章

バーナード・ショーとアイザック・ニュートン

ニュートンの生涯は二部構成で、その生活習慣は、片方でのものともう片方でのものとは驚くほどちがっていた。その分割線は 1692 年頃、彼が 50 歳になったあたりでやってきた。G.B.S. は、『よきチャールズ国王の黄金期』を 1680 年に設定している。既知の事実を大きく離れて、彼はニュートンを、まちがいでなくその年の彼とはちがったものとして描いている。だがニュートンにあり得た人格についての予言者的な洞察によって、彼は三十年後であればあり得なくもなかった姿を示してくれる――「退屈なジョージ国王の黄金の(ずっと黄金まみれの)時代」だ。ここで GBS を賞賛するのに、彼の時代錯誤が持つ proleptic な性質を明らかにしてみましようかな？

小さな細部から始めると、芝居の舞台はまったく説明がつかない代物で、どこかにあるアイザック・ニュートンの家だ。ニュートンはそんな家を持ったことはなかった。ケンブリッジ時代はずっと、トリニティカレッジにいて、いまだに現存する大門とチャペルの間の部屋にいた。だが G.B.S. が「外に鉄のバルコニーがあって、庭園の高さまで降りる鉄階段がついている」と述べたのは正しい。それらはすでに撤去されてしまっているが。というのもニュートンは、いまや建物と通りとの間の草地になっている部分に自分の庭園を持っていて、この庭園の中に彼の実験室があったからだ。三十年後のニュートンは、確かに描かれたような家を、レスター広場はずれのセントマーチン街に持っていた。彼のカーテンとソファ類はすべて深紅だったそうで、未来の製作者たちはこれを念頭に置いて欲しいものだ。またケンブリッジには家政婦や女中もいなかった。ただベッドメイクをするケンブリッジの老人と、ときには部屋を共有して手伝いをした、カレッジのシザールまたは後にいう秘書の若者がたまにいただけだ。

だがこのケンブリッジの環境にいたニュートンは、1680 年には人生第一期の絶頂にあり、『プリンキピア』刊行はまだ七年先で科学面での友人数名以外には無名の存在、隠遁状態で、宇宙のあらゆる謎に取り組み、魔術師で、深い不思議な秘教的秘密を抱え、猜疑心に満ち、孤独で、明るい世界とのつきあいができない人物だった。たまたま、『プリンキピア』最終段階で彼の書生としてカレッジで同居していたハンフリー・ニュートンが、少し後の 1685 年に描いたニュートンの描写がある。「あの方の当時の態度はきわめて弱々しく、おとなしくて慎ましく、見たところ怒ったことは決してなく、深遠な思索にふけり、相貌は穏やかで、快く、整っておりました」。すでに白髪だったとのこと。「あまりに集中され、研究に対して真剣なので、食事もありとらず、いやときには食事をお

忘れになり、だから部屋に入ると食事がまったく手つかずなのに気がつき、それについて指摘すると、あの方はこうおっしゃるのです。――「おや食べてなかったっけ？」そしてテーブルに向かい、一口二口立ったまま召し上がります。というのも一人でテーブルについて食べるころは一度も見たとはいいたくないのです……二時、三時前にベッドに入るとはほとんどなく、時には五時や六時まで起きており、四、五時間ほど横になり、特に春と落葉の時期には、六週間にわたり実験室にこもりきりで、火は昼も夜もめったに消えないのです。あの方がある夜に徹夜して私が次の夜に徹夜し、その科学実験を終えるまで見ていましたが、その実施においてあの方はきわめて正確で厳密で緻密でした。その狙いが何だったのか私にはうかがい知ることができませんでしたが、その装置に向かうときの細心ぶり、その真剣さはときに、何か人間の業や興産の到達範囲を超えたものを狙っているのではと思わせるものではありました。食事以外のときに、ワイン、エール、ビールをお飲みになるのは見たことがありませんし、食事のときにもきわめて少量です。何か公式の行事がある日でもなければ、食堂に食事にでかけることはめったになく、しかもそのときですら、こちらが注意しなければまったくうわの空で、靴の踵を踏んで、ストックングのひもはほどけ、短白衣を着たまま、髪もほとんど梳ることはないのです」

ハンフリーの疑念は正しかった。何百ページにもわたる未刊の原稿が現存して裏付けているように、ニュートンは賢者の石、生命の霊薬と、卑金属の黄金への変換を探究していたのだった。彼はまさに、伝統的なヘルメス学や啓示の書に精神を極度に集中させれば、自然の秘密と将来の出来事の道筋を解明できると信じる魔術師だったのだ。ちょうど、観測されたわずかな事実に純粋に精神を作用させることで、天の秘密を解き明かしたように。彼の業績は前向きであり、現代科学のあらゆる恐怖への道を切りひらいたが、彼自身の精神は中世の彼方を振り返り、はるか古代東方の伝統的な謎を見ていたのだった。G.B.S. が彼に口走らせる台詞は正しい――「もっと取り組むべき重要なことはあまりに多い。物質の変換、生命の霊薬、光と色彩の魔術、何よりも聖典の秘密の意味。そしてこうしたものに精神を集中させるべきときに、私は気がつく、無限級数の数字についての考察や、曲線を分割不能なほど小さい三角形の底に分割するといった無意味な考察のお遊びに頭を漂わせているのだ。なんと愚かなことか！何という時間の無駄、貴重な時間の無駄か！」発言としては正しいが、これがあの秘密の人物の閉ざされた唇から一度であれ発されたとは考えられない。五年にわたって同居していたハンフリーにすら、実験場の火が何を明かすはずだったのかについて、匂わせすらしなかった人物なのだから。

G.B.S. は芝居の登場人物たちが、何十年も後になるまで出版されていないニュートンの著作を読んでいることにした。それは別に問題ない。だがある一節については、ひょっとして文句を言わせていただけますかな？ というのもそれは、日付だけでなく（ニュートンがこの考えを口走ったのは、芝居の設定日より四十五年後だった）、ニュートンの数少ない記録に残った思索の中で、最も有名で美しい台詞を改変してしまっているからだ。

G.B.S. 版ニュートン：私は生涯を、自分の無知の大海について考えつつ過ごす。かつてその大海の果てしない浜辺で、小石を拾ったと豪語したことがあった。だがそれは砂の一粒だと言うべきだっただろう。

実際のニュートン：自分が世の中でどのように見られているかは知らない。だが自分で見ると、私は浜辺で遊ぶ少年のようなものでしかなかったようだ。ときには普通よりもすすすべの小石やきれいな貝殻を見つけて気を取られている。だがその間にも

ずっと真実の大海がすべて、発見されないまま目の前に広がっているのだ。

ハンフリーが描いた自分自身をも省みない激しい労働を十年以上も続けて、アイザック・ニュートンは『プリンキピア』を世に問い、人生の危機を迎え、親密だった母親を失い、いまなら神経衰弱と呼ばれるものに陥り、それがあまりにひどく、彼が発狂したという噂が広まったほどだ。彼は混乱し病気だった。精神の集中を失った（そして以前のような集中は二度と回復できなかった）。自分が訴追され、友人たちに裏切られたと思ひこみ、バカげた根拠のない糾弾の手紙を書き送った。この1692年頃には、彼は齢五十年で、有名人だった。友人たちは、もう彼の身体と理性を回復させるには、トリニティでの居室から掘り出して、どこかに名誉と尊厳ある役職を見つけてやるしかないと考えた。最初の試みは失敗に終わり、ニュートンの神経に与えた影響はといえば、この取り組みすべてを嫌悪するようになっただけだった。王は彼をケンブリッジのキングスカレッジの学長に指名したが、カレッジはこのあらゆる栄誉の中で最大のものを拒絶した。ニュートンがイートン校出身でもなく聖職者でもないからというのだ――こうした大きな理由のどちらも有効でないかをニュートンが述べた、長い訴状がある。彼をチャーターハウスの学長にしようという試みがあった。最後にやっと、トリニティ時代からの旧友チャールズ・モンタギューが、当時財務大臣でハリファックス卿だったことで、まず造幣局の所長、後に長官という、かなりの収入ある閑職を用意してあげたのだった。

ニュートンはロンドンに転居して、その後三十年にわたりロンドン社交界で、G.B.S. が二十年か三十年前の設定の中で彼に与えたのときわめて似た立場を占め続けた。ニュートンは人生の第二期に入ったのだった。魔術書は閉じられた。ストッキングはきちんと引き上げられ、髪もとかされた（だが食事については相変わらずだった。キャサリン・バートンはこう語っている。「叔父は夕食を二時間も放置します。おかゆやミルクに卵を温かいうちに夕食で運んでおいたら、叔父はそれが冷めてから、朝食に食べるのです」）。彼はポープやスウィフトの仲間に加わり、前者には賞賛され、後者にはネタにされた。王立学会の終身会長、ヴォルテールを始め大陸からの訪問者すべてにとっての名所、科学と学習の高貴な家長にして守護役、イングランドと世界の公認の栄光。実際、あるときかれはオペラに出かけたが、一度だけだった――後で彼はこう語る。「よいものが多すぎるというやつだ。ディナーの氾濫さながら。第一幕は楽しく聴いた。第二幕では我慢しきれない。第三幕で逃げ出したよ」

彼は田舎から若い姪のキャサリン・バートン十七歳を呼び寄せ、家の世話をしてもらった。そしてキャサリンはロンドン社交界で最もウィットに富んだきれいな女の子の一人になった。スウィフトは彼女と二人きりで食事をするのが大好きで、ステラへの手紙の中で「彼女はここのだれよりも好きだ」と記録している。彼女はハリファックス卿の伴侶、一部の噂では愛人になった。だから、彼女が加わったときに幕間が少しあっただけで、ハリファックス、叔父、姪は三十年少々その関係が続けたのだった。そして晩年のニュートンは有名なだけでなく、金持ちだった――シェイクスピア、ダーウィン、ショーと同じく。

G.B.S. が、その時代錯誤ぶりを徹底させて、キャサリン・バートンとチャールズ・モンタギューも芝居に登場させてくれればと思う。セントマーチン街のニュートンの家と図書室（その蔵書は、長く荒涼とした放浪の挙げ句、今年トリニティに返還された）は、マクミラン氏たちの立派な邸宅の近くにあり、深紅のソファやクッションにカーテンで、キャサリン・バートンが家を仕切っていれば、G.B.S. が前世紀の彼に与えた訪問者や台詞に

はびったりだったろう。だが戯曲家には公正な特権を持っている。1710年のニュートンを三十年前に戻すほうが、チャールズ二世とそこご婦人たちが、ジョージ一世の御代に跋扈しているふりをするよりも簡単だったのだろう。G.B.S. が主張する、いや豪語するように「シェイクスピアがトロイのヘクトルにアリストテレスを暗唱させて以来、舞台がこれほどとんでもない時代錯誤を実演してみせたことはない」というのが彼のこの芝居なのだが、彼の念頭にある具体的な例（ニュートンに水星の近日点に何か変なことがあると気がつかせる）のは、私に言わせれば、この面におけるいちばんどうでもいい罪状でしかない。ショーはこう結論する。「一方で、私の芝居のニュートンは舞台天文学者だというのは認めよう。つまりある特定時代の天文学者なのではなく、あらゆる時代の天文学者なのだ。人間ニュートンは、天才児の中でも最も奇妙な人物だった。そしてその矛盾ぶりすべてについて、私はいくらでも書ける」。確かにその通りではあるし、敢えてケチをつけるなら、ニュートンは彼がここで示したものよりはるかに奇妙な存在だったということだけだ。ニュートンがケンブリッジを去って魔術書を閉じたとき、彼は長持ち一つに、莫大な神秘の原稿をすべて荷造りして、その死後にキャサリン・バートンの夫は、人生第一期のこの神童にして天才魔術師について、手当たり次第に物語や記憶を集めてそこに付け加えた。そしてそのままそこに転がっていたのに、先日競売人のハンマーがそれを散逸させた。その中身の一部は有名だが、その内容はいまだに、ストレートな連続性ある物語として、長持ちから出てきたままに刊行されてはいない。彼が死後の誕生のほぼその日から「天才児の中で最も奇妙」――突出して最も奇妙――だったという証拠は山ほどある。

このトリビュート集を欠席してなるものかと思いつつも、世界をめぐるややこしい仕事への無為な専念のため、精神とペンの余裕を奪われていた者として、この乏しい文をあわててしたためてみた。私が G.B.S. に対して抱く愛と敬意にはまるで及ばない代物ではある。

1946年4月7日

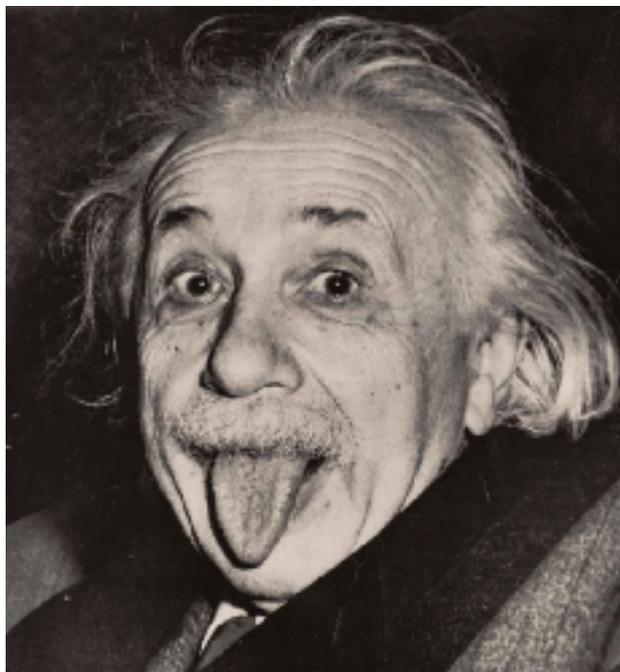
訳者付記

初出 *G.B.S. 90* (Hutchinson, 1946)。ジョージ・バーナード・ショーの90歳記念文集で、彼の知り合い（イギリス文化人総覧）がたくさん寄稿した中のもの。採りあげられている芝居は、1939年のもの。

本稿は、ちょうど世界銀行とIMF設立を（ケインズとしてはきわめて不本意な形で）決めたサヴァンナ会議から帰ったばかりで疲れ果てていたとき（最後の「世界をめぐるややこしい仕事」はこのことすな）、一日で書かれて、1946年4月9日に発送されたそうなの。そしてケインズは、その後二週間もせず4月21日に他界。本稿は、ケインズの絶筆、とのこと。

第 17 章

アインシュタイン



アルバート・アインシュタイン

ニュートンを見たことのないワーズワースがニュートンの彫像について書いたこと：

思考の不思議な海の中を、孤独に
永遠に旅する精神の大理石の指標

私は、アインシュタインを見たんだが、どうやら何かを記録しなきゃいけないーそんなに変ったことではないのかもしれないがー彼が「いたずらっ子」で、いたずら好きなユダヤ少年、インキまみれ、長い鼻を引っ張ってみせる中で、世界がそのケツを蹴飛ばしている。カワイイ悪鬼、純粹でクスクス笑っている。明らかに彼は文字通り、ケツを何度も蹴飛ばされてきたし、そういうものだと思っていて、それを真実と独立性と相容れるものと思っていて、ほとんどそれが独立のシンボルとさえ思っていて、それで気を悪くしたりはしていない。

その機会というのはベルリン大学での私の講演のときで、そこに彼がやってきた。続いて公式の晩餐があって、そこにも彼はきた。ベルリンでは彼はスター扱いされない。私が個人的に紹介を受けなかった数少ないお客の一人が彼だった――だから自分で探し出さなといけなかった。そしてテーブルで彼がすわらされた座席は、一番末席から二つ目。私のもっと不運な座席は、総長夫人と大臣夫人の間、リディアは閣下と陛下の間にすわらされた。一見したときにはだれだかわからなかった。奇妙な黒い生き物が、立派な丸い頭をつけて身体を横にして入ってくるのを見て、私はふざけてお隣にこう言ったよ――おやムッシュ・ブリアンのお越しだ！でも答がやってきたとき――あれはアインシュタインですよ――私は彼に近づいて、本当に似ているのはチャーリー・チャップリンだと気がついた。チャーリー・チャップリンに、シェイクスピアのおでこをつけたもの、というのがアインシュタインをいちばんよく表している。チャーリーの精神と悪鬼めいた横目の流し目もまったく同じ。彼はそういう種類のユダヤ人だ――めったに頭を水面から出さない、甘く優しい悪鬼たちで、不死性を複利計算に昇華していない連中。

彼は私の講演について語った――英語はわかるけれど話せないようだったな。私が共産主義にちょっと同情を匂わせた部分に同意したかと尋ねたよ。するとこう答えた。「ええ。私の心はアカですが、頭がまだついてきておりません」

晩餐では遠くから彼を見ることしかできなかった。ドイツの晩餐では、演説がコース料理ごとに行われ、その間は給仕たちも引っ込んで、扉はすべて閉められる。二番目の演説が続いているとき、アインシュタインはリディアの言い方だと、ちょっと水をだしたいと思って、ちょっとニヤリとして立ち上がり、扉に向かい、このときまちががなく教室から抜けだそうとする少年を思わせる様子だった。ところが、扉は外側から鍵がかかっていたので、もっと大きくしおしおとした微笑を浮かべつつ、また身体を横にして座席に戻ってくるしかなかった。まわりの老ドイツ人たちから、その不穏当で、場をわきまえない、ちょっと恥知らずな行動のせいで冷たい目を浴びて、言わばケツを蹴飛ばされたわけだが、それでも恥じることなく、改悛もせず、ひるみもしない。アインシュタインは孤独に旅する。彼の眉は、ある精神の指標だ――ワーズワースの使った言葉で完全な姿を描くのはむずかしいがね。

晩餐後には老経済学者たちと話をしなきゃいけなかったが、彼が立ち去る前に同情するような視線と、演説についてちよとした賞賛をもらった（「sehr schön und fein (とても美しく素敵だった)」）。というわけで、本当に彼とちょっと戯れたわけだな。

彼はベルリン中で私が出会った中で、いちばん親切で、唯一の才能ある人物だったね。まあリディアがえらく気に入っていた銀行屋のフルシュテンベルクと、ハンブルクからの身の丈80センチの謎めいた経済学者クルト・ジンガーは例外かもしれない。そして彼はユダヤ人だった。フルシュテンベルクとジンガーもそうだった。そして我が親愛なるメルキオールもユダヤ人だ。それでも、もしベルリンに住んでいたなら私も反ユダヤ主義になりかねない。というのも哀れなプロイセン人たちは、別の種類のユダヤ人相手だと鈍くて足が重たすぎる。そのユダヤ人というのは悪鬼ではなく、現役の悪魔で、小さな角に三つ股の槍、脂ぎった尻尾をしているんだ。お金と権力と頭脳をすべて持ち合わせた不純なユダヤ人どもの醜い親指に抑え込まれた文明を見るのは、気分のよいものじゃない。私は太ったハウスフラウたちや、太った指のワンダーフォーゲルたちのほうに一票投じたい。結果としてドイツ政治の左派と右派は、私たちが思っているようなことを厳密には言っていないんだ。右派はナショナリスト、反ユダヤ、版ドーズ方式だ。左派は立ち回って逃げ

てウソをつき、国際金融と赤色ロシアへの迎合とかだ。右派が資本主義というのは、保守派だからというだけだ。確かに、実際には右派の牛や豚どもと群れるのは無理だから、虫けらどもと飛ぶしかない。だがドイツの政治的ユダヤ人どもとつきあうくらいなら、ロイド・ジョージとむしろつきあうほうがまだマシでないかどうか、自分でも確信が持てないよ。

「ベルリン訪問」1926年6月22日、未発表

第 18 章

アインシュタイン (その 2)

Gewiss hast auch du, lieber leser, als Knabe oder Mädchen mit dem stolzen Gebäude der Geometrie Euilids Bekanntschaft gemahct (親愛なる読者よ、あなたも少年または少女として、ユークリッド幾何学の見事な構造はお馴染みだろう) – 「相対性の特殊および一般理論についての論考」はこのように始まる – 「Gewiss würdest du kraft dieser Vergangenheit jeden mit Verachtung strafen, der auch nur da sabgelegenste Sätzchen dieser Wissenschaf für unwahr erklärte. (まちがいでなく、このあなたの過去のかげらの力により、あなたがたはその前提の最もとんでもない断片ですら疑問視する者すべてに対して、偏見を持って扱うことだろう)。確かにその通り。大人の人間性へと成長できない少年たち – マルクス、フロイト、アインシュタイン – は古代人種の予言者たちをぶちのめしている。社会、個人、知的なルーツを打破して、健全な動物には陰気に思えるほどの客観性でそれを打ち破り、どうもあらゆるものから、自然な感情の温かみを剥奪しているかのようだ。学童たちとしては、ズボンにケリを入れる以外にどんな伝統的な仕返しが考えられるというのか? – ジャムの壺の羊皮紙のふたにある髑髏と骨のぶちがいの下に、赤インキで予言者の頭に懸賞金をかけるくらいしかできない。

だから私たちの世代にとって、アインシュタインは二重のシンボルに仕立て上げられている – 宇宙の冷たい領域を旅する精神のシンボルであり、勇敢で鷹揚な追放者のシンボル、純粋な心を持ち、快活な精神を持つ人物のシンボルだ。彼もまた学童ではあるが、種類がちがう – くしゃくしゃの髪、柔らかい手をしてバイオリンを弾く。クローマービーチにしゃがんで算数をやっている彼を見よう、シェイクスピアの眉を備えたチャーリー・チャップリンで、その間に別の学童、きわめて騎士道精神に富むロッカー・ランプソンがいじめっ子たちに対する護衛を買って出る。

だからナチスの小僧どもが彼に対してことさら激怒するのも無理はない。彼は確かに、彼らが最も嫌うものの象徴であり、ブロンドの獣の正反対だ – 知性主義者、個人主義者、超自然主義者、平和主義者、インキまみれで小太り。あの意地悪いガキどもがアルバートに蹴りを入れないとは考えられない。ロウはそのように彼を描き出す。自由に駆け回る知性の栄光や、柔らかく客観的な共感と、にっこりする心の無垢など連中にわかるはずもないし、それに対して連中の権力だのお金だの暴力、避けに血に虚勢など何の意味も持たないことも理解できるわけがない。だがアルバートとブロンドの獣たちは、その間にある世界を作り上げる。もしどちらかが相手を追補したら、人生の力はそれだけ減ってしまう。野蛮人どもが古代種族を魔女として破壊してしまうとき、彼らがホウキにまたがって天を計測するのを拒絶するとき、彼らは自分たち自身を生み出した土塊へと己を沈み戻

すよう己を宿命づけているのかもしれない。

初出 : *New Statesman and Nation*, 1933年10月21日

初出

本書に収録された論説の(イギリスでの)初出は次の通り：

I. 政治家群像

1. 四人会議：パリ 1919 年 *The Economic Consequences of the Peace* (1919 年 1 月), pp. 26-50.
2. ロイド・ジョージ氏：断片 本書初出
3. ボナー・ロー氏 *The Nation and the Athenaeum*, May 26, 1923.
4. オックスフォード卿 *The Nation and the Athenaeum*, February 25, 1928.
5. エドウィン・モンタギュー *The Nation and the Athenaeum*, November 29, 1924.
6. (i) 戦争を語るチャーチル氏 *The Nation and Athenaeum*, March 5, 1927.
- (ii) 平和を語るチャーチル氏 *The Nation and Athenaeum**, March 9, 1929.
7. 偉大なるヴィリアーズ・コネクション *The Nation and Athenaeum*, April 28, 1928.
8. トロツキーのイギリス論について *The Nation and Athenaeum*, March 27, 1926.

II. 経済学者たちの生涯

1. (i) ロバート・マルサス 本書初出
- (ii) ロバート・マルサス：没後百周年訓示 *The Economic Journal*, June 1935.
2. ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズ *Journal of the Royal Statistical Society*, Part III, 1936.
3. アルフレッド・マーシャル *The Economic Journal*, September 1924.
4. メアリー・ペイリー・マーシャル *The Economic Journal*, June-September 1944.
5. フランシス・イジドロ・エッジワース *The Economic Journal*, March 1926.
6. (i) 経済学者としてのラムゼイ *The Economic Journal*, March 1930.
- (ii) 哲学者としてのラムゼイ *The New Statesman and Nation*, October 3, 1931.

III. 科学者群像

1. 人間ニュートン *Newton Tercentenary Celebrations*. The Royal Society. Cambridge, 1947.
2. バーナード・ショーとアイザック・ニュートン *G.B.S. 90* (Hutchinson, 1946)
3. アインシュタイン 本書初出、執筆 1926 年 6 月 22 日
4. アインシュタイン (その 2) *The New Statesman and Nation*, 1933 年 10 月 21 日

訳者解説

本書は John Maynard Keynes, *Essays in Biography* (1955) の全訳に、ケインズがバーナード・ショー (のアインシュタインの芝居) とアインシュタインについて書いた文を二つ、さらにマルサスについての追加の文を加えたものだ。元にしたのは、ネット上に転がっている 1955 年版のスキャンで、<https://genpaku.org/keynes/essaysinbiography/keynesbio.pdf> においておく。ただし、ラムゼイの最後の部分とジェヴォンズの最初の部分が欠落している。これと、追加の文については全集版を見て足した。また、写真や図は、訳者が勝手につけたものだ。ケインズの描写には、顔つきが云々といった話が頻出するし「あの有名な肖像」とか言われてもピンとこないと思うので、サービスだ。

ご覧の通り、ケインズが書いたいろいろな人物像コレクションとなる。ぼくが使った 1955 年の底本は、もともと 1933 年に出ていたものに、ジョフリー・ケインズが 3 編を追加して刊行したものだ。これは非常によい判断だったと思う。

が、その後ケインズ全集に入れるにあたり、編者がその他やたらにケインズの本を書いたいろいろな人物評伝をぶちこんで、かなり太らせた。さらに最後に二つ、ケインズが別に刊行してほしいと述べた「回想録二編」も入っている。そうねえ、これもある意味で人物評伝と言えなくもない。でもそれでいささか、本としての焦点がぼけているような印象はまがいなくある。回想録に入っている「若き日の信念」はおもしろいけれど、人物評伝に入れるのは苦しいのでは？ だからここには入れていない。そしてそれ以外の部分では……いやあ、追加された人たちって、ぼくはバーナード・ショーとアインシュタイン以外、ほぼだれも知らないのだ。他に唯一、バルフォアというのは、あのバルフォア宣言の人ね、というのは知っているが (その宣言のおかげで何やら悪人めいた印象があるけれど、評価はさておき今のタコなイギリスからは想像もつかないほど八面六臂の大活躍をして外交巧者のイギリス的なイメージを作り上げた超やり手)、ベンジャミン・ストロングって、だれ？ ジュリアン・ベルって、だれ？ そういうまったく知らない人のアレを訳すのはあまりに面倒だったし、文章的にもぼくは大したものとは思わなかったの、ここには入れていない。

それを言うなら、もともと収録されていた文章だって、すでにとっくに忘れ去られた人は多い。ボナー・ローとか言われても「だれだっけ」という感じだし (ロイド・ジョージがヴェルサイユ条約後に失脚した後で首相になった人です)、その人たちについてケインズが書いた文章を読んでも、ピンとこない。それを今の日本人が読んでもどこまで意味があるのか、という気はするし、正直言えば削ってもいいか、とさえ思う。が、ケインズが自分で入れた文章だし、あまり分量は多くないので、残した。

この時点で「ボナー・ローを知らずにケインズを訳すとは」とか、果ては「なに、あのジュリアン・ベルをご存じないとは呆れはてた！」みたいなことを言う人も出てくるんだ

ろうとは思ふ。経済史の人なら「フォックスウェルを知らないとは何事か！」といきりたつのかも。そう思うなら、自分で訳してね。山形も、いずれもつと勉強して、「おお、このサンガーさんというのはあのサンガーさんでしたか！」ということになれば追加するかもしれない。バルフォアは……そのうちやるかも。そんなすごい文ではないのだが。

勝手に追加したので、原著と少し章構成は変えた。第一部はそのまま。第二部の経済学者編には、ジェヴォンスとマーシャル夫人を入れた。ニュートンとアインシュタイン、バーナード・ショーは科学者編をつくって入れた(全集を真似た)。ショーは科学者じゃないけど、文自体はショーの芝居をもとにしたニュートンの話だからそれに免じて入れた。

それと……この論集でいちばん長いのに一番精彩を欠くのは、アルフレッド・マーシャルのヤツだと思う。マーシャルが限界革命をまとめて完成させた人物なのは知っているし、ケインズが子供時代から家族ぐるみでつきあいのある大恩人だから詳しく長くなるのは仕方ないし、当時はいまとは比べものにならない権威だったろうから、力こぶが入るのもわかる。その一方で、ジェヴォンズやニュートンのような変人ではないし、その主著『経済学原理』はいまどき読む人もいないし、その成立事情や長所欠点を延々と説明されても、どうしようという感じではある。その分、奥さんのメアリー・ペイリー・マーシャルのやつは気軽に楽しい。

全体に、この論集の何たるか、収録された人々とケインズとの関係についてここでアレコレ解説してもいいのだけれど、すべて本文中に書いてあることでだいたいわかる中身だし、お手軽なエッセイとして楽しく読むのがいちばんよいと思うので、まあ楽しく読んでくださいな。

人によっては、本書はケインズの最もよい部分が出ているときえ言う。各種人物評の、深い洞察の一方で、ほめてるのかけなしているのかわからない嫌味な調子、それをレトリックで丸め込むやり口、確かにケインズらしさ全開ではある。同時に、彼が『一般理論』で(無用に)ひけらかしている美文調の修辞過多な作文作法もよく出ており、ロイド・ジョージ首相についての文で、ウィルソン大統領を乙女ヨーロッパ救出の王子さまになぞらえた表現などは、もうちょっと明解な書き方もあったはずだとは思う。この堅琴を持って王子の十四カ条を歌にしている魔女というのが、だれのどういう面を指しているのか(ロイド・ジョージがウィルソン大統領の意図をねじ曲げた、というようなことです)、とか解説をつけたほうがいいのかも。それを始めるとキリがない。たぶん元の文章も、わかるヤツはわかる、わからんヤツはわからんでいい、というものだったんだろうと思うし、レトリックや寓話の狙いの一つはまさに、わかる力量のないヤツを煙にまくことではあるのだし。

そして本書は、ケインズが生まれつつあった『一般理論』に向けて、自分の知的系譜をまとめるための活動でもあった。『一般理論』冒頭に出てくる「これはリカードではなくマルサスの系譜」というのは、たぶん本書のマルサス評伝を読まないで、何のことかわからないだろうし、ジェヴォンズも、反リカードの論者として登場している。そして恩師でありながら仮想敵とも言うべきマーシャルの扱いには、かなり複雑なものがこめられている。それを意識しつつ経済学者たちの評伝を読むと、味わいもひとしおだし、そしてそれぞれの学者がとんでもなくキャラが立った変人なのも、面白さを盛り上げている。

その一方で本書には、たぶんケインズ最悪といってもいいような文も入っている。「偉大なヴィリアーズ・コネクション」という一文。イギリスのいろんな貴族が血縁関係にある、というのを示した本について、ケインズはえらく喜んでいて、なんかこの家系に傑出

した人物を生み出す遺伝的なアレがあるのでは、というのを嬉々として書いているんだが、そんなの貴族同士が政略結婚とかしまくってました、というだけの話じゃないの？ さらに、ナントカ子爵のなんとか夫人が、だれそれ公爵の甥っ子と親戚でさあ、なんて言われただけでみんなピンとくるのか！ イギリス社交界・貴族業界みたいなのが、こんなに根深く彼（およびその想定読者）の思考に入り込んでいるのは、当時なら当然とはいえドン引きではある。もちろん序文で彼は、そんなのはどうでもよくて、むしろ知的な伝統と系譜のほうが大事だ、とは言うんだけど…… ケインズは優生学にも結構肩入れしたりしていたので、この文も彼のそういう下心が露骨に見えるのは、なんだか居心地悪い感じはする。が、そういう面も知っておくに越したことはない。

そして……全集版で足された、最後のアインシュタインについての一文。これは他とまったく文体や書きぶりがちがう。発表を意図していなかったせいかもしれない。そしてその中身は……いいのかよ、これ。全集版の編者は「でもケインズはヒトラーの迫害からユダヤ人難民救うのに尽力してますから！」と注をつけてはいるけれど、すごいなあ。アインシュタインについて、同じネタ元からよそ行きに加工した文章も比較のために収録したが、すごくぼかした書き方になっていて、基本的な考え方は変わっていないことがうかがえる。

邦訳は、半世紀以上前に岩波から出ているやつ（1959）と、全集に収録されているヤツ（1980）がある。岩波から出ているやつは、本書と同じ1955年版の翻訳で、全集版は同じ人が訳しており、基本は岩波版の使い回しに加筆したものだ。翻訳はきわめて古く固いもので、当時ですらまともに読めた人がいたのだろうか？ おもしろいことに、ケインズが引用するマルサスとかの古くさい文章は結構うまく翻訳できているのに、特にケインズが口頭発表用に書いた、少しでも読めた部分は目を覆うばかりのひどいものとなっている。

それが特に顕著に出ているのは、前出のアインシュタインについての文。ぼくの訳を読んでもらえば、かなり書き散らし調になっているのがわかると思うけれど、おそらく旧訳者は、そこでケインズが何を言っているかさえまったく理解できていない。

それでも古い条約とか階級を自分で調べるのが面倒だったときに参照……と思ったが、こちらでもグーグル先生にかなうものではない。「ヴィリアーズ・コネクション」に登場するいろんな泡沫貴族について、だれだか調べて訳注をつけているのは、まあご苦労ではあるけれど、知る価値のある人は一人もいないので、これまた参照していない。

何かまちがいにお気づきの方は、ご一報を。これをネットのどこかで見つけた方は、最新版が <https://genpaku.org/keynes/essaysinbiography/JMKessaysinbiographyj.pdf> にあるはず。同じディレクトリに、epub版もあるはずだし、もとのlatexファイルもあるので、拡張子を変えてみてください。ではお楽しみあれ。

山形浩生 (hiyori13@alum.mit.edu)

コロナ戒厳令下の東京にて

2021年2月